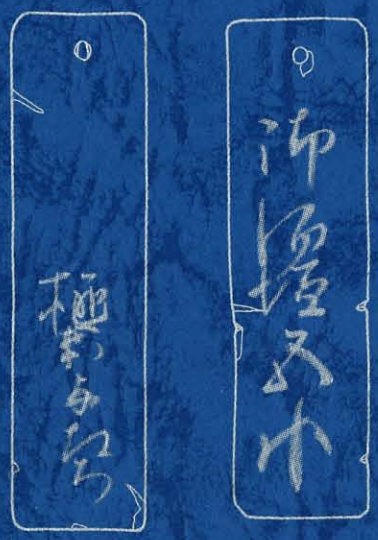
仙台市文化財調査報告書第374集

仙台城跡 10

平成21年度　調査報告書

―　仙台城本丸大広間跡調査成果の総括　―



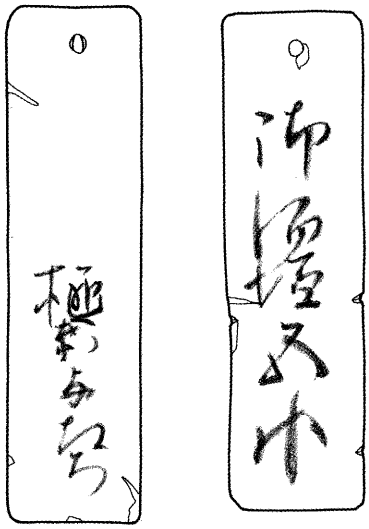
2010年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第374集

仙台城跡 10

平成21年度　調査報告書
― 仙台城本丸大広間跡調査成果の総括 ―



2010年3月

仙台市教育委員会

仙台城跡鳥瞰写真（東から・2007年10月撮影）

仙台市内鳥瞰写真（西から・2007年10月撮影）

第23次　調査区全景（北西から）

第23次　１区KS－746井戸跡検出状況（南から）

第23次　１区KS－768カマド跡検出状況（南から）

第23次　１区北壁基本層序（南東から）

第23次　１区KS－680鍛冶工房跡
１・２号炉跡検出状況（北東から）

・「○櫃森与左衛門」

No.1776

・「○御酒塩五升七合」

No.1776

・「○櫃森与左衛門」

No.1777

・「○御酒塩五升七合」

No.1777

・「○櫃森与左衛門」

No.1778

・「○御酒塩五升」

No.1778

・「国分靏カ谷村〔兵衛カ〕七□□」

No.1792

・「御年貢米四斗五升入」

No.1792

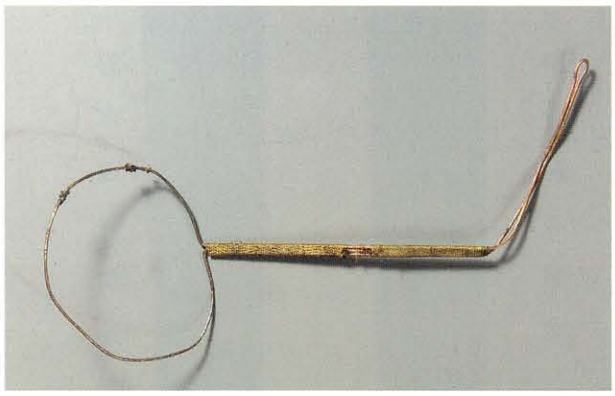
第23次　1区KS－746井戸跡出土木簡

1区　KS－746井戸跡出土京焼暦手筒茶碗（No.1522）

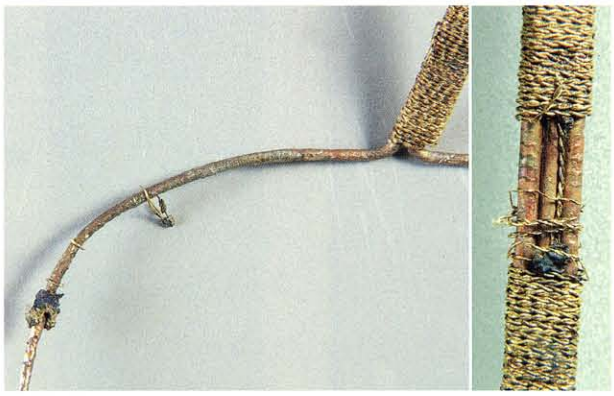
1区　Ⅰ層出土備前大甕（No.0148）

1区　KS－746井戸跡出土漆器椀（No.2316）

1区　KS－746井戸跡出土漆器盃（No.2350・2362）



1区　KS－746井戸跡出土灰汁掬いか（No.1769）



1区　KS－746井戸跡出土(No.1769)部分拡大

1区　KS－746井戸跡出土連歯下駄（No.2318・2320）

3区　Ⅲ層出土二つ丁子巴文軒桟瓦（No.1550）

第23次　出土遺物

序　　文

慶長５年、初代仙台藩主伊達政宗が仙台城の縄張り始めを行い、城下のまちづくりを行ってから、四百年余りが過ぎ、仙台市は人口100万人を超える東北地方の中心都市となりました。市の中心部が、近代的なビルの林立する都市化の波にさらされていく中にあって、仙台城跡は市街地から最も近い緑豊かな場所として、青葉城や天守台といった愛称で、市民から親しまれてきました。

遺跡としての仙台城跡は、平成９年度から15年度まで行われた本丸石垣修復工事に伴う発掘調査や、平成13年度から始められた国庫補助による学術調査によって、中世の山城であった千代城期や、伊達氏の居城期の内容が徐々に明らかとなってきました。

これらの発掘で新たに判明した石垣の変遷や、ヨーロッパ産のガラス器や金銅金具等の貴重な出土品などから、仙台城跡は我が国の近世を代表する城郭遺跡であることが評価され、平成15年８月、国の史跡に指定されました。これを契機として、仙台城跡の保存管理及び整備に向けた、「仙台城跡整備基本計画」が策定される等、仙台城跡の様々な魅力を引き出すための取り組みが始まっております。

こうした中で、平成21年度は清水門南側の造酒屋敷跡の発掘調査、大広間跡の発掘調査、広瀬川護岸石垣の測量調査が行われました。

清水門付近の造酒屋敷跡の調査では、屋敷に伴うと考えられる礎石跡や井戸跡、カマド跡などの遺構が発見されました。井戸跡からは、屋敷の当主の名前を記した木簡や、酒造りにかかわると考えられる木製品が多数見つかり、調査地が造酒屋敷の一角であることが裏付けられました。

また、昨年度まで８年次にわたる本丸大広間跡の調査成果についても総括し、これまで絵図や文献でしか、その姿を偲ぶことができなかった大広間の全容が解明されてきました。

今回の調査事業及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げますとともに、本報告書が研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

平成22年３月

仙台市教育委員会
教育長　荒　井　　崇

例　　言

1．本書は、仙台城跡の平成21年度遺構確認調査及び遺構測量調査、本丸大広間跡調査成果総括の報告書である。
本書の内容は既に刊行している『仙台城跡１～９』の内容及び遺跡見学会資料や各種の発表会資料に優先する。

2．本調査は、国庫補助事業である。

3．本報告書の作成にあたり、次のとおり分担した。
本文執筆　　在川宏志（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ）
佐藤　洋（仙台城本丸大広間跡調査成果の総括）
陶磁器ほかの観察については佐藤が行った。
編集は、佐藤・在川がこれにあたった。

4．記載内容の釈読については、仙台市博物館、仙台城跡調査指導委員のご教示を得た。

5．木簡の墨書についての実測は、文化財課調査係　廣瀬真理子が担当した。

6．石垣測量は、佐野コンサルタンツ㈱に委託した。

7．木簡の樹種同定は、古代の森研究舎に委託した。

8．発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々と機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝する。（敬称略・順不同）
須田良平（宮城県教育庁文化財保護課）　松尾信裕（大阪城天守閣）
小井川百合子、鵜飼幸子、菅野正道、倉橋真紀、水野沙織、坂田美咲（仙台市博物館）
仙台市博物館　宮城県図書館　㈶斎藤報恩会

9．本調査に係わる出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．本書中の地形図は、国土地理院発行の１：50,000『仙台』と１：10,000地形図『青葉山』の一部を使用している。

2．遺構図の平面位置図は平面直角座標系X（日本測地系）を用いており、文中で記した方位角は真北線を基準とし、高さは標高値で記した。

3．遺構略号は、全遺構に通し番号（国庫補助調査による検出遺構番号：KS－　）を付した。

4．本報告書の土色については、『新版標準土色帳』（古山・佐藤：1970）を使用した。

5．本書に使用した遺物図版縮尺は、陶磁器類・土器類は１：３、瓦は１：６、金属製品は１：２、銭貨は１：１、木製品は１：４、漆器は１：３、木簡は１：２を原則としている。

6．木簡の釈文及び型式については、木簡学会刊行の『木簡研究』における記載方法に準じた。

7．遺物の法量で（　）で示した数値は推定復元値、「－」は計測不能を示している。

目　　次

巻頭写真図版
序　文
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ．はじめに……1
Ⅱ．仙台城跡の概要
　1．仙台城跡の地理的環境……3
　2．仙台城跡の歴史的環境……3
　3．仙台城跡の発掘調査……5
Ⅲ．調査計画と実績……6
Ⅳ．第23次調査
　1．調査目的及び調査経過……8
　2．旧地形及び基本層序……9
　3．検出遺構……10
　4．出土遺物……40
　5．絵図・文献の検討……98
　6．まとめ……102
Ⅴ．第24次調査
　1．調査目的及び調査経過……104
　2．基本層序……104
　3．検出遺構と出土遺物……105
　4．まとめ……105
Ⅵ．第25次調査……106
Ⅶ．総括……113
　引用・参考文献
仙台城本丸大広間跡調査成果の総括
Ⅰ．これまでの調査成果……118
Ⅱ．大広間建物跡の特徴……119
Ⅲ．付属施設……131
Ⅳ．その他の遺構……132
Ⅴ．出土遺物……139
Ⅵ．科学的分析……140
Ⅶ．絵図の検討……141
　引用・参考文献
　写真図版

挿　図　目　次

第１図　仙台城跡と周辺の遺跡…… 2
第２図　焼失以前の大手門と脇櫓…… 3
第３図　仙台城跡の遺跡範囲…… 4
第４図　仙台城本丸現存石垣解体修復工事前…… 4
第５図　仙台城本丸現存石垣解体修復工事後…… 4
第６図　本丸北壁石垣北東角部旧石垣検出状況…… 5
第７図　本丸北壁石垣背面階段状石列検出状況…… 5
第８図　仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図…… 7
第９図　第23次調査区配置図…… 8
第10図　調査前状況…… 9
第11図　Ⅱ層（花崗岩の砕石層）分布図…… 9
第12図　第23次調査第2遺構面平面図……11・12
第13～16図　第23次調査１～３区断面図……13～16
第17図　1区KS-746井戸跡遺構平面図…… 21
第18図　1区KS-768カマド跡遺構平面図…… 23
第19図　第23次調査１面遺構平面図……27
第20図　１区炭層分布図……28
第21図　１区KS-681・682遺構断面図…… 29
第22図　KS-746井戸跡出土荷札木簡にみられる地名……43
第23図　第23次調査出土磁器……46
第24～27図　第23次調査出土陶器……47～50
第27～28図　第23次調査出土土師質土器……50～51
第28図　第23次調査出土瓦質土器……51
第29～31図　第23次調査出土瓦……52～55
第32～33図　第23次調査出土金属製品……55～56
第34図　第23次調査出土石製品・レンガ…… 57
第35～40図　第23次調査出土木簡……58～63
第41～48図　第23次調査出土木製品……64～71
第49図　絵図からみた造酒屋敷……98
第50図　伊丹郷町第164・175次調査検出カマド遺構平面図…… 102
第51図　玉造小学校内調査かまど遺構平面図…… 102
第52図　調査前状況…… 104
第53図　第24次調査区位置図…… 104
第54図　第24次調査遺構平面図…… 105
第55図　第24次調査北壁段面図…… 105
第56図　調査区全景…… 105
第57図　KS-531礎石跡検出状況…… 105
第58図　広瀬川護岸石垣（大橋南側）全景…… 106
第59図　第25次調査位置図…… 106
第60図　第25次調査広瀬川護岸石垣立面図・縦横断図… 107・108
第61図　第14次調査中門跡北側石垣立面図…… 110
第62図　第14次調査広瀬川護岸石垣(大橋南側)立面図… 111
第63図　第14次調査広瀬川護岸石垣（大橋北側）……112

仙台城本丸大広間跡調査成果の総括

第１図　大広間部屋割り図…… 119
第２図　大広間跡遺構平面図と『御本丸大広間地絵図』の合成図……121
第3図　大広間跡遺構平面図……122
第4図　『仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図』……125
第5図　銅釘類型模式図・計測部位…… 126
第6図　大広間跡・御成門跡　飾り金具・銅釘出土地点図…126
第7図　砂礫層分布図……128
第8図　第20次大広間南東周辺基本層序模式図……129
第9図　裏上段の間東側断面模式図……129
第10図　大広間跡関連遺構位置図…… 133
第11図　大広間跡関連施設（塀跡）位置図…… 134
第12図　柱筋にのらない礎石位置図…… 136
第13図　大広間下層遺構位置図…… 137
第14図　『御本丸大広間地絵図』…… 141
第15図　『御本丸千畳敷之図……142
第16図　『青葉城御本丸之図』…… 143
第17図　『旧本丸御屋形図』…… 144
第18図　大広間跡遺構平面図…… 145・146
第19図　大広間跡遺構平面合成写真…… 147・148

挿　表　目　次

第１表　これまでの調査実績…… 6
第２表　調査計画表…… 6
第３表　調査実績表…… 7
第４～７表　第23次調査１～３区土層注記表……16～18
第８表　第23次調査出土陶磁器他数量表……40
第９表　第23次調査出土瓦数量表……42
第10表　第23次調査出土金属製品数量表……42
第11表　第23次調査出土ガラス・石製品数量表…… 42
第12表　第23次調査出土木製品数量表……45
第13表　第23次調査出土磁器観察表……46
第13～17表　第23次調査出土陶器観察表……47～50
第18～20表　第23次調査出土土師質土器……50～51
第20表　第23次調査出土瓦質土器観察表……51
第21～24表　第23次調査出土瓦観察表……52～55
第25～26表　第23次調査出土金属製品観察表……55～56
第27～28表　第23次調査出土石製品・レンガ観察表… 57
第29～34表　第23次調査出土木簡観察表……58～63
第35～42表　第23次調査出土木製品観察表……64～71
第43～44表　第23次調査出土磁器観察表……72～73
第45～47表　第23次調査出土陶器観察表……76～77
第48～49表　第23次調査出土土師質土器・瓦質土器観察表……78
第50表　第23次調査出土瓦観察表……82
第51～52表　第23次調査出土金属製品・石製品観察表…… 83
第53～54表　第23次調査出土木製品観察表……87～88
第55～56表　第23次調査出土木製品観察表……94～95
第57表　第23次調査出土鍛冶関係遺物観察表……96
第58表　第23次調査出土その他観察表……97
第59表　榧森家関連年表…… 100
第60表　造酒屋敷関連資料一覧…… 101
第61表　第24次調査土層注記表…… 105

仙台城本丸大広間跡調査成果の総括

第1表　大広間座敷部各部屋規模一覧……123
第2表　大広間跡関連出土瓦……125
第3表　飾り金具・銅釘集計表…… 126
第4表　残存礎石一覧……130
第5表　柱筋にのらない礎石跡及び掘り方一覧……136
第6表　下層遺構一覧……138
第7～8表　大広間跡関連出土陶磁器・土器類…… 139
第9～10表大広間跡関連出土金属類・瓦…… 139
第11表　大広間座敷・部屋名対照表…… 144

写真図版目次

写真図版１　第23次調査　調査区全景・1区遺構……30
写真図版１～８　第23次調査　１区遺構(第２遺構面)… 31～37
写真図版８～９　第23次調査　１区遺構(第１遺構面)… 37～38
写真図版10　第23次調査　２・３・４区遺構……39
写真図版11～12　第23次調査出土磁器……72
写真図版12～17　第23次調査出土陶器……73～78
写真図版17～18　第23次調査出土土師質土器・瓦質土器… 78～79
写真図版19～21　第23次調査出土瓦……80～82
写真図版21～22　第23次調査出土金属製品・石製品……82～83
写真図版23～25　第23次調査出土木簡……84～86
写真図版26～33　第23次調査出土木製品……87～95
写真図版34～35　第23次調査出土鍛冶関係遺物・その他… 96～97
写真図版36　第25次調査…… 109

仙台城本丸大広間跡調査成果の総括

写真図版１　第１次調査（平成13年）……150
写真図版２　第５次調査（平成14年）……151
写真図版３　第７次調査（平成15年）……152
写真図版４　第10次調査（平成16年）……153
写真図版５　第12次調査（平成17年）……154
写真図版６　第15次調査（平成18年）……155
写真図版７　第17次調査（平成19年）……156
写真図版８～９　第20次調査（平成20年）…… 157・158

Ⅰ．はじめに

平成21年度は、仙台城跡遺構確認調査第２次５カ年計画の４年次にあたり、下記の体制で臨んだ。(敬称略、順不同)

調査主体	仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室）		
調査担当	文化財課	課長	田中　則和
		仙台城史跡調査室長	工藤　哲司
		主査	佐藤　　洋
		主任	熊谷　俊朗
		主任	佐藤　　淳
		文化財教諭	在川　宏志

発掘調査、整理を適正に実施するために調査指導委員会を設置し、指導・助言を受けた。

委員長	岡田　清一（東北福祉大学教授　中世史）
副委員長	平川　　新（東北大学東北アジア研究センター教授　近世史）
委　員	西　　和夫（神奈川大学客員教授　建築史）
	北垣聰一郎（石川県金沢城調査研究所長　石垣・城郭研究）
	藤沢　　敦（東北大学特任准教授　考古学）
	岡崎　修子（㈶仙台ひと・まち交流財団　仙台市片平市民センター館長　地域史）

仙台城跡調査指導委員会開催日

第23回：平成21年10月20日　第23次調査中間報告、若林城跡第10次調査中間報告、登城路調査報告、本丸大広間跡調査成果総括の報告

第24回：平成22年３月12日　第23次・24次・第25次調査報告、若林城跡調査報告、仙台城跡調査整備計画

調査および整理参加者　相澤　守、安部文子、天野美津枝、内山陽子、太田裕子、小佐野直子、小野寺美智子、菅家婦美子、木幡真喜子、竹内美江子、対馬悦子、菱沼みのり、堀内泰子、増田瑞枝、三嶋典子、結城龍子、吉田妘絽子、渡邉　優

城館跡		5	南目城跡	9	川内古碑群	14	南小泉遺跡
1	仙台城跡	6	谷地館跡	10	片平仙台大神宮の板碑	15	養種園遺跡
	天然記念物青葉山（斜線部分）	墓所		その他の中・近世の主な遺跡		16	杉土手（鹿除土手）
2	若林城跡	7	経ヶ峯伊達家墓所	11	川内A遺跡		
3	茂ヶ崎城	板碑・石碑		12	川内B遺跡		
4	国分鞭館跡	8	澱不動尊文永十年板碑	13	桜ヶ岡公園遺跡		

第１図　仙台城跡と周辺の遺跡（中・近世）

Ⅱ．仙台城跡の概要

１．仙台城跡の地理的環境

仙台城跡は仙台市街地の西方に位置し、青葉山丘陵及びその麓の河岸段丘部分を中心に城域が形成されている。青葉山丘陵は東を流れる広瀬川に向かい迫り出し、広瀬川とその支流の竜ノ口渓谷の浸食により高さ70mほどの断崖を形成しており、その丘陵上の平場（標高115～117m）に仙台城の本丸は位置する。本丸の規模は、東西245m、南北267mを計り、南側は落差約40mの竜ノ口渓谷、東側は広瀬川に落ちる高さ約70mの断崖に守られた天然の要害となっており、比較的傾斜の緩やかな本丸北側には約17mの高さを有する石垣が築かれている。尾根続きとなっている本丸西側には「御裏林」と呼ばれた森林が広がり、貴重な自然が残るために国指定天然記念物「青葉山」となっている。御裏林では、３条の大規模な堀切などが確認されている。本丸跡の麓部の河岸段丘には二の丸跡と三の丸跡が位置しており、二の丸跡は仙台上町段丘面、三の丸跡は仙台下町段丘面と高度を下げている。蛇行する広瀬川に西から二本の大きな沢が走り、この沢に挟まれ御裏林を背にした場所に二の丸跡が位置する。二の丸跡の東側に位置する大手門跡付近には、約９mの高さの石垣が残り、その南側には大手門脇櫓が昭和42年（1967）に復元されている。さらに低位に位置する三の丸跡は、外郭を水堀と土塁に囲まれ、門跡付近には石垣が残存している。三の丸跡の東側、河岸段丘の最も低位に位置する追廻地区の広瀬川の岸部分には、260mに及ぶ石垣が残存している。

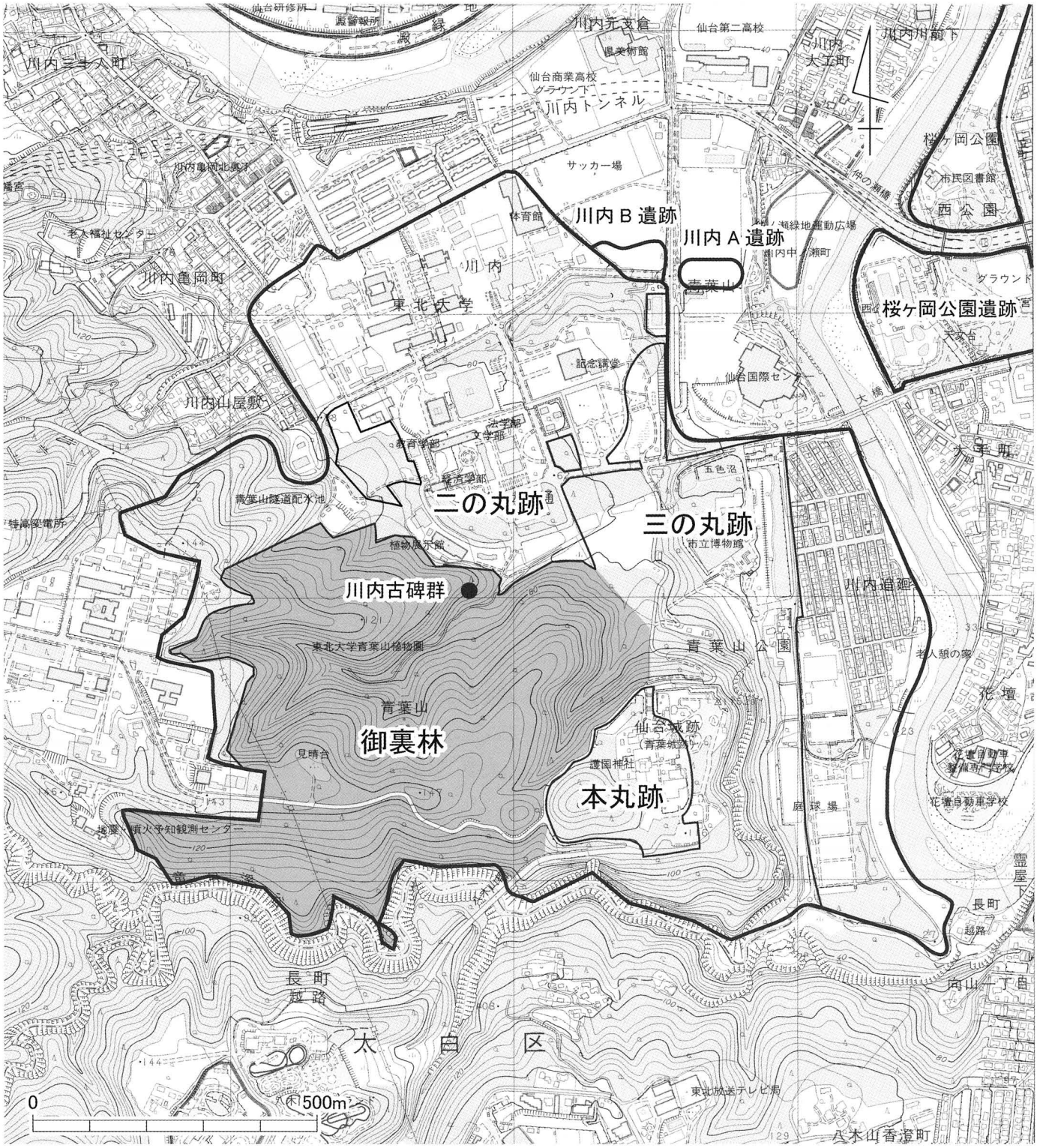
２．仙台城跡の歴史的環境

仙台城は、初代仙台藩主伊達政宗によって造営された城である。関ヶ原の戦い直後の慶長５年（1600)12月24日、城の縄張りが開始され、翌年１月から普請に着手、工事は慶長７年（1602）５月には一応の完成をみたとされている。築城当初は「山城」である本丸を中心とする城郭であったが、政宗の死後、二代藩主忠宗が山麓部に二の丸の造営を開始する。寛永年間以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸・勘定所・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。残された絵図などからみると、本丸への登城路は、大手門を通って中門を経て本丸詰門に至るものと、巽門、清水門、沢門を通るものがある。

絵図や文献などによれば(註１)、本丸には詰門を入った東側に天皇家や将軍家を迎えるための御成門があり、華麗な障壁画や欄間彫刻に彩られた大広間を中心とする御殿建物群が存在していた。東側の城下を見下ろす崖面に造られた懸造、さらには能舞台・書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって造られた桃山文化の集大成といえる建物群が威容を誇っていたと考えられている。西脇櫓・東脇櫓・艮櫓・巽櫓は三重の櫓であったが、正保３年（1646）４月の地震によって倒壊したとする記事がみられ(註２)、以後復興されずに明治を迎えたものとされている。

本丸の建物群は江戸時代の度重なる災害に加え、明治維新後の取り壊しなどにより失われ、二の丸の御殿群も明治15年（1882）の大火によって焼失した。唯一仙台城の面影を伝えていた国宝の大手門及び脇櫓も昭和20年（1945）７月、太平洋戦争の際の米軍による空襲によって焼失した。現在では、本丸北壁や随所に点在する石垣、本丸西側の堀切、三の丸の周囲を囲む堀と土塁などが往時の仙台城を偲ぶ貴重な遺構となっている。また、伊達氏による仙台城築城以前にこの地域をおさめていた国分氏の居城「千代城」に関する16世紀代の文献記録も残っており(註3)、中世山城が存在していた可能性も指摘されている。

第2図　焼失以前の大手門と脇櫓（1935年頃）



第３図　仙台城跡の遺跡範囲（1/10,000）太線：埋蔵文化財包蔵地範囲　細線：史跡指定範囲　　天然記念物「青葉山」

第４図　仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣
解体修復工事前（北西から）

第５図　仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣
解体修復工事後（北東から）

3.仙台城跡の発掘調査

仙台城のこれまでの調査には、昭和58年（1983）から継続的に実施されている東北大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査と、仙台市博物館の新築工事に伴って昭和58・59年（1983・1984）に実施された三の丸跡の発掘調査があり、本丸跡では石垣修復工事に伴う発掘調査が第1次発掘調査である。

本丸北壁の石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の観点から石垣修復工事が平成９年(1997)度から実施されている。この石垣修復工事に伴う本丸1次発掘調査は、平成９年(1997)7月から石垣解体に先行する事前調査と、翌年10月から開始した解体工事と並行する発掘調査からなっている。解体工事は平成12年(2000)９月に石材9,106石と、Ⅱ期石垣124石の解体をもって終了し、石積工事を同年12月から開始し、平成16年(2004)3月に工事が終了した。

石垣解体修復に伴う発掘調査により、現存石垣（Ⅲ期石垣）背面より二時期にわたる旧石垣（Ⅰ期・Ⅱ期石垣）が検出され、石垣基部の調査や石垣断面構造の記録化により、Ⅰ期からⅢ期までの石垣の変遷や構造が明らかになった。石材調査では各種の刻印や朱書、墨書などを多数発見し、矢穴や石材加工の変化も確認されている。石垣は、表面の「石積み」様式の変化とともに、背面の土木工法の変容も顕著であり、石垣背面の土木工事痕跡の考古学的な手法による層位的調査と、盛土の重複関係や遺物の分析からみた石垣変遷を、文献調査との照合により時期区分されている。築城期には、旧地形や中世山城「千代城」の縄張りを利用して斜面を切り土しながら石垣を構築（Ⅰ期）し、元和２年（1616）の地震によりこの石垣が倒壊した後、築城期の石垣形状を一新する修復工事が行われて石垣が再構築（Ⅱ期）され、その後、寛文８年（1668）の地震によりこのⅡ期石垣も倒壊し、現存石垣に全面改築（Ⅲ期）されたと考えられている。

平成13年（2001）からは国の補助を受け、発掘調査のほかに遺構現況調査や石垣測量などの総合調査を実施しており、平成22年（2010）３月現在で25次にわたる調査を実施している。特に本丸大広間跡の発掘調査は８次にわたり実施しており、その位置や内部構造について解明しつつある状況である。

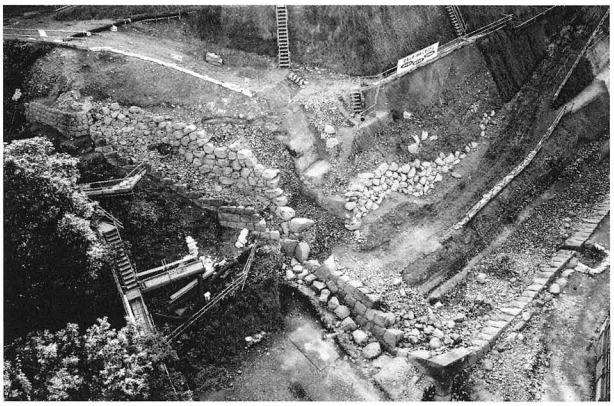
平成15年（2003）５月に三陸沖を震源とする地震が起き、中門跡と清水門跡の石垣の一部が被災し、その後、平成15～17年（2003～05）に災害復旧工事を行った。

平成15年（2003）年８月には約66haが国史跡に部分指定され、その後、仙台市は「仙台城跡整備基本構想」「仙台城跡整備基本計画」を策定した。平成17～19年（2005～07）には巽門東側にあったとされる堀跡、平成20年（2008）からは清水門南側の造酒屋敷跡の学術調査を実施し、その調査成果に基づく史跡整備を事業目標としている。

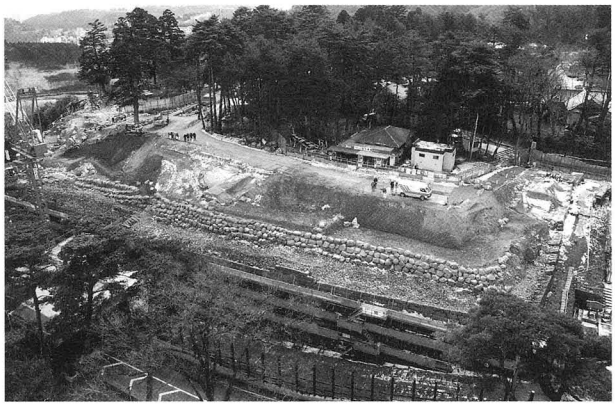
註１　『仙台城下絵図』寛文４年（1664）宮城県図書館蔵・『肯山公造制城郭木写之略図』17世紀後半（推定）宮城県図書館蔵・『貞山公治家記録』など

註２　義山公治家記録、正保3年（1646）４月28日条

註３　貞山公治家記録、慶長5年（1600）12月24日条



第６図　本丸北壁石垣北東角部
旧石垣（Ⅰ・Ⅱ期）検出状況（北東から）



第７図　本丸北壁石垣背面
階段状石列検出状況（北西から）

Ⅲ．調査計画と実績

平成21年度は、仙台城跡遺構確認調査の第２次５ヵ年計画４年次にあたる。平成17年度までの第１次５ヵ年計画では、国指定史跡仙台城跡の全体像を把握することを目標として、遺構の遺存状況、種類、規模、配置等の確認を目的とする遺構確認調査と、石垣の破損状況や石積みの特徴を確認することを目的とする石垣現況調査、測量調査などを実施してきた。また、本丸大広間跡や巽櫓跡などの発掘調査、本丸での遺構現況調査などを行ってきた。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第１次	大広間跡（1次）	185㎡	平成13年９月17日～12月27日
第２次	清水門跡付近石垣測量	210㎡（立面）	平成13年11月30日～平成14年２月13日
第３次	大番士土手跡・御守殿跡・懸造跡	1,400㎡	平成14年５月20日～平成15年１月31日
第４次	巽櫓跡	110㎡	平成14年５月20日～８月31日
第５次	大広間跡（2次）	470㎡	平成14年８月５日～12月20日
第６次	仙台城跡（全域）	約145ha	平成15年５月７日～８月８日
第７次	大広間跡（3次）	258㎡	平成15年８月４日～12月25日
第８次	登城路跡	58㎡	平成15年11月12日～12月25日
第９次	広瀬川護岸石垣測量(1次)	50㎡（立面）	平成15年12月９日～平成16年２月５日
第10次	大広間跡（4次）	397㎡	平成16年７月20日～12月24日
第11次	登城路跡・広瀬川護岸石垣測量(2次)	349㎡（立面）	平成16年12月18日～平成17年３月31日
第12次	大広間跡（5次）	446㎡	平成17年５月26日～10月19日
第13次	三の丸堀跡（1次）	86㎡	平成17年11月１日～12月22日
第14次	中門北側・広瀬川護岸石垣測量(3次)	627㎡	平成18年１月16日～１月20日
第15次	大広間跡（6次）	311㎡	平成18年６月１日～８月４日
第16次	三の丸堀跡（2次）	522㎡	平成18年９月１日～11月30日
第17次	大広間跡（7次）	263㎡	平成19年５月28日～８月３日
第18次	三の丸堀跡（3次）	468㎡	平成19年９月１日～11月26日
第19次	本丸北西壁石垣測量（1次）	425㎡（立面）	平成20年１月16日～１月18日
第20次	大広間跡（8次）	248㎡	平成20年５月８日～７月31日
第21次	造酒屋敷跡（1次）	160㎡	平成20年８月26日～10月29日
第22次	本丸北西壁石垣測量（2次）	448㎡（立面）	平成20年12月24日～平成21年１月21日

第１表　これまでの調査実績

第２次５ヵ年計画では、引き続き、国指定史跡仙台城跡における全体像の把握を目的として、遺構確認調査と石垣現況調査、測量調査、絵図等の資料調査などを実施する予定である。今年度は、造酒屋敷跡周辺および大広間跡における遺構確認調査、広瀬川護岸石垣の測量調査を実施した。発掘調査費については総経費16,713千円、国庫補助額8,099千円との内示を受けたことから、以下の調査計画を立案した。

調査次数	調査地区	調査予定面積	調査予定期間
第23次	造酒屋敷跡（2次）	420㎡	平成21年６月25日～10月31日
第24次	大広間跡	3㎡	平成21年12月14日～12月18日
第25次	広瀬川護岸石垣測量（4次）	250㎡（立面）	平成21年12月18日～平成22年３月23日

第２表　調査計画表

これまで、本丸跡では８次にわたる調査により、仙台城本丸御殿の中心的建物である大広間跡の礎石跡や雨落ち溝跡などを検出し、大広間建物跡の位置及び規模（東西33.5m、南北26.3m）を確認した。また、大広間跡の西側に位置する御成門跡の礎石や、そこから大広間跡に延びる通路跡と考えられる石敷き遺構を検出した。大広間建物跡の内部については、建物に関わる礎石跡を検出し、各部屋の間取りや位置など、大広間の全容を解明する上で大きな成果が得られた。

第23次調査は、清水門付近にあったとされる造酒屋敷跡の遺構確認を目的として実施した。屋敷跡の調査（１～４区）では、屋敷や酒造に関わると考えられる礎石跡や石列、カマド跡、井戸跡、溝跡などを検出した。また、造酒屋敷廃絶後に使われていたと考えられる鍛冶工房跡も検出した。遺物は、木簡をはじめとする多数の木製品、磁器、陶器、瓦、金属製品などが出土した。

第24次調査は、大広間跡虎の間西側、広縁部中央の礎石跡を調査指導委員会の指導により追加調査として実施

した。調査では、KS-531礎石跡の遺構全体を検出した。

第25次調査は、広瀬川護岸石垣の測量を行い、石積み状況を調査した。これまで実施した第９次・第11次・第14次調査により、大橋北側の石材及び大橋南側約200m分の護岸石垣を既に測量している。第25次調査では約64mを測量調査し、石垣の図化作業を併せて行った。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第23次	造酒屋敷跡（2次）	369㎡	平成21年７月１日～11月12日
第24次	大広間跡	2.25㎡	平成21年12月14日～12月15日
第25次	広瀬川護岸石垣測量（4次）	250㎡（立面）	平成21年12月16日～平成22年１月７日

第３表　調査実績表

第８図　仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図（1/5000）

Ⅳ．第23次調査

１．調査目的及び調査経過

第23次調査は、清水門付近の造酒屋敷跡を対象として、平成21年（2009）７月１日から同年11月12日まで遺構確認のための発掘調査を実施した。調査面積は369㎡である。

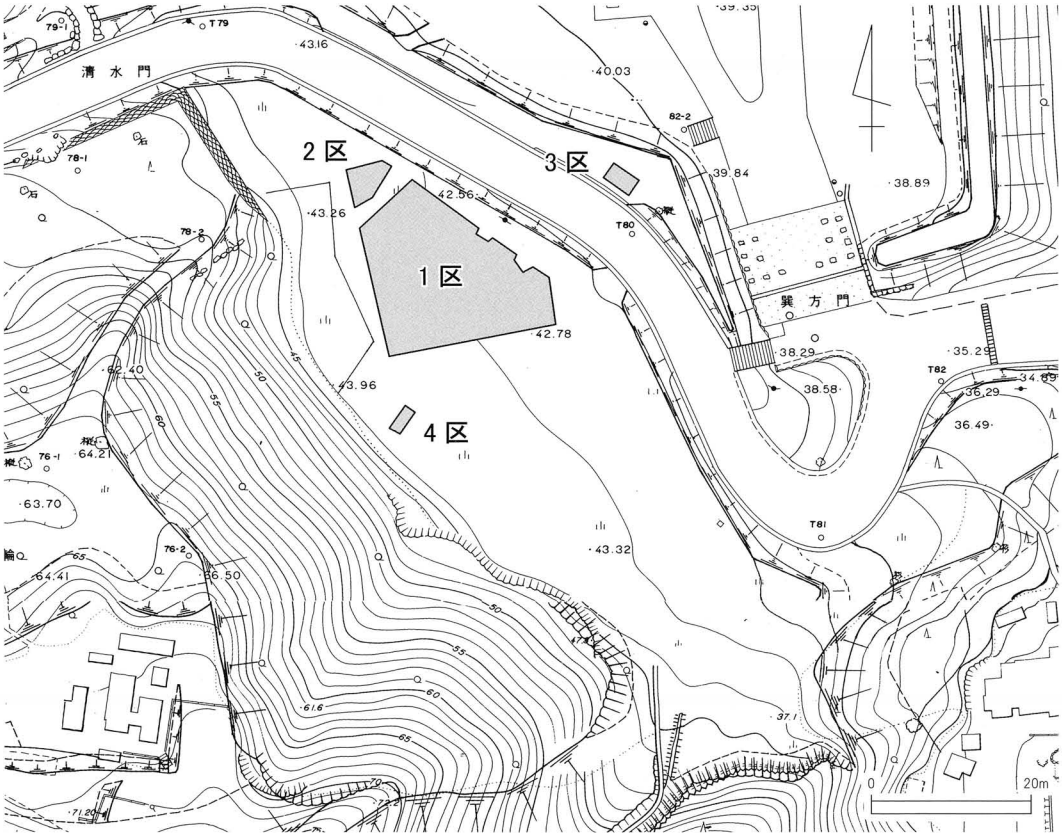
調査目的は、清水門の南側に位置し、仙台藩の御用酒屋であった榧森家の屋敷跡や酒蔵跡など、造酒屋敷跡の位置および規模の確認（１～４区）である。榧森家は、初代仙台藩主伊達政宗が、親しい幕臣である柳生宗矩の紹介で、慶長13年（1608）に大和国（現在の奈良県）から招かれ、城内に酒蔵と屋敷を与えられて酒造にあたった。その後、明治９年（1876）に廃業するまでの約270年にわたり酒造業を営んだ。

調査区の設定や調査前の現況写真撮影後、６月29日にフェンスを設置し、重機による表土の除去作業を開始した。７月１日から人力による表土除去及び遺構の検出作業を開始した。

造酒屋敷跡の調査（１～４区）では、造酒屋敷に伴うと考えられる礎石跡、石列、井戸跡、カマド跡、炉跡、石組溝などを検出した。調査は遺構の確認を主とし、遺構の掘り込みは最小限にとどめた。遺物は、近世の整地層と考えられるⅣ層上面から18世紀代を中心とする磁器、陶器のほか、土師質土器、瓦質土器、瓦、古銭などが出土した。また、KS-746井戸跡からは陶磁器、金属製品などのほか、木簡や漆器、下駄、箸、樽や桶の部材などの木製品が多数出土した。

第23次調査は、平成21年２月24日の第22回仙台城跡調査指導委員会において、調査箇所や目的、方法について了承を得て実施した。平成21年10月20日に実施した第23回仙台城跡調査指導委員会において調査の進め方についての現地指導を受けた。調査成果については、10月22日に記者発表、10月24日に遺跡見学会（100名参加）を実施し公表した。その後、調査区の埋め戻しの作業を行い、11月16日に調査箇所は原状に復した。

なお、出土遺物の水洗作業中に榧森家当主の名前が記された木簡や年貢米の荷札木簡などを確認した。記載内容の釈文を仙台市博物館、仙台城跡調査指導委員のご教示を得た上で、12月10日に記者発表を実施し公表した。



第９図　第23次調査区配置図（1/800）

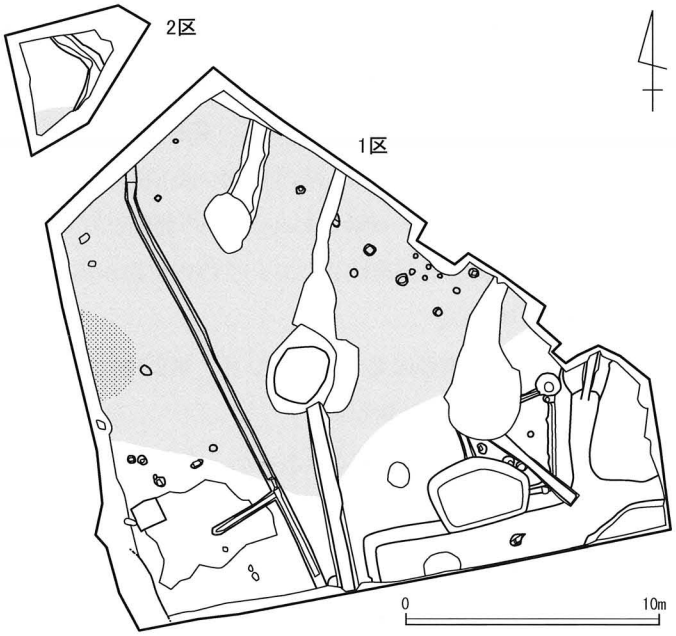
2．旧地形及び基本層序

造酒屋敷跡は、追廻から本丸へ至る登城路の南側、青葉山丘陵の裾部にあたる標高約43mの平場に位置する。北側の三の丸跡がある下町段丘面との間には約３m、東側の巽門跡との間には約５mの比高差がある。平場の南側には青葉山丘陵の斜面が長沼（三の丸堀跡）方向まで伸びていることから、仙台城の築城時に斜面を造成して造られた平場であったと推定される。平場は西から東にかけて緩やかに傾斜している。以下、各区の基本層の概要について述べる。

第10図　調査前状況

(1) 1区

１区の基本層は５層に大別した（第５～６表）。Ⅰ層は近代から現代にかけての盛土層で25層に細分した。Ⅱ層は花崗岩の砕石層で、近代以降の整地層である(第11図)。Ⅱ層直下に近代の遺構面を検出した。花崗岩の砕石は人為的に敷かれており、１区南部、KS-680鍛冶工房跡の周辺ではみられない。Ⅱ層が鍛冶工房に関連する可能性が考えられる。今回の調査ではこの層を便宜上、基本層として扱う。Ⅲ層は近世の整地層である。Ⅲ層上面でKS-680鍛冶工房跡など第１遺構面の遺構を検出した。Ⅳ層は近世の盛土層で５層に細分した。Ⅳ層上面でKS-746井戸跡やKS-768カマド跡など第2遺構面の遺構を検出した。1区の北側は削平による段差がみられ、Ⅳ層も削平により失われている。Ⅴ層は第21次調査の２区Ⅲa層に相当する。Ⅵ層は硬くしまった層で地山の可能性がある。



花崗岩の砕石層（Ⅱ層）　炭層（Ⅱ層上面）

第11図　Ⅱ層（花崗岩の砕石層）分布図（1/300）

(2) 2区

２区の基本層は３層に大別した(第７表)。Ⅰ層は現代の盛土層で12層に細分した。調査区南壁でⅠ層最下層直下に花崗岩の砕石が部分的にみられたが、調査区全体までは広がらなかった。Ⅲ層は近世から近代にかけての整地層で１区のⅢ～Ⅳ層に対応する。KS-685石組溝、KS-687石組溝の検出面である。Ⅳ層は地山である。

(3) 3区

３区の基本層は３層に大別した(第７表)。Ⅰ層は現代の盛土層である。調査区北壁と西壁でⅠ層最下層の直下に花崗岩の砕石はみられたが、調査区全体には広がらなかった。Ⅲ層は近世と考えられ盛土層でKS-800石組溝の検出面である。18世紀代の肥前染付網目文碗が出土した。Ⅳ層は近世の盛土層で２層に細分した。

(4) 4区

４区の基本層は４層に大別した。Ⅰ層は現代の盛土層である。Ⅱ層は時期不明の旧表土である。Ⅲ層は近世の盛土と考えられる層で、溝１条を検出したが、埋土から焼土やビニールが出土しており、新しい溝である。Ⅳ層は崩落土の可能性がある。

3．検出遺構

【第２遺構面】

おもに１区の基本層のⅣ層上面で検出された近世の遺構面である。１区南側で調査区を東西に横断する人為的に形成された段差がみられ、北側が10cm程低くなっている。段の南側では18世紀代の陶磁器が中心で、一段低い北側では19世紀前半の遺物も出土していることから、同じ第２遺構面でも18世紀代から19世紀の遺構面と19世紀前半の遺構面に分けられる。

(1) １区

・KS - 688礎石　調査区北壁壁面で検出した。加工のない川原石で長軸21cm、厚さ19cmである。掘り方は東西56cm以上、深さは20cmである。根固め石は確認されなかった。KS -690石列と関連する可能性が考えられる。

・KS - 689礎石　調査区北部で検出した。加工のない川原石で長軸40cm、短軸25cmである。掘り方と根固め石は確認されなかった。礎石上端のレベルは41.754mである。

・KS - 690石列　調査区北部で検出した。東西方向に延び、西側で石材はまばらになるが、北に屈曲する石列である。検出した長さは東西2.8m、南北1.3m、方向はN－18°－Eである。径23～28cmの加工のない川原石を配している。石の上面の高さに統一性はない。石列の北側にブロック状の黄褐色土が分布しており、建物にかかわる盛土（犬走り相当か）であると推測される。この面で瓦が出土している。石列はその縁辺に配置されたものと考えられる。KS -691より古い。

・KS - 691ピット　調査区北部で検出した。平面形は円形である。規模は東西50cm、南北54cmである。円礫、角礫を含む。KS -690石列より新しい。

・KS - 692礎石跡　調査区北部で検出した。平面形は円形である。規模は東西100cm、南北89cmである。根固め石の大きさは径７～17cmの円礫である。径７cmの杭１本を検出した。礎石の抜取り穴は確認されなかった。瓦片が出土した。

・KS - 693集石　調査区北部で検出した。平面形は円形である。規模は東西55cm、南北50cmである。根固め石と考えられる径５～30cmの礫を多数含む。なお、石が集合しており礎石の可能性があるが、根固め石と考えられる礫が立っている状況で検出されたものや少量のもの、角礫が混じるなど、礎石と判断できないものは集石として扱った。

・KS - 694ピット　調査区北東部で検出した。平面形は円形である。規模は東西40cm、南北35cmである。

・KS - 695溝跡　調査区北部で検出した。南北方向に延びる溝で、上端幅20～30cmである。検出した長さは357cm、方向はN－13°－Wである。埋土には砂の堆積がみられた。撹乱やKS -708・710に切られているが、KS -722・751溝跡に接続する可能性が推測される。

・KS - 696溝跡　調査区北部で検出した。南北方向に延びる溝で、上端幅20～26cmである。検出した長さは173cm、方向はN－2°－Wである。埋土には砂の堆積がみられた。瓦が出土した。

・KS - 697礎石跡　調査区北部で検出した。平面形は円形である。規模は東西117cm、南北107cmである。根固め石の大きさは径15～24cmの円礫であり、角礫２石を含む。礎石の抜取り穴は確認されなかった。瓦片が出土した。

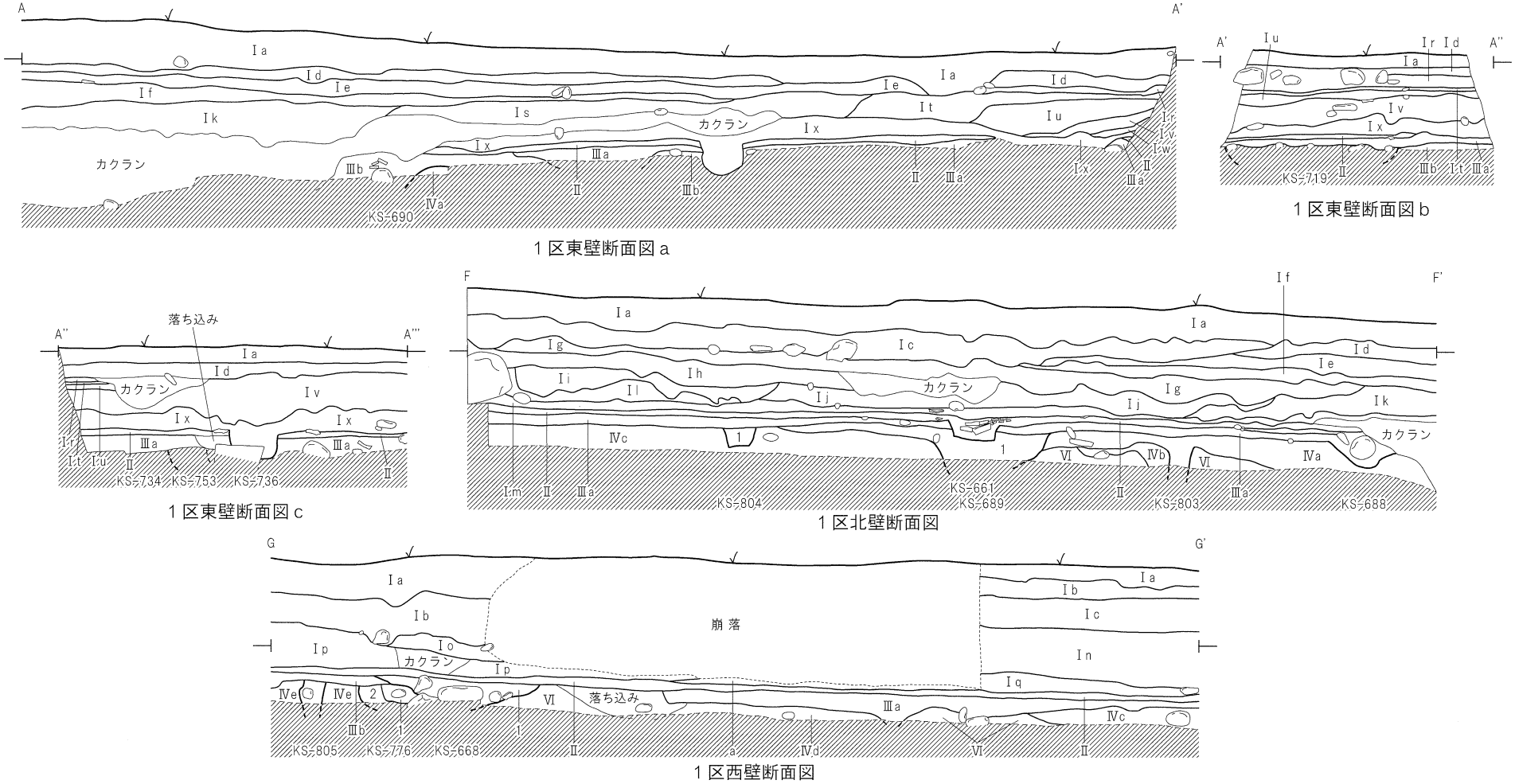
・KS - 698集石　調査区西部で検出した。平面形は円形である。規模は東西71cm、南北61cmである。根固め石と考えられる径６～12cmの円礫、瓦が出土した。

・KS - 699溝跡　調査区西部で検出した。調査区西壁から南に緩やかに曲がる溝で、上端幅42～60cm、深さ14cmである。検出した長さ2.6m、方向はN－35°－Wである。KS -700・701より新しい。上部が削平され残りが悪いが、KS -772溝跡に接続する可能性が考えられる。瓦が出土した。

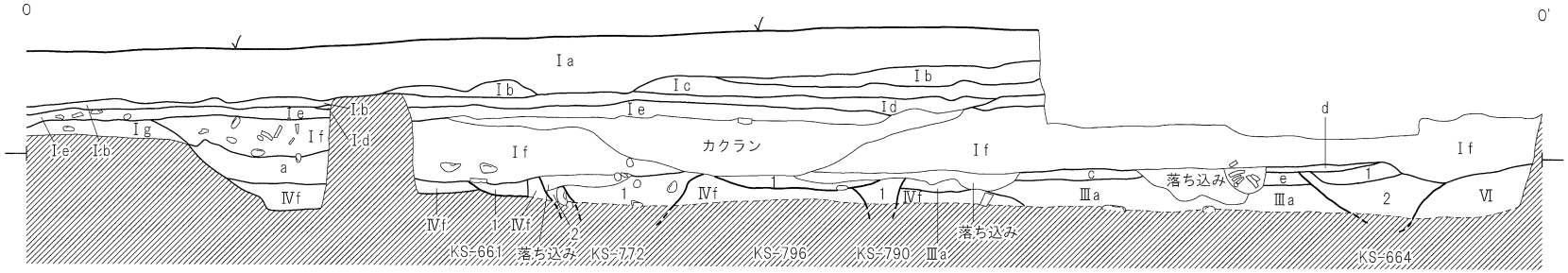
・KS - 700集石　調査区西部で検出した。平面形は円形である。規模は東西75cm、南北80cmである。根固め石と考えられる径５～20cmの礫を含む。KS -699より古い。

・KS - 701ピット　調査区西部で検出した。平面形は円形である。規模は東西26cm、南北32cmである。径10cmの礫

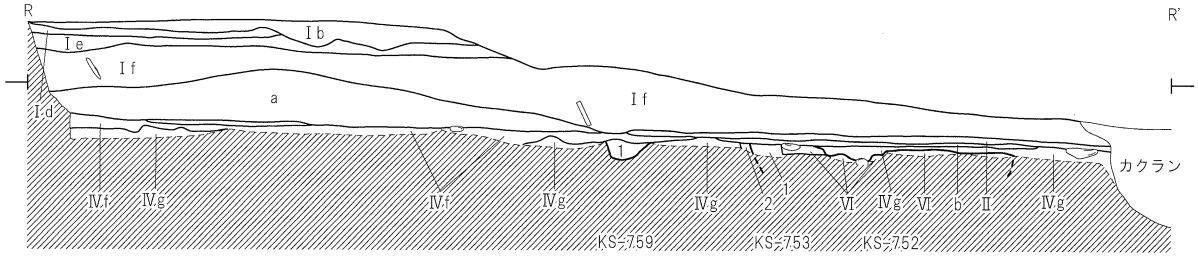
第12図　第23次調査　第２遺構面遺構平面図（1/100）



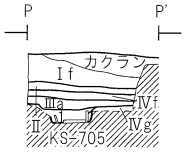
第13図　第23次調査　1区断面図1（1／50 SL＝42.500m）



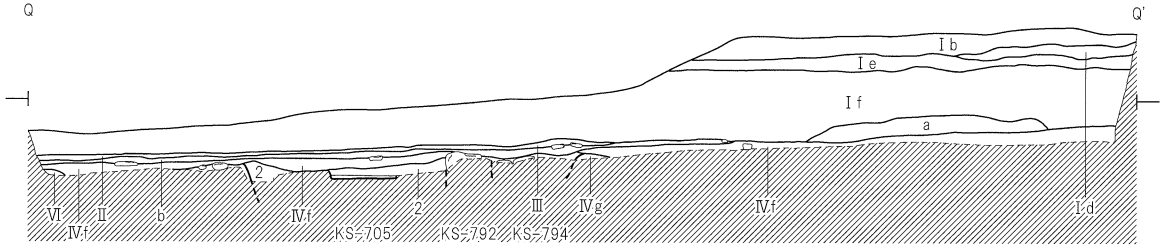
1区南壁断面図



1区 ベルト東壁断面図

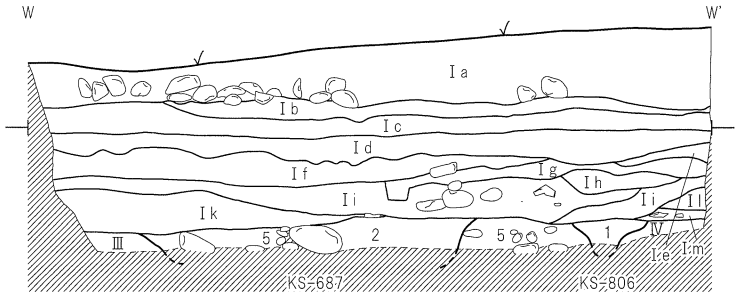


1区中央部壁断面図

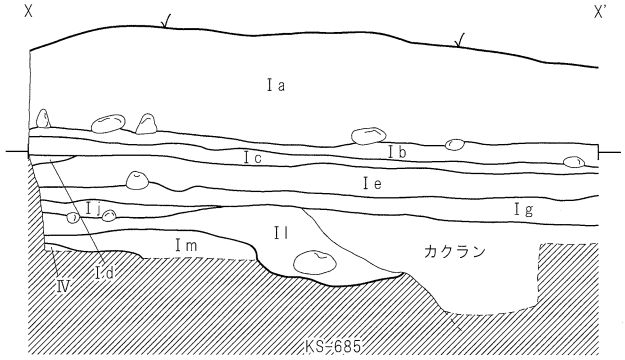


1区 ベルト西壁断面図

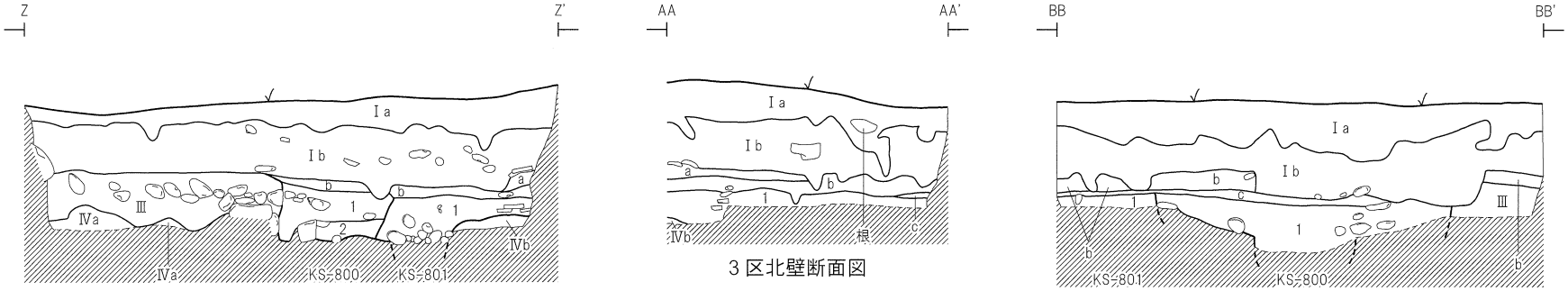
第14図　第23次調査　1区断面図2（1／50 SL＝42.500m）



2区南壁断面図



2区北壁断面図

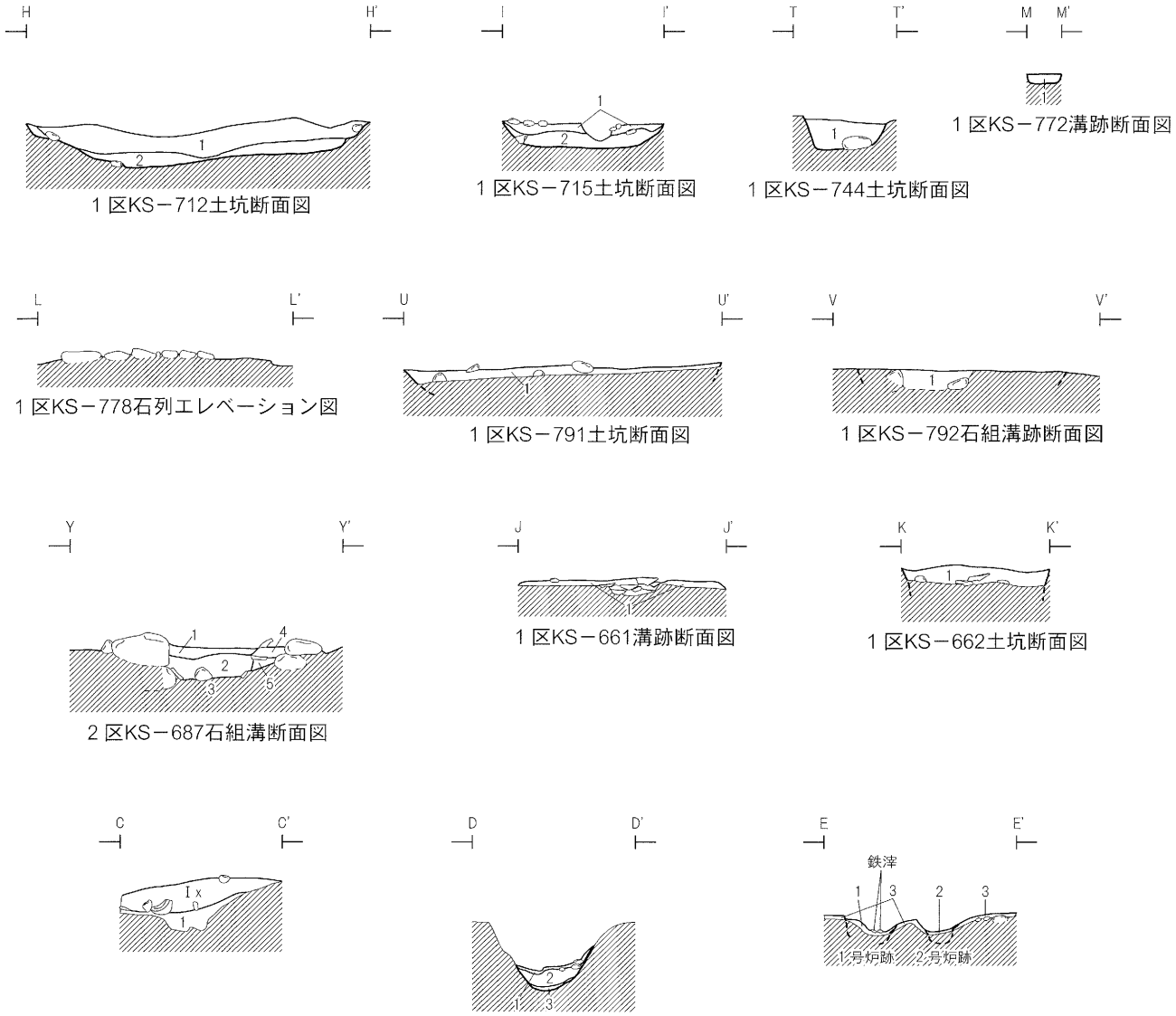


3区西壁断面図

3区北壁断面図

3区東壁断面図

第15図　第23次調査　2・3区断面図（1／50 SL＝42.500m）



第16図　第23次調査　遺構断面図

調査区	遺構番号	遺構・層位	土色 土色No	土色 土色	土質	土性 粘質	土性 しまり	備考
1	KS－712	埋土1	2.5Y5/3	黄褐色	砂	無	やや有	径2～25cmの凝灰岩片を多量に含む。鉄分、瓦片を少量含む。
		埋土2	2.5Y5/2	暗灰黄色	粘土シルト	有	やや有	径5～25cmの礫、瓦を多量に含む。(はっている可能性有)
	KS－715	埋土1	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト	無	有	径5～10cmの礫、砂を少量含む。
		埋土2	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	無	有	径5～15cmの礫、炭、鉄分を少量含む。
	KS－744	埋土1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	やや有	やや有	径2～7cmの礫を含む。内部に根石あり。
	KS－774	埋土1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	やや有	やや有	砂を多量に含む。鉄分、瓦片を含む。
	KS－791	埋土1	10Y4/1	灰色	粘土質シルト	有	やや有	砂を多量に含む。径2～10cmの礫を含む。鉄分を含む。
	KS－792	埋土1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂質シルト	有	無	中間に2枚の粗砂層あり。上面に細砂層あり。炭、鉄分を含む。
	KS－661	埋土1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや有	無	花崗岩、鉄分を多量に含む。瓦片を少量含む。底面が硬化している。
	KS－662	埋土1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	有	無	花崗岩片、円礫、木片、石灰、炭を含む。中央上部付近に鉄分を多量に含む。
	KS－680 ピット	1	10YR3/3	暗褐色	シルト	やや有	やや有	明黄褐色シルトブロック(10YR6/6)を多量に含む。径5～20cmの礫、瓦片を少量含む。
		埋土1	10YR3/2	黒褐色	シルト	無	やや有	炭を多量に含む。花崗岩片を含む。
	KS－680 土坑	埋土1			炭層	無	無	径10cm位の礫を少量含む。鉄滓を含む。
		埋土2	5Y4/1	灰色	シルト質砂	やや有	無	径5cm前後の礫を少量含む。鉄分、粘土を少量含む。
		埋土3			炭層	やや有	無	
	KS－680 1・2号炉跡	埋土1	5YR1.7/1	黒色	粘土質シルト	やや有	無	表面に炭、鉱滓、焼土を含む。
		埋土2	2.5YR5/8	明赤褐色	シルト	やや有	無	
		埋土3	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	有	径2～15cmの礫を含む。砂、風化礫を多量に含む。
2	KS－687	埋土1	10Y4/1	灰色	粘土	強	無	径3～15cmの礫、瓦片を少量含む。
		埋土2	10Y5/1	灰色	砂	無	無	径2～15cmの礫を少量含む。瓦片を多量に含む。
		埋土3	7.5GY4/1	暗緑灰色	シルト質粘土	強	無	
		掘り方4	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色	粘土質シルト	やや有	有	径5～20cmの礫を多量に含む。炭、風化礫を少量含む。
		掘り方5	5GY3/1	暗オリーブ灰色	シルト質粘土	有	有	径10～25cmの礫を多量に含む。

第４表　第23次調査遺構土層注記表（第16図）

調査区	遺構番号	遺構層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘質	しまり	
1	基本層	Ⅰa	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	有	やや有	径2～25cmの礫、ビニール片を含む。
		Ⅰb	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや有	やや有	黒褐色土ブロック(10YR3/1)を多量に含む。
		Ⅰc	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	有	無	黒褐色腐食質粘土(7.5YR3/2)を多量に含む。にぶい黄褐色粘土質ブロック(10YR5/3)に鉄分、径5～25cmの礫を少量含む。
		Ⅰd	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	無	有	径1～5cmの礫を多量に含む。
		Ⅰe	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質砂	無	やや有	径1～6cmの礫を少量含む。鉄分を少量含む。0.5～2cmの風化礫を多量に含む。
		Ⅰf	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	無	有	径1～3cmの礫を少量含む。鉄分、炭を含む。
		Ⅰg	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	無	やや有	鉄分、風化礫を少量含む。
		Ⅰh	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土	強	無	鉄分を多量に含む。径1～5cmの礫を少量含む。瓦片を含む。
		Ⅰi	10YR3/2	黒褐色	粘土	強	無	鉄分、風化礫、植物を少量含む。
		Ⅰj	7.5YR3/1	黒褐色	腐食質粘土	強	無	植物を多量に含む。径5～15cmの鉄分礫を少量含む。
		Ⅰk	7.5YR3/4	暗褐色	粗砂	無	無	中間に黒色腐食層を挟む。上面に鉄分を多量に含む。
		Ⅰl	10YR6/6	明黄褐色	シルト質粘土	強	無	風化礫を多量に含む。鉄分を少量含む。径45cmの大型石を含む。ややグライしている。
		Ⅰm	7.5YR4/1	灰色	粘土	強	無	上部に腐食層を含む。鉄分灰を少量含む。花崗岩片を一部に含む。
		Ⅰn	2.5Y6/3	にぶい黄色	粘土	強	無	径30～60cmの大型礫を下部に含む。鉄分、瓦片を少量含む。
		Ⅰo	10Y4/1	灰色	粘土	有	無	上面に腐食層あり。径2～5cmの礫、瓦片を少量含む。
		Ⅰp	5Y5/2	灰色オリーブ	粘土	強	やや有	風化礫を多量に含む。径3～8cmの礫を少量含む。鉄分、炭、瓦片を含む。
		Ⅰq	2.5Y3/1	黒褐色	シルト質粘土	有	無	植物を多量に含む。径10～30cmの礫を少量含む。
		Ⅰr	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	無	無	径2～11cmの礫、炭、風化礫を少量含む。
		Ⅰs	10YR3/1	黒褐色	シルト	有	無	径2～10cmの礫を少量含む。鉄分を多量に含む。瓦片、磁器を含む。
		Ⅰt	10YR4/2	10YR4/2	シルト	やや有	無	径2～5の礫を少量含む。鉄分を多量に含む。上部に風化礫(厚さ3～5cm)の盛土。
		Ⅰu	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	無	やや有	径1～8cmの礫を少量含む。
		Ⅰv	10YR3/1	黒褐色	シルト	やや有	やや有	鉄分を少量含む。
		Ⅰw	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや有	やや有	鉄分、風化礫を少量含む。
		Ⅰx	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト	やや有	有	径1～3cmの礫を少量含む。鉄分を少量含む。
		Ⅰy	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや有	やや有	腐食層を多量に含む。径2～10cmの礫、鉄分を少量含む。第21次調査2区Ⅱ層に類似。
		Ⅱ	2.5Y5/2	暗黄色	粘土質シルト	やや有	やや有	砂、花崗岩片を多量に含む。グライ層。
		Ⅲa	2.5Y5/2	暗黄色	粘土	強	有	径1～6cmの礫を多量に含む。鉄分を少量含む。
		Ⅲb	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	有	有	径3～5cmの礫、鉄分を少量含む。
		Ⅳa	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘土	有	有	上部に風化礫を多量に含む。径5～20cmの礫を少量含む。鉄分を多く含む。黒色ブロックを少量含む。
		Ⅳb	2.5Y5/3	黄褐色	粘土	有	有	風化礫を多量に含む。ややグライしている。上面にピットあり。
		Ⅳc	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色	粘土	強	有	砂礫を多量に含む。鉄分を少量含む。
		Ⅳd	10GY4/1	暗緑灰色	粘土	有	有	径3～10cmの礫を少量含む。細砂を含む。
		Ⅳe	10YR2/1	黒色	粘土	強	有	径1～3cmの礫を少量含む。
		Ⅵ	2.5GY6/1	オリーブ灰色	シルト質粘土	有	強	径0.5～2cmの礫を少量含む。地山か。
	炭層	a	－	黒色	炭	－	－	花崗岩が混じる。
	KS－736	掘り方1	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂質シルト	無	やや有	径1～2cmの礫、鉄分を少量含む。礎石か。
	KS－689	埋土1	5GY4/1	暗オリーブ灰色	粘土	やや有	有	下部に砂礫を多量に含む。鉄分を少量含む。
	KS－804	埋土1	5GY4/1	暗緑灰色	粘土質シルト	やや有	有	砂、鉄分を多量に含む。
	KS－668	掘り方1	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト	有	有	径3～20cmの礫を多量に含む。砂を多量に含む。鉄分を少量含む。
	KS－776	掘り方1	2.5Y4/1	黄灰色	シルト	有	無	鉄分を少量含む。大型礫含む。礎石あり。
		掘り方2	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色	粘土質シルト	有	やや有	風化礫を少量含む。グライ層。
	KS－805	埋土1	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	有	有	径5cmの礫、風化礫粒子を多量に含む。

第５表　第23次調査１区土層注記表１（第13図）

調査区	遺構番号	遺構層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘質	しまり	
1	基本層	Ⅰa	10YR3/2	黒褐色	シルト	やや有	やや有	10YR3/1黒褐色粘土質ブロックを多量に含む。径1～5cmの礫を少量含む。上部にまだらな整地層(約10cm)あり
		Ⅰb	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	有	無	腐植土を多量に含む。鉄分、炭を少量含む。第21次調査2区のⅡ層に類似。
		Ⅰc	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	やや有	黄褐色ブロックを多量に含む。径2～5cmの礫、鉄分、瓦片を少量含む。
		Ⅰd	10YR3/2	黒褐色	シルト	有	有	径1～3cmの礫、風化礫、炭、鉄分を少量含む。大正時代の銭貨が出土。
		Ⅰe	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粘土	強	やや有	鉄分、風化礫を少量含む。
		Ⅰf	2.5Y5/3	黄褐色	シルト質粘土	強	有	黄色い風化礫を多量に含む。径1～4cmの礫、鉄分、瓦片を少量含む。
		Ⅰg	2.5Y3/2	黒褐色	シルト質粘土	強	無	径2～5cmの礫、鉄分を多量に含む。瓦片を含む。
		Ⅰh	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	有	やや有	径1～8cmの礫、鉄分、黄褐色粘土ブロックを多量に含む。瓦片を多量に含む。
		Ⅰi	2.5Y5/3	黄褐色	シルト	有	やや有	径1～6cmの礫、鉄分、瓦片を含む。
		Ⅱ	10Y3/1	オリーブ黒色	砂礫層	無	やや有	花崗岩片を多量に含む。
		Ⅲa	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂礫	無	やや有	径2～10cmの礫を多量に含む。瓦片を含む。
		Ⅳc	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	有	有	砂を多量に含む。径2～4cmの礫、鉄分、炭を少量含む。
		Ⅳd	10YR6/6	明黄褐色	粘土質シルト	有	有	鉄分を含む。
		Ⅴ	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂	有	無	砂、径1cm前後の風化礫を多量に含む。第21次調査2区Ⅲa層に相当。
		Ⅵ	2.5Y7/4	浅黄色	砂	無	強	鉄分を含む。砂は凝固している。地山。
	盛土	a			花崗岩片			径1～20cmの岩片層。岩の周りには鉄分を多量に含む。
	炭層	b			炭	無	無	鍛冶遺構に関連。花崗岩を少量含む。
	整地土	c	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト	有	有	灰色砂を多量に含む。鉄分、炭を含む。
		d	2.5Y5/3	黄褐色	砂	やや有	有	粘土を含む。
		e	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	やや有	有	粘土を含む。風化礫を少量含む。
	KS－661	埋土1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	有	無	花崗岩片を多量に含む。径1～8cmの礫を少量含む。底部に鉄分を多量に含む。銅版転写の碗出土。
	KS－664	埋土1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	やや有	有	径2～4cmの礫、風化礫を少量含む。
		埋土2	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質砂	やや有	やや有	径1～10cmの礫、鉄分を少量含む。
	KS－705	埋土1	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	無	無	中間に粗砂の層あり。炭を含む。
		掘り方1	10YR5/3	にぶい黄褐色	細砂	無	やや有	径2～5cmの礫を少量含む。中間に粗砂層あり。
	KS－753	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	やや有	やや有	径1～2cmの礫を含む。鉄分を少量含む。
		埋土2	2.5Y5/3	黄褐色	シルト	やや有	有	径3～5cmの礫を含む。鉄分、炭を少量に含む。砂を多量に含む。
	KS－759	埋土1	2.5Y5/3	黄褐色	細砂	無	やや有	径2～5cmの礫を含む。鉄分、瓦片を含む。KS－759の埋土。
	KS－772	埋土1	5GY4/1	暗オリーブ灰色	砂質シルト	有	やや有	砂を多量に含む。径1～3cmの礫、木片を含む。石組み溝。
		掘り方2	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色	シルト質砂	やや有	やや有	粘土を含む。石組みの石。溝の掘り方。
	KS－790	埋土1	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	有	無	径1～10cmの礫を少量含む。澄み、鉄分を含む。
	KS－794	埋土1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	無	やや有	径10～15cmの礫を含む。鉄分、炭を含む。KS－794の埋土。
	KS－796	埋土1	2.5Y5/3	黄褐色	シルト	やや有	有	径1～3cmの礫を含む。鉄分、瓦片を含む。

第６表　第23次調査１区土層注記表２（第14図）

調査区	遺構番号	遺構層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘質	しまり	
2	基本層	Ⅰa	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	無	無	径2～15cmの礫を少量含む。下部暗褐色シルト層(10Y3/4)
		Ⅰb	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	やや有	有	径3～5cmの礫、鉄分を少量含む。
		Ⅰc	5Y3/1	オリーブ黒色	シルト	やや有	やや有	径2～5cmの礫、鉄分を少量含む。炭を少量含む。
		Ⅰd	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	有	やや有	黄褐色粘土ブロックを多量に含む。径3～5cmの礫、鉄分、瓦片を少量含む。
		Ⅰe	2.5Y4/2	暗灰黄褐色	粘土質シルト	やや有	無	砂を多量に含む。径3～15cmの礫、鉄分を少量含む。
		Ⅰf	10YR2/1	黒褐色	腐食層	有	無	黄褐色粘土ブロック(2.5Y5/3)を多量に含む。炭、植物を含む。
		Ⅰg	10YR2/2	黒褐色	粘土	有	無	腐植土を含む。北壁では中間に砂層を挟む。
		Ⅰh	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	有	やや有	径1～3cmの礫、砂を少量含む。
		Ⅰi	2.5Y3/2	黒褐色	粘土	有	やや有	径10～30cmの礫、板材、炭を少量含む。中間に細砂層を挟む。
		Ⅰj	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	有	やや有	
		Ⅰk	5GY4/1	暗オリーブ灰色	シルト質粘土	強	やや有	黄褐色粘土ブロック、黒褐色粘土ブロックを多量に含む。径2～5cmの礫、瓦を含む。上面に花崗岩片あり。
		Ⅰl	7.5GY4/1	暗緑灰色	粘土	強	やや有	径5～7センチの礫、風化礫、炭を少量含む。北壁にKS－685溝跡埋土の砂層が見られる。
		Ⅰm	10Y4/1	灰色	粘土	強	無	北壁では径3～7cmの礫、瓦片が少量含む。花崗岩片2点出土。
		Ⅲ	7.5GY4/1	暗緑灰色	粘土質シルト	やや有	有	1～3cmの礫を含む。
		Ⅳ	5GY5/1	オリーブ灰色	砂	無	有	径1～3cmの礫、鉄分を少量含む。地山。
	KS－806	埋土1	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色	シルト	有	有	風化礫、炭、鉄分、瓦片を含むピット。
3	基本層	Ⅰa	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	無	無	径1～3cmの礫を少量含む。
		Ⅰb	10YR4/4	褐色	シルト	やや有	無	径2～15cmの礫、花崗岩片を含む。瓦片を少量含む。
		Ⅲ	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	無	無	上部に5～30cmの礫を多量に含む。
		Ⅳa	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	無	無	風化礫を少量含む。
		Ⅳb	10YR5/6	黄褐色	シルト	無	有	径2～3cmの礫を少量含む。風化礫、細粒を多量に含む。
	整地土	a	10YR4/4	褐色	砂質シルト	無	有	径3～10cmの礫を少量含む。上面に花崗岩片がのる。鉄分を少量含む。
		b	10YR4/4	褐色	シルト	やや有	有	径2～10cmの礫を少量含む。黄褐色粘土ブロック(2.5Y5/3)を少量含む。瓦片を含む。
		c	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	やや有	無	径5～15cmの礫を少量含む。
	KS－800	埋土1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	やや有	有	径5～10cmの礫を少量含む。瓦片を含む。
	KS－801	埋土1	10YR4/4	褐色	シルト	やや有	無	径5～10cmの礫を含む。砂を含む。北端に瓦を多量に含む。KS－801暗渠状遺構。

第７表　第23次調査２・３区土層注記表（第15図）

を含む。KS -699より古い。

・KS - 702ピット　調査区西部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西66cm、南北55cm である。径４～16cm の礫を含む。

・KS - 703ピット　調査区中央部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西63cm、南北55cm である。径４～18cm の礫を含む。

・KS - 704ピット　調査区中央部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西46cm、南北37cm である。径５～10cm の礫、瓦片が出土した。

・KS-705木樋　調査区中央部で検出した。南北方向に延びる木樋で、上端幅は25cm である。検出した長さは8.1m、方向はN－20°－Wである。木樋は上部が削平され、底板と側板の一部のみ残存し、底板幅は18cm である。掘り方の上端幅30cm、下端幅24cm である。KS-792石組溝の掘り方と交差しているが、溝との切り合いは確認されなかった。KS-792石組溝と直交しており、１区南西部の石組溝や溝跡と一連のものである可能性も考えられる。瓦が出土した。

・KS - 706礎石　調査区中央部で検出した。平面形は円形である。加工のない扁平な川原石で長軸37cm、短軸31cm である。掘り方は東西49cm、南北45cm である。根固め石は確認されなかった。礎石上端の確認レベルは41.872mである。

・KS - 707柱穴　調査区中央部で検出した。平面形は方形である。規模は東西78cm、南北70cm である。長軸23cm、短軸18cm と長軸31cm、短軸25cm の柱痕跡２基を確認した。柱痕跡には切り合いはみられず、２つ同時に存在し、どちらかが柱の補強材であると考えられる。KS -708より新しい。

・KS - 708土坑　調査区中央部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西42cm、南北67cm 以上である。瓦が出土した。KS -707より古い。KS -695とは接しているが新旧関係は不明である。

・KS - 709土坑　調査区中央部で検出した。平面形は撹乱により切られているが、楕円形と推測される。規模は東西20cm 以上、南北65cm 以上である。径10～20cm の礫を含む。内部に炭の詰まったピット１基を確認した。

・KS - 710土坑　調査区中央部で検出した。平面形は撹乱により切られているが、楕円形と推測される。規模は東西27cm 以上、南北45cm 以上である。

・KS-711ピット　調査区中央部で検出した。平面形は円形である。規模は径25cmである。KS-695溝跡より新しい。

・KS - 712土坑　調査区北東部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西170cm、南北250cm、深さ30cm である。底面に径５～20cm の礫が多数みられる。KS -713･714より古い。KS -715より新しい。出土遺物は肥前染付皿片、大堀相馬灰釉碗片、瓦である。

・KS - 713土坑　調査区北東部で検出した。平面形は撹乱により切られているが、方形と推測される。規模は東西28cm 以上、南北60cm である。径７～21cm の礫を含む。KS -712より新しい。

・KS - 714土坑　調査区北東部で検出した。平面形は撹乱により切られているが、方形と推測される。規模は東西54cm、南北48cm である。径５cm の礫を含む。KS -712より新しい。

・KS-715土坑　調査区北東部で検出した。平面形は方形である。規模は東西160cm、南北105cm、深さ18cm である。径５～20cm の礫を含む。KS -712より古い。17世紀から18世紀の白磁皿２点と瓦が出土した。

・KS - 716集石　調査区北東部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西83cm 以上、南北54cm である。径５～15cm の礫を多数含む。KS -717より古い。プラン上で18世紀代の備前糸目徳利片、瓦が出土した。

・KS - 717礎石跡　調査区北東部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西90cm、南北150cm である。径110cm の礎石抜取り穴を確認した。根固め石の大きさは径５～25cm の円礫である。KS -718より古く、KS -716より新しい。瓦が出土した。

・KS-718土坑　調査区北東部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西76cm 以上、南北46cm 以上である。径５～25cm の礫を多数含む。KS -717より新しい。瓦が出土した。礎石もしくは集石の可能性が考えられる。

・KS－719礎石跡　調査区東部で検出した。平面形は北東部が調査区外となっているが、円形と推測される。規模は東西100cm、南北147cmである。根固め石の大きさは径５～35cmの円礫である。礎石の抜取り穴は確認されなかった。瓦が出土した。

・KS－720柱穴　調査区中央部で検出した。平面形は円形である。規模は東西50cm、南北44cmである。径18cmの柱痕跡を確認した。掘り方には径５～30cmの礫を含む。瓦が出土した。

・KS－721ピット　調査区部で検出した。平面形は撹乱により切られているが、円形と推測される。規模は東西13cm以上、南北40cm以上である。KS－722より新しい。

・KS－722溝跡　調査区中央部で検出した。東西方向に延びる溝跡で、上端幅11～20cmある。検出した長さは125cm、方向はN－68°－Eである。KS－721・723・725より古い。KS－695と接続する可能性が考えられる。

・KS－723土坑　調査区中央部で検出した。平面形は円形である。規模は東西45cm、南北40cmである。

・KS－724柱穴　調査区中央部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西45cm、南北40cmである。長軸25cm、短軸20cmの柱が一部残存する柱痕跡を確認した。

・KS－725柱穴　調査区中央部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西41cm、南北35cmである。径20cmの柱が一部残存する柱痕跡を確認した。

・KS－726柱穴　調査区中央部で検出した。平面形は不整円形である。掘り方の規模は東西40cm、南北34cm、径17cmの柱が一部残存する柱痕跡を確認した。

・KS－727柱穴　調査区中央部で検出した。平面形は不整円形である。掘り方の規模は東西63cm、南北53cmである。径20cmの柱が一部残存する柱痕跡を確認した。掘り方には長軸７cm、短軸５cmの石を含む。

・KS－728柱穴　調査区中央部で検出した。平面形は楕円形である。掘り方の規模は東西35cm、南北50cmである。長軸33cm、短軸27cmの柱が一部残存する柱痕跡を確認した。

・KS－729炉跡　調査区中央部で平面の一部を検出した。平面形は大部分を撹乱により切られているが、円形と推測される。規模は東西30cm、南北40cmである。炉床に多量の焼土がみられた。

・KS－730柱穴　調査区中央部で検出した。平面形は不整円形である。掘り方の規模は東西57cm、南北51cmである。径21cmの柱が一部残存する柱痕跡を確認した。径５～20cmの礫を含む。

・KS－731柱穴　調査区東部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西80cm、南北60cmである。径25cmの柱が一部残存する柱痕跡を確認した。

・KS－732柱穴　調査区東部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西43cm、南北40cmである。長軸35cm、短軸33cmの柱痕跡を確認した。

・KS－733柱穴　調査区東部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西35cm、南北25cm以上である。径18cmの柱根が残存する柱痕跡を確認した。

・KS－734溝跡　調査区東部で検出した。東部が調査区外、南部が撹乱に切られている。上端幅25～150cm以上である。検出した長さは東西2.9m、南北1.3m、方向はN－68°－Eである。プランが東側に広がる。KS－735・737より古い。染付碗や瓦が出土した。

・KS－735土坑　調査区東部で検出した。平面形は撹乱により切られているが、楕円形と推測される。規模は東西70cm以上、南北80cm以上である。径５～23cmの礫を含む。

・KS－736礎石　調査区東部で検出した。加工のないやや変形した四角い川原石で、長軸40cm以上、短軸25cm以上である。掘り方と根固め石は確認されなかった。

・KS－737柱穴　調査区東部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西48cm、南北54cm以上である。径13cmの柱痕跡を確認した。柱痕跡は空洞になっていた。瓦片が出土した。

・KS－738柱穴　調査区東部で検出した。平面形は楕円形である。掘り方の規模は東西36cm、南北34cmである。径

19cm の柱の一部が残存する柱痕跡を確認した。

・KS-739ピット　調査区東部で検出した。平面形は円形である。規模は東西50cm、南北47cmである。KS-741より古い。

・KS-740井戸跡　調査区東部で検出した。平面形は撹乱（第21次調査でKS-592溝跡としたが、今回の調査で撹乱として扱う）により、上部約半分が失われているが、円形と推測される。規模は東西5m以上、南北4.4mである。掘り方がKS-746井戸跡に切られるが、井戸本体の切り合いはない。KS-742より新しい。

・KS-741集石　調査区東部で平面のみ検出した。扁平な加工のない川原石で、径約25～40cm の6石が確認された。KS-740井戸跡の北側に配されていることから、KS-740井戸跡にかかわる遺構である可能性が考えられる。KS-739より新しい。

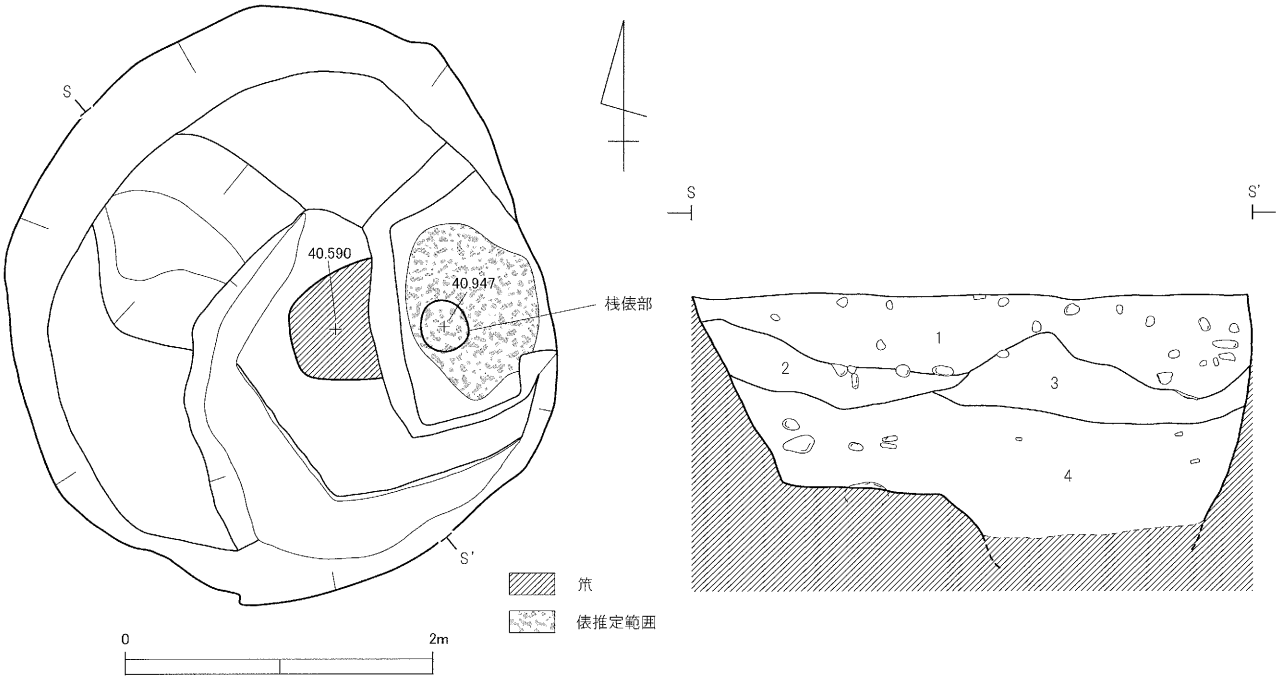
・KS-742土坑　調査区東部で検出した。平面形は大部分を撹乱により切られているが、楕円形と推測される。規模は東西25cm 以上、南北80cm 以上である。KS-740・746井戸跡より古く、KS-743より新しい。

・KS-743ピット　調査区東部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西17cm 以上、南北30cm である。KS-742より古い。

・KS-744土坑　調査区東部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西74cm、南北62cm、深さ25cm である。底面に径20cm 以上の川原石を確認した。

・KS-745土坑　調査区中央部で検出した。平面形はKS-746井戸跡に切られているが、円形と推測される。規模は東西82cm 以上、南北46cm 以上である。径15cm の礫を含む。KS-746井戸跡より古い。

・KS-746　井戸跡　調査区中央部で検出した。平面形は円形である。規模は東西3.5m、南北3.85m、深さ1.6m以上である。調査深度の底面で掘り方と本体との間が段になっており、調査深度の底面で掘り方の南側に寄って井戸本体のプランを確認した。本体は略方形を呈している。調査を行った深さでは井戸枠は確認されなかった。段の北西側に一



調査区	遺構番号	遺構層位	土色 土色No	土色 土色	土質	土性 粘質	土性 しまり	備考
1	KS－746	埋土1	10YR2/4	灰黄褐色	粘土質シルト	有	有	径3～10cmの礫を含む。風化礫、砂を多量に含む。花崗岩片、炭、瓦片を少量含む。
		埋土2	2.5Y1/3	黒褐色	粘土質シルト	有	無	径5～15cmの礫を少量含む。径2～10cmの風化礫を多量に含む。炭、鉄分、木製品を少量含む。ややグライしている。
		埋土3	5Y1/3	オリーブ黒色	粘土質シルト	有	無	径3～7cmの礫、炭を含む。木製品、鉄分を少量含む。砂を多量に含む。ややグライしている。
		埋土4	2.5Y1/4	黄灰色	シルト質粘土	有	無	径7～25cmの礫を少量含む。下部に少礫を多量に含む。ややグライしている。木簡、漆器、下駄、箸等多量に含む。

第17図　1区KS-746井戸跡平・断面図（1/50）

段低くなっている箇所が確認され、井戸として使用しなくなったあと、井戸枠を抜く際に掘り下げたことによるものと推測される。

埋土の２層上面では、面取りの加工がみられる長軸約50cm、短軸約28cmの方形の石とその周囲に環状に配された加工のない川原石13石を検出した。この配石については井戸を埋める際に行った井戸鎮めなどの祭祀遺構であると考えられる。埋土１層は山土で埋められていた。埋土２～４層以下の埋土からは後述する遺物のほかに、俵が桟俵部分を中心に押しつぶされた状態で検出した。また、笊とみられる竹を編んだものも検出した。埋土から出土した磁器は18世紀のものが中心である。陶器は大堀相馬産の碗や皿、仏飯器のほか、寛保２年（1742）の暦とみられる京焼暦手筒茶碗（第24図３）、鳴海織部皿（写真図版16－108）、瀬戸鉄絵蓋物（第25図15）など18世紀のものが中心であるが、19世紀前葉の大堀相馬産の鍋も出土しており（第24図11）、井戸使用時期の下限が19世紀代になると考えられる。陶磁器以外では、土師質・瓦質土器、煙管、古銭、砥石などのほか、木簡をはじめ漆器椀、下駄、箸、樽や桶の部材、栓、井戸支柱材（第48図４）などの木製品が多数出土している。出土した木簡のうち、榧森家6代当主である「榧森与左衛門」と記されたものが３点確認された（第35図１～３）。KS -740・742・745・757より新しい。なお、第21次調査では本遺構をKS -595土坑として扱ったが、今回の調査で井戸跡であることが確認された。

・KS - 747柱穴　調査区中央部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西40cm、南北42cmである。径23cmの柱の一部が残存する柱痕跡を確認した。

・KS - 748柱穴　調査区中央部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は径22cmで、径15cmの柱痕跡を確認した。

・KS-749ピット　調査区中央部で検出した。平面形は円形である。規模は径40cmで、径19cmの柱痕跡を確認した。瓦が出土した。

・KS - 750土坑　調査区中央部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西85cm、南北90cmである。長軸60cm、短軸55cmの柱痕跡を確認した。

・KS - 751溝跡　調査区南部で検出した。南北方向に延びる溝跡で、KS -746井戸跡に直交するように東西方向にも延び、T字型を呈する。上端幅20～33cmである。検出した長さは南北方向4.39m、東西方向1.6m、方向はN－28°－Wである。KS -746より古く、KS -752より新しい。瓦片が出土した。

・KS - 752柱穴　調査区南部で検出した。平面形はベルトとKS -751溝跡により切られているが、楕円形と推測される。掘り方の規模は東西35cm以上、南北55cmである。長軸25cm、短軸15cmの柱痕跡を確認した。

・KS - 753柱穴　調査区南部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西35cm以上、南北37cmである。長軸20cm、短軸15cm以上の柱痕跡を確認した。

・KS - 754柱穴　調査区南部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西16cm、南北18cmである。径10cmの柱痕跡を確認した。

・KS - 755柱穴　調査区南部で検出した。平面形は不整形である。掘り方の規模は東西49cm、南北30cmである。径23cmの柱の一部が残存する非常に太い柱痕跡を確認した。掘り方中に径５～15cmの礫を含む。

・KS - 756土坑　調査区南部で検出した。平面形は撹乱により切られているが、方形と推測される。規模は東西83cm、南北93cm以上である。堆積土中に径５～10cmの礫を含む。

・KS - 757土坑　調査区南部で検出した。平面形はKS -746井戸跡に切られているが、不整円形と推測される。規模は東西38cm以上、南北70cm以上である。堆積土中に径６～20cmの礫を含む。

・KS - 758ピット　調査区南部で検出した。平面形は撹乱により切られているが、円形と推測される。規模は東西10cm以上、南北40cm以上である。

・KS - 759溝跡　調査区南部で検出した。東西方向に延びる溝で、上端幅23～33cmである。検出した長さは153cm、方向はN－68°－Eである。KS -751より新しい。東側で接しているKS -756土坑との関係は不明である。

・KS - 760柱穴　調査区南部で検出した。平面形は方形である。掘り方の規模は東西36cm、南北40cm、深さ10cm である。径23cm の柱痕跡を確認した。径２～６cm の礫を含む。

・KS - 761ピット　調査区南部で検出した。平面形は円形である。規模は径30cm である。瓦が出土した。

・KS - 762柱穴　調査区南部で検出した。平面形は楕円形である。掘り方の規模は東西43cm、南北49cm である。径15cm の柱痕が残存する柱痕跡を確認した。柱痕跡は空洞になっていた。径５～20cm の礫を含む。

・KS - 763土坑　調査区南部で検出した。南側の段の下に延びるが、平面形は不整円形と推測される。規模は東西64cm、南北93cm 以上である。中心部から径10～15cm の礫や瓦片が出土した。

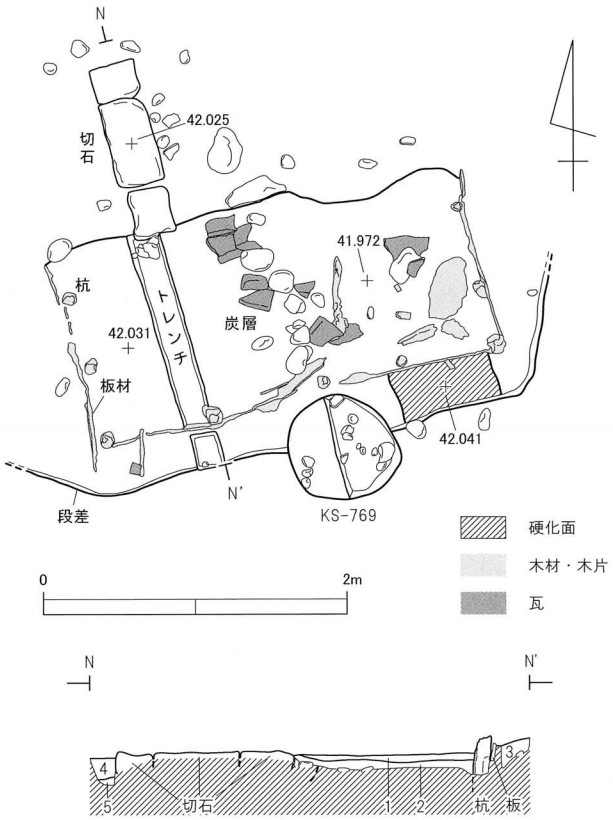
・KS - 764土坑　調査区南部で検出した。平面形は一部が未調査部分に延びているので確認できないが、不整形と推測される。規模は東西58cm 以上、南北55cm 以上である。KS -765溝跡より古い。

・KS - 765溝跡　調査区南部で検出した。東西方向に延びる溝跡で、上端幅は18cm である。検出した長さは90cm、方向はN－72°－Eである。KS-764より新しい。溝の上面で丸瓦３個体が凹面を上にして横並びに敷かれた状態で確認された。溝にかかわる施設の可能性が考えられる。KS -763より古い。

・KS - 766ピット　調査区南部で検出した。平面形は方形である。規模は東西30cm、南北27cm である。径３～５cm の礫を含む。

・KS - 767土坑　調査区中央部で検出した。平面形は一部が未調査部分にあたるので確認できないが、楕円形と推測される。規模は東西50cm 以上、南北40cm 以上である。南側に段差を確認したが、段差より新しい19世紀代の遺構であると考えられる。

・KS - 768カマド跡　調査区西部で検出した。平面形は長方形で、東西辺と南辺を横板で囲まれた区画と、その北側に接続する扁平な石材が残るカマド本体部からなる。長方形の区画部は上部が削平され、残存している底部のみを検出した。規模は横板で囲まれた部分が東西2.8m、南北1.15m、石列部分が南北1.2m、方向はN－15°－Wである。横板は北辺以外の三辺で確認され、内側には横板を支える径12cm 程の丸杭が９本打ち込まれている。杭は南辺が両角を含め５本、東西辺は各３本配置されている。北東と南東角に杭はない。北辺に杭はなく、土壁であった可能性が考えられる。床面には一面に炭が堆積しており、上面には加工のない径12～25cm の川原石や桟瓦がみられる。北側には幅50～55cm、長軸24～58cm の切石が3石並んだ状態で検出し、掘り方は16cm である。各石材は石材の長軸方向に浅く凹んだ溝状になっている。南東隅の横板外側には東西70cm、南北35cm の方形の硬化面が、南西側の横板外側に接続するような板材が確認された。出土遺物は炭層より19世紀前葉の瀬戸美濃産の染付端反碗や桟瓦などが出土してお



調査区	遺構番号	遺構層位	土色		土質	土性		備考
			土色No	土色		粘質	しまり	
1	KS－768	埋土1			炭の層	無	やや有	上面に板材、桟瓦片がのる。
		埋土2	7.5Y4/1	灰色	粘土	有	有	径1～5cmの礫、瓦を含む。掘り方の可能性もあり
		掘り方1	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	有	有	径2～4cmの礫、瓦、鉄分を含む。
		掘り方2	2.5Y3/2	黒褐色	粘土	有	有	
		掘り方3	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	有	有	

第18図　1区KS－768カマド跡平・断面図（1/50）

り、遺構時期の下限が19世紀代になると考えられる。なお、遺構の類例については、まとめで後述するが、兵庫県伊丹市の伊丹郷町第164次・175次調査で検出された酒造用と考えられるカマド跡や大阪府大阪市の玉造小学校内の調査で検出されたカマドと構造が類似している。また、カマド跡の南側で調査区を東西に横断し、北側が一段低くなる段差を確認した。この遺構の北東側には炭を含む焼土の分布を２箇所検出した。

・KS - 769土坑　調査区西部で検出した。平面形は円形である。規模は径70cm である。径３～15cm の礫、瓦片が出土した。KS -768・770より新しい。

・KS - 770土坑　調査区西部で検出した。平面形は不整形である。規模は東西35cm、南北58cm 以上である。径10～15cm の礫、木片を含む。KS -769より古い。

・KS - 771土坑　調査区西部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西50cm、南北30cm である。瓦が出土した。

・KS - 772石組溝　調査区西部で検出した。南北方向に延びる石組溝で、上端幅60～85cm である。検出した長さは8.45m、方向はN－38°－Wである。加工のない20～35cm の川原石を縁石として据えている。溝の北側は段差を境に削平されている。KS - 773・774より新しい。北側で検出したKS - 699溝跡と接続する可能性が考えられる。瓦が出土した。

・KS - 773土坑　調査区西部で検出した。平面形は大部分をKS -772・774溝跡に切られているため不明である。規模は東西30cm 以上、130cm 以上である。KS -772・774溝跡より古い。

・KS - 774溝跡　調査区西部で検出した。南北方向に延びる溝跡で、上端幅16～30cm である。検出した長さは4.27m、方向はN－25°－Wである。北側は段差を境に削平されている。KS -772より古く、KS -773より新しい。瓦が出土した。

・KS - 775集石　調査区西部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西120cm、南北115cm である。径４～40cm の礫を含む。礎石の可能性が考えられる。

・KS - 776礎石　調査区西部で検出した。平面形は方形である。規模は東西20cm、南北10cm である。KS -668礎石に切られる。

・KS - 777柱穴　調査区西部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は東西25cm、南北35cm である。径15cm の柱痕跡を確認した。

・KS - 778石列　調査区西部で検出した。南北方向に延びる石列で、幅25～30cm である。検出した長さは164cm、方向はN－18°－Wである。加工のない15～30cm の川原石を並べて置いて布石としている。石は他の石列とは異なり、幅、高さともにほぼ一定に敷かれており、遺構の形状から土台をのせる建物基礎の可能性が考えられる。

・KS - 779柱穴　調査区西部で検出した。平面形は円形である。掘り方の規模は径50cm である。径30cm の柱痕跡を確認した。径６～10cm の礫を含む。KS -778石列より古い。

・KS - 780土坑　調査区西部で検出した。平面形は円形である。規模は東西55cm、南北45cm である。径３～20cm の礫を多数含む。

・KS - 781集石　調査区西部で検出した。平面形は円形である。規模は東西77cm、南北70cm である。径５～25cm の礫を多数含む。礎石の可能性が考えられる。

・KS - 782石組溝　調査区西部で検出した。東西方向に延び、調査区西壁付近で南に屈曲する。上端幅１～1.5m、東西約２mにわたり溝と直交して並べられた板材が覆う。検出した長さは3.7m、深さは30cm 以上、方向はN－116°－Wである。板材の下には加工のない10～20cm の川原石と面取りした石や角礫を縁石として据えている。溝の掘り方が確認され、幅は1.2～1.8mである。掘り方より17世紀中葉の肥前染付皿や砥石（第34図５）が出土した。

・KS - 783集石　調査区南部で検出した。平面形は円形である。規模は東西42cm、南北40cm である。風化礫を含む。KS -782石組溝より新しい。

・KS - 784土坑　調査区南部で検出した。平面形はKS -782石組溝に切られているが、円形と推測される。規模は東

西20cm以上、南北50cm以上である。KS-782石組溝より古い。

・KS-785礎石　調査区南部で検出した。平面形は楕円形である。掘り方の規模は東西35cm、南北40cm以上である。径20cmの加工のない川原石を礎石とする。

・KS-786集石　調査区南部で検出した。平面形は円形である。規模は東西55cm、南北50cmである。径10～30cmの礫多数含む。礎石の可能性が考えられる。

・KS-787ピット　調査区南部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西30cm、南北25cmである。KS-789より新しい。

・KS-788集石　調査区南部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西90cm、南北72cmである。径5～15cmの礫を多数含む。KS-787より古い。

・KS-789集石　調査区南部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西42cm、南北40cmである。風化礫を含む。

・KS-790石組溝　調査区南部で検出した。南北方向に延びる石組溝で、上端幅は26～35cm、深さ19cmである。検出した長さは2.3m、方向はN－23°－Wである。加工のない25cmと40cmの2石のみが残存している。東側に縁石の抜取り穴と考えられるピット3基が確認された。

・KS-791土坑　調査区南部で検出した。平面形は不整形である。規模は東西2.6m、南北2.6mである。内部からは多量の瓦の小片が敷き詰められた状態で出土した。KS-772・782・790・792と接続しており、石組溝や溝跡と一連の排水にかかわる遺構の可能性が考えられる。19世紀前葉の産地不明の大型燗徳利が出土した。

・KS-792石組溝　調査区南部で検出した。南北方向に延びる石組溝で、上端幅は27～40cm、深さ14cmである。検出した長さは2.3m、方向はN－57°－Eである。南側の縁石は加工のない長軸22～35cmの川原石が長軸方向を溝の方向に並べて据え、北側には小さな石が並ぶように点在している。溝の掘り方が確認された。埋土は砂層と粘土層の互層となっている。KS-705木樋と接続する可能性が考えられる。

・KS-793ピット　調査区南部で検出した。平面形は円形である。規模は径18cmである。瓦片が出土した。KS-792石組溝の掘り方より新しい。

・KS-794ピット　調査区南部で検出した。平面形はベルトに切られているが、ほぼ円形であった推測される。規模は東西30cm以上、南北50cm以上である。径15cmの礫を多数含む。KS-792石組溝より新しい。

・KS-795土坑　調査区南部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西46cm、南北56cmである。径5～20cmの礫多数含む。

・KS-796土坑　調査区南部で検出した。平面形はKS-772・790に切られているため不明である。規模は東西2.7m以上、南北1.1m以上である。瓦片や径7cmの丸杭が出土した。

・KS-797柱穴　調査区南部で検出した。段の上面を掘り込んでおり、検出面はV層上面である。平面形は円形である。掘り方の規模は東西35cm、南北40cmである。長軸20cm、短軸15cmの柱痕跡を確認した。

・KS-798土坑　調査区南部で検出した。段の上面から掘り込んでおり、検出面はV層上面である。平面形はKS-681池状遺構に切られているが、南壁断面にみられるプランから円形であった推測される。規模は東西98cm以上、南北25cm以上、深さ70cm以上である。KS-681池状遺構より古い。

・KS-799井戸跡　調査区南東部でKS-681池状遺構の西壁壁面で検出された。東西10cm以上、南北50cm以上の井戸枠の横板がL字状に確認された。KS-740・746井戸跡よりも小型の井戸とみられる。埋土から瓦が出土した。

・KS-802柱穴　調査区南部で検出した。平面形は円形である。長軸24cm、短軸21cmの瓦の一部残存する柱痕跡を確認した。

・KS-803ピット　調査区北壁壁面で検出した。規模は東西28cm、深さ14cmである。

・KS-804ピット　調査区北壁壁面で検出した。規模は東西20cm、深さ20cm以上である。

・KS－805ピット　調査区西壁壁面で検出した。規模は東西18cm、深さ20cm 以上である。

(2) 2 区

・KS－687溝跡　調査区中央で検出した。東西方向に延びる石組溝で、上端幅86cm、下端幅47cm、深さ34cm 以上である。検出した長さは3.5m、方向はN－77°－Eである。加工のない20～45cm の川原石を長軸を横にして二段に重ねて縁石として据えている。溝の内部には砂が堆積し、多量の瓦片が含まれていた。1 区KS -690石列とほぼ平行に並び、清水門に近い位置で検出していることから、屋敷境となる石組溝である可能性も考えられる。肥前白磁と考えられる碗や土師質土器皿が出土した。

・KS－806ピット　調査区南壁断面で検出した。規模は東西50cm、深さ16cm 以上である。

(3) 3 区

・KS－800石組溝　調査区中央で検出した。調査区を東西方向に延びる石組溝で、上端幅65～70cm である。検出された長さは1.93m、方向はN－23°－Eである。加工のない25～35cm の川原石を縁石として据えている。東壁付近で北へ方向を変えている。溝の埋土から18世紀後葉の大堀相馬の土瓶や瓦、溝の北側掘り方から瓦が出土した。

・KS－801暗渠状遺構　調査区北側で検出した。多量の川原石を詰めている。上端幅は40cm である。KS -800石組溝と同じ方向に並ぶと考えられる。また、暗渠を埋め立てた上部、Ⅲ層上面から榧森家の家紋である二つ丁子文の軒桟瓦 1 点出土した。

【第 1 遺構面】

1 区で基本層のⅡ層とした花崗岩の砕石層直下で、Ⅲ層上面で検出された近代の遺構面である。出土遺物には19世紀代の陶磁器片などが出土している。第 1 遺構面の上限は榧森家が城内から市内に移転した明治10年（1877）頃、下限は招魂社（現宮城県護国神社）の参道整備が行われた明治30年代後半頃と考えられる。

なお、第21次調査で検出したKS -589～592についてはⅡ層上面から掘り込まれていたので遺構から除いた。また、KS -593についても屋敷跡の敷地の段差と理解し、個別の遺構名として使用していくことにした。

(1) 1 区

・KS-661溝跡　調査区北部で検出した。1 区を南北方向に縦断し、北側で東に屈曲する。上端幅45cm、下端幅35cm、深さ 8 cm である。検出した長さは約18.2m、方向はN－26°－Wである。溝の内部からは花崗岩の砕石を詰め込まれた状態で出土した。北側の溝の底面で径10cmの丸杭を 2 本確認した。溝の南側でT字状にほぼ直交し、西に延びる溝も検出した。検出した長さは2.8mで、方向はN－118°－Wである。KS-663･684より新しい。遺物は瓦のほか、銅版転写の瀬戸美濃染付燗徳利（第23図15）、19世紀前葉と考えられる白磁皿片、染付皿片が出土した。

・KS－662土坑　調査区南西部で検出した。平面形は正方形で、KS -633を切って掘り込まれている。規模は一辺が1m、深さ14cm である。花崗岩片や石灰、木片などを含む。底面は硬くしまっている。染付長皿、瓦質土器鉢、瓦が出土した。

・KS－663硬化面　調査区南西部で検出した。平面形は不整形で、東西約5.2m、南北約3.2mの範囲でみられた。厚さ 4 cm ほどで、部分的に硬化した石灰が貼りついている状況で確認された。KS-662と関連する可能性が考えられる。面の直下で瓦片や木片が出土した。

・KS－664溝跡　調査区南西部で検出した。大部分が調査区外となっており、検出した長さは2.7mで、方向はN－32°－Wである。花崗岩片や瓦、ガラス瓶が出土した。2 区のKS -685溝跡と関連する可能性が考えられる。

・KS－665掘立柱建物跡　調査区西部で検出した。東西 1 間（約1.7m）、南北 1 間（1.2m）である。方向は南東辺でN－60°－E である。柱穴掘り方は径40～55cm の不整円形である。柱穴の中には根石と考えられる花崗岩片が確認された。柱痕跡は確認できなかった。

・KS－666ピット　調査区西部で検出した。平面形は楕円形である。規模は東西30cm、南北25cm である。

・KS - 667ピット　調査区西部で検出した。平面形は隅丸方形である。規模は東西30cm、南北25cm である。底面で辺15cm の略方形の川原石が確認された。

・KS - 668礎石　調査区西部で検出した。平面形は不整円形である。加工のない川原石で、長軸50cm、短軸30cm である。礎石の掘り方は調査区西壁断面で確認でき、南北136cm、深さ20cm 以上である。

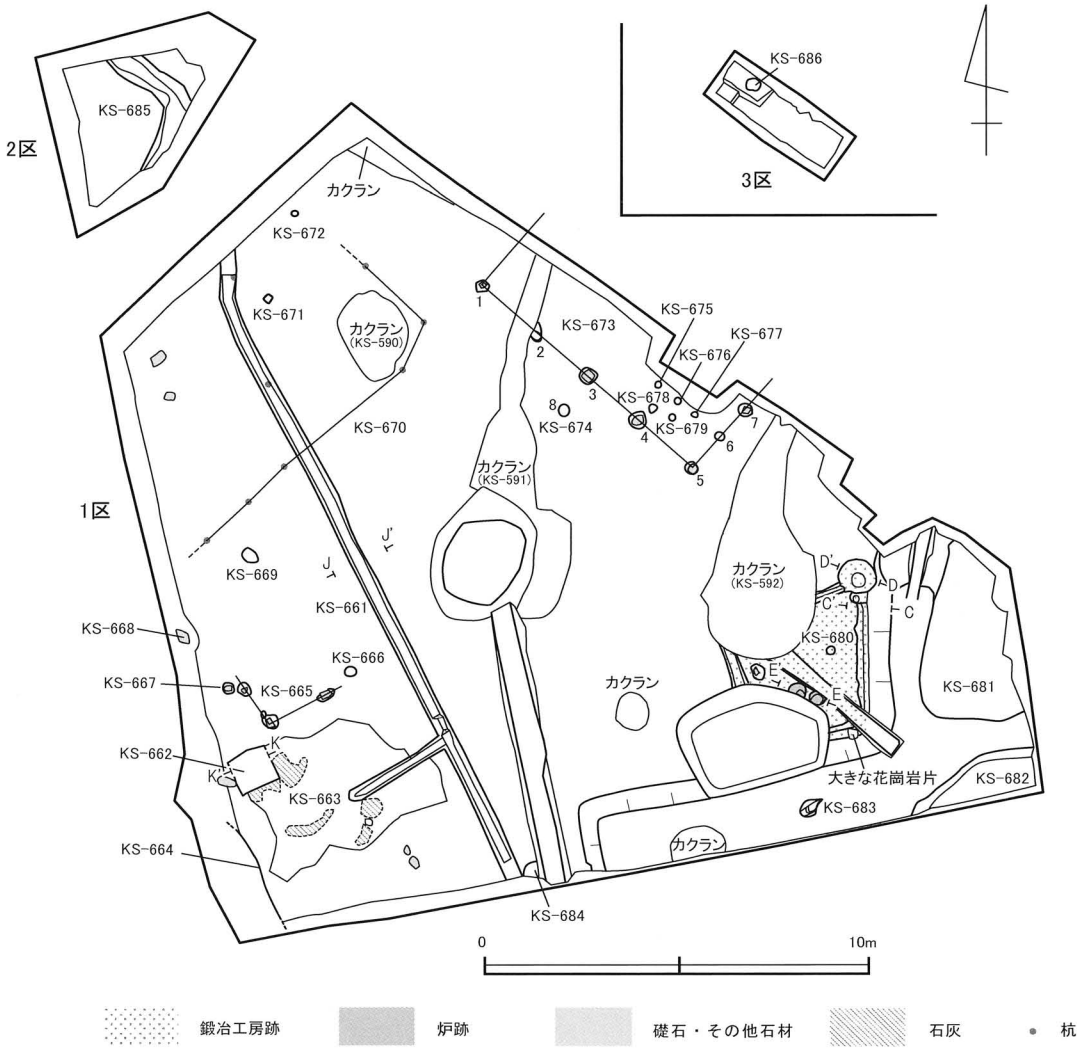
・KS - 669ピット　調査区西部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西35cm、南北45cm である。ピットの中には花崗岩片が確認された。KS - 665掘立柱建物跡の柱穴と類似しているので、関連する可能性が考えられる。

・KS - 670杭列　調査区北部で検出した。6 本の杭が東西方向に延び、東側で北西に屈曲する杭列である。隣り合う杭の間隔は1.4～4mである。方向はN－48°－Eである。杭は径10cm 前後の丸材である。KS-673掘立柱建物跡の北辺と東辺がほぼ平行に並ぶため、敷地内を区画する施設として、一連の遺構になる可能性が考えられる。

・KS - 671ピット　調査区北部で検出した。平面形は隅丸方形である。規模は東西25cm、南北25cm である。

・KS - 672ピット　調査区北部で検出した。平面形は円形である。規模は径20cm で、ピットの中には花崗岩片が確認された。

・KS - 673掘立柱建物跡　調査区北部で検出した。東辺が調査区外となっているが、東西２間（約1.7m）以上、南北４間（7.2m）である。方向は西辺でN－48°－Wである。柱穴が7基確認された。柱穴の掘り方は径25～40cm の円形もしくは楕円形である。柱穴６基の中には花崗岩の砕石が多数確認され、柱を支えるために詰められたものと考



第19図　第23次調査第１遺構面遺構平面図（1/200）

えられる。柱痕跡は確認できなかった。柱穴３・５と床面からは17世紀中ごろの肥前染付皿が出土した。KS -680鍛冶工房跡に関連する建物の可能性が考えられる。

・KS - 674ピット　調査区東部で検出した。平面形は円形である。規模は径30cm である。内部にはKS -675掘立柱建物跡の柱穴と同じように花崗岩片が詰められていた。瓦が出土した。KS-673掘立柱建物跡と関連すると考えられる。

・KS - 675ピット　調査区東部で検出した。平面形は円形である。規模は径20cm である。

・KS - 676ピット　調査区東部で検出した。平面形は円形である。規模は径20cm である。

・KS - 677ピット　調査区東部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西20cm、南北15cm である。花崗岩片が出土した。

・KS - 678ピット　調査区東部で検出した。平面形は不整円形である。規模は東西20cm、南北25cm である。

・KS - 679ピット　調査区東部で検出した。平面形は円形である。規模は径20cm である。

・KS - 680鍛冶工房跡　調査区南東部で検出した。一部を撹乱に切られているが、平面形は台形を呈するものと考えられる。規模は東西４m以上、南北４mである。南半部で後述の炉跡２基を検出した。炉跡の周辺を中心に床面上には炭層が分布している。四辺で周溝を検出した。上端幅25～30cm、深さ10cm である。断面形は逆台形に近い。工房跡の東辺北端で土坑とピットを検出した。土坑の平面形は円形で、規模は径１m、深さ30cm である。埋土の上部には矢穴をもつ破片を含む花崗岩片の層、下部に鉄滓、瓦を含む炭の層がみられる。ピットは北側を先述の土坑に切られ、平面形は楕円形である。規模は東西50cm、南北30cm 以上、深さ10cm で、炭を多量に含み、花崗岩片、瓦片も含む。土坑は周溝と接続しており、排水施設と考えられる。床面の南東角には長軸33cm、短軸24cm の四角く加工された花崗岩片がみられた。

１号炉跡　鍛冶工房跡南側に位置し、東西36cm、南北48cm、深さ12cm の楕円形の炉跡である。表面に炭、焼土、鉄滓がみられた。炉床は溶解したものが硬化面を形成していた。

２号炉跡　１号炉跡の北西に位置し、東西30cm、南北50cm、深さ18cm の楕円形の炉跡である。底面は焼けていた。炉の北側でレンガ１点が出土した(第34図７)。鍛冶作業に伴う台石と考えられる。レンガの北西には花崗岩片を含む東西35cm、南北45cm、不整円形のピット１基を検出した。

・炭層　調査区の南東部と西部で炭が堆積する層が５箇所でみられた(第20図)。炭層はサンプルを採取し、水洗作業を行った。水洗した炭の中から採取した遺物や特徴から炭層を１～５に分類した。

炭層１　鍛冶工房跡の床面に分布する。炭の中から鉱滓、粒状滓、瓦を検出した。

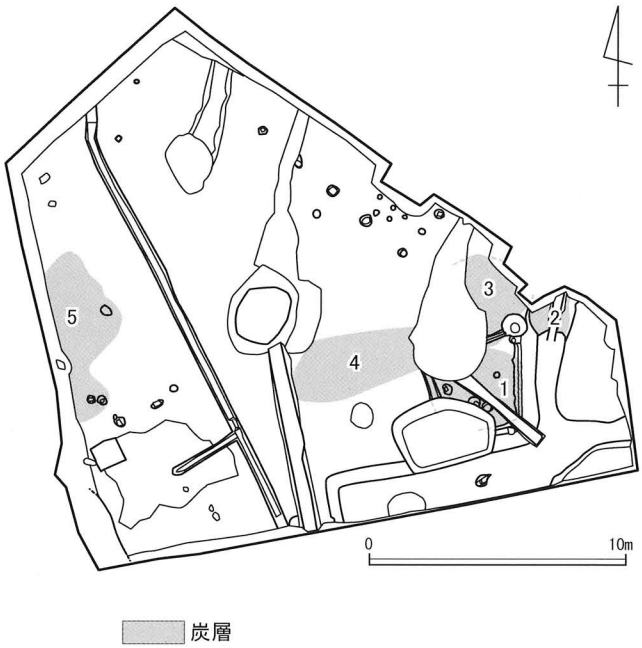
炭層２　鍛冶工房跡の北東、調査区南部の段の壁面に分布する。炭の中から鉱滓、粒状滓を検出した。遺構精査の際に羽口が出土した。

炭層３　鍛冶工房跡の北側に分布する。炭の中から鍛造剥片を検出した。

炭層４　鍛冶工房跡の北西に分布する。炭の中から鉱滓、粒状滓、羽口２点、針金、石灰の 塊を検出した。

炭層５　調査区西部に分布する。炭以外はみられなかった。

炭層１～４は鍛冶工房床面およびその周辺でみられ、検出した遺物から鍛冶作業に伴うものと考えられる。炭層５は遺物がみられず、工房跡からも離れてい

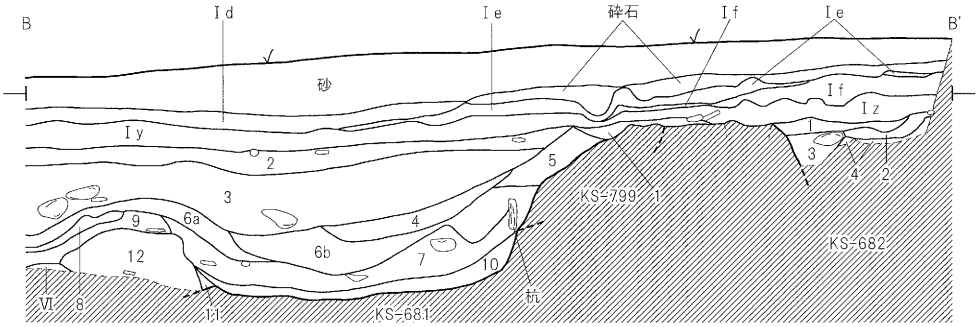


第20図　１区炭層分布図（1/300）

るが、同じ検出面であることから工房に何らかの関連するものと考えられる。

・KS - 681池状遺構　調査区南東部で検出した。比高差40cm の段差上部の平場を掘り込んでおり、検出面はⅤ層（第21次調査のⅢa層）上面である。平面形は北部と東部が調査区外となっているが、隅丸方形と推測される。規模は東西2.8m以上、南北4.5m以上、深さ1.12mである。最下層および底面はグライしており、水が溜まっていた状態が一定期間あったと推測される。この層からは18世紀代の肥前染付碗（くらわんか手）が出土している。構築時期の上限は不明であるが、近世から近代にかけて使用されていたと推測される。北東部には東西１m以上、南北4.7m以上、高さ30～40cm の盛土による高まりがみられ、丸杭１本を検出した。南壁でも丸杭１本を検出しており、護岸の土留めに使われていたものと考えられる。遺物は西壁に多い。瀬戸美濃染付端反碗、肥前染付碗、皿、瓶や切込白磁梅花文角小皿などのほか、瓦が多量に出土した。埋土中の炭層から鉱滓が出土している。

・KS - 682性格不明遺構　調査区南東部で検出した。段の上面を掘り込んでおり、検出面はⅤ層上面である。平面形は南部と東部が調査区外となっているため不明である。規模は東西3.2m以上、南北1.1m以上である。構築時期は不明である。磁器、瓦が出土した。



調査区	遺構番号	遺構層位	土色No	土色	土質	土性 粘質	土性 しまり	備考
1	KS－681	埋土1	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	有	有	径2～4cmの礫、鉄分、炭を少量含む。
		埋土2	2.5Y4/1	黄灰色	シルト	有	やや有	鉄分、風化礫、炭、瓦片を少量含む。砂を多量に含む。
		埋土3	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂質シルト	無	無	径2～30cmの礫、瓦片、鉄分を少量含む。
		埋土4	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	無	有	径1～3cmの礫を少量含む。
		埋土5	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	無	やや有	径1～3cmの礫を少量含む。鉄分を少量含む。
		埋土6a	10YR4/2	灰黄褐色	粘土シルト	無	有	径3～6cmの礫を少量含む。腐植土を多量に含む。
		埋土6b	10YR4/2	灰黄色	シルト	無	有	径10～30cmの大型礫を多量に含む。鉄分、瓦片を含む。上面に腐食層。
		埋土7	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	無	やや有	径5～15cmの礫、鉄分、炭を少量含む。
		埋土8	2.5Y4/1	黄灰色	シルト	無	有	炭、風化礫、瓦片を含む。
		埋土9	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土質シルト	やや有	有	黄色粘土ブロックを多量に含む。瓦片を含む。
		埋土10	2.5YR5/3	黄褐色	細砂層	無	やや有	径2～5cmの礫を少量含む。炭、粘土、鉄分を含む。
		埋土11	10YR1/7－1	黒色	粘土	無	やや有	炭を多量に含む。
		盛土12	10YR6/4	にぶい黄橙色	粘土	やや有	有	径1～15cmの礫、瓦片、鉄分、炭を少量含む。
	KS－682	埋土1	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	有	やや有	径1～15cmの礫、炭を少量含む。鉄分を多量に含む。
		埋土2	10YR3/1	黒褐色	シルト	有	やや有	径2～4cmの礫を少量含む。鉄分、炭を含む。
		埋土3	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	有	やや有	径5～30cmの大型礫を多量に含む。鉄分を多量に含む。
		掘り方4	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂質シルト	有	無	鉄分を含む。

第21図　KS－681池状遺構・682遺構断面図（1/50）

・KS - 683土坑　調査区南部で検出した。段の上面を掘り込んでおり、検出面はⅢa層上面である。平面形は不整形である。規模は70cm、南北45cm である。埋土には炭が多量に含まれている。

・KS - 684ピット　調査区南部で検出した。平面形はベルトがあり、KS -661溝跡に切られているが、ほぼ円形と推測される。規模は東西40cm 以上、南北40cm 以上である。KS -661溝跡より古い。

(2) 2 区

・KS - 685溝跡　調査区中央で検出した。調査区北壁から南側に延びるＬ字型の溝跡で、上端幅は60～80cm である。検出した長さは北側1.1m、南側２mである。瓦と鉄釉壺片、花崗岩片が出土した。1区KS -664溝跡と形状が類似するため関連する可能性が考えられ、KS -680鍛冶工房跡の西側を区画し、排水施設として利用されたと推測される。

(3) 3 区

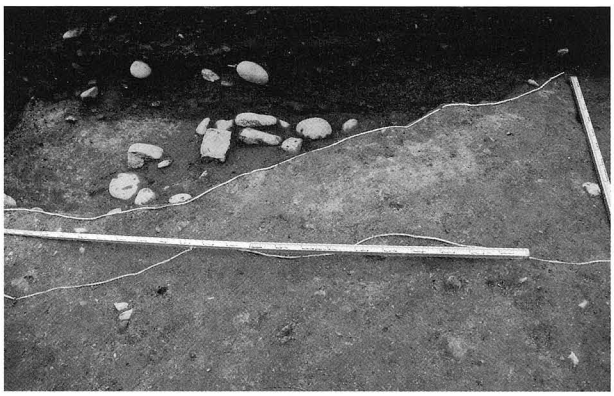
・KS - 686ピット　調査区北部で検出した。検出面はⅡ層上面である。平面形は楕円形である。規模は東西45cm、南北35cm である。

調査区全景（北から）

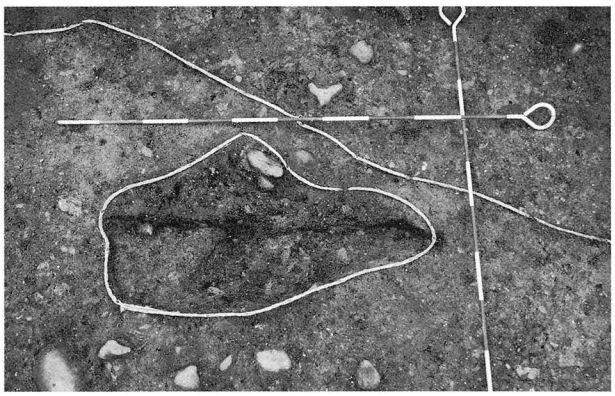
1区　第2遺構面全景（南東から）

1区　第2遺構面全景（南から）

1区　KS－681池状遺構検出状況（東から）



1区　KS－682遺構検出状況（北から）

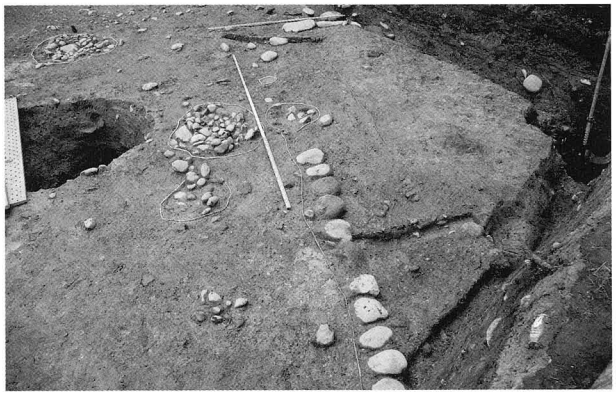


1区　KS－683土坑検出状況（北から）

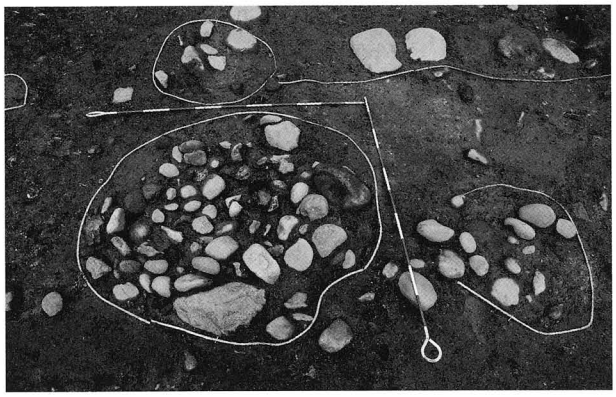
1区　KS－688礎石検出状況（南東から）

1区　KS－688礎石検出状況（南東から）

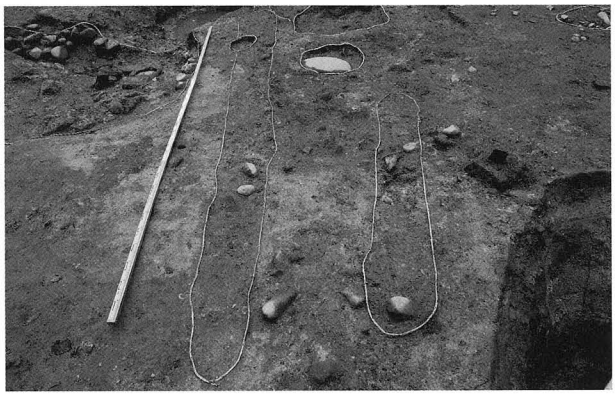
写真図版1　第23次調査　調査区全景・1区遺構（第2遺構面）1



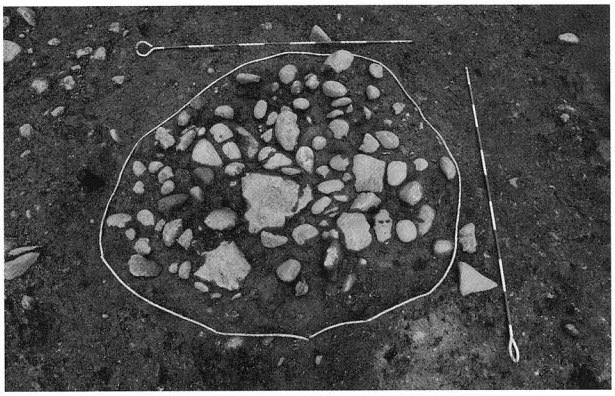
1区　KS－690石列検出状況（東から）



1区　KS－691・692礎石跡・693集石検出状況（南東から）

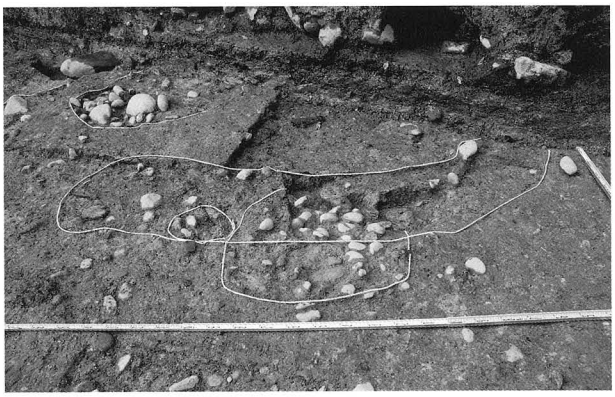


1区　KS－695・696溝跡検出状況（北から）

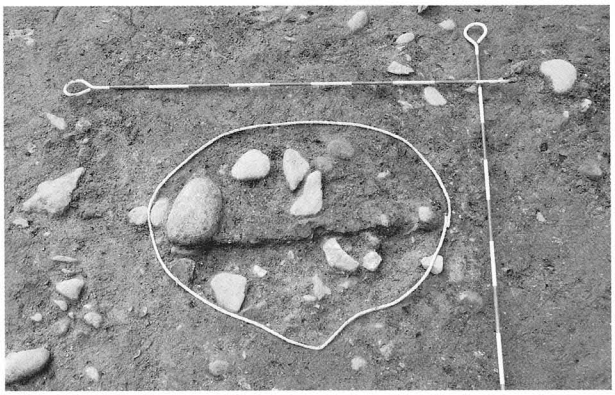


1区　KS－697礎石跡検出状況（南から）

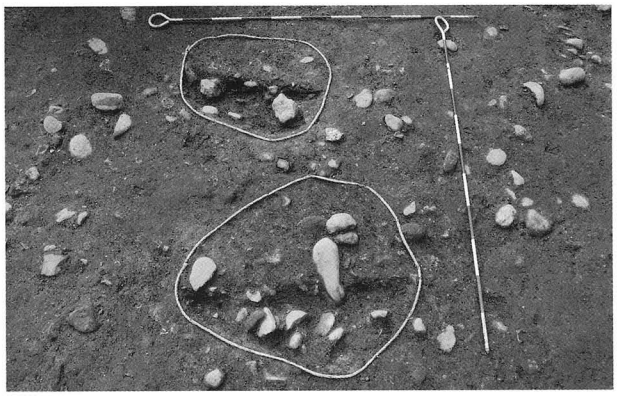
1区　KS－698集石検出状況（東から）



1区　KS－699溝跡・700集石・701ピット検出状況（北東から）

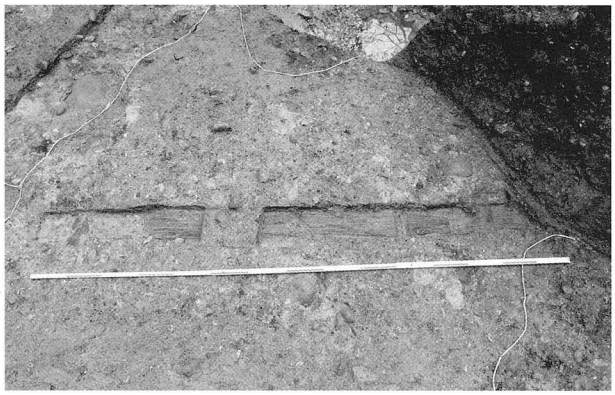


1区　KS－702ピット検出状況（北から）

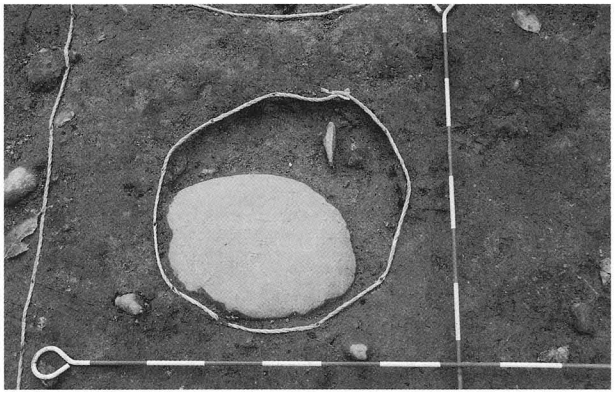


1区　KS－703・704ピット検出状況（北から）

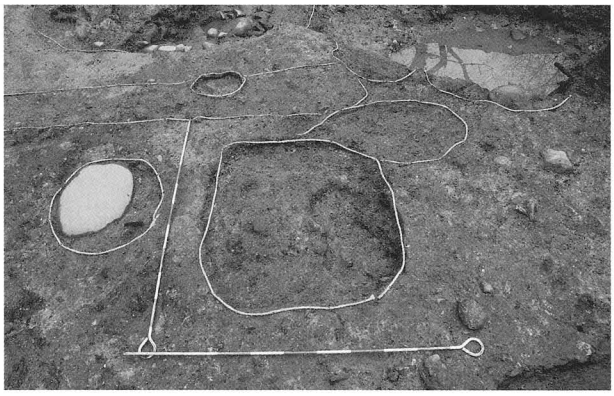
写真図版２　第23次調査　１区遺構（第２遺構面）２



1区　KS－705木樋検出状況（西から）

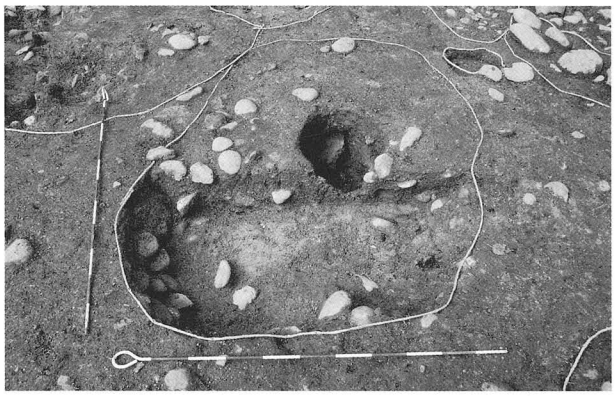


1区　KS－706礎石検出状況（北から）

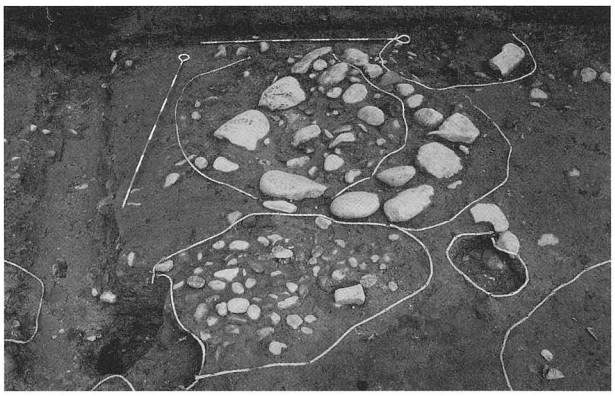


1区　KS－707柱穴・708・709・710土坑・711ピット検出状況(北から)

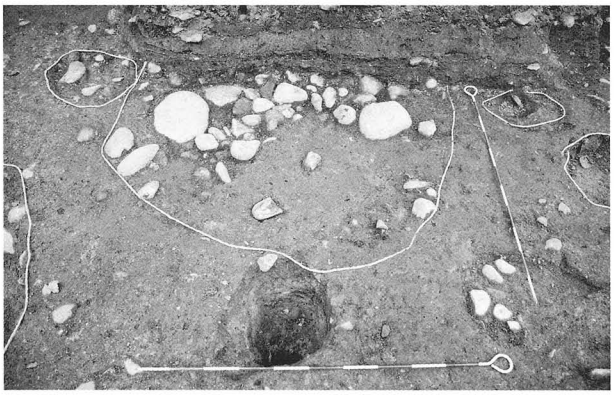
1区　KS－712・713・714土坑検出状況（北西から）



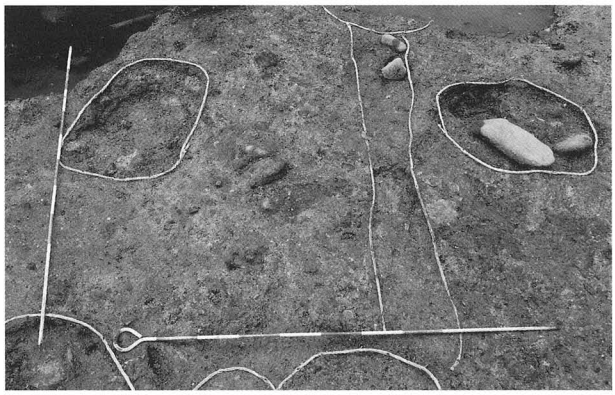
1区　KS－715土坑検出状況（東から）



1区　KS－716集石・717礎石跡・718土坑検出状況(南西から)

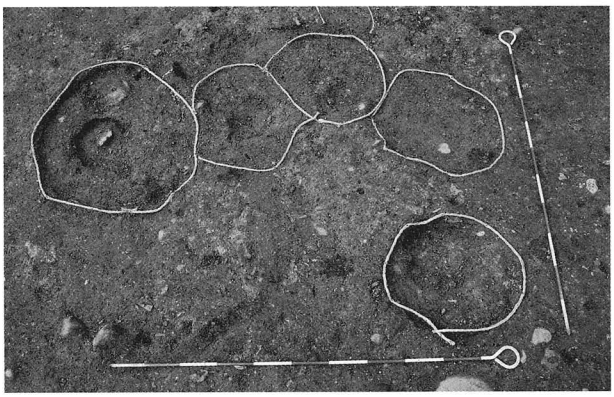


1区　KS－719礎石・732・733柱穴検出状況（南西から）



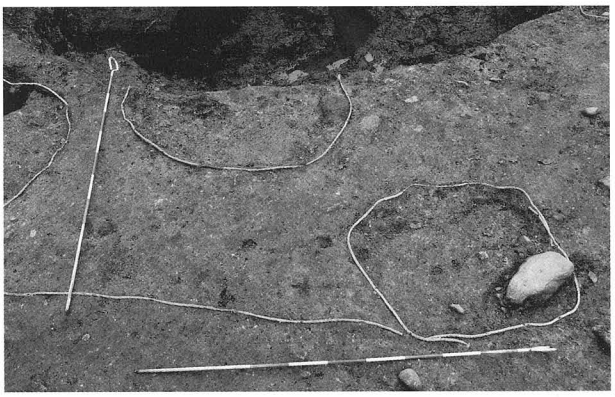
1区　KS－720柱穴・721ピット・722溝跡・728柱穴検出状況(東から)

写真図版３　第23次調査　１区遺構（第２遺構面）３

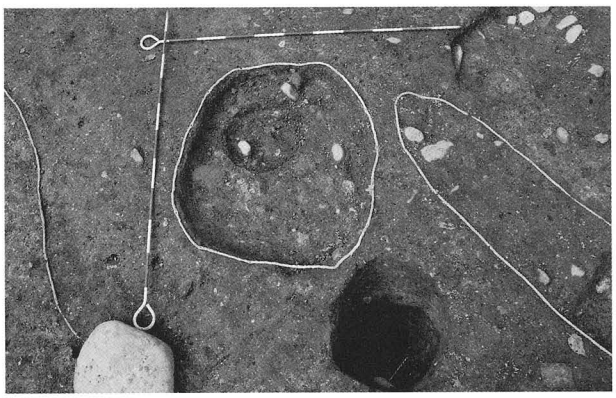


1区　KS－723土坑・724・725・726・727柱穴検出状況（東から）

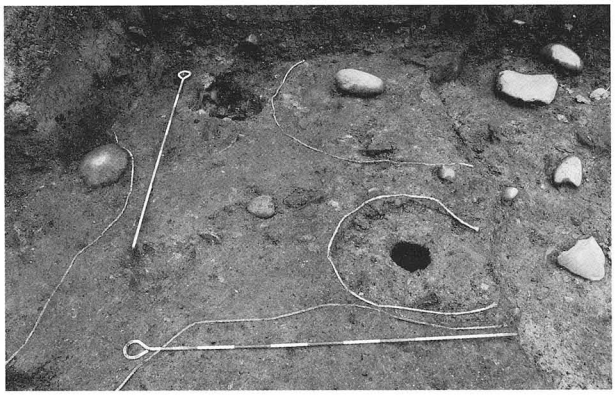
1区　KS－729炉跡検出状況（東から）



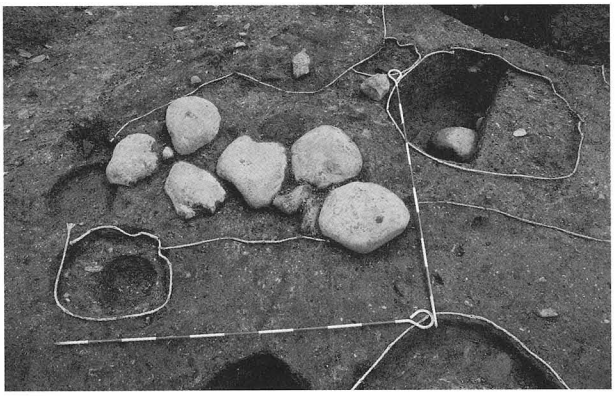
1区　KS－730柱穴・745土坑検出状況（北西から）



1区　KS－731柱穴検出状況（北東から）



1区　KS－734溝跡・735土坑・736礎石跡・737柱穴検出状況（西から）



1区　KS－738・739・740・741集石・742土坑・743ピット・744土坑検出状況（西から）

1区　KS－740井戸跡検出状況（北西から）

1区　KS－746井戸跡検出状況（西から）

写真図版４　第23次調査　１区遺構（第２遺構面）４

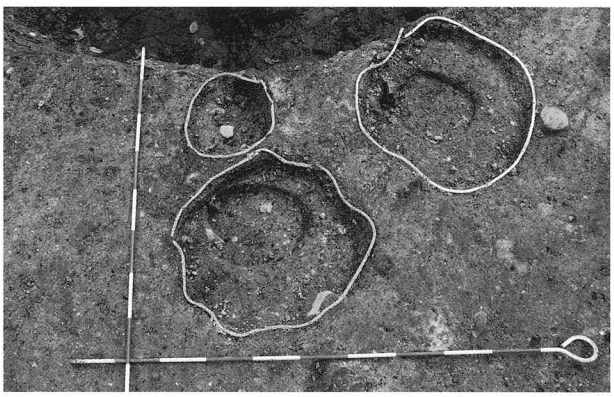
1区　KS－746井戸跡東壁断面（西から）

1区　KS－746井戸跡俵出土状況（東から）

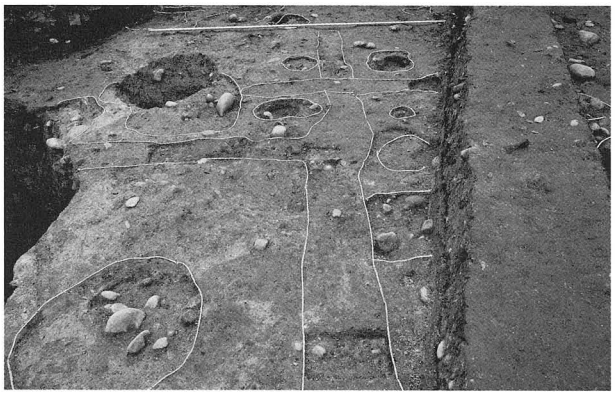
1区　KS－746井戸跡笊出土状況（西から）

1区　KS－746井戸跡祭祀遺構（北から）

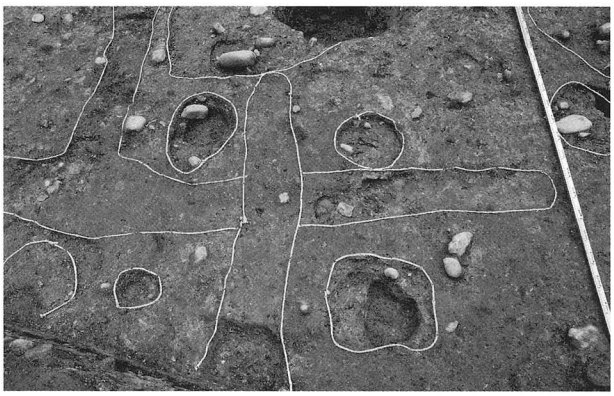
1区　KS－746井戸跡漆器椀（No.2310）出土状況



1区　KS－747･748柱穴･749ピット検出状況（西から）

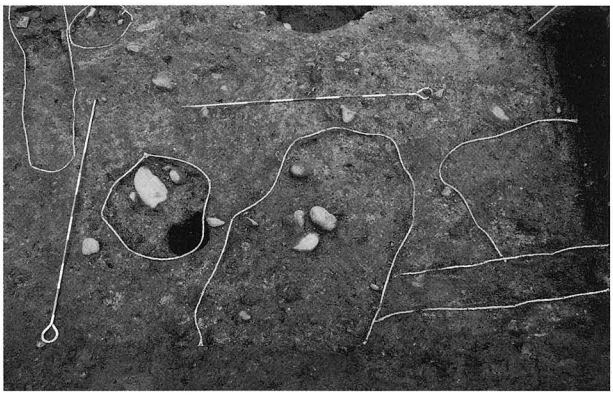


1区　KS－750土坑･751溝跡･752･753柱穴検出状況(北西から)

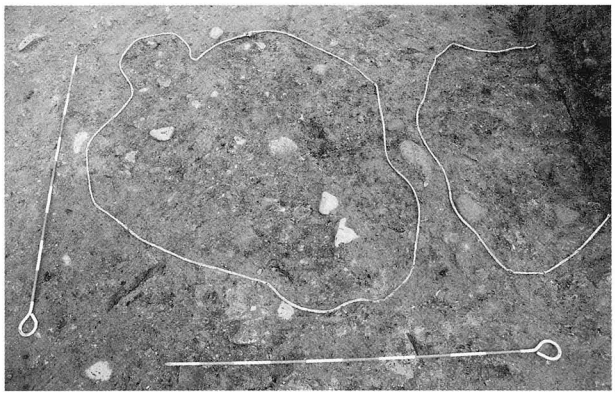


1区　KS－754･755柱穴･759溝跡･760柱穴･761ピット検出状況(西から)

写真図版５　第23次調査　１区遺構（第２遺構面）５



1区　KS－762柱穴・763・764土坑・765溝跡検出状況(南から)

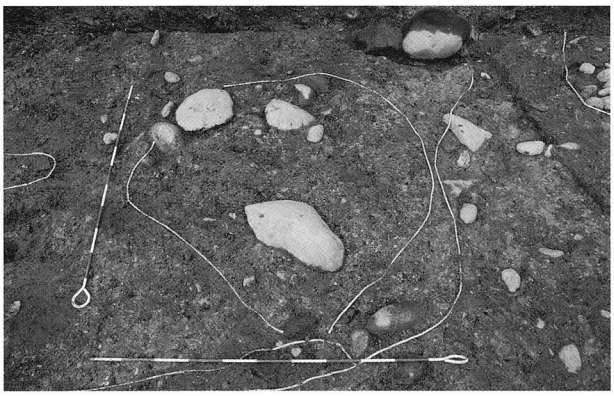


1区　中央部焼土検出状況（南から）

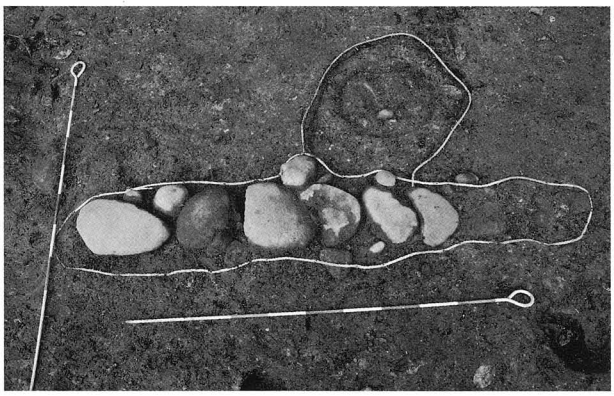
1区　KS－768カマド跡・767・769・771土坑出土状況(南から)

1区　KS－768カマド跡サブトレンチ断面（西から）

1区　KS－770土坑・772石組溝・773土坑・774溝跡・790石組溝・791土坑検出状況(南から)



1区　KS－775集石検出状況（東から）



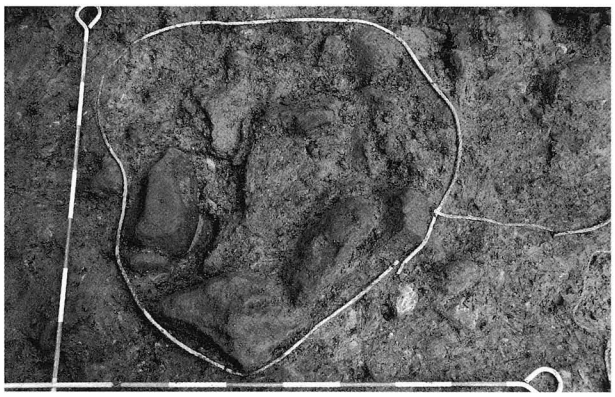
1区　KS－778石列・789柱穴検出状況（東から）

1区　KS－780土坑検出状況（東から）

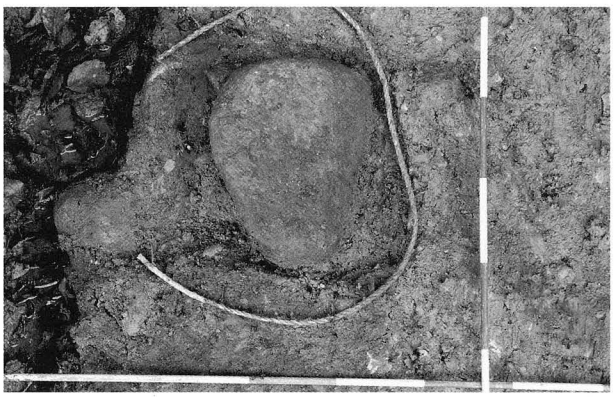
写真図版6　第23次調査　1区遺構（第2遺構面）6

1区　KS－781集石検出状況（北西から）

1区　KS－782石組溝検出状況（南から）

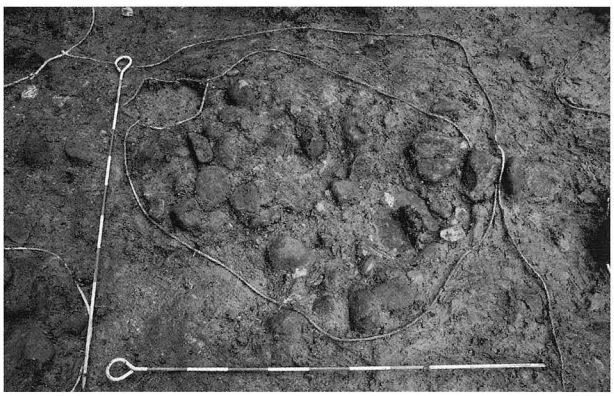


1区　KS－783集石検出状況（南から）

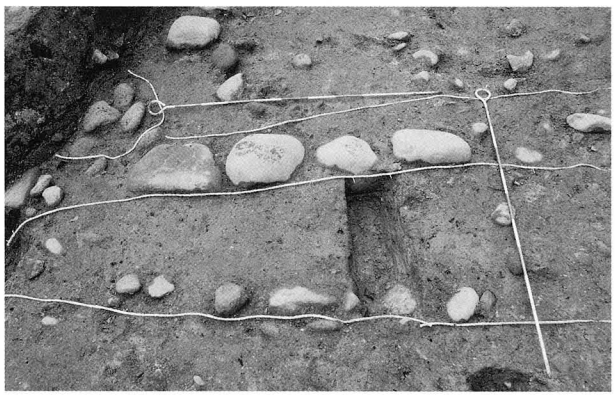


1区　KS－785礎石検出状況（東から）

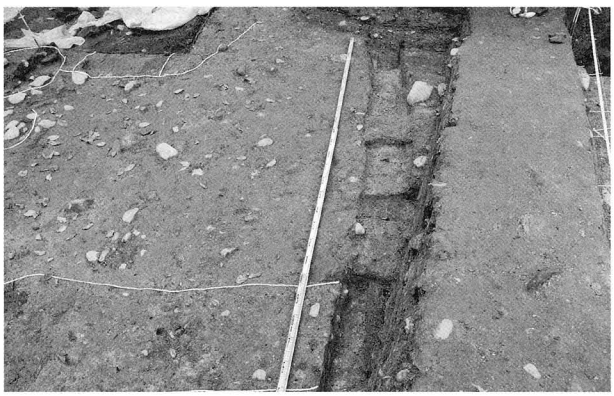
1区　KS－786・789集石検出状況（南から）



1区　KS－787ピット・788集石検出状況（東から）



1区　KS－792石組溝・794ピット検出状況（北西から）

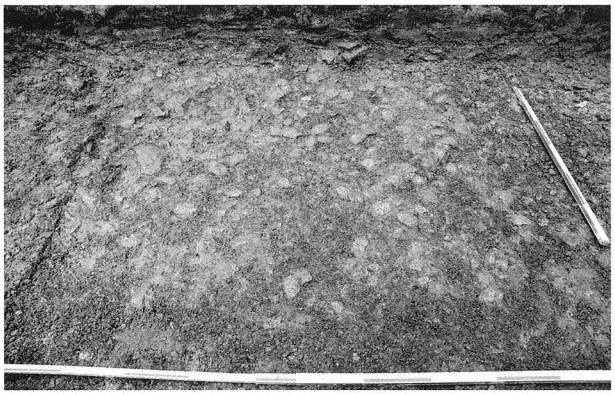


1区　KS－705木樋（南部）検出状況（東から）

写真図版７　第23次調査　１区遺構（第２遺構面）７

1区　KS－797柱穴検出状況（東から）

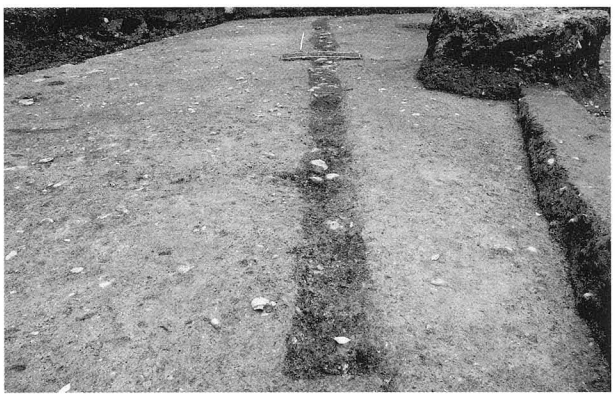
1区　KS－799井戸跡検出状況（東から）



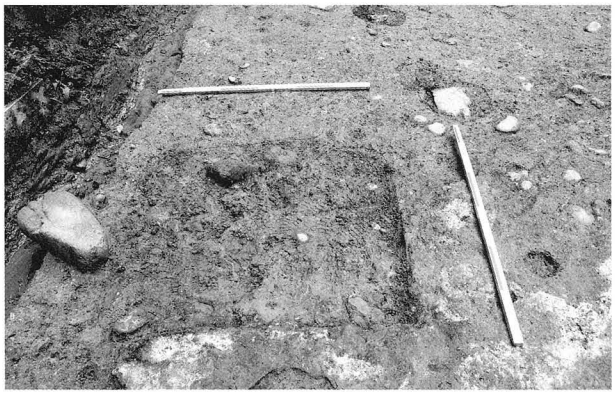
1区　Ⅲ層（花崗岩の砕石層）検出状況（南東から）

1区　南東部炭層検出状況（北東から）

1区　第1遺構面検出状況（南東から）



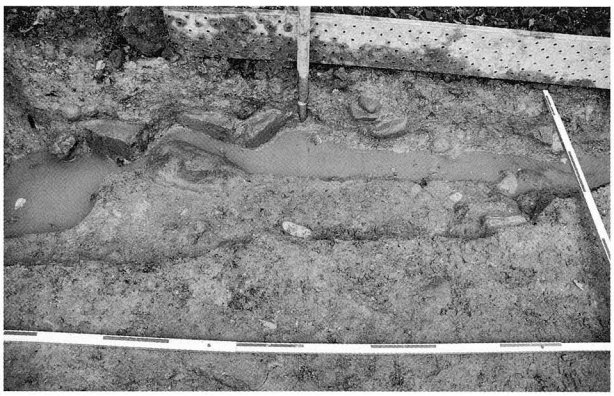
1区　KS－661溝跡検出状況（南から）



1区　KS－662土坑検出状況（南東から）

1区　KS－663硬化面検出状況（南から）

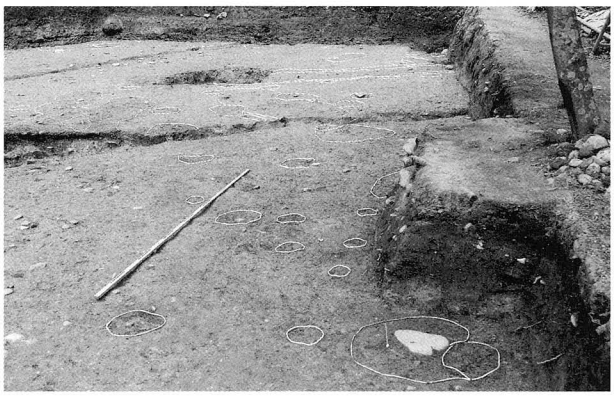
写真図版8　第23次調査　1区遺構（第2遺構面）8・（第1遺構面）1



1区　KS－664溝跡検出状況（東から）

1区　KS－665掘立柱建物跡検出状況（北から）

1区　KS－668礎石･776礎石検出状況（東から）

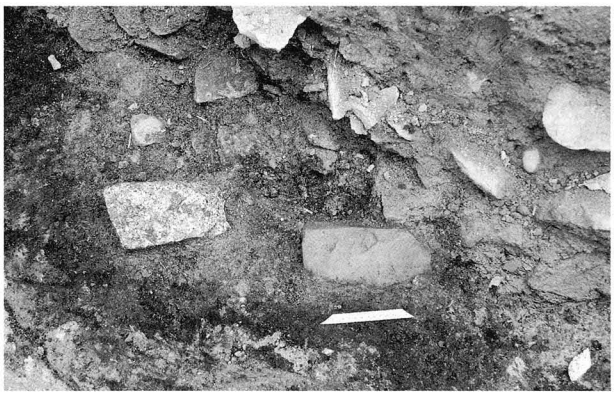


1区　KS－673掘立柱建物跡検出状況（南から）

1区　KS－680鍛冶工房跡検出状況（上が西）

1区　KS－680鍛冶工房跡土坑検出状況（北東から）

1区　KS－680鍛冶工房跡 1･2号炉跡検出状況（北東から）



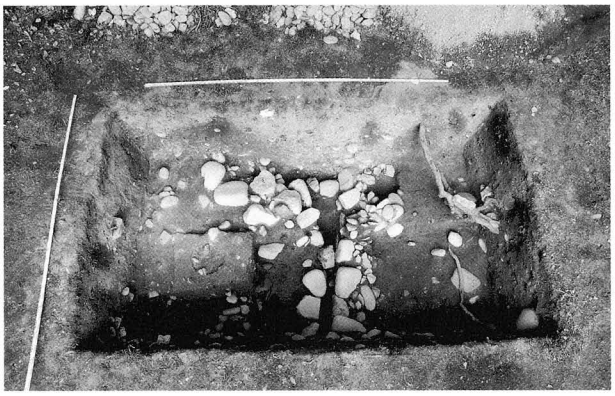
1区　KS－680 2号炉跡北側レンガ（No.634）出土状況

写真図版9　第23次調査　1区遺構（第1遺構面）2

2区　第2遺構面全景（上が西）

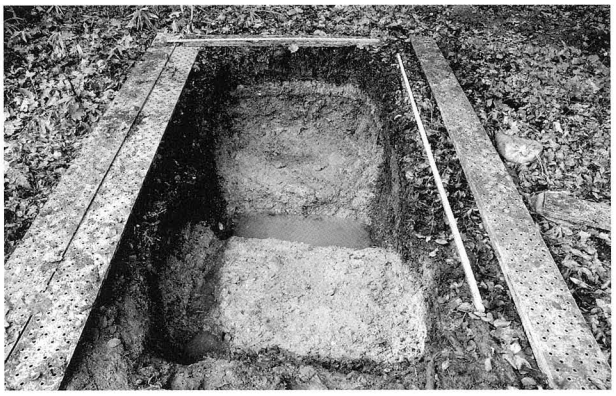
2区　KS－685溝跡検出状況（南東から）

2区　KS－687石組溝断面（東から）

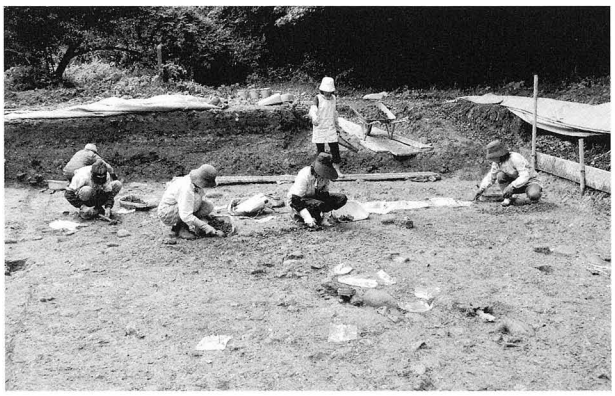


3区　第2遺構面全景（上が東）

3区　KS－800石組溝・801暗渠状遺構検出状況（北東から）



4区全景（北東から）



調査作業風景

遺跡見学会風景

写真図版10　第23次調査　2・3・4区遺構

4．出土遺物

各遺物の出土点数については、区・遺構・層位別の数量表（第８～12表）を作成し、報告書掲載遺物については観察表（第13～58表）を付した。なお、陶磁器の点数は、接合・分類作業を行い同一個体と判断されるものを１点とし、それ以外は全て破片数として算出した。今年度の調査では３基の井戸跡が検出されたが、このうち部分的に調査を行ったのは重複関係からみて最も新しいKS-746井戸跡である。この井戸跡の出土遺物は、数多くの多種類に及ぶが、陶器・磁器、木製品が中心である。

⑴磁器（第８表）

磁器は429点出土した。１区では、KS-746井戸跡からの出土が多い。

井戸跡から出土した磁器の組成特徴は、肥前が102点で、内訳は染付83点（陶胎1点）、白磁13点、青磁２点、鉄釉１点（碗）、色絵２点（水滴か、口縁端部を金彩したもの）である。中国青花２点（皿・鉢）、瀬戸美濃は染付碗（端反）１点である。染付では筒形のもの５点。皿では中皿４点や輪花皿２点を含む。女性の使用が考えられる紅猪口２点がみられる。白磁は碗と仏飯器である。

⑵陶器（第８表）

陶器は728点出土した。１区では、KS-746井戸跡からの出土が多い。井戸跡から出土した陶器の産地は大堀相馬207点、小野相馬14点、京焼２点、京・信楽８点、肥前陶器23点、瀬戸９点、美濃４点、志野12点、岸窯１点、堤１点、産地不明（在地か）９点、産地不明５点、中国産と考えられる褐釉壷１点である。大堀相馬の多くは18世紀代のもので、19世紀に下るような端反碗はみられない。最も新しいと考えられるものには、鉄釉鍋があり、19世紀前半頃のものであると考えられる。小野相馬は碗を主体に皿・香炉がみられた。京焼では色絵暦文筒形碗が注目され、暦文の文面は、東京都芝離宮跡の出土例と同じで、寛保２年（1742）のものと考えられる。また胎土が灰色を呈するものは、京・信楽として扱った。肥前陶器（唐津）では、古い唐津灰釉碗や二彩の壷や大鉢が含まれている。瀬戸では鉄絵皿（第24図１）や鉄絵雁金文碗蓋（第25図15）が注目される。井戸跡からの出土ではないが、鉄釉の茶入片や天目茶碗が１点ずつ出土している。美濃焼には、志野菊皿・鉄、志野織部絵皿などいずれも17世紀初頭から前葉のものである。志戸呂（静岡県）は口縁部付近に鉄釉を施釉した大ぶりの徳利1個体分とみられる（第26図６）。産地不明で在地の可能性のあるものは、鉄釉の擂鉢の他、初めて茶入を確認した。昨年度の調査では大堀相馬の小杯が目立っていたが、今年度は同じ大堀相馬の仏飯器が多く出土した。天目茶碗、茶入、風炉、褐釉壷など、茶の湯にかかわる陶磁器・土器が含まれているのが注目される。また、備前の大甕の存在が明らかになり、少なくとも２個体あり、いずれも内外塗土を特徴として、17世紀代のものと考えられる。第21次調査でも同様の破片が数点出していた。この大甕は断定できないが、

区	遺構・層位	磁器	陶器	土師質土器	瓦質土器	土製品	レンガ	計
1	表採	2	1					3
	撹乱	13	16	7	1			37
	側溝	3	3					6
	Ⅰ	64	39	14	1		1	119
	Ⅱ	73	78	15	5	1		172
	Ⅲ上面	13	47	7	6	1	1	75
	Ⅲ	27	44	24	5			100
	Ⅳ上面	7	28	16	1			52
	Ⅳ			2				2
	Ⅴ	1	4					5
	KS-661埋土	2						2
	KS-662埋土				1			1
	KS-673埋土	3	2	2				7
	KS-680炭層1	4	4	1	1			10
	KS-680炭層2	1						1
	KS-680壁面	1						1
	KS-680埋土	2	2					4
	KS-681埋土	21	18	5		1		45
	KS-682埋土	1	2					3
	KS-690埋土			6				6
	KS-712埋土	1	1					2
	KS-713埋土	1						1
	KS-714埋土			1				1
	KS-715埋土	3		1				4
	KS-716埋土	2	4	1				7
	KS-717掘り方		2	2				4
	KS-717埋土	2	2	1				5
	KS-734埋土	1						1
	KS-744埋土		1		1			2
	KS-746埋土	51	119	11	3			184
	KS-746埋土2	15	33	4	3			55
	KS-746埋土3	1	23	2	1			27
	KS-746埋土4	39	178	12	5			234
	KS-768埋土	2		2				4
	KS-772埋土	1		1				2
	KS-792埋土		1					1
	1区小計	357	652	137	34	3	2	1185
2	Ⅰ	47	46	3	1		1	98
	Ⅲ	6	1	1				8
	Ⅳ上面		1					1
	KS-685埋土		1					1
	KS-687埋土	1		2				3
	2区小計	54	49	6	1	0	1	111
3	Ⅰ	17	21		3		2	43
	Ⅲ		1		1			2
	Ⅳ		2					2
	北壁	1						1
	KS-800埋土		3	1				4
	3区小計	18	27	1	4	0	2	52
	計	429	728	144	39	3	5	1348

第８表　第23次調査出土陶磁器他数量表

酒造りに関連する可能性がある。

３区ではKS-800石組溝埋土中より18世紀代後半以降の大堀相馬白濁釉土瓶が出土した。

⑶土師質土器（第８表）

土師質土器は144点出土した。皿が多い。ほとんどが法量復元のできない小片であるため、口径等に関して全体的な傾向を知ることは困難である。口径の計測または復元できたものは、燈明皿２点、皿７点、折縁鉢１点、植木鉢１点、焼塩壷２点である。すべて図示した（第27･28図）。

KS-746井戸跡からは土師質土器29点出土した。土師質土器は皿が主体であるが、１点焼塩壷が出土している。

⑷瓦質土器（第８表）

瓦質土器は39点出土した。すべて破片資料である。１区では34点が出土した。KS-746井戸跡からは鉢類をはじめとして13点が出土しており、風炉と考えられるものが２点、擂鉢が１点含まれる。２区では不明１点がⅠ層から出土した。３区から４点出土し、風炉と考えられるものが１点である（第28図13）。

⑸土製品（第８表）

羽口が３点出土した。すべて破片資料である。１区KS-680鍛冶工房跡床面や炭層２から出土している。鍛冶工房にかかわるものと考えられる。

⑹レンガ（第８表）

レンガ５点出土した。ほとんどがⅠ層からの出土である。１区KS-680鍛冶工房跡の２号炉跡北側、炭層１から１点出土しており、鍛冶作業に伴う台石の可能性が考えられる（第34図７）。

⑺瓦（第９表）

瓦は総計4,132点出土し、このうち丸瓦が844点、平瓦が2,880点で併せて全体の90％を占める。１～３区とも、多くは近代以降の層から出土している。丸瓦、平瓦を中心に軒丸瓦、軒平瓦、軒桟瓦、伏間瓦、輪違い、平板類など多様な瓦が出土している。

①軒丸瓦　62点出土した。瓦当文様の判別可能なものは46点である。文様構成は、１区が三引両文1点、三巴文21点、珠文三巴文18点である。Ⅰ層からの出土が多い。２区は三巴文１点、珠文三巴文２点である。Ⅰ層からの出土が多い。３区は九曜文１点、三巴文１点、珠文三巴文１点である。Ⅲ層上面からの出土である。

②軒平瓦　30点出土した。瓦当文様の判別可能なものは７ 点である。文様構成は、１区が梅花文１点、桔梗文３点花菱文１点、梅文１点である。Ⅲ・Ⅳ層上面からの出土が多い。また、菊花文の滴水瓦１点がⅡ層上面から出土した（第25図６）。２区は花菱文1点でKS-687石組溝埋土から出土した。３区は三葉文１点でⅠ層から出土した。

③軒桟瓦　９点出土した。瓦当文様の判別可能なものは７ 点である。文様構成は、１区が三巴文４点、２区が三巴文２点である。Ⅰ層からの出土が多い。３区ではⅢ層上面から榧森家の家紋とされる二つ丁子巴文１点出土した（第32図２）。なお、二つ丁子巴文の軒桟瓦は巽門跡の調査でも１点出土している。

④棟瓦　主に棟に使用される瓦を棟瓦と総称する。91点出土した。内訳は、1区が冠伏間瓦26点、箱冠伏間瓦１点（第29図１）、熨斗瓦８点、輪違い23点、面戸瓦26点である。大半が近代以降の層から出土している。２区は、熨斗瓦２点、輪違い３点出土した。３区は熨斗瓦３点、輪違い２点、面戸瓦１点である。

⑤飾り瓦　１区から詳細不明の２点が出土した。２点とも図示した（第30図９・第31図11）。

⑥駒瓦　１区から駒巴瓦50点が出土した。３区から駒巴瓦２点が出土した。

⑦塀瓦　123点出土した。これは平板瓦、塀平瓦、桟付平板瓦、駒付平板瓦、二の平瓦の総数である。5点を除き、すべて1区から出土した。平板瓦28点、塀平瓦22点、桟付平板瓦3点、駒付平板瓦15点、二の平瓦3点が出土した。ほとんどが近代以降の層から出土している。

⑧その他　この他、1区で種別不明の瓦が1点出土した。

区	遺構・層位	丸瓦	平瓦	軒丸	軒平	滴水	軒桟	桟瓦	冠伏間	角桟伏間	熨斗	輪違	面戸	飾り	駒巴	塀	平板厚	塀平	桟付平板	駒付平板	二の平	不明	計
1	カクラン	39	84	2	3								2		3	6	1						140
	側溝	18	49	2	1				2						5	1		2			1		81
	I	54	174	3	2		3	6	10	2		1	3		19	11	12	6		5			311
	II	104	290	17	4	1	2	13	9		3	10	9		10	25	9	11		8		1	526
	III上面	54	172	4	2		1					1			3	1				1			239
	III	114	572	10	5			2					2	1	5	1		2		1			715
	IV上面	49	155	2	2			1				2											211
	KS-661埋土		11																				11
	KS-662埋土	1																					1
	KS-664埋土	1	2																				3
	KS-673埋土	6	6																				12
	KS-680炭1	28	137	1							1				1		3						171
	KS-680壁面	1	10																				11
	KS-681埋土	45	201	1	1							1	1			1							251
	KS-684埋土	2	10													2							14
	KS-690埋土	1	1																				2
	KS-691埋土	1	10							1													12
	KS-692埋土		6																				6
	KS-696埋土		3																				3
	KS-705埋土		3								1												4
	KS-706埋土		3																				3
	KS-712埋土	3	1									1							1				6
	KS-713埋土	3	2	1																			6
	KS-715埋土	3	2																				5
	KS-717埋土		10																				10
	KS-718埋土		10																				10
	KS-719埋土	3	3																				6
	KS-720埋土	1	1																				2
	KS-744埋土	40	105	3	3			2	5			2	3		1	3	2	1					170
	KS-746埋土2	3	26																				29
	KS-746埋土3		3																				3
	KS-746埋土4	18	54	1	1			1															75
	KS-746埋土	31	123	4								1	2	1					1				163
	KS-751埋土	1																					1
	KS-761埋土		1																				1
	KS-763埋土	2																					2
	KS-765埋土	15																					15
	KS-768埋土	7	35					3															45
	KS-772埋土	7	16	2	1																		26
	KS-774埋土	3	9																				12
	KS-791埋土	37	130	1																			168
	KS-796埋土	2	7																				9
	KS-799埋土		1												1								2
	1区小計	697	2438	54	25	1	6	28	26	3	5	19	22	2	48	51	27	22	2	15	1	1	3493
2	I	29	49	2	1		2	1					1								1		86
	III	3	43	1									1				1				1		50
	IV	8	40																				48
	KS-685埋土	3	22									1											26
	KS-687埋土	26	88	2	2							1	1										120
	2区小計	69	242	5	3	0	2	1	0	0	0	2	3	0	0	0	1	0	0	0	2	0	330
3	I	72	161	1	2			12			2	2	1		1	1							255
	III	1	25	2			1	1			1								1				32
	IV	2	9												1								12
	KS-800埋土	3	4					2															9
	3区小計	78	199	3	2	0	1	15	0	0	3	2	1	0	2	1	0	0	1	0	0	0	308
4	溝跡		1																				1
	4区小計		1																				1
	計	844	2880	62	30	1	9	44	26	3	8	23	26	2	50	52	28	22	3	15	3	1	4132

第9表　第23次調査出土瓦数量表

(8)金属製品（第10表）

59点出土した。内訳は煙管7点、火箸の頭部と考えられる玉1点（第32図8）、銃弾2点（第32図6、7）、鉄釘21点、銭貨13点、灰汁掬いと考えられるものが1点、針金6点、その他8点である。3区から鉄釘9点が出土した以外はすべて1区からの出土である。煙管は雁首4点、吸口2点、火皿1点である。雁首4点を図示した（第32図9～12）。銭貨は寛永通宝7点、近代銅貨2点、煙管をつぶして造られたもの1点、不明3点である。寛永通宝は1区Ⅲ・Ⅳ層上面から古寛永2点、KS-746井戸跡から新寛永5点出土した。KS-681池状遺構南壁からは鋳造年代が明和6年（1769）の正字11波の四文銭が出土した。また、I

区	遺構・層位	煙管	銃弾	鉄釘	銭貨	針金	その他	計
1	攪乱		1			1		2
	I						2	2
	II	1	1	3	2	3	3	13
	III上面	1		6		2		9
	IV上面				2		1	3
	KS-673埋土				1			1
	KS-680土坑						1	1
	KS-680炭層			2				2
	KS-681埋土				1			1
	KS-733埋土				1			1
	KS-744埋土			1				1
	KS-746埋土	2			3		2	7
	KS-746埋土2	1						1
	KS-746埋土4	2			3		1	6
	1区小計	7	2	12	13	6	10	50
3	I			8				8
	KS-800埋土			1				1
	3区小計	0	0	9	0	0	0	9
	計	7	2	21	13	6	10	59

第10表　第23次調査出土金属製品数量表

層から大正４年（1915）銘の稲一銭青銅貨が１点出土した。不明なもの以外の10点を図示した（第33図）。KS-746井戸跡の埋土上部からは用途不明で形状が灰汁掬いに類似するものが１点出土した（第32図13）。１区KS-680鍛冶工房跡に伴う土坑やピット、炉跡のほか、工房周辺の炭層からは鍛造剥片、鉄滓、鉱滓、粒状滓を検出した。

⑼ガラス・石製品（第11表）

ガラス42点、石製品14点出土した。ガラスはすべてⅠ層からの出土である。石製品は水晶３点、砥石７点、硯４点である。KS-746井戸跡から水晶１点、砥石３点、硯３点が出土した。ほかの石製品も第２遺構面からの出土である。

区	遺構・層位	ガラス	水晶	砥石	硯	計
1	撹乱			1		1
	Ⅰ	32				32
	Ⅲ		1			1
	Ⅳ上面		1			1
	KS-680炭層			1		1
	KS-680周溝				1	1
	KS-746埋土		1	1	1	3
	KS-746埋土2			1	1	2
	KS-746埋土4			1	1	2
	KS-768埋土			1		1
	KS-791掘り方			1		1
	1区小計	32	3	7	4	46
2	Ⅰ	7				7
	2区小計	7	0	0	0	7
3	Ⅰ	3				3
	3区小計	3	0	0	0	3
	計	42	3	7	4	56

第11表　第23次調査出土ガラス・石製品数量表

⑽木製品（第12表）

2,204点出土した。ほとんどがKS-746井戸跡から出土し、木簡、漆器、樽、桶、栓、箸、下駄等がみられる。木製品には、酒造りにかかわるものと生活用品とに大別される。ここではすべての種類を扱うことができないので、おもな遺物について扱うことにした。

①木簡

63点出土した。すべてKS-746井戸跡からの出土である。墨書があり一字以上判読可能のものが26点、墨痕は認められるが判読できないものが11点である。判読可能な木簡はすべて図示した（第35～40図）。

木簡は形状や記載内容等からⅠ～Ⅲ類の３種類に大別できる。文字が判読できる木簡について種類別にその特徴を述べる。（　）内は『木簡研究』の提示されている型式を基にした型式番号である。

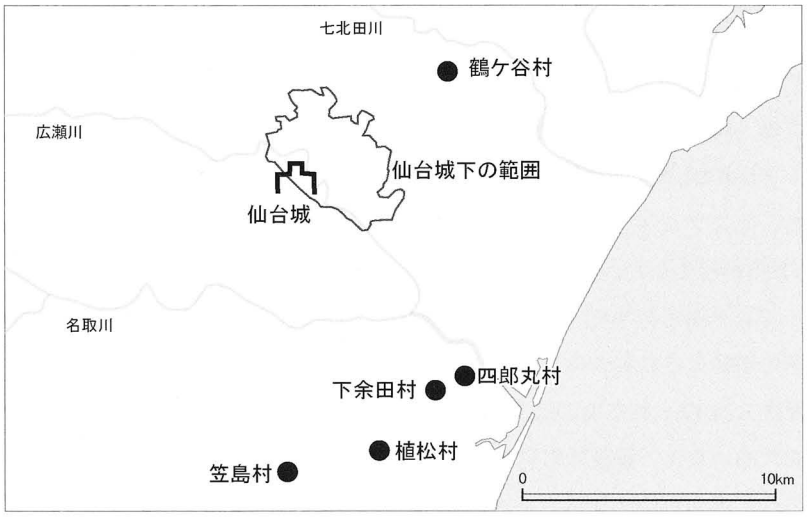
Ⅰ類　木札木簡

形状は、短冊形（011型式）で四隅が面取りされている柾目板のものが、４点出土した。大きさは10～12㎝、上部中央に穿孔があり成形や加工が丁寧に施されている。樹種はすべてスギである。

記載内容はすべてに「御酒塩」とあり、「五升」などの容量が記されており、そのうち３点はもう一面に「榧森与左衛門」と記されている。「酒塩」とは調味のために使われた酒であり、「榧森与左衛門」は榧森家の6代当主であった人物である。文献からも、「御膳酒」とともに「御酒塩」が藩に献上されたという記録がある。このことから榧森家が酒塩を藩に納める際、その容器につけた木札であったと考えられ、未使用か使用済みのものが井戸跡に廃棄された可能性が推測される。

Ⅱ類　荷札木簡

形状は、短冊形のもの（011型式）と、一端が方頭で、他端が欠損、腐食で原形が失われたもの（019型式）、長方形の材の一端を尖らせたもの（051型式）、折損、腐食その他によって原形の判明しないもの（081型式）が、14点出土した。下端が尖るものと下端が細くなるものの割合が多い。木札木簡に



第22図　KS-746井戸跡出土荷札木簡にみられる地名

比べて成形や加工が粗雑であり、ほとんどのものが、木材を割ったままか、粗く削ったもので、柾目板や板目板を斜めに木取りされた材が混在する。

記載内容は「御年貢米」、「御米」、「米」とあり、仙台藩での米一俵分を示す「四斗五升入」と容量が記されている。もう一面には「上松村喜六」「名取笠嶋村弥左衛門」など、地名と人名がみられることから、年貢米として藩に納める際、米俵につけた荷札木簡であったと推測される。なお、東北大学埋蔵文化財調査センターが行った仙台城二の丸北方武家屋敷地区第７地点の調査で出土した米の記載が確認できる木簡の中に、年号や日付の記載されたものがみられるが、今回の調査で出土した木簡からは確認できなかった。

木簡に記載された地名についてみると、「国分靈ヵ谷村」（宮城郡）、「名取四郎丸村」（名取郡北方）、「下余田村」、「植（上）松村」、「名取笠嶋村」（名取郡南方）の５つの村名が確認できた。現在の仙台市宮城野区鶴ヶ谷、太白区四郎丸と名取市下余田、植松、笠島である。明治22年（1889）まではそれぞれ村であり、仙台城下からも近く、藩に年貢を納める蔵入地（藩の直轄地）であったと考えられる。造酒屋敷で酒造りに使われた米が藩から支給されていたとすれば、仙台城下近郊の蔵入地から集められた年貢米であったことが推察される。

Ⅲ類　その他

形状は一端が方頭で、他端が欠損、腐食で原形が失われたもの(019型式)、長方形の材の一端の左右に切り込みを入れたもの(032型式)、長方形の材の一端を尖らせているが、他端は欠損したもの(059型式)のものが、８点出土した。これらは記載内容が断片的であったり、詳細がわからないため用途が不明である。Ⅰ・Ⅱ類の木簡とは区別した。

なお、木簡26点中24点が樹種同定の結果、スギと確認された。スギは16世紀以降桶や曲物材として東北をはじめ全国で利用頻度の高い用材である(註１)。針葉樹とした木簡もスギの可能性があり、極めて厳密な用材選択が行われていたと推察される。

②漆器・漆塗製品

漆器は、椀の個体と分かるものが34点出土し、汁椀と考えられるもの12点（内外赤色２点、内赤外茶１点、内赤外黒６点、内赤外緑１点）、飯椀と考えられるもの５点（内外赤色４点、内赤外黒１点）、分類できなかったもの17点（内外赤10点、内外茶色１点、内赤外黒６点、うち文様あり４点）である。腰部に稜線のある腰折タイプの椀は８点出土し、２点は大型品である。いずれも内外とも赤色漆である。蓋は７点出土し、内訳は内赤外黒のもの４点、内外赤色１点、内外黒色１点、稜線のみられる腰折タイプ１点である。皿は３点出土し、内赤外黒１点（大型か）、腰折タイプ？２点である。この他金彩文様のある盃片２点（１個体）、片口１点、段重など箱状になるもの予想できる板材２点（赤と黒７点、赤とオリーブ色か１点）、膳の部材は６点で、内訳は側板２点（竹材？に塗彩したもの１点）、脚１点、脚の脇にとりつくもの３点（第42図３～５）である。漆器は、内赤外黒の椀類のほかに、腰折や緑色の椀が組合されており、江戸後期頃の特徴と考えられる。曲物は側板73点（うち桜皮で綴じたもの１点）、蓋板と考えられるもの（中央に穴）２点、底板２点、合計77点である。側板の多くは残りが悪く、破片の状態で出土した。

③桶・樽

おもに酒造りに関わるとみられる木製品に、桶・樽がある。側板は203点出土し、内訳は柾目材125点、板目材77点、ミニチュア（柾目材、柄杓か）１点、把手１点、蓋板６点、底板とみられるもの４点、タガ材とみられるもの102点が出土した。側板は全体の長さの分かるものはほとんどなく、多くはノコギリで切断された破片である。おそらく上下端の朽ちた（磨耗した）部分を切り離し、作り直しているのではないかと想像される。タガ材も節間を基準に切断した特長がみられる。そうした破片となった部材で注目されるものは、側板では第45図５～６のような、厚さ３cm以上あるものは、酒造用民具例と比較して大桶に相当し、底径や高さが５尺ないし６尺になるものと予想される。また、蓋板でも第44図４は、推定直径が2.15mになり、大桶のものであると考えられる。これら大型品は酒造りにかかわり、仕込み用や貯蔵用などに使われた可能性がある。また、桶等を固定する目的などに使ったと考えられるクサビ（ストッパー）は、31点出土している。側面が三角形のものが主体であるが、中央がくぼむM字状のも

のもみられる。なお、1区の調査では、井戸跡、南西部Ⅲ層、Ⅳ層上面では多数のノコギリで切断したとみられている木端材が出土した。桶・樽などの木製品の解体・再加工が行われていた可能性が高い。

④栓

37点出土した。未成品と考えられるものを1点含む。酒樽（角樽）用と考えられる栓も1点出土した（第46図7）。

⑤樹皮

樹皮には特徴の異なる2種類のものが出土している。幅3～3.5cm前後の短冊形の樹皮が、破片を含めて87点出土している。片面にはカゴのヒゴ材が貼り付いており、この樹皮はカゴの内貼りだったことが分かる。樹皮には穴のみられるものがある。カゴの内側に樹皮（桜皮か）を貼り付けた容器ということになる。用途等、現在不明である。

もう1つは、屋根に使用する柿材であると考えられる。杉皮とみられる大型で短冊形のものが36点出土した。破片が多いが全体の分かるものが2点あり、1点は48cm×10.5cm、もう1点は46cm×5.5cmを測る。この屋敷では建物の建て替えを行っているので、それと関連する可能性がある。

⑥箸

箸は合計432点出土し、内訳は丸型（多角形の面取り）402点（完形品110点、破片262点）、丸型先細2点、角型先細27点（完形7点、破片20点）、漆塗り箸（丸型）1点である。丸型のものには、19cm前後の短いものと、20～21cmの長いものに分かれる。漆塗り箸（第45図5）は、赤色漆と茶色漆を塗り分けている。

⑦下駄

下駄は合計24点出土し、井戸出土は23点である。内訳は四角形の角型連歯下駄10点（撹乱出土1点）、角型刳り下駄8点、丸型で特徴不明のもの1点、草履1点である。一般的に角型は男性用、丸型は女性用と考えられる。連歯下駄の中には、歯の先端に釘穴の認められるものがある。すべり止めを目的として釘を打ち付けた、冬用のものであると考えられる。図で示した大型の角型連歯下駄は、台部表面に同じ特徴の焼面（刻印か）があり、大きさもそろっていることから、1足の下駄と考えられる（第49図1・3）。

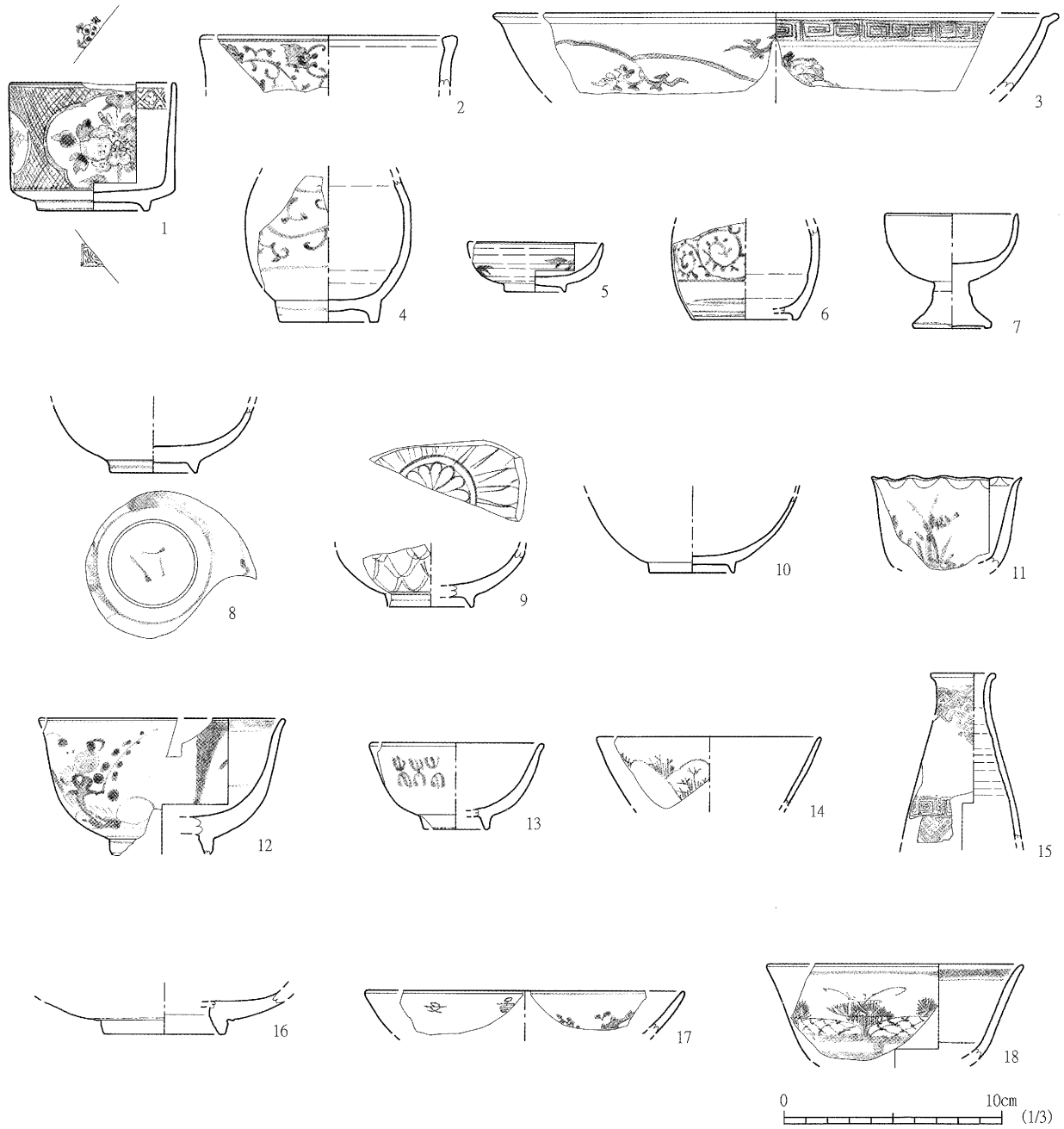
⑧その他

前述のもの以外に膳の一部、セイロ、道具の柄、糸巻き、建具部材、調度品部材、燭台支脚、人形の手、井戸枠材、棒などが出土した。

註1　山田昌久　「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史」
『植生史研究特別』第1号　1993

区	遺構・層位	木簡	漆器	曲物	板材	角材	割材	丸太	建築部材	箸	樹皮	桶・樽	栓	クサビ	下駄	竹製品	木端	その他	不明	計
1	撹乱														1					1
	側溝											1								1
	Ⅰ																32	5		37
	Ⅱ			2	17			2			1	1		1		1	29	15	2	71
	Ⅲ上面		15		2				10								13	1		41
	Ⅲ		1		2												2			5
	Ⅳ上面											1								1
	KS-661埋土				1			1				4					7	1	1	15
	KS-680炭層																	1		1
	KS-744埋土															2				2
	KS-746埋土	10	48	30	39	29	7		23	141	16	80	16	12	8	23	164	32	4	682
	KS-746埋土2		1	1	1		1								2		3	1	1	11
	KS-746埋土3		4	1	4					4		9				2		1		25
	KS-746埋土4	53	87	44	114	79	9		10	287	52	158	21	18	13	101	220	20	11	1297
	KS-768埋土				1															1
	KS-772埋土											1								1
	KS-790埋土				1													3		4
	KS-796埋土											1						1		2
	1区小計	63	156	78	182	108	17	3	43	432	69	256	37	31	24	129	470	81	19	2199
2	Ⅰ				1	1	1					1					1			5
	2区小計	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	5
	計	63	156	78	183	109	18	3	43	432	69	257	37	31	24	129	471	81	19	2204

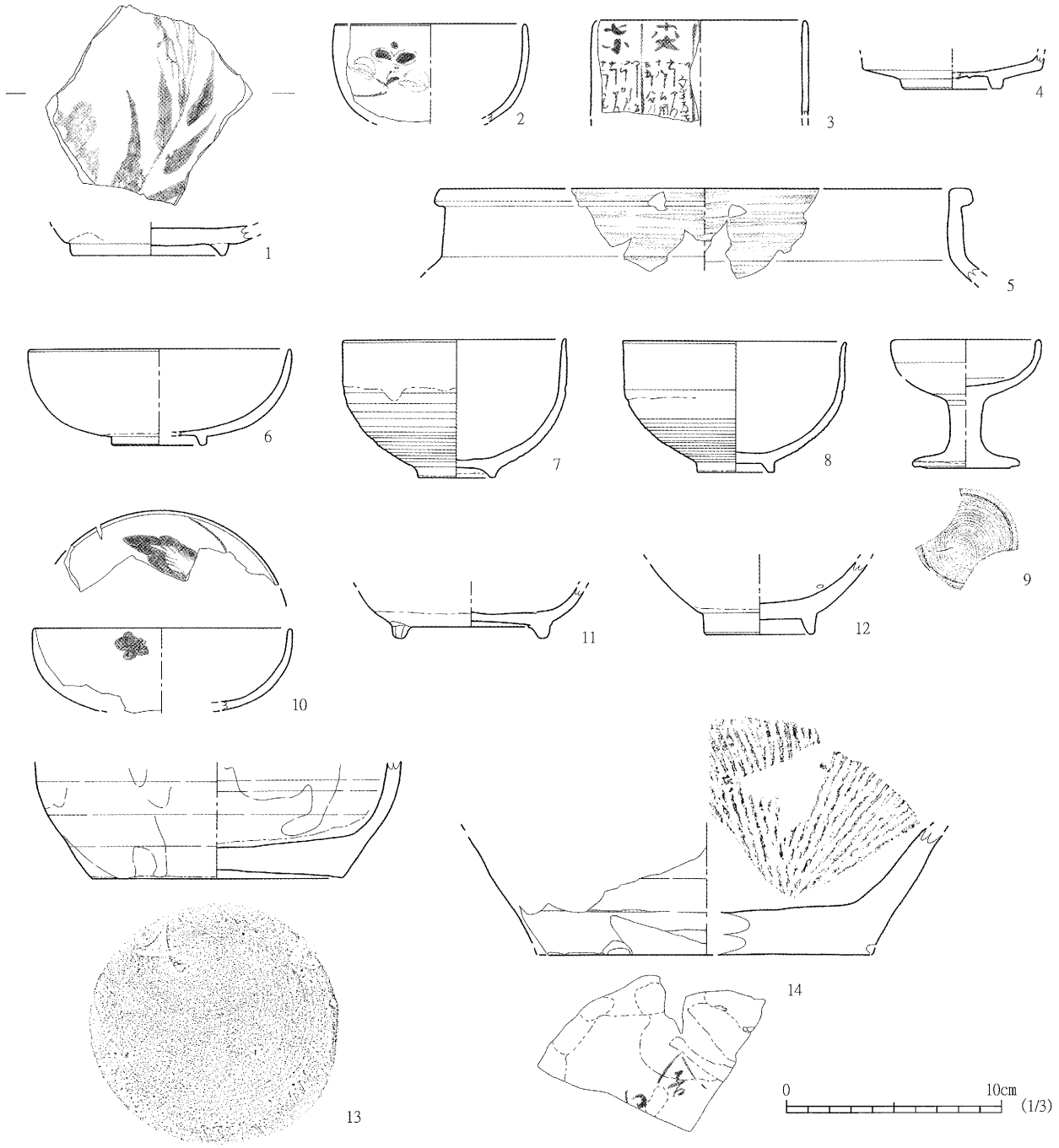
第12表　第23次調査出土木製品数量表



第23図　第23次調査出土磁器（S=1/3）

図	遺物番号	区	遺構・層位	種　類	生産地	器　種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	文　様　等	備　　考	写真
1	1103	1	KS-746・埋土	染付	肥前	筒形碗	18ｃ後	(78)	(52)	59	牡丹文　見込手描き五弁花　文様は窓絵　地文は斜格子文　内面四方襷文　高台内二重枠「満福」か		1
2	1704	1	KS-746・埋土	染付	肥前	香炉	18ｃ前～18ｃ中	(118)	－	(24～)	花唐草文		2
3	1104	1	KS-746・埋土	染付	肥前	折縁中皿	17ｃ後～18ｃ中	(260)	－	(37)	草花文　口縁部雷文帯　裏文様　蔓草文　口紅	漆継ぎ	3
4	1425	1	KS-746・埋土	染付	肥前	鶴首瓶	18ｃ前～18ｃ中	－	(46)	(67)	蛸唐文　内面露胎　高台畳付のみ露胎		4
5	1424	1	KS-746・埋土	染付	肥前	紅猪口	18ｃ	(62)	(29)	23	紅猪口　笹文　畳付のみ露胎		7
6	1526	1	KS-746・埋土4	染付	肥前	鶴首瓶	18ｃ前～18c中	－	(50)	(43)	蛸唐文　内面無釉　畳付のみ露胎		5
7	1571	1	KS-746・埋土4	白磁	肥前	仏飯器	17ｃ末～18ｃ後	61	36	53	底部削り出し露胎		6
8	1278	1	KS-746・埋土4	染付	波佐見	碗	18ｃ中	(92)	40.5	(31)	雪輪草花文　高台内に銘あり（不明）		8
9	1185	1	KS-746・埋土4	染付	肥前	碗	18ｃ前	－	(40)	(27～)	網目文　外面は二重網目文　見込菊花文　高台内文様あり		9
10	1186	1	KS-746・埋土4	白磁	肥前	碗	18ｃか	(96)	39	(35)	畳付のみ露胎	漆継ぎ	10
11	1187	1	KS-746・埋土4	染付	肥前	輪花猪口	17ｃ末～18c中	(69)	－	(42)	草花文　内側に呉須付着		12
12	387	1	I	染付	切込	端反碗	19ｃ前	(113)	－	(63)	草花文　見込目跡無　上手のもの（胎土白色）		11
13	806	1	KS-768・埋土	染付	瀬戸美濃	端反碗	19ｃ前	(80)	(30)	(40)	源氏香文	薄い口銹（口紅）　あり	13
14	1095	1	KS-715・埋土	染付	肥前	碗	18ｃ末～19ｃ前	(104)	－	(32)	風景文（山か）　素描文様	外に開く碗または広東碗	14
15	521	1	KS-661・埋土	染付	瀬戸美濃	燭徳利	19ｃ後	(30)	－	(77)	幾何学文様（銅版転写）	鍛冶工房関係遺物	15
16	671	1	KS-682北壁	青磁	波佐見か	皿	17ｃか	－	(56～)	(21～)	見込文様（凹線文様か）　胎土灰色、黒色粒子		16
17	1658	1	KS-682・埋土	染付	肥前	皿	19ｃ前か	(146)	－	(20～)	樹木　文字		17
18	971	1	KS-768・埋土	染付	瀬戸美濃	端反碗	19ｃ前	(118)	－	(44～)	垣根　草文		18

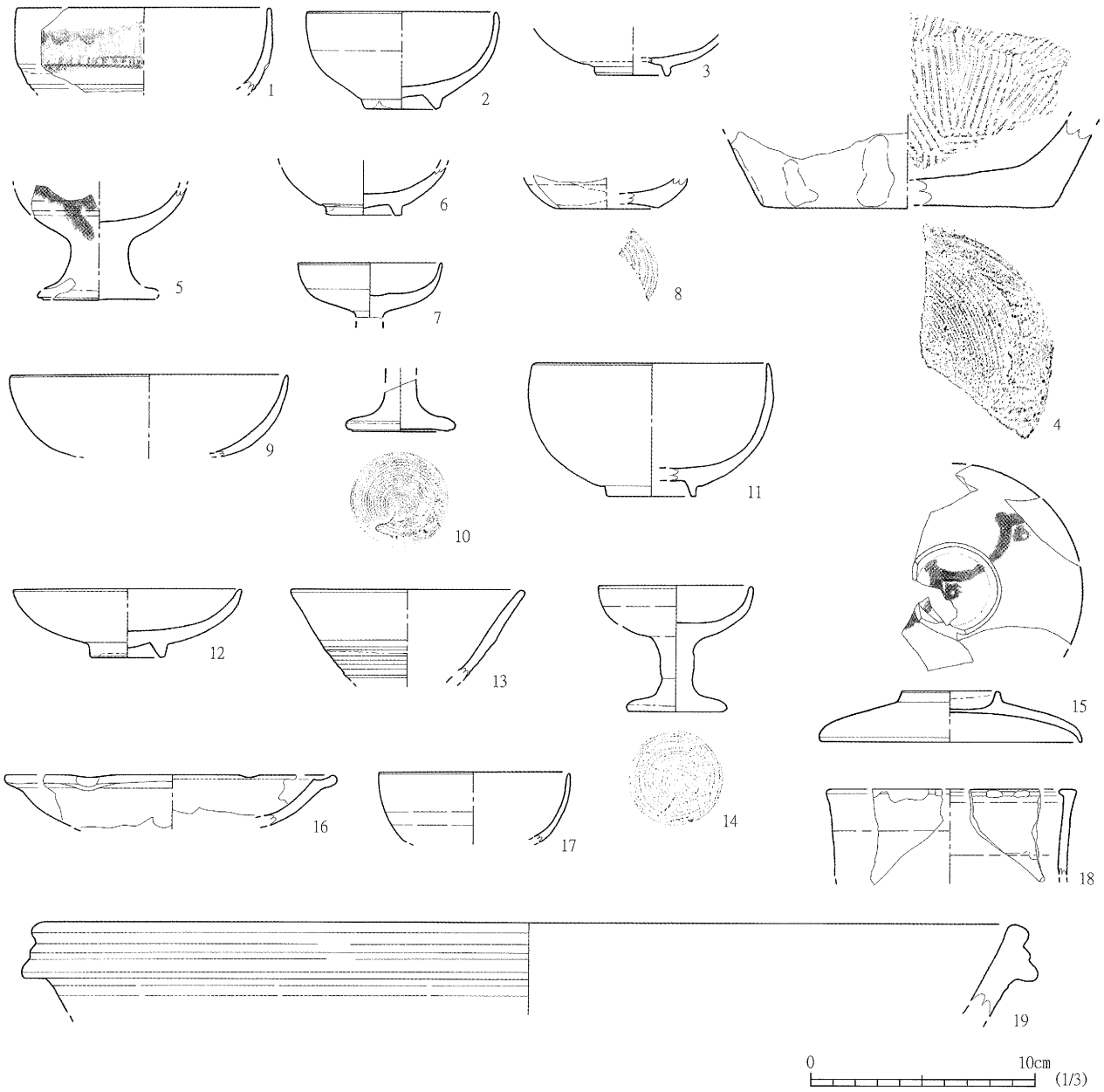
第13表　第23次調査出土磁器観察表



第24図　第23次調査出土陶器１（S=1/3）

図	遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器　種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	釉薬・文様等	備　　考	写真
1	1350	1	KS-746・埋土	瀬戸美濃	輪花皿	17ｃ	(90)	72	(14)	鉄絵草文　地は灰釉　貼付高台		33
2	1504	1	KS-746・埋土2	京・信楽	碗	18ｃ	(90)	－	(46)	色絵花樹文碗　赤、緑、青、金　小型　胎土灰色　気泡　貫入		34
3	1522	1	KS-746・埋土2	京焼	筒形碗	18ｃ	(100)	－	(45～)	色絵暦手文	寛保2年（1742）の暦か　東京都港区芝離宮跡出土碗に類似	35
4	1405	1	KS-746・埋土4	京・信楽か	筒形碗	18ｃ	(84)	(46)	(16)	内面灰釉　外面無釉　胎土褐灰色　白色細砂　気泡多し　高台内中央、渦状の沈線　粗い貫入		36
5	1208	1	KS-746・埋土3	肥前	壺	17ｃ中	(250)	－	(44)	二彩唐津、松文か	接合しないが文様のある破片あり	37
6	1200	1	KS-746・埋土4	大堀相馬	平碗	18ｃ後～	(122)	(44)	45	灰釉　胎土灰色　黒色粒子　貫入高台脇から高台内露胎		38
7	1307	1	KS-746・埋土4	大堀相馬	碗	18ｃ	(104)	36	65.5	掛分（灰釉と鉄釉）　胎土灰色　畳付のみ露胎		39
8	1117	1	KS-746・埋土	大堀相馬	碗	18ｃ	(103)	36	62	掛分（灰釉と鉄釉）　胎土灰色　貫入　畳付のみ露胎		40
9	1599	1	KS-746・埋土4	大堀相馬	仏飯器	18c	(70)	42～50	61	灰釉　胎土灰色色　黒色粒子		41
10	1137	1	KS-746・埋土	京焼か	平碗	18ｃ後か	(120)	－	(39)	色絵　緑、青、黒　線の上に黒を重ねてる　胎土は灰白色で空隙（孔）が多い		43
11	1288	1	KS-746・埋土4	大堀相馬	鍋	19ｃ前	－	(64)	(25～)	鉄釉　露胎部スス付着（ふき取り）　回転ヘラナデ	KS-746井戸跡の下限を示す資料	42
12	1232	1	KS-746・埋土4	小野相馬	碗	18c	(100)	50	(34)	淡青色釉　見込目跡2ヶ　高台脇～高台内露胎　胎土灰色～淡褐色　細砂		44
13	978	1	KS-746・埋土	産地不明	徳利	18ｃ～	169	116	55	鉄釉　内底、外底露胎　釉ムラあり　灰黒色～褐色　細砂	在地か	45
14	1207	1	KS-746・埋土3	産地不明	擂鉢	18ｃ～	－	(156)	(59)	鉄釉　底部施釉　細砂多　底銘「舎」、「同」か「日」	在地か	46

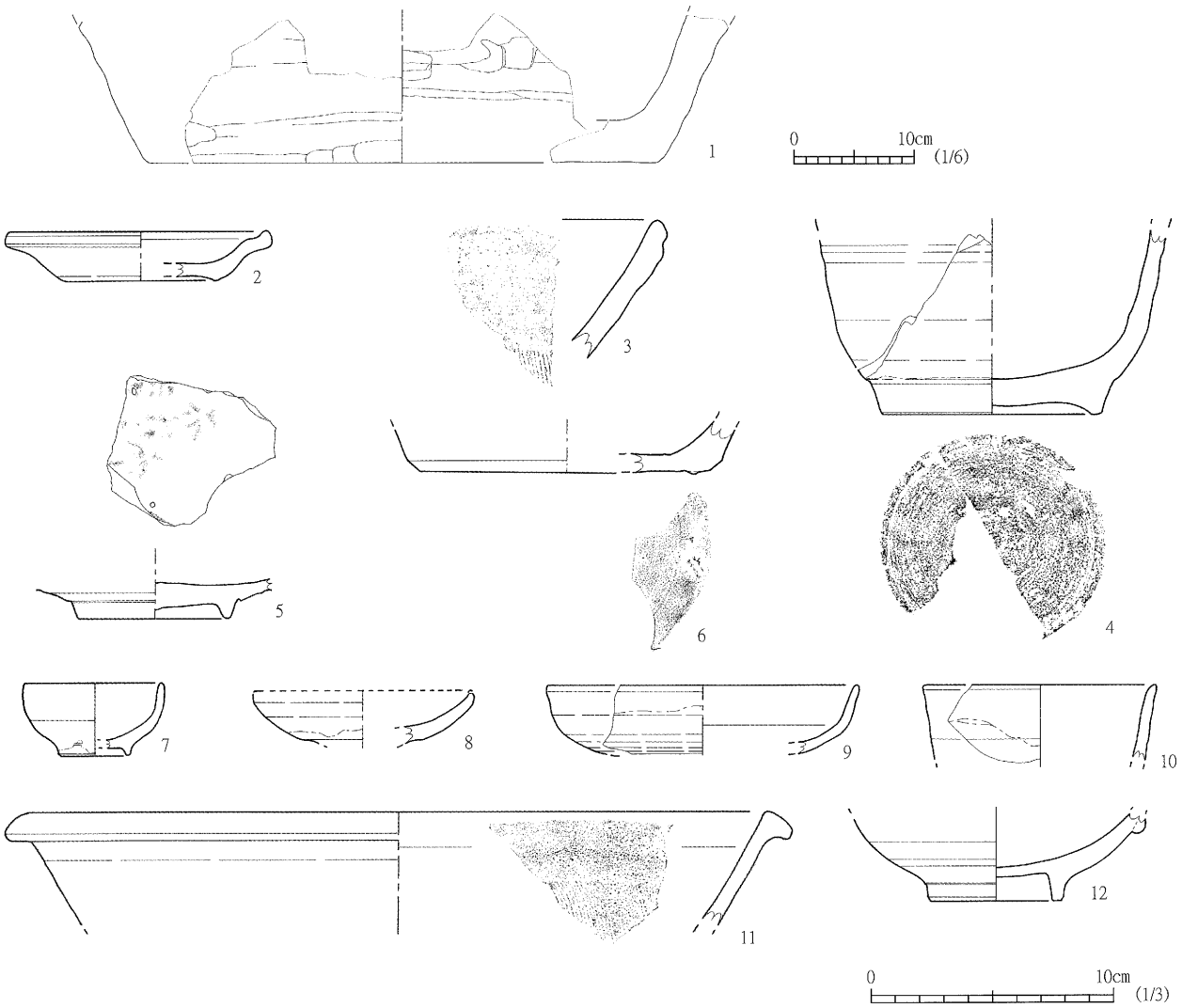
第14表　第23次調査出土陶器１観察表



第25図　第23次調査出土陶器２（S=1/3）

図	遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器　種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	釉薬・文様等	備　　考	写真
1	1352	1	KS-746・埋土	大堀相馬	碗	18ｃ	(114)	—	(38～)	掛分飴釉流（灰釉と鉄釉）		47
2	1134	1	KS-746・埋土	大堀相馬	小杯	18ｃ	86	32	44.5	灰釉　畳付高台内露胎		48
3	1123	1	KS-746・埋土	京・信楽	碗	18ｃ	(88)	34	(22)	色絵か　胎土灰色　気泡多し　貫入	№1504の色絵碗と類似	49
4	1771	1	KS-746・埋土	産地不明	擂鉢	18ｃ～	—	(130)	(41)	鉄釉　前面、外底も施釉　重ね焼きの道具痕	在地か	51
5	1418	1	KS-746・埋土	大堀相馬	仏飯器	18ｃ後	—	(53)	(52)	灰釉飴釉流	脚太いタイプ	50
6	1508	1	KS-746・埋土2	大堀相馬	碗	18ｃ	(74)	34	(22)	灰釉		53
7	1210	1	KS-746・埋土3	大堀相馬	仏飯器	18ｃ	(65)	—	(25)	灰釉　脚折れ面磨耗	脚破損後も割れ口を底部として小皿に転用	52
8	1623	1	KS-746・埋土	産地不明	茶入	18ｃか	—	(46)	(14)	内外鉄釉　腰部露胎　底部糸切施釉（鉄釉で体部の釉調と異なる）	在地か（仙台焼の可能性も）	54
9	1467	1	KS-746・埋土4	大堀相馬	平碗	18ｃ後か	(62)	—	(37)	灰釉　内面茶色物質付着		56
10	1195	1	KS-746・埋土4	大堀相馬	仏飯器	18ｃ	—	44	.24	鉄釉		55
11	1581	1	KS-746・埋土4	大堀相馬	碗	18ｃ	104	40	61	灰釉　高台内畳付露胎　内面茶色物質付着		57
12	1294	1	KS-746・埋土4	大堀相馬	皿	18ｃ	(102)	(33)	31	灰釉　釉調　発色悪し（白っぽい）　口縁端部所々欠損		58
13	1287	1	KS-746・埋土4	大堀相馬	猪口	18ｃ	(106)	—	(40～)	掛分（灰釉と鉄釉）		59
14	1131	1	KS-746・埋土	大堀相馬	仏飯器	18ｃ	(70)	45	57	灰釉　貫入あり　胎土灰白色　黒色粒子含む		60
15	860	1	KS-746・埋土4	瀬戸か	蓋	18ｃか	(118)	—	23	鉄絵羅金文　胎土灰釉色　釉中に気泡多量　貫入　（口縁端部は露胎になってない）　Ⅲ層出土と接合	蓋物の蓋　つまみ径44mm	61
16	1546	1	KS-746・埋土4	小野相馬	折縁輪花皿	18ｃ	(148)	—	(23～)	灰釉　胎土褐灰色　白色粒子多い　釉下表面に鉄分の吹き出し多し（まだら）		62
17	1655	1	KS-746・埋土3	大堀相馬	小型碗	18ｃ後	(85)	—	(32)	灰釉　内面茶色物質付着　胎土灰白色　黒色粒子含む　貫入細かい		64
18	1641	1	KS-746・埋土	小野相馬	灰落とし	18ｃ	(112)	—	(39)	灰釉系　胎土褐灰色　白色粒子少量		65
19	1324	1	KS-746・埋土4	産地不明	擂鉢	18ｃ～19ｃ	(446)	—	(42～)	鉄釉	在地か	63

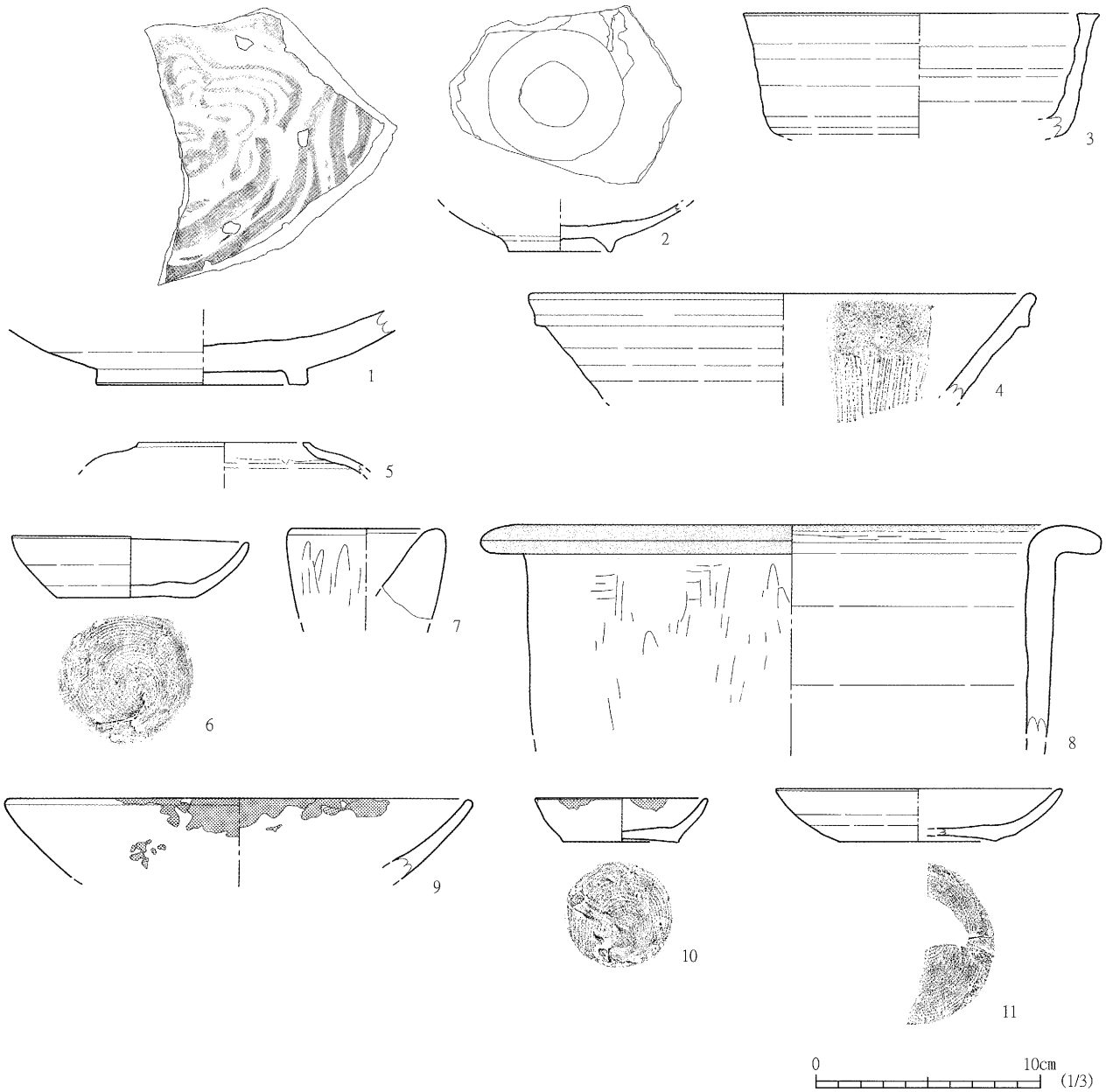
第15表　第23次調査出土陶器２観察表



第26図　第23次調査出土陶器３（１：S=1/6　２～12：S=1/3）

図	遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器　種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	釉薬・文様等	備　　考	写真
1	148	1	Ⅰ	備前	大甕	17c	－	(425)	(125～)	内面降灰か（白い斑点）　内外塗土　底部窯道具痕1ヶ 胎土　赤褐色細砂と粗砂	高さ推定60cm以上か	66
2	257	1	Ⅰ	瀬戸美濃	折縁皿	16c後	(110)	(62)	21	灰釉　削り出し高台　底部釉ふき取り	大窯」期か　他に蓮弁文碗（16c）の破片が出土	67
3	436	1	KS-680・炭層1	堤	擂鉢	19c	－	－	－	鉄釉　暗褐色　細砂	鍛冶遺構関係遺物	69
4	529	1	KS-681	岸窯系か？	鉢	17c	－	92	(78)	鉄釉　釉薬はうすい　高台脇～高台内露胎　糸きり 削り出し高台　畳付の一部に糸きり痕あり		68
5	400	1	Ⅰ	唐津	皿	17c中	(97)	(64)	(17)	鉄絵　型紙刷り　透明釉　胎土灰白色　見込み目跡 2ヶ　高台内兜巾		74
6	469	1	Ⅰ	志戸呂	徳利	18c	(140)	(120)	(23)	胎土灰色　砂は目立たず　窯道具痕　底部回転ヘラケズリか	KS-746より多く破片出土	70
7	309	1	Ⅲ上面	大堀相馬	小杯	18c後～	(58)	(30)	31	白濁釉　高台脇～高台内露胎（わずかに飴釉あり）　灰白色　黒色粒子		71
8	307	1	〃	唐津	皿	16c末～17c初	(92)	－	(22～)	灰釉　胎土　灰色　釉むらあり		72
9	853	1	Ⅲ	唐津	皿	16c末～17c初	(130)	－	(29)	灰釉　ロクロヘラケズリ		73
10	992	1	側溝北	瀬戸美濃	腰錆碗	18c	－92	－	(32～)	灰釉　鉄釉		75
11	942	1	Ⅳ	岸窯系	擂鉢	17c後か	(326)	－	(48～)	鉄釉		77
12	598	1	Ⅲ	大堀相馬	大型碗	19c前か	(123)	54	(37)	掛分（灰釉と黒釉）　畳付のみ露胎　胎土灰色　黒色粒子		76

第16表　第23次調査出土陶器３観察表



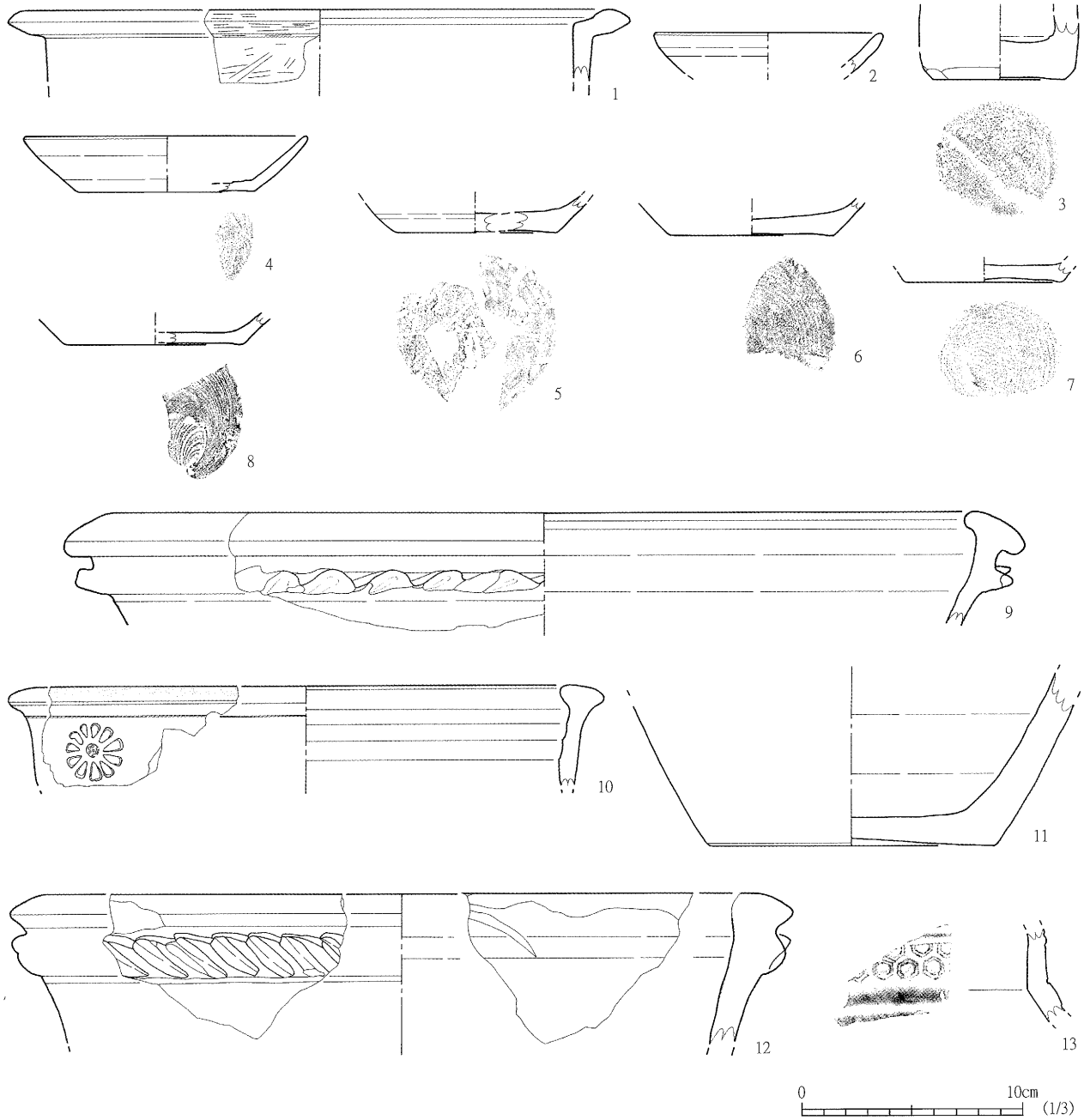
第27図　第23次調査出土陶器４・土師質土器１（S=1/3）

図	遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器　種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	釉薬・文様等	備　　考	写真
1	555	1	V	肥前系	大鉢	17～18ｃ	－	(94)	(34)	刷毛目文　胎土赤褐色　砂　目跡3ヶ所あり		78
2	930	1	撹乱	肥前	皿	17ｃ後	(102)	46	(22)	灰釉　見込蛇の目釉ハギ　高台砂付着		82
3	666	1	KS-682・底部	産地不明	鉢か香炉	18ｃ	(158)	－	(56～)	飴釉　内面も施釉	在地か	79
4	679	1	KS-682・南壁	産地不明	擂鉢	18ｃ	(226)	－	(48)	鉄釉　胎土　細砂　黒灰色～褐色	在地か	80
5	1635	3	KS-800・埋土	大堀相馬	土瓶	18ｃ後～	(76)	－	(14)	白濁釉　口唇部は露胎（無釉）		81

第17表　第23次調査出土陶器４観察表

図	遺物番号	種　別	器　種	区	遺構・層位	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	備　　考	写真
6	1373	土師質土器	皿	1	KS-746・埋土	106	61	28		118
7	1633	土師質土器	焼塩壺	1	KS-746・埋土	(72)	－	(41)	内面ロクロナデ　桃色～赤褐色　外面ロクロナデ　縦位のヘラミガキ(粗い)　コップ型	117
8	1738	土師質土器	植木鉢	1	KS-746・埋土	(276)	－	(96)	口縁部に横位ヘラミガキと黒漆塗り　体部外面　縦位ヘラミガキ　トーンは漆	120
9	1204	土師質土器	灯明皿	1	KS-746・埋土3	(208)	－	(36)	内外すす付着　(内面ふき取り汚れている)	121
10	1336	土師質土器	灯明皿	1	KS-746・埋土4	76	50	20	ロクロ成形　すす、油煙3ヶ所　内面汚れているか　底部回転糸切り　墨痕あり　内外面炭化物付着　外面ヘラケズリ	116
11	1595	土師質土器	皿	1	KS-746・埋土4	(128)	(70)	24	底部　回転糸切り	119

第18表　第23次調査出土土師質土器１観察表



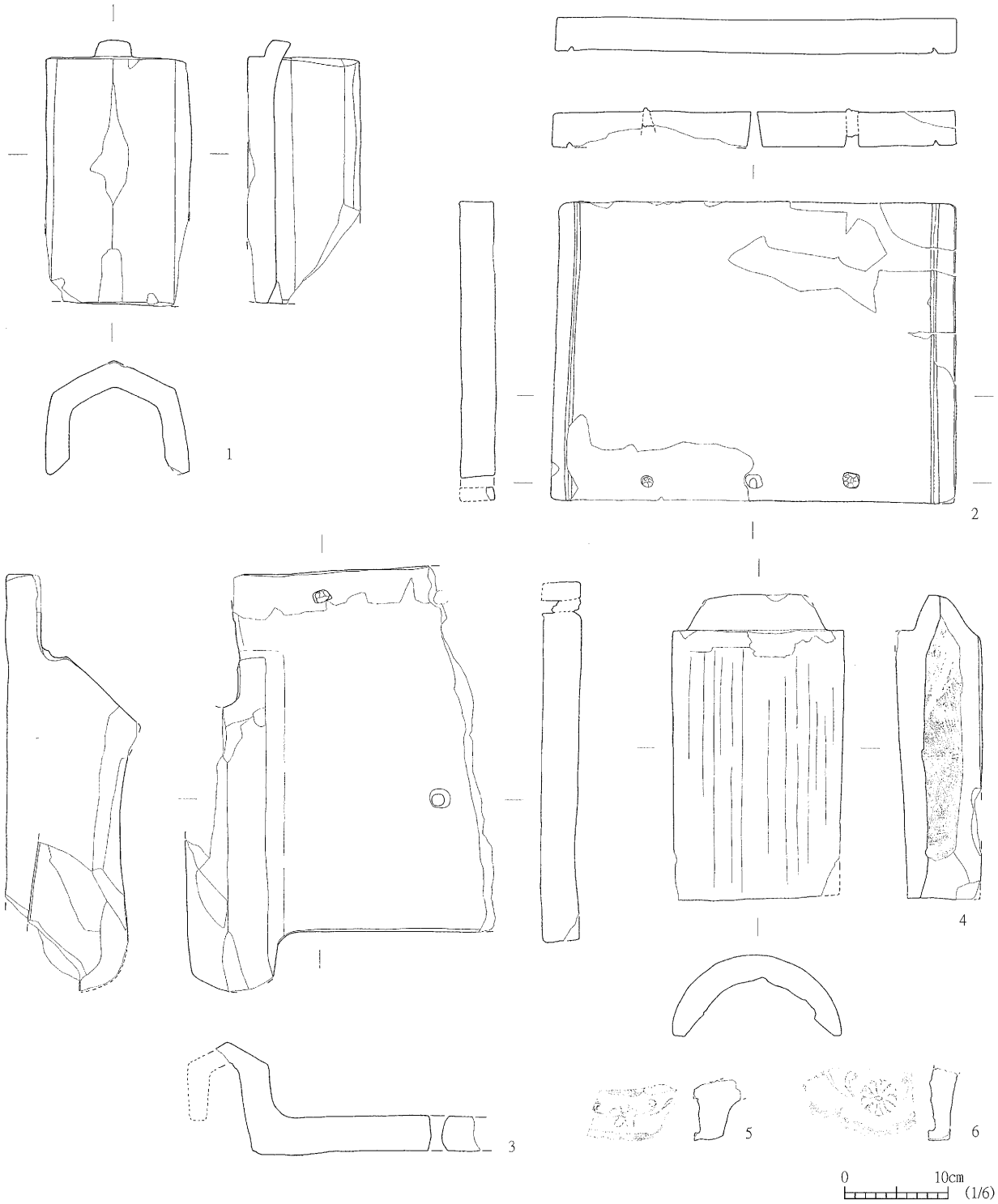
第28図　第23次調査出土土師質土器２・瓦質土器（S=1/3）

図	遺物番号	種　別	器　種	区	遺構・層位	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	備　　考	写真
1	571	土師質土器	折縁鉢	1	KS-717・掘り方	(282)	－	(33)	産地不明　近世か　灰白色～淡褐色　細砂　外面ミガキ	122
2	951	土師質土器	Ⅲ	1	KS-717・掘り方	(106)	－	(19)	胎土　淡赤褐色　砂目立たず	123
3	933	土師質土器	焼塩壺	1	Ⅳ	(72)	58	(30)	ロクロ成形　円筒型か　厚手　胎土橙色　細砂　底部　回転糸切り摩滅　外面ヘラケズリ手持ち　17ｃか	124
4	578	土師質土器	Ⅲ	1	Ⅳ	(128)	(80)	(26)	回転糸切り	126
5	792	土師質土器	Ⅲ	1	Ⅳ	－	(74)	(17)	回転糸切り	125
6	1084	土師質土器	Ⅲ	1	Ⅳ	(104)	(76)	(17)	胎土　淡赤褐色　細砂	127
7	1650	土師質土器	Ⅲ	2	KS-687・埋土	(78)	(70)	(9)	回転糸切り	128
8	983	土師質土器	Ⅲ	1	KS-690・掘り方	(104)	(78)	(15)	胎土灰白色　砂目立たず　底部回転糸切り	129

第19表　第23次調査出土土師質土器２観察表

図	遺物番号	種　別	器　種	区	遺構・層位	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	備　　考	写真
9	1774	瓦質土器	火鉢	1	KS-746・埋土	(436)	－	(53)	刻みのある突帯1条	137
10	1570	瓦質土器	風炉か	1	KS-746・埋土4	(272)	－	(46)	頸部に菊花文（印花）　口縁端部に赤彩あり　内面炭化物付着　トーンは赤彩	139
11	1775	瓦質土器	鉢	1	KS-746・埋土	(200)	(130)	(80)	ロクロナデ	138
12	1695	瓦質土器	火鉢	1	KS-746・埋土2	(326)	－	(70)	刻みのある突帯が1条巡る　内面口唇部は帯状に磨滅、剥落痕あり	141
13	1183	瓦質土器	風炉か	3	Ⅲ	－	－	－	亀甲繋ぎ文（印刻）頸部隆帯　胎土灰色　炭化物付着	140

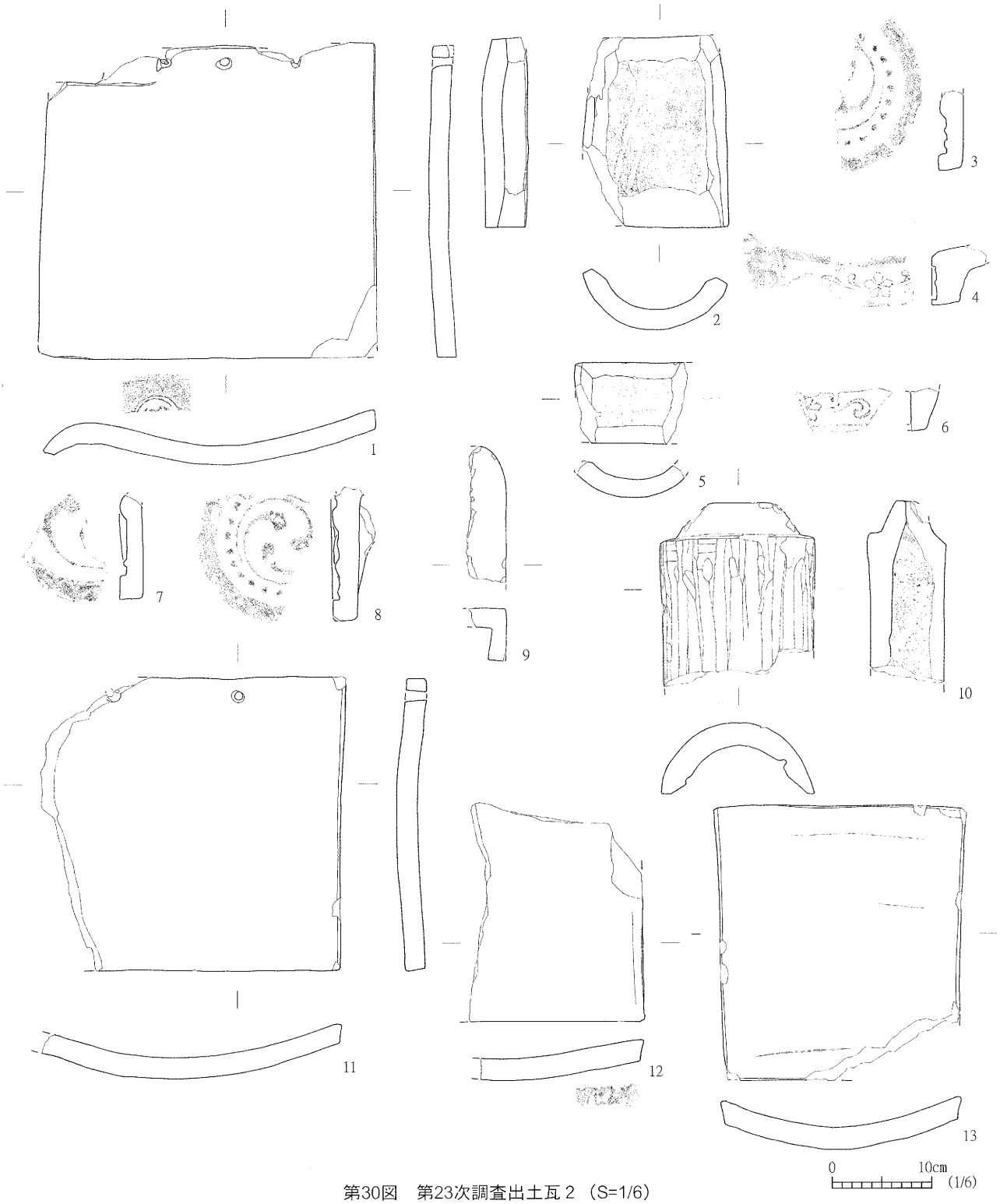
第20表　第23次調査出土瓦質土器観察表



第29図　第23次調査出土瓦１（S=1/6）

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	文様	計測値（mm）	重量(g)	備　　考	写真
1	777	箱冠伏間瓦	1	I	—	全長260　幅141　高さ(110)　厚み23　玉縁幅38　玉縁長さ15　玉縁受け幅45　玉縁受け長さ28	1940	胎土灰色砂	143
2	693	塼平瓦	1	I	—	全長293　前幅382　後幅390　厚み34　水切り幅6　水切り深さ5　孔径15×15　14×15　11×11	5980	胎土灰色　砂礫　黒色粒子　鉄釘残存	147
3	1901	駒付平板瓦	1	I	—	最大幅（295～）　全長416　厚み36　駒部幅78　駒部長さ(280)　駒部高さ73　孔径19×20　14×18	6080	胎土灰黒色（かなり黒い）　砂礫　古い剥離か　釘残存	148
4	1910	丸瓦	1	I	—	前幅(137～)　後幅164　長さ297　高さ80　厚み27　玉縁先端（91）　玉縁長さ34	2210	コビキB（鉄線切り）　吊紐痕　胎土灰色　黒色粒子多い　砂目立たず	144
5	937	軒平瓦	1	撹乱	桔梗　剣菱	瓦当高さ（50）　瓦当厚み28　内区高さ33　周縁深さ4	201	唐草文（複線）　胎土灰色　黒色粒子少量	145
6	734	滴水瓦	1	II	菊花	瓦当厚み（20）　内区高さ（60）　周縁深さ7	174	唐草文	146

第21表　第23次調査出土瓦１観察表



第30図　第23次調査出土瓦２（S=1/6）

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	文様	計測値（mm）	重量(g)	備　　考	写真
1	691	丸桟瓦・左	1	Ⅱ下部	－	全長320　前幅（338）　孔3箇所	3540	刻印あり　面取りあり　断面を取ったところは面取りが少ない	158
2	1074	輪違い	1	撹乱	－	全長197 前幅(105) 後幅(107) 高さ(59) 厚み(前幅)11	884	凹面コビキB（鉄線切り）　布目痕　縦位ナデ	149
3	960	軒丸瓦	1	KS-772・埋土	珠文三巴左巻き	周縁幅17　周縁深さ9　瓦当厚み25	352	巴文は尾長　珠文10個　胎土灰色　石英、黒色粒子	150
4	752	軒平瓦	1	撹乱	桔梗　剣形	厚み22　瓦当高さ（61）　瓦当厚み28　内区高さ34　周縁深さ45	551	唐草文　瓦上端面取り　胎上淡褐灰色　砂少量　粉質	152
5	815	面戸瓦	1	Ⅲ	－	全長83　幅（114）　高さ（37）　厚み18	226	内側コビキB　鉄線切り　胎土灰色	153
6	587	軒平瓦	1	Ⅲ	桔梗　剣形	瓦当高さ（42）　瓦当厚み（26）　内区高さ（32）	134	唐草文　離れ砂　胎土灰色砂少量	151
7	919	軒丸瓦	1	Ⅳ上面	三巴左巻き	周縁幅24　周縁深さ6　瓦当厚み23	217	木目痕　やや笵ずれ　胎土灰色　黒色粒子	154
8	733	軒丸瓦	1	Ⅰ	珠文三巴左巻き	周縁幅21　周縁深さ6　瓦当厚み25	487	胎土淡褐灰色　砂粉質　いぶし弱い　珠文9つ	155
9	1854	飾り瓦	1	Ⅳ上面	－	全長（132）　幅（43～）　厚み20	236	鬼瓦類　胎土灰色　砂少量　黒色粒子少量	156
10	2036	丸瓦	1	Ⅲ	－	全長（188）　後幅154　高さ72　厚み23　玉縁先幅（66）玉縁長さ32	1088	内面コビキB（鉄線切り）　布目痕　吊紐痕　胎土灰色　砂黒色粒子	157
11	2021	平瓦	1	KS-681・南壁	－	前幅(244～)　後幅(194～)　長さ300　高さ56　厚み21　孔径12×13	3040	表裏とも表面はサビ付着　胎土灰色砂	160
12	541	平瓦	1	KS-661・埋土	－	全長（223）　前幅（177）　高さ（41）　厚み22	1131	刻印あり　面取りあり　胎土灰色　黒色粒子少量　砂	159
13	2027	平瓦	1	KS-791・埋土	－	全長280　前幅（109～）　後幅（254～）　高さ54　厚み22	2540	胎土黒灰色　黒色粒子　砂礫	162

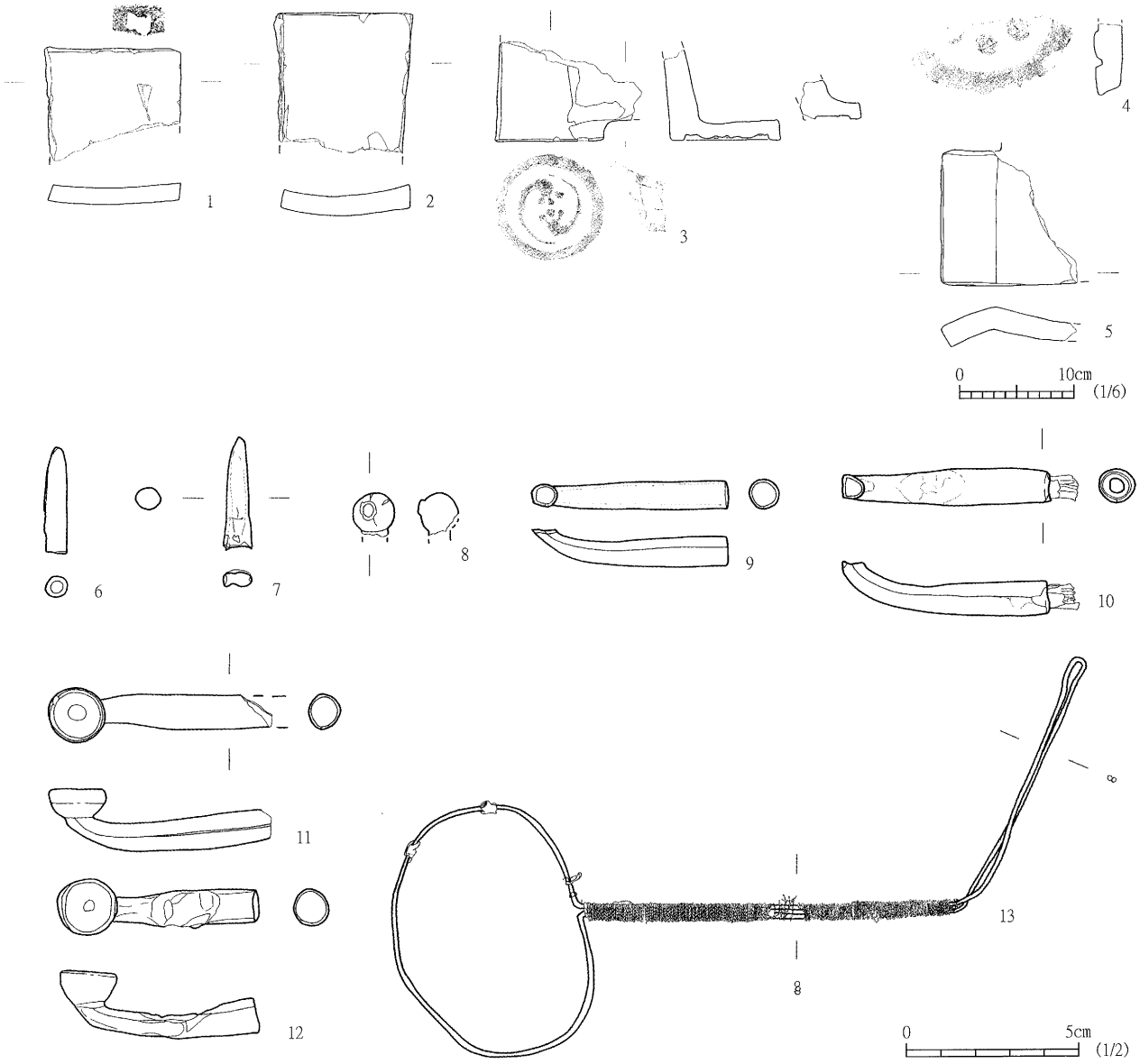
第22表　第23次調査出土瓦２観察表

第31図　第23次調査出土瓦３（S=1/6）

0　10cm　(1/6)

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	文様	計測値（mm）	重量(g)	備　考	写真
1	1833	塀平瓦	1	西側側溝	―	全長(240～)　幅(193)　厚み38　水切幅15　水切深さ9	1750	刻印あり　指紋	161
2	1839	二の平瓦	1	南側側溝	―	全長(280～)　幅(216～)　厚み26　突起部幅25　突起部高さ23	2300	水返しがつく	164
3	2066	平瓦	1	Ⅳ上面	―	全長328　前幅（238）　高さ49　厚み22	2890	胎土灰色　砂礫　黒色粒子　釘穴	158
4	2162	丸桟瓦	1	KS-768・埋土	左	全長304　厚さ20～22	1620	胎土灰色　砂礫	170
5	2033	角桟伏間瓦	1	KS-791・埋土	―	全長（155～）　幅（152～）　高さ70　厚み20　桟幅57　平部高さ52　桟厚み20	737	胎土灰色　砂礫　強いナデ　やや大きな面取りあり	165
6	2069	軒丸瓦	1	Ⅰ	三引両	周縁幅19　周縁深さ6　瓦当厚み23	246	胎土灰色　砂目立たず	166
7	1102	軒平瓦	1	Ⅳ上面	梅花	瓦当高さ（33）　内区高さ（27）	85	唐草文(複線) 瓦頭部離れ砂 胎土青灰色 黒色粒子	167
8	2076	軒丸瓦	1	KS-746・埋土4	三巴左巻き	周縁幅20　周縁深さ9	177	胎土灰色　砂目立たず	168
9	2082	軒丸瓦	1	KS-746・埋土	珠文三巴左巻き	周縁幅20　周縁深さ7　瓦当厚み27	256	尾は短い　胎土灰色砂多し	169
10	2051	輪違い	1	KS-746・埋土	―	全長（108）　前幅（127）　高さ（56）　厚み（前幅）20	223	凹面コビキB（鉄線切り）　布目痕　胎土灰色　砂、黒色粒子少量	171
11	2053	飾り瓦	1	KS-746・埋土	―	全長（130）　幅（71）　厚み（51）	409	鬼瓦類の外辺部破片　胎土灰色　砂礫少量　黒色粒子少量	172
12	837	輪違い	1	KS-712・埋土	―	全長（92）　前幅（78）　高さ（45）　厚み（前幅17）	159	凹面コビキB（鉄線切り）　燻し弱い　淡褐灰色砂　焼きあまい	174
13	2146	輪違い	2	KS-685・埋土	―	全長（94）　前幅（102）　高さ（65）　厚み（前幅で、22）	269	凹面コビキB（鉄線切り）　布目痕	175
14	743	軒桟瓦	2	Ⅰ	三巴左巻き	小巴部　瓦当径(84)　内区径68　周縁幅9　周縁深さ6　瓦当厚み(24)	632	胎土黒灰色　砂、黒色粒子少量	173

第23表　第23次調査出土瓦３観察表



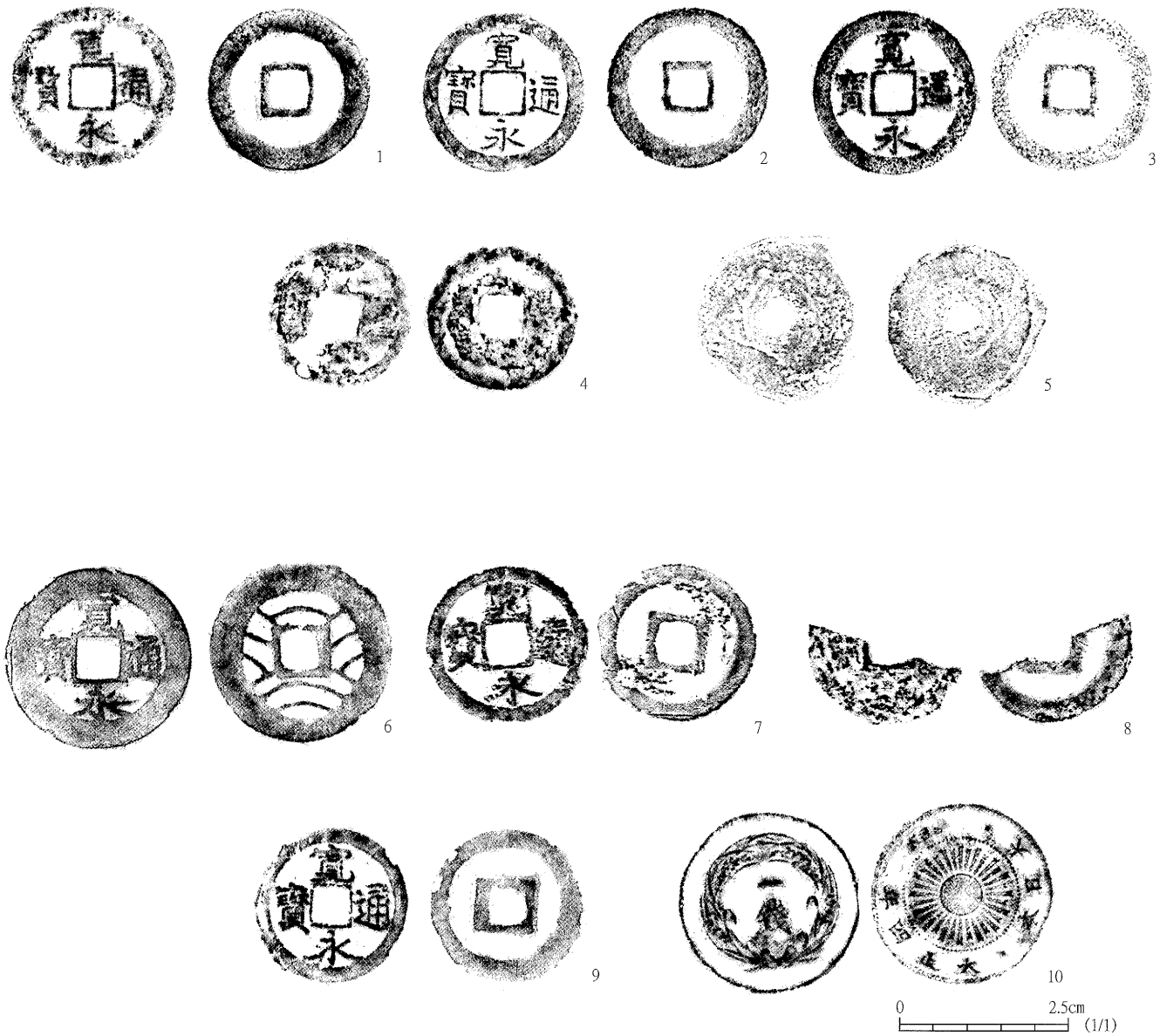
第32図　第23次調査出土瓦４・金属製品１（１～５：S=1/6　６～13：S=1/2）

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	文様	計測値（mm）	重量(g)	備　　考	写真
1	2117	熨斗瓦	3	Ⅰ	－	全長(100)　幅(118)　高さ(19)　厚み14　割線の深さ2	213	刻印あり　ヘラ状工具痕　胎土黒灰色　砂　表面が粗い	177
2	2110	熨斗瓦	3	Ⅲ	－	全長（123）　幅116　高さ27　厚み16　割線の深さ6	379	胎土黒灰色　砂白色粒子　上部面取り　ナデ　櫛目が一部にあり	179
3	1550	軒桟瓦	3	Ⅲ	二つ丁字巴	小巴部　瓦当径95　内区径71　周縁幅13　周縁深さ5　瓦当厚み18　垂れ部　内区高さ20　瓦当厚み14	441	榧森家の家紋　軒平部は細線の唐草文か　巽門跡に出土例あり　胎土灰色　砂礫含む	178
4	2137	軒丸瓦	3	Ⅲ	九曜	周縁幅24　周縁深さ6　瓦当厚み20	233	胎土灰色　砂黒色粒子	176
5	994	角桟瓦・左	3	KS-800・埋土	－	全長（119）　前幅（120）　厚み（19）	309	胎土灰色　砂礫　黒色粒子少量　裏面は木目痕（柾目状）	180

第24表　第23次調査出土瓦４観察表

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　　量（mm）	重量(g)	備　　考	写真
6	681	銃弾	1	撹乱	全長31　径6	7.6	近代　緑青（銅製か）	183
7	519	銃弾	1	Ⅱ	全長33　径7×6	7.93	近代　銅の合金か（少し緑青）　内部に白色物質充填	184
8	611	不明	1	Ⅲ	全長（13）　幅12	7.94	火箸頭部か　表面白い錆	185
9	1269	煙管	1	KS-746・埋土4	全長56	5.05	雁首（火皿欠損）　金色真鍮か	187
10	1089	煙管	1	KS-746・埋土4	全長68	8.52	雁首（火皿欠損）　金色真鍮か　（羅宇、竹材、茶色漆一部残存）	188
11	1091	煙管	1	KS-746・埋土2	全長65　火皿部16×16	7.98	雁首　表赤褐色　緑青でない　材質不明	189
12	1768	煙管	1	KS-746・埋土	全長58　火皿部16×15	6.11	雁首　金色真鍮　火皿と油返し間補修あり　油返しつなぎ目も補修あり　油返し中央部変形　火皿内面に炭化物付着	190
13	1769	不明	1	KS-746・埋土	全長200	9.77	灰汁掬いか　金色の針金を2本撚ったものを柄に巻きつけている　錆びてない　針金を巻いたところは銅線3本（元々1本）　銅線も錆びていない　円形の枠の部分は金色の針金で網がついている	186

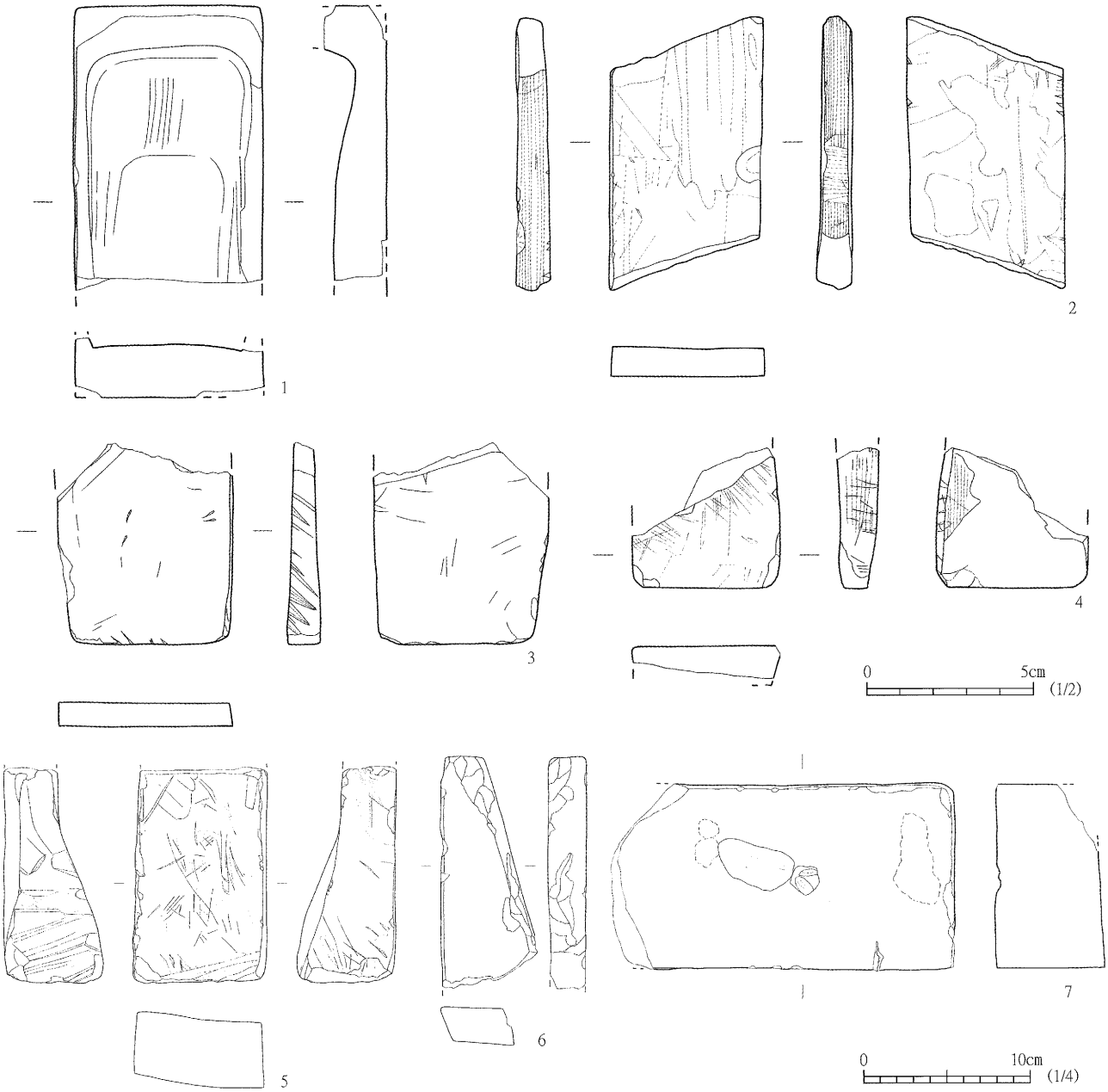
第25表　第23次調査出土金属製品１観察表



第33図　第23次調査出土金属製品２（S=1/1）

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量(g)	備　考	写真
1	1500	古銭	1	KS-746・埋土	外径25.0　穿径5.7	3.59	寛永通宝（新寛永）	191
2	1701	古銭	1	KS-746・埋土	外径25.0　穿径5.7	3.09	寛永通宝（新寛永）	192
3	1499	古銭	1	KS-746・埋土4	外径25.0　穿径5.7	4.23	寛永通宝（新寛永）	193
4	1088	古銭	1	KS-746・埋土4	外径22.6　穿径5.7	1.1	寛永通宝（新寛永）	194
5	1086	古銭	1	KS-746・埋土4	外径24.0　穿径5.6	1.08	煙管をつぶした銭貨　雁首銭	195
6	553	古銭	1	KS-681・南壁	外径28.3　穿径5.7	3.35	四文銭　正字　波　明和6年（1769）	196
7	313	古銭	1	Ⅲ	外径25.0　穿径5.7	2.75	寛永通宝（古寛永）	197
8	985	古銭	1	Ⅳ	外径25.0	0.95	寛永通宝（古寛永）	198
9	499	古銭	1	Ⅲ	外径24.0　穿径5.5	2.31	寛永通宝（新寛永）	199
10	422	古銭	1	Ⅱ下部	外径27.8	6.41	稲一銭　大正4年（1917）	200

第26表　第23次調査出土金属製品２観察表



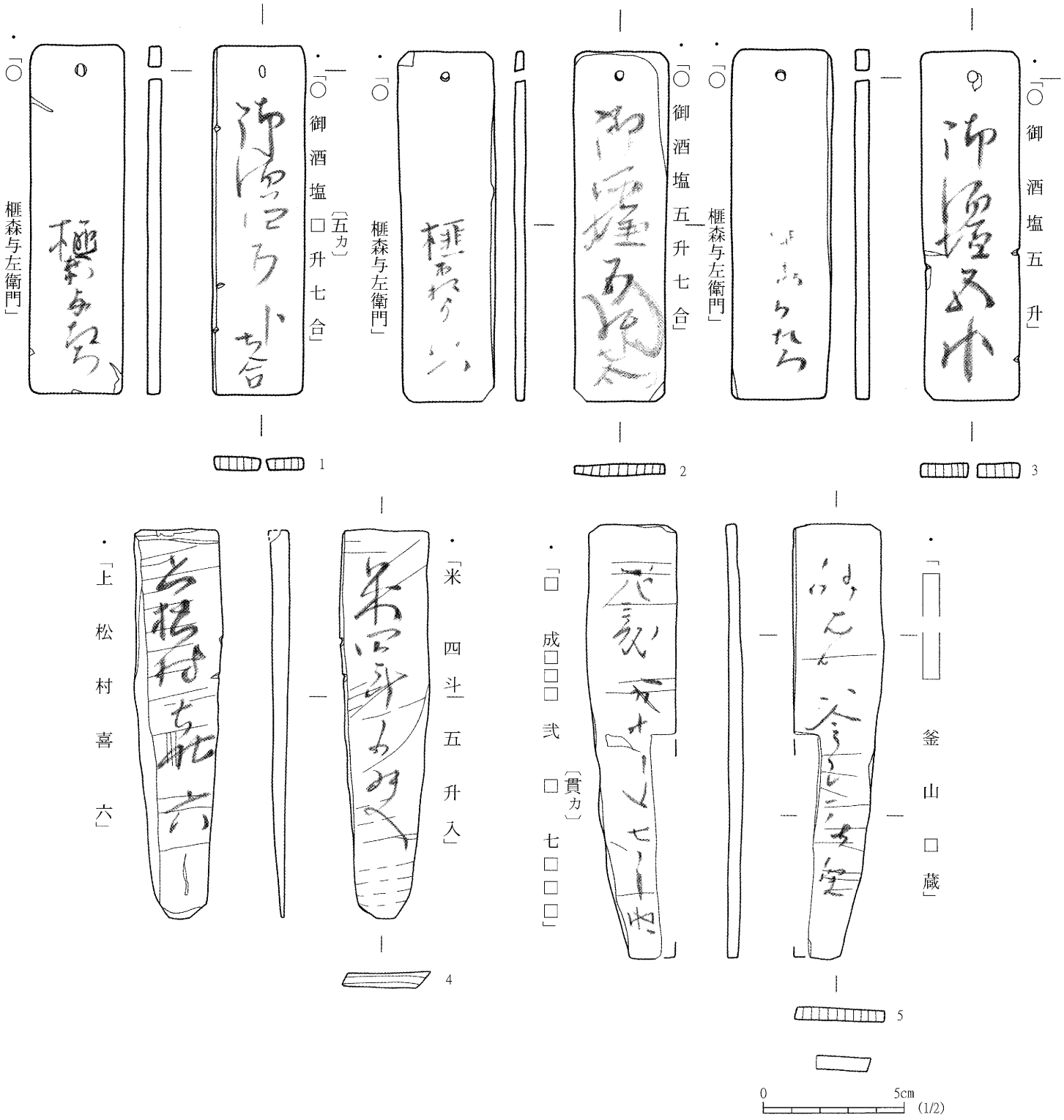
第34図　第23次調査出土石製品・レンガ（1～4：S=1/2　5～7：S=1/4）

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量(g)	備　考	写真
1	1657	硯	I	KS-682・埋土	全長87　幅57　厚さ19	117.56		206
2	1161	砥石	I	KS-746・埋土	全長68　幅47　厚さ10	62.29		205
3	1271	砥石	I	KS-746・埋土4	全長62　幅53　厚さ8	53.95		207
4	972	砥石	I	KS-768・埋土	全長43　幅45	25.51		209
5	1950	砥石	I	KS-782・埋土	全長132　幅59　厚さ41	840		210
6	764	砥石	I	I	全長142　幅58　厚さ22	190.68	瓦（平瓦）瓦転用砥石　トーンは使用面すり面	211

第27表　第23次調査出土石製品観察表

図	遺物番号	種　別	器　種	区	遺構・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	備　考	写真
7	634	その他	レンガ	I	KS-680・工房跡直上	113	(209)	66	台石か　使用痕あり　2号炉跡の脇　炭層1の中　鍛冶工房関連　19c後半	362

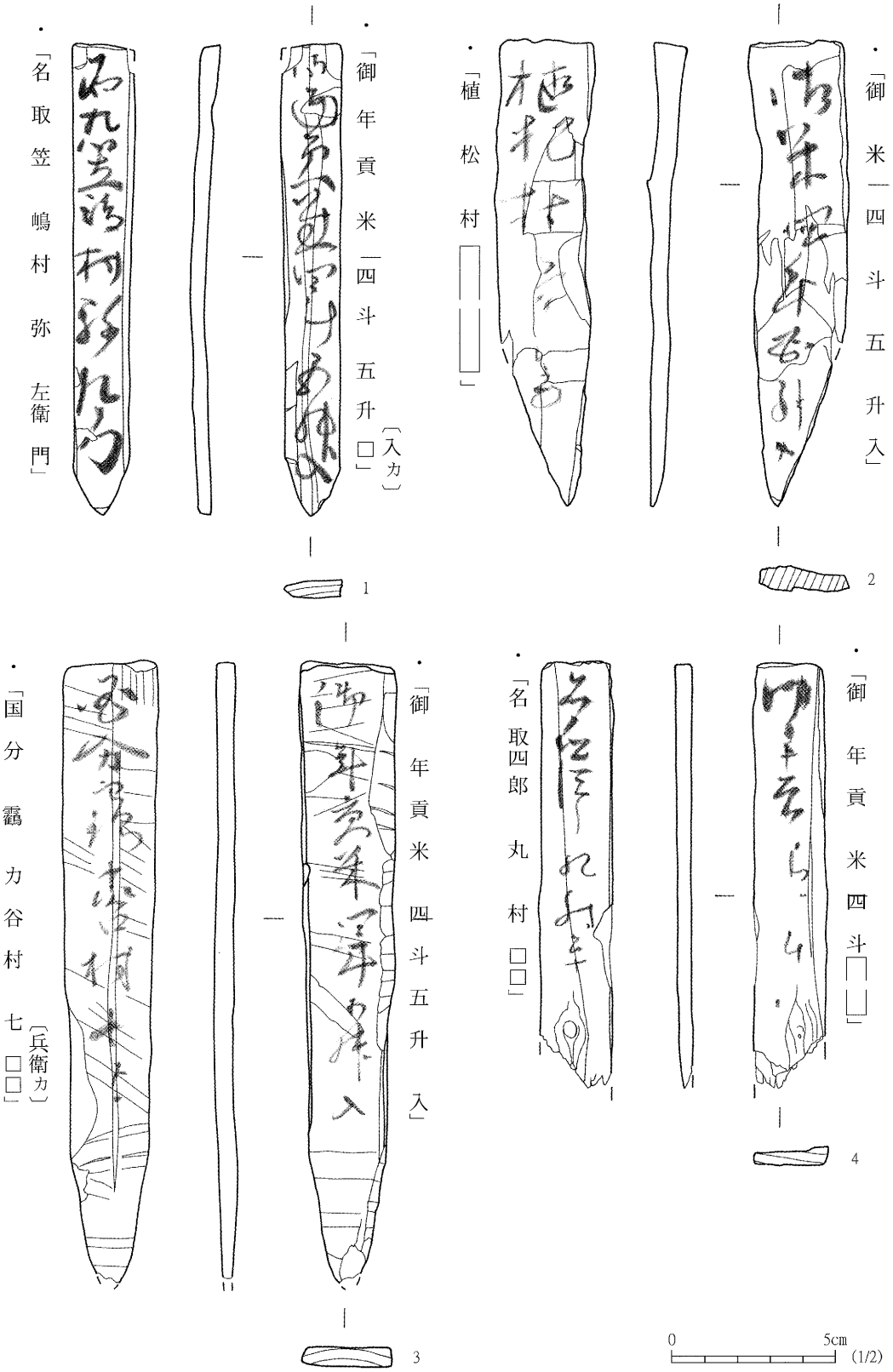
第28表　第23次調査出土レンガ観察表



第35図　第23次調査出土木簡１（S=1/2）

図	遺物番号	区	遺構・層位	型式	孔	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	記載事項（表）	記載事項（裏）	樹種	備考	写真
1	1776	1	KS-746・埋土	011	中央	101	26	3.5	・「○御酒塩□〔五ヵ〕升七合」	・「○樋森与左衛門」	スギ	Ⅰ類	212
2	1777	1	KS-746・埋土4	011	中央	101	26	3	・「○御酒塩五升七合」	・「○樋森与左衛門」	スギ	Ⅰ類	213
3	1778	1	KS-746・埋土4	011	中央	101	28	4.5	・「○御酒塩五升」	・「○樋森与左衛門」	スギ	Ⅰ類	214
4	1779	1	KS-746・埋土4	051		140	30	6	・「米四斗五升入」	・「上松村　喜六」	スギ	Ⅱ類　正しくは植松村	215
5	1780	1	KS-746・埋土	019		157	32	5	・「□　□　釜山□蔵」	・「□成□□□弐□〔貫ヵ〕七□□□」	スギ	Ⅲ類	216

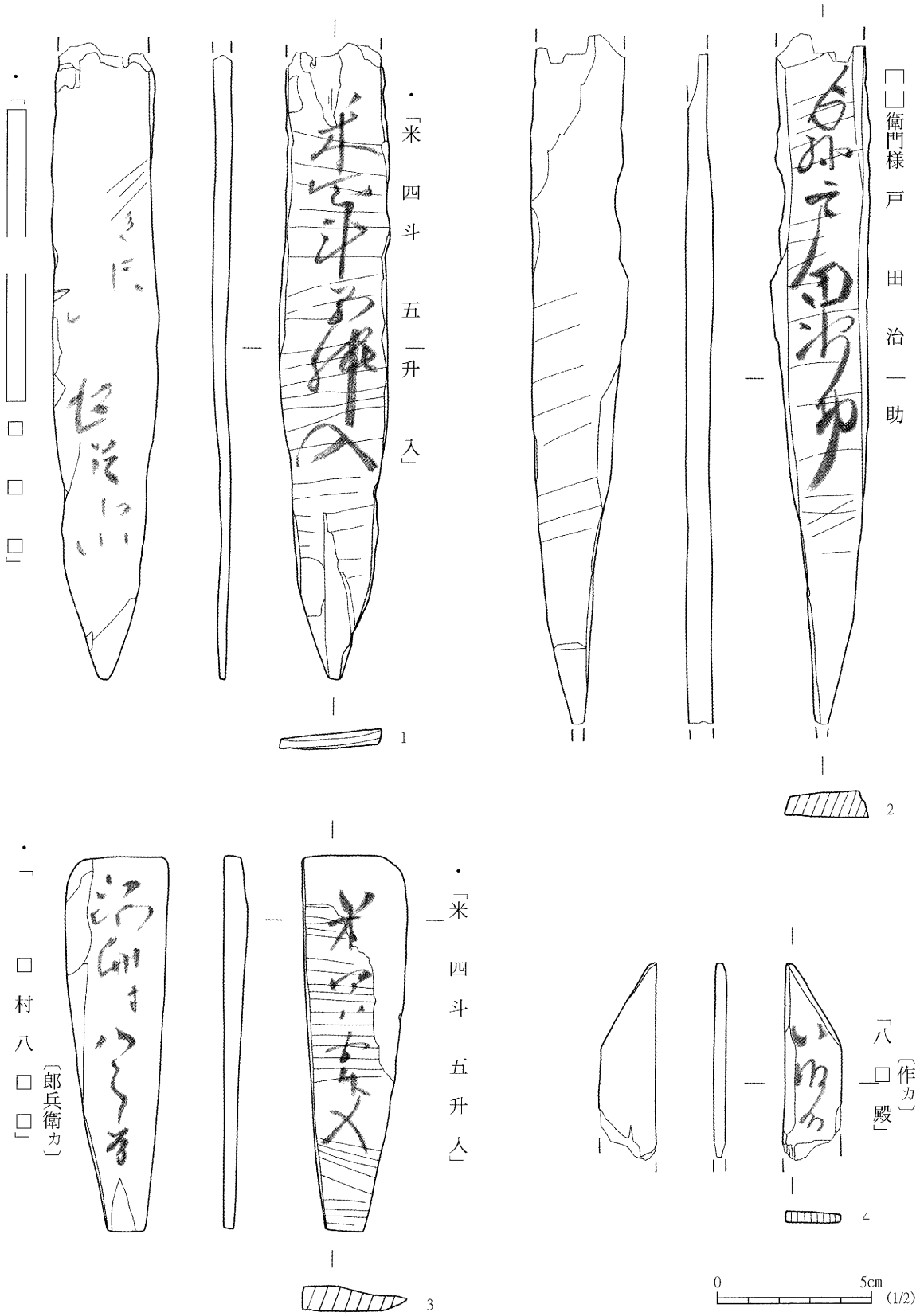
第29表　第23次調査出土木簡１観察表



第36図　第23次調査出土木簡２（S=1/2）

図	遺物番号	区	遺構・層位	型式	孔	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	記載事項（表）	記載事項（裏）	樹種	備考	写真
1	1782	1	KS-746・埋土4	059		146	18	5.9	・「御年貢米四斗五升□〔入ヵ〕」	・「名取　笠嶋村　弥左衛門」	スギ	Ⅱ類	217
2	1789	1	KS-746・東壁	051		145	29	9.9	・「御米四斗五升□〔入ヵ〕」	・「植松村　□　□」	スギ	Ⅱ類	220
3	1792	1	KS-746・埋土4	019		(193)	29	6	・「御年貢米四斗五升入」	・「国分靏力谷村　七□□〔兵衛ヵ〕」	スギ	Ⅱ類	218
4	1790	1	KS-746・東壁	019		(132)	22	6.2	・「御年貢米四斗□　□」	・「名取　四郎丸村　□□」	スギ	Ⅱ類	219

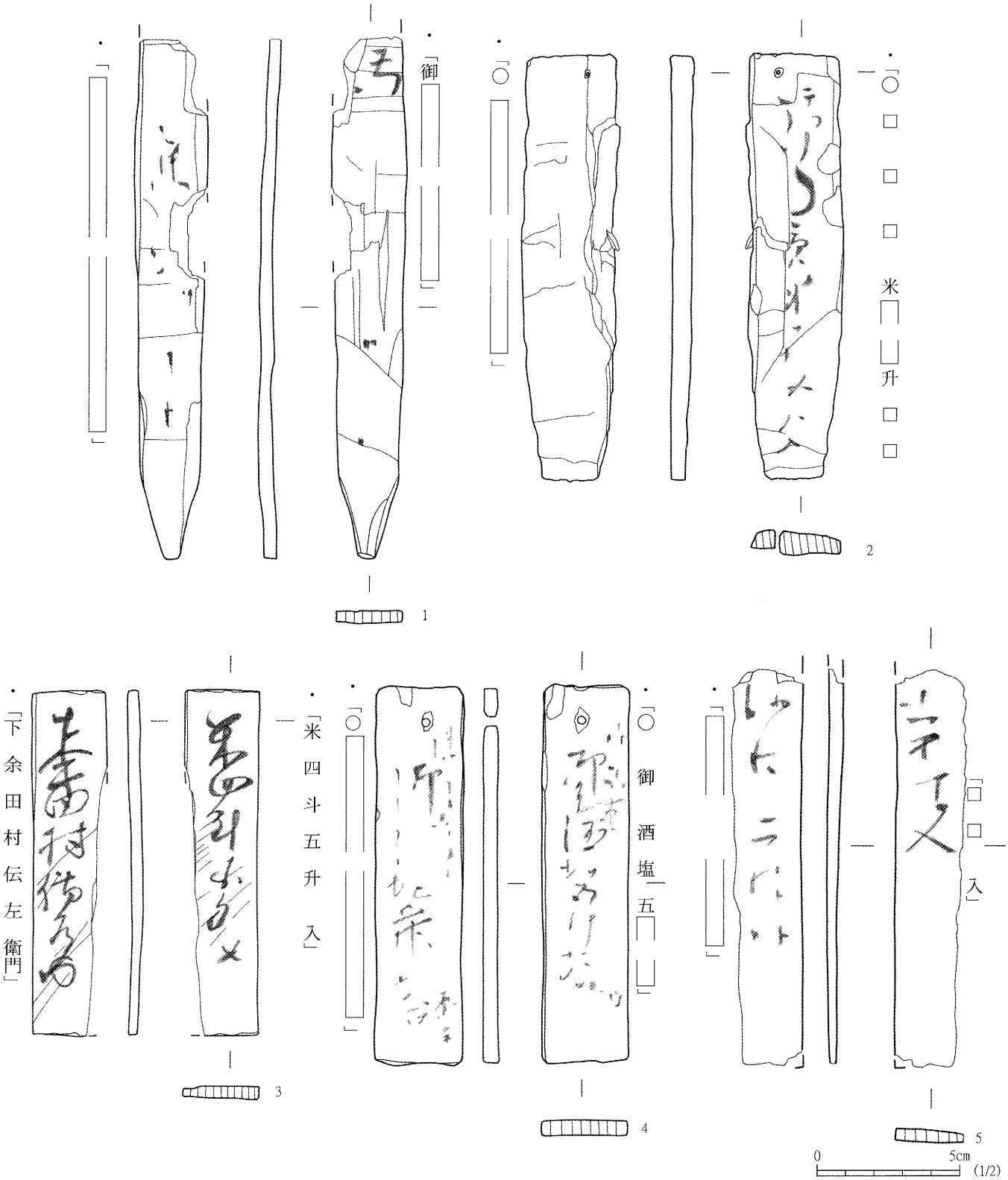
第30表　第23次調査出土木簡２観察表



第37図　第23次調査出土木簡３（S=1/2）

図	遺物番号	区	遺構・層位	型式	孔	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	記載事項（表）	記載事項（裏）	樹種	備考	写真
1	1791	1	KS-746・埋土4	059		(211)	35	6	・「米四斗五升入」	・「□□□□□」	スギ	Ⅱ類	221
2	1796	1	KS-746・埋土	081		(299)	31	9	□□□衛門様　戸田治助		スギ	Ⅲ類	222
3	1795	1	KS-746・埋土4	011		125	33	8	・「米四斗五升入」	・「□村八□□〔郎兵衛カ〕」	スギ	Ⅱ類	227
4	1916	1	KS-746・埋土4	059		(66)	18	3.8	「八□〔作カ〕殿」		針葉樹	Ⅲ類	234

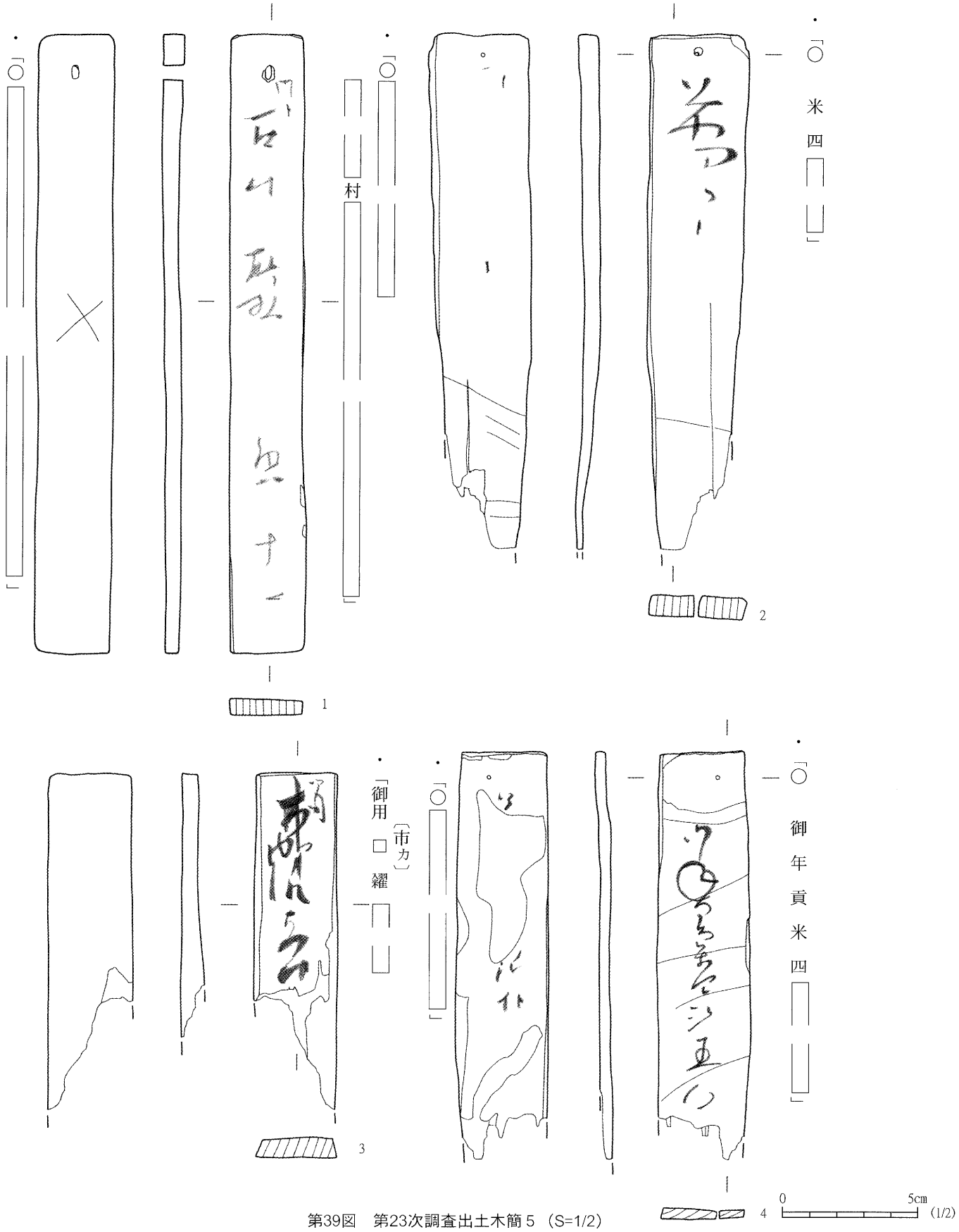
第31表　第23次調査出土木簡３観察表



第38図　第23次調査出土木簡４（S=1/2）

図	遺物番号	区	遺構・層位	型式	孔	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	記載事項（表）	記載事項（裏）	樹種	備考	写真
1	1793	1	KS-746・埋土4	059		(184)	26	6	・「御□□」	・「□□」	針葉樹	Ⅲ類	224
2	1799	1	KS-746・埋土	019	中央	152	32	8.3	・「○□□□米□□升□□	・「○□□」	スギ	Ⅱ類	231
3	1922	1	KS-746・埋土4	011		123	26	4	・「米四斗五升入」	・「下余田村　伝左衛門」	スギ	Ⅱ類	228
4	1943	1	KS-746・埋土4	011	中央	135	30	5.6	・「○御酒塩五□□」	・「○□□」	スギ	Ⅰ類	229
5	1960	1	KS-746・埋土4	081		(113)	(20)	4	「□□入」	「□□」	スギ	Ⅲ類	230

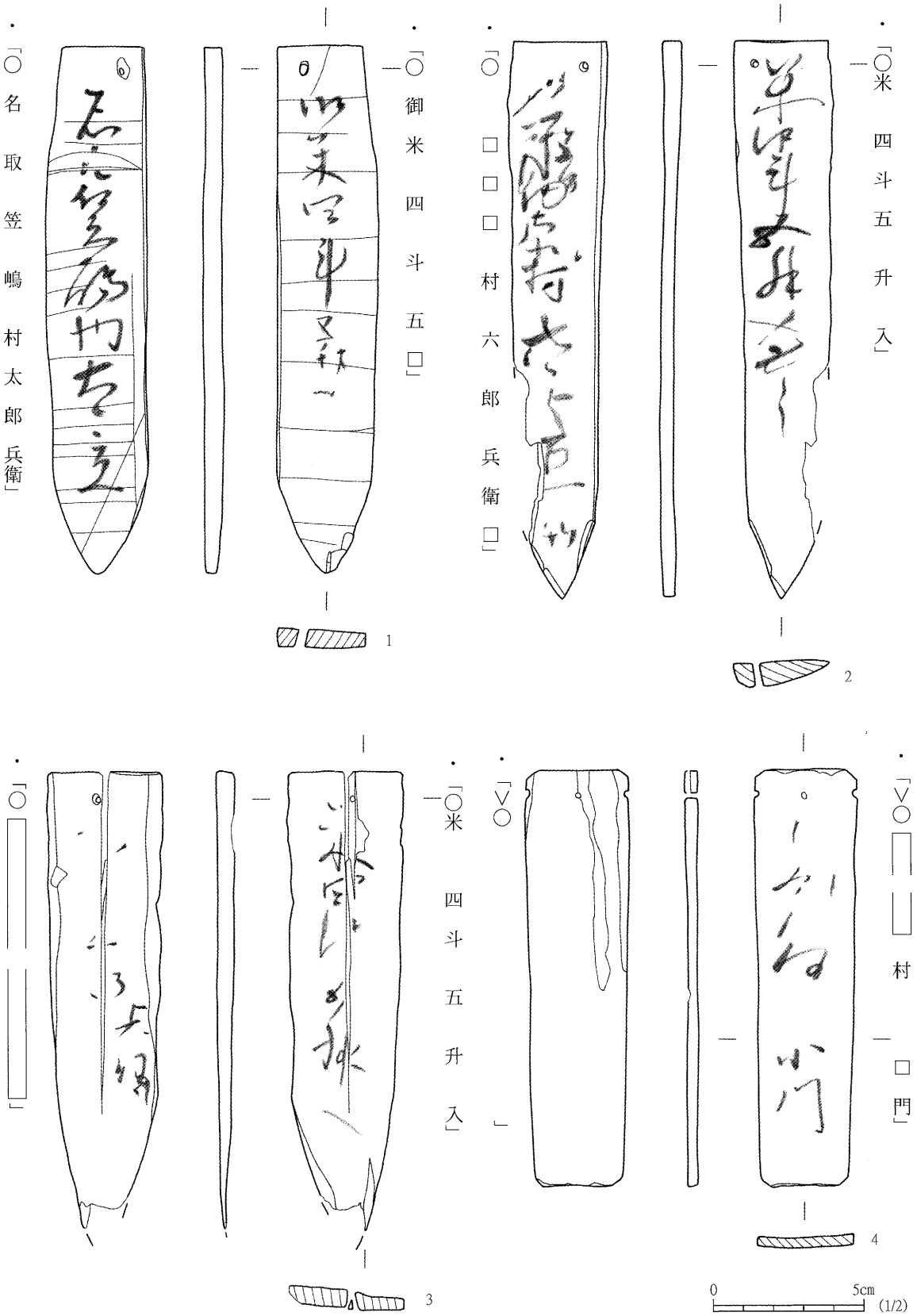
第32表　第23次調査出土木簡４観察表



第39図　第23次調査出土木簡５（S=1/2）

図	遺物番号	区	遺構・層位	型式	孔	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	記載事項（表）	記載事項（裏）	樹種	備考	写真
1	1914	1	KS-746・埋土4	011	中央	232	28	8	・「○□□村□□」	・「○□□」	スギ	Ⅲ類　×の線刻	223
2	1800	1	KS-746・埋土	019	中央	(193)	37	8	・「○米四□□」	・「○□□」	スギ	Ⅱ類	225
3	1917	1	KS-746・埋土4	019		(127)	30	8	・「御用　□〔市ヵ〕糴		スギ	Ⅲ類	233
4	1923	1	KS-746・埋土4	019	中央	(153)	34	5	・「○御年貢米四□□」	・「○□□」	スギ	Ⅱ類	232

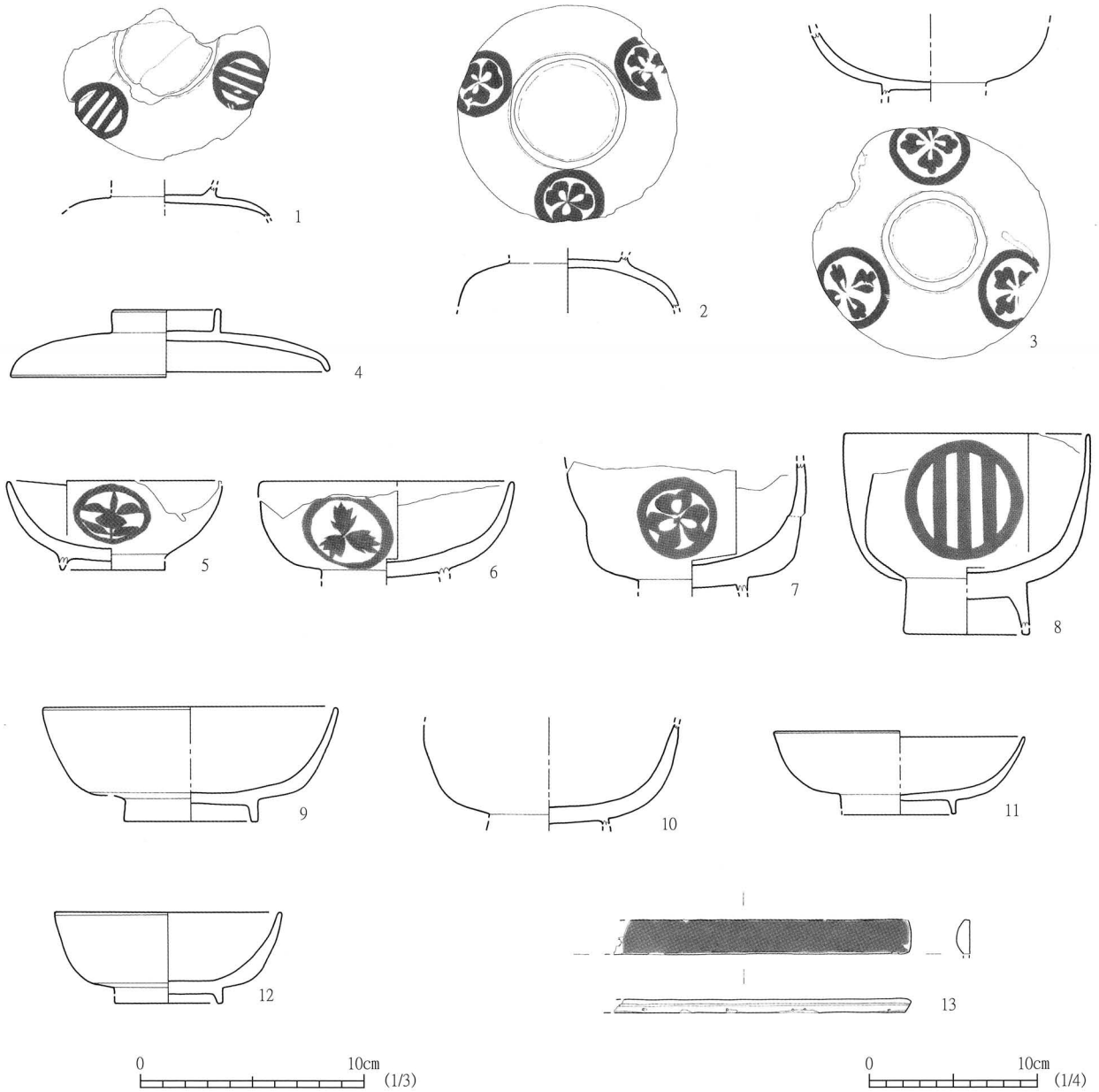
第33表　第23次調査出土木簡５観察表



第40図　第23次調査出土木簡６（S=1/2）

図	遺物番号	区	遺構・層位	型式	孔	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	記載事項（表）	記載事項（裏）	樹種	備考	写真
1	1919	1	KS-746・埋土4	051	横	176	33	6.9	・「○御米四斗五□」	・「○名取　笠嶋村　太郎兵衛」	スギ	Ⅱ類	237
2	1920	1	KS-746・埋土4	051	横	137	32	8	・「○米四斗五升入」	・「○□□□村　六郎兵衛□」	スギ	Ⅱ類	226
3	1944	1	KS-746・埋土4	019	中央	153	38	6	・「○米四斗五升入」	・「○□　□」	スギ	Ⅱ類　裏面　文字2行　不明	235
4	1948	1	KS-746・埋土4	032	中央	109	34	3.6	・「V○□　□村」	・「V○　」	スギ	Ⅲ類	236

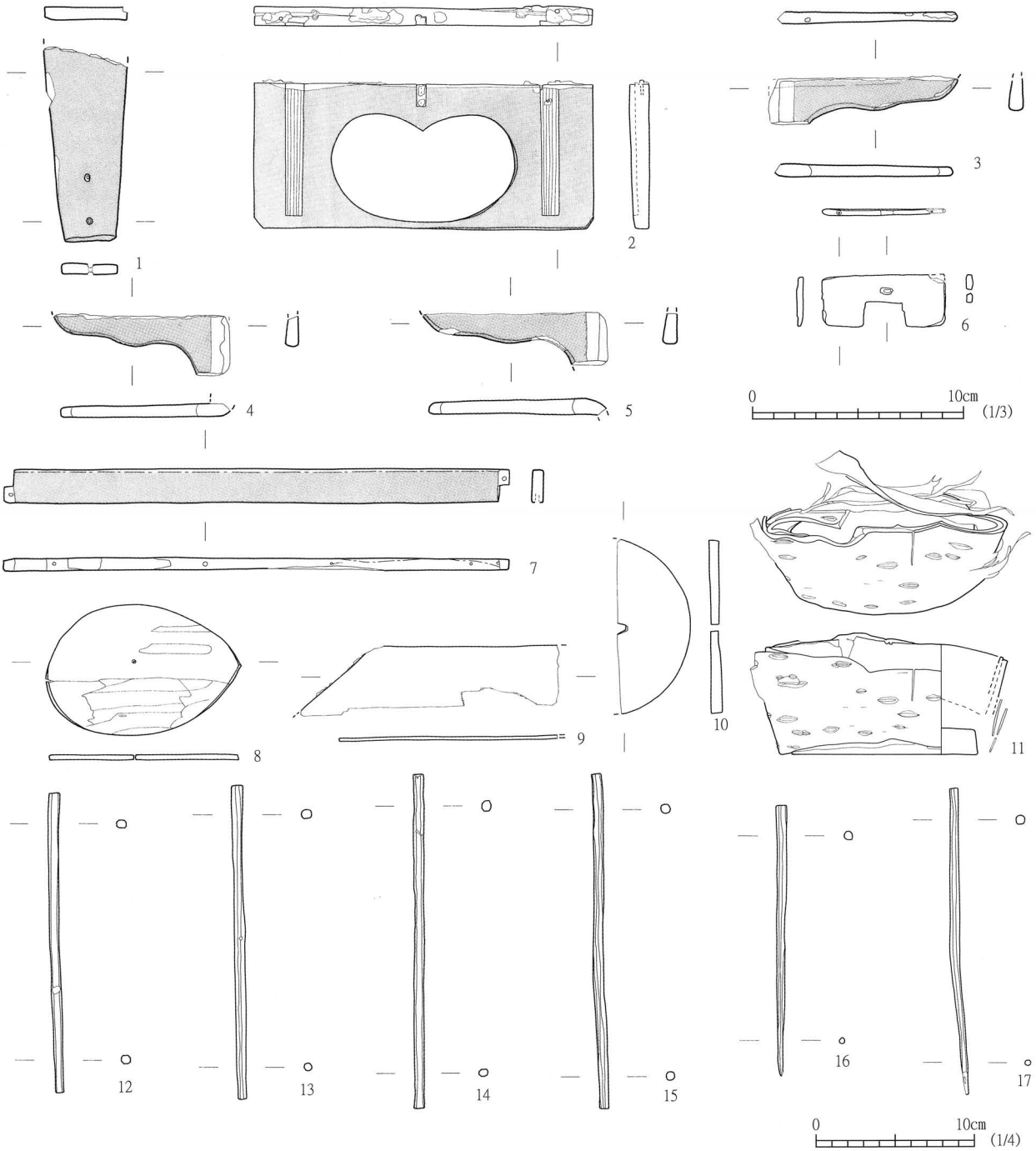
第34表　第23次調査出土木簡６観察表



第41図　第23次調査出土木製品１（１～12：S=1/3　13：S=1/4）

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	備　考	写真
1	2317	漆器（蓋）	1	KS-746・埋土	口径（90）　器高（12）　厚さ3	椀の蓋　外に黒漆地に竪三引両紋（赤色漆）3箇所か（伊達家家紋）　内赤色漆　口縁部約3分の1欠損	238
2	2310	漆器（蓋）	1	KS-746・埋土4	口径（98）　器高（23）　厚さ4	丸に片喰（3箇所）　腰張りタイプ　外黒漆赤色漆文様　内赤色漆　口縁部、高台部欠損	239
3	1988	漆器（椀蓋）	1	KS-746・埋土4	口径（106）　器高（29）　底径47　厚さ4	外黒漆　内赤色漆　外に丸に木瓜（もっこう）文様3ヶ所　口縁部、高台部欠損	240
4	1971	漆器（蓋）	1	KS-746・埋土4	口径143　器高30　底径49	椀蓋（煮物椀か）大型品　内外赤色漆　口縁、畳付が黒色漆　口縁部一部欠損　ヒビ割れのため歪み　全体に汚れ	241
5	1972	漆器（汁椀）	1	KS-746・埋土4	口径（96）　器高（38）　底径（47）	丸に橘文3箇所　外は黒漆地に赤色漆文様　内は赤色漆　口唇部黒漆　高台残存部は黒漆　汁椀か　小型品吸い物椀の蓋かも　壷椀の蓋の可能性	242
6	1975	漆器（汁椀）	1	KS-746・埋土4	口径（114）　器高（44）　底径（57）	大ぶりの汁椀　浅いようだが蓋の可能性はないか　丸に三つ柏紋(3箇所)　口縁部高台欠損　外面・黒漆地に赤色漆文様　内面・赤色漆　口唇部も黒漆　底厚い	244
7	2309	漆器（飯椀）	1	KS-746・埋土4	口径(107～)　器高(58～)　底径(49～)	丸に片喰文　_椀か　腰張りタイプ　外面は黒地に赤色漆文様　内面は赤色漆　口縁部と高台部欠損　体部裂け（亀裂）　歪み	243
8	2316	漆器（飯椀）	1	KS-746・埋土	口径（110）　器高（90）	三引両文　3ヶ所に三引両文がある　外面に黒地に赤色漆の家紋（伊達家）　内面に赤色漆　高台部椀部歪み　亀裂あり　口縁部欠損　口唇部黒色漆	245
9	1994	漆器（腰折椀）	1	KS-746・埋土	口径（132）　器高52　底径60	大ぶり　内外面とも赤色漆（くすんだ赤色）　高台畳付と口唇部黒漆　一文字腰椀（煮物用か）（破片6点）	246
10	1993	漆器（汁椀）	1	KS-746・埋土3	口径（113）　器高（45）　厚さ8	外は緑色漆（黒っぽく変色）　口縁部、高台腰部の一部欠損　体部亀裂あり　口唇・高台内黒漆　漆剥がれあり	247
11	1987	漆器（汁椀）	1	KS-746・埋土4	口径（112）　器高（34）　厚さ4	椀　外緑色漆（黒っぽい）　内赤色漆　口唇部、つまみ部先端、口縁、畳付は黒漆　口縁部欠損　体部に穴があいている	248
12	2256	漆器（腰折椀）	1	KS-746・埋土4	口径103　器高41　底径48	腰折椀　内外赤色漆　残り良好	249
13	1992	漆器	1	KS-746・東壁	全長(178)　幅（21）　厚さ8	竹材か　両面赤色漆　側面一面黒漆　上端黒漆塗り　膳の部材か　木釘5つ	251

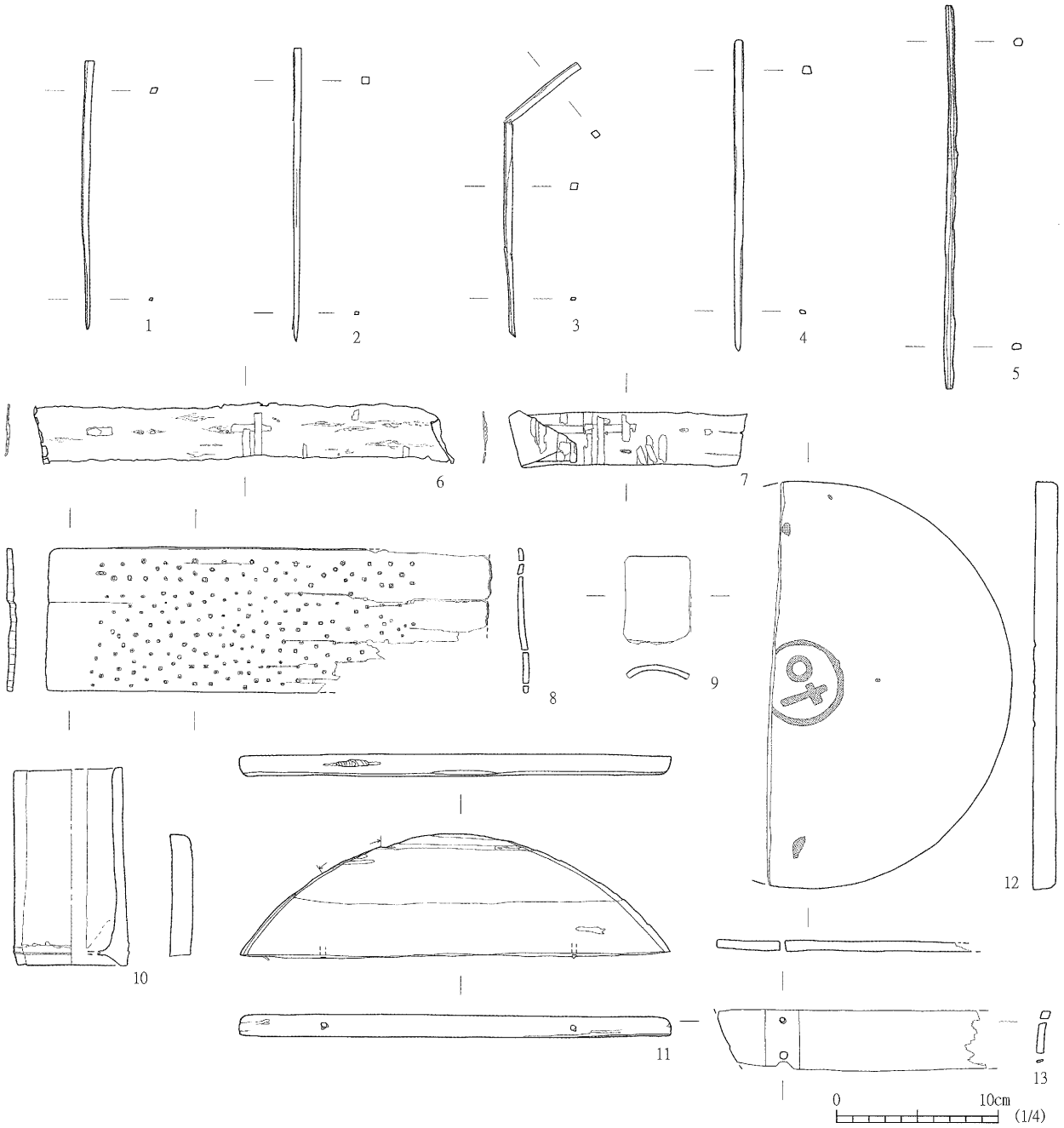
第35表　第23次調査出土木製品１観察表



第42図　第23次調査出土木製品２（１、３～５、７：S=1/3　２、６、８～17：S=1/4）

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	備　考	写真
1	1977	漆器（板材）	1	KS-746・埋土	全長(92)　幅(41)　厚さ6	表側の3面に黒漆　(柿渋の可能性あり)　薄く光沢がない　釘穴2個（釘残存）　柾目	250
2	1982	漆器（膳の脚）	1	KS-746・埋土4	全長92　幅215　厚さ10～12	膳の脚か　接合面となる上端面では木釘穴、付着物（接着剤か）あり　表面は光沢のない黒色塗　面取り　はめ込み	252
3	1989	漆器（膳の脚）	1	KS-746・埋土4	全長90　幅(22)　厚さ6	膳脚部の部材　両面面取り　黒漆、一部剥離　木釘1つ　接着剤付着　№1990・1991と同一の膳の部材か	253
4	1990	漆器（膳の脚）	1	KS-746・埋土4	全長83　幅(29)　厚さ6	膳脚部の部材 両面面取り 黒漆、一部剥離　上端部欠損 №1989・1991と同一の膳の部材か	254
5	1991	漆器（膳の脚）	1	KS-746・埋土4	全長88　幅25　厚さ8	膳脚部の部材　両面面取り　黒漆、一部剥離　接合面調整痕あり　上端剥離（面残ってない）　№1989・1990と同一の膳の部材か	255
6	1798	膳	1	KS-746・埋土	全長34　幅78　厚さ4	小型膳の脚　中央に穴　木釘2つ　縁辺磨耗	275
7	2175	膳(側板)	1	KS-746・埋土	全長239　幅16　厚さ5	口縁端部黒漆　上端黒漆塗り　両側面柿渋か(茶色)　接合部木釘6つ　柾目材　切り込みのある塗りの板	256
8	2260	不明	1	KS-746・埋土4	全長83　幅123　厚さ(3～4)	容器の天板か　中央部に有孔1つ　楕円形板　柾目材　穴はつまみ用か　中央で分離後片側は剥離痕（削りか）あり	276
9	2224	曲物	1	KS-746・埋土	全長163　幅39　厚さ2	側板　柾目材　切り込みラインあり　欠損部あり	277
10	1797	板材	1	KS-746・埋土	全長111　幅(46)　厚さ7	有孔円板（用途不明）　推定直径112mm　柾目材　容器天板か	278
11	2341	樹皮容器	1	KS-747・埋土	口径(160)　器高(68)　底径120×66　厚み15	弁当箱か　楕円形　柾目材　桜皮(綴じ目を確認できず)　二重巻き	279
12	2294	箸	1	KS-746・埋土4	全長190　幅7　厚さ5.7	丸形　多角形面取り　短いタイプ	275
13	2297	箸	1	KS-746・埋土4	全長199　幅7　厚さ5.5	丸形　多角形面取り　短いタイプ	275
14	2289	箸	1	KS-746・埋土4	全長214　幅6　厚さ6.5	丸形　多角形面取り　長いタイプ	275
15	2292	箸	1	KS-746・埋土4	全長214　幅7　厚さ6	丸形　多角形面取り　長いタイプ	275
16	2186	箸	1	KS-747・埋土	全長173　幅6　厚さ5.2	丸形　先細　多面形面取り	276
17	2187	箸	1	KS-746・埋土	全長195　幅6　厚さ5.5	丸形で先端が尖り、コゲあり	277

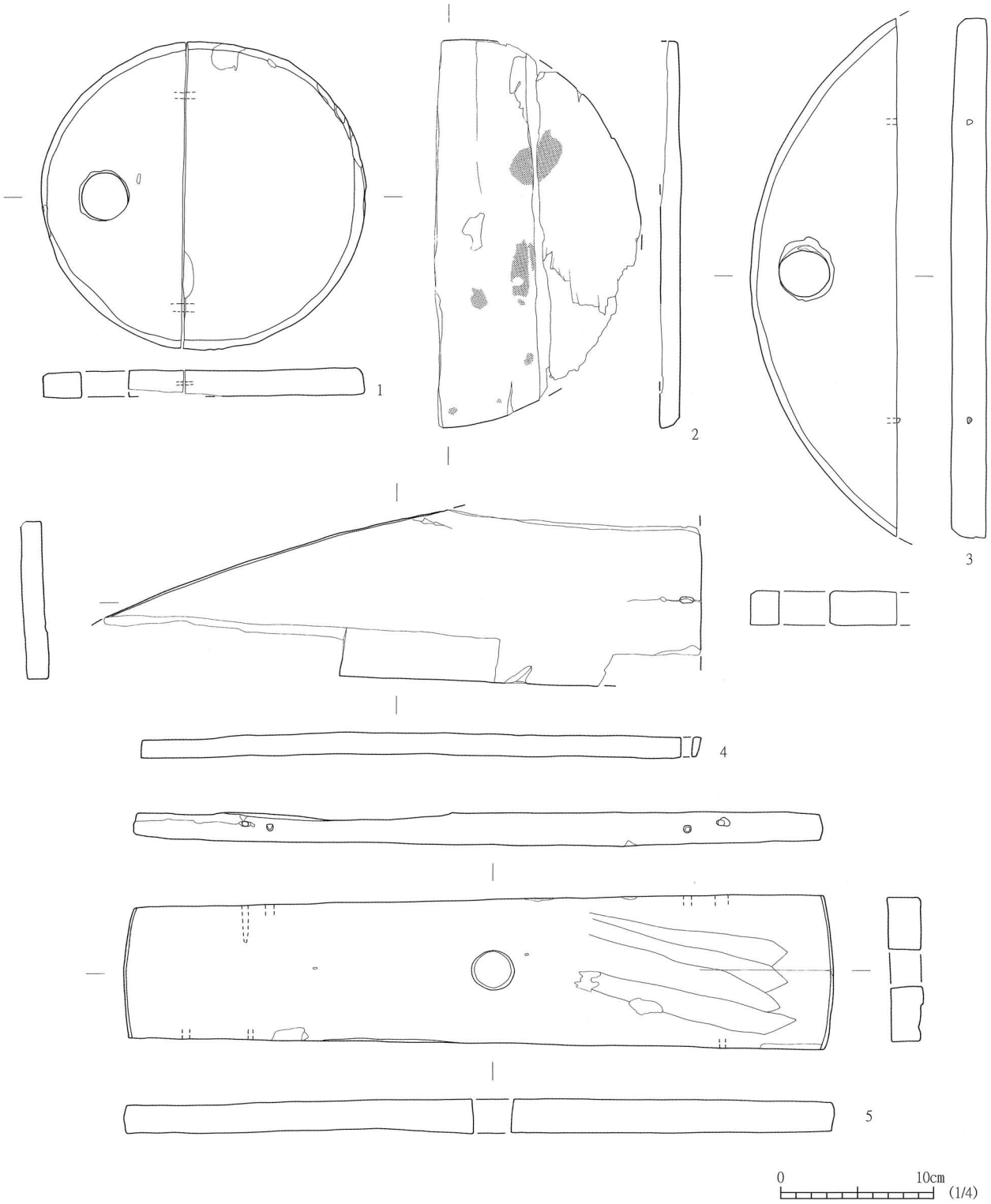
第36表　第23次調査出土木製品２観察表



第43図　第23次調査出土木製品３（S=1/4）

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（㎜）	備　考	写真
1	2279	箸	1	KS-746・埋土4	全長168　幅5　厚さ4	角形先細	278
2	2262	箸	1	KS-746・埋土4	全長183　幅5　厚さ4	角形先細　2箇所剥離している　中央部に面取りか	279
3	2278	箸	1	KS-746・埋土4	全長(189)　幅5　厚さ4.5	角形先細　2箇所に折れ	280
4	2332	箸	1	KS-746・埋土4	全長194　幅5.8　厚さ4.5	角形先細	281
5	1986	漆器（箸）	1	KS-746・埋土4	全長238	塗箸　赤色漆（トーン部分）と茶色漆の塗り分け　円柱状の箸（面取りあり）　断面扁平になっている方が先端か（つぶれて断面が変形している所あり）	282
6	2249	樹皮	1	KS-746・埋土4	全長261　幅33　厚さ0.7～2	籠の内側に貼ったとみられる樹皮　籠材付着　末端カールしている	283
7	2249	樹皮	1	KS-746・埋土4	全長148　幅32　厚さ0.5～1.8	籠の内側に貼ったとみられる樹皮　籠材付着　折り曲げたたんでいる　ヒゴ材が中に入り込んでいる	283
8	2334	蒸し器（蒸籠）	1	KS-746・埋土4	全長276　幅90　厚さ4	柾目材の薄い板での蒸し器　箱蒸籠の底板か　側板に計193個の穴あり　両端に穴の開かない部分あり　裏面に焦げ目あり（外側か）	285
9	2227	小型容器	1	KS-746・埋土4	全長55　幅40　厚さ4	柄杓か　柾目材　楕円形か	284
10	2183	竹製品	1	KS-746・埋土4	口径(68)　器高123　底径68	灰落としか　3点同一個体　フシあり（欠損）	286
11	2339	蓋か	1	KS-746・埋土	全長(267)　幅(76)　厚さ14	桶か　柾目材　2枚以上の組物　断面狭い面取り　斗形　片面黒く変色　直径約32cm　木釘1つ　釘穴1つ　ヒビ割れあり　裂け目の修理痕あり	287
12	2338	蓋	1	KS-746・埋土	直径252　厚さ14.5	樽蓋か　1枚もの約3分の1欠損　表中央○に「叶」の焼印　断面斗形　面取り狭い(磨耗)　「叶」焼印は市内の店名か　裏面はキズ多し	289
13	2223	蓋	1	KS-746・埋土	全長(163)　幅37　厚さ5	桶側板の転用か　柾目材　桟材痕跡（白っぽい）釘穴2つ　湾曲している	288

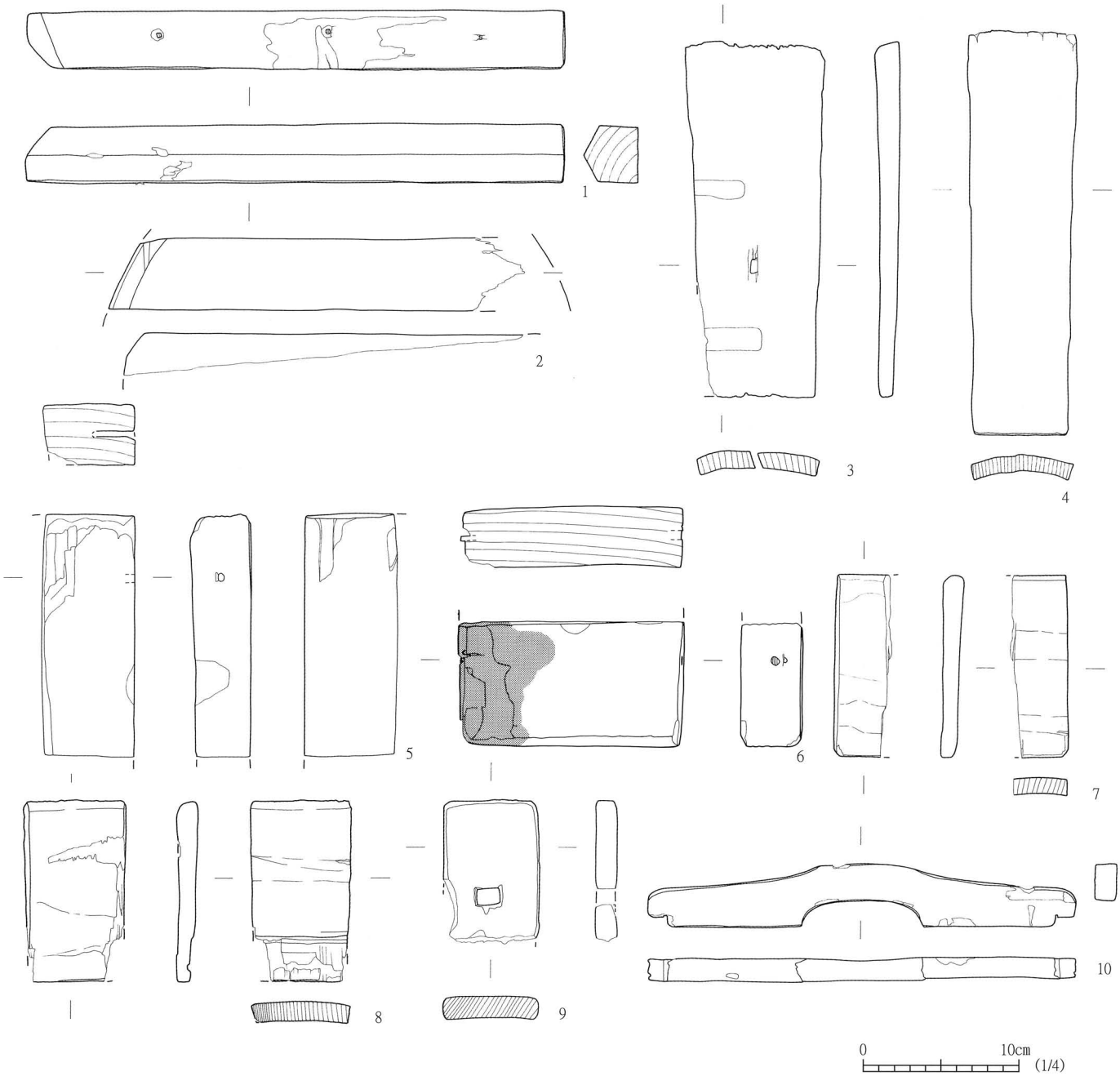
第37表　第23次調査出土木製品３観察表



第44図　第23次調査出土木製品４（S=1/4）

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　　量（mm）	備　　考	写真
1	2337	蓋（樽）	1	KS-746・埋土4	全長207　幅213　厚さ18　直径(208)　孔直径32	木釘2つ　縁辺上部面取り（斗形）　蓋2枚組　2枚の板はいずれも板目材	290
2	2171	蓋か	1	KS-796・埋土	全長258　幅(136)　厚さ13	柾目材（フシあり）　断面斗形か　木質部非常に柔らかい　表面にコゲ目あり（網点部分は炭化）	291
3	2336	蓋（樽）	1	KS-746・埋土4	全長(348)　幅(96)　厚さ23　径(420)　孔直径35	板目材　部材2枚以上　穴の直径35　木釘1つ　木釘穴1つ　面取り断面斗形　裏面（内側か）黒色塗料（柿渋か、光沢なし）	292
4	2275	蓋（大桶）	1	KS-746・埋土	全長(394)　幅(118)　厚さ14　直径(215)	直径約215cm　釘穴1つ　柾目材　5尺あるいは6尺桶か　切り込み加工あり　片面黒色柿渋塗り	293
5	2267	蓋か	1	KS-746・埋土	直径469　幅(104)　厚さ22　孔直径24	円孔あり　両側面面取り　釘穴7つ　断面算盤玉状　コシキの底板か	297

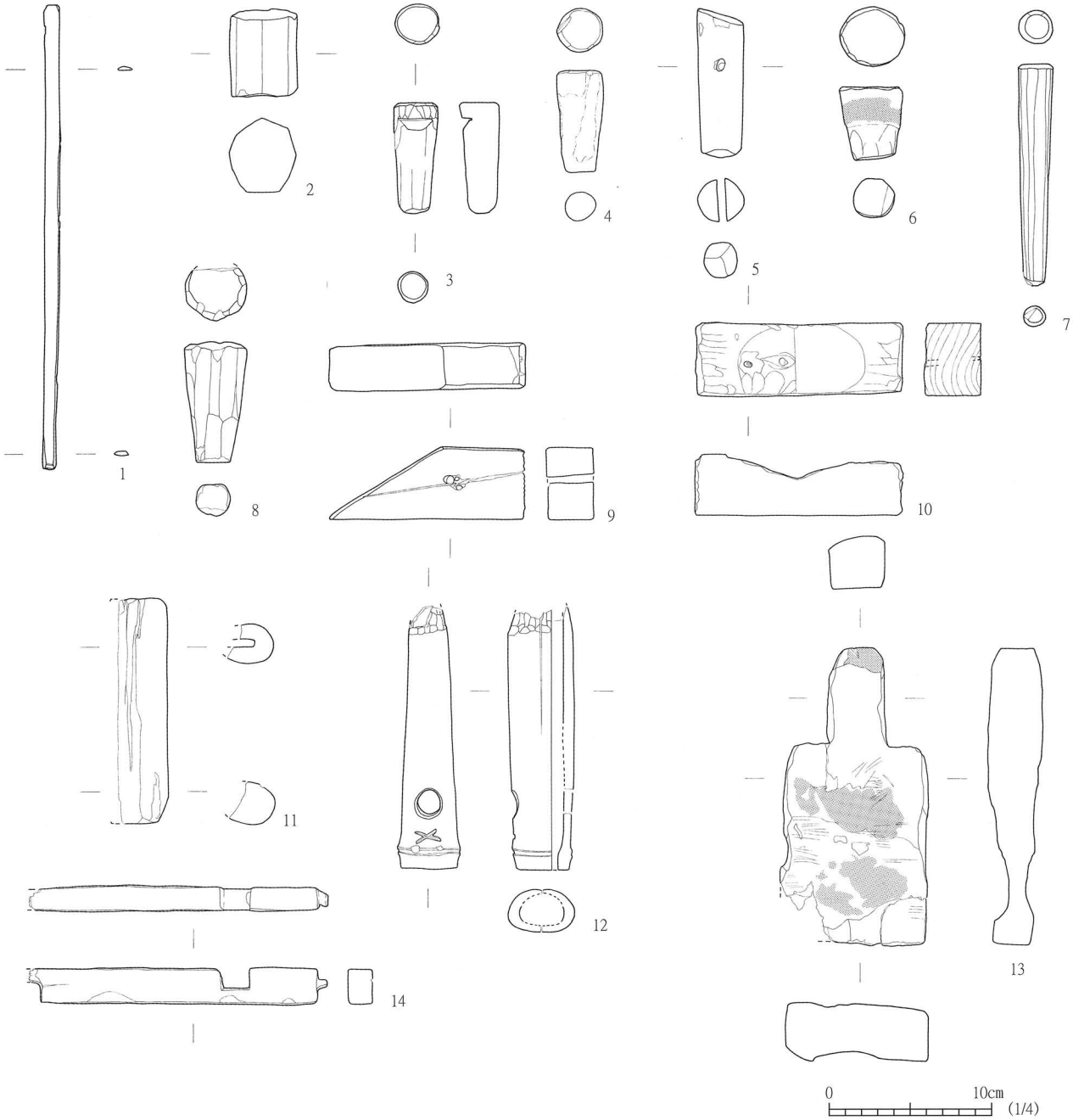
第38表　第23次調査出土木製品４観察表



第45図　第23次調査出土木製品５（S=1/4）

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	備　考	写真
1	2258	角材	1	KS-746・埋土4	全長344　幅37　厚さ35	断面五角形　一方の端部は孤状を呈しており蓋の桟材(つまみ)の可能性あり　釘穴3つ(2箇所釘残存)	298
2	1978	板材	1	KS-746・埋土4	全長(266)　幅(48)　厚さ(207～)	桶か樽の底板か　柾目材　推定直径約31cm　片面黒色塗布（柿渋か）　もう片面剥離　面取り　（出土品中最も厚手）　断面斗形	
3	2176	桶	1	KS-746・埋土	全長230　幅83　厚さ15	側板　柾目材　板中央付近に四角穴（釘穴か、何かに転用したか）　口径は1尺（内径約33cm）ほどの容器か　年輪の夏材部分はかなり失われくぼんでいる　黒ずんでいる部分はタガ痕か　面取り	294
4	2319	桶（側板）	1	KS-746・埋土	全長263　幅(70)　厚さ10	柾目材　外形側直径17.8cm　（外径17.8　内径17）　口縁部の面取り確認できず（内側）	295
5	2326	大桶	1	KS-746・埋土4	全長158　幅59　厚さ38	板目材　側面片側に釘穴1つ(木釘か)　大型桶側板の口縁部片　縦横ともカットされている　口縁内面に面取りあり　磨耗　厚さが4cm近いので底径が5尺、あるいは6尺の大型桶と予想される	296
6	2327	大桶	1	KS-746・埋土4	全長81　幅144　厚さ39	両側面に木釘あり2箇所　右側面にこげあり　大型桶の側板口縁部材（カットされた口縁片）　約3分の1程焼けて炭化　口縁部内面面取りあり　厚さが4cm近いものは類例から底径5尺あるいは6尺の大型桶と予想される（下部はノコギリで切断）	299
7	2167	桶	1	KS-746・埋土	全長118　幅(37)　厚さ12	小半切桶か側板（柾目材）　タガ痕は黒く変色　面取り　底板圧痕	300
8	2168	桶	1	KS-746・埋土	全長118　幅65　厚さ13	小半切桶か側板（柾目材）　タガ痕　底板圧痕　(No.2167と同一か、他にも同じくらいの大きさの側板出土）　年輪あり	301
9	2323	桶	1	KS-746・埋土	全長(94)　幅62　厚さ14	桶の角材　把手ほぞ穴あり　下部欠損　面取り	303
10	2328	把手	1	KS-746・埋土4	全長24　幅272　厚さ14	樽か桶の把手　板目材	302

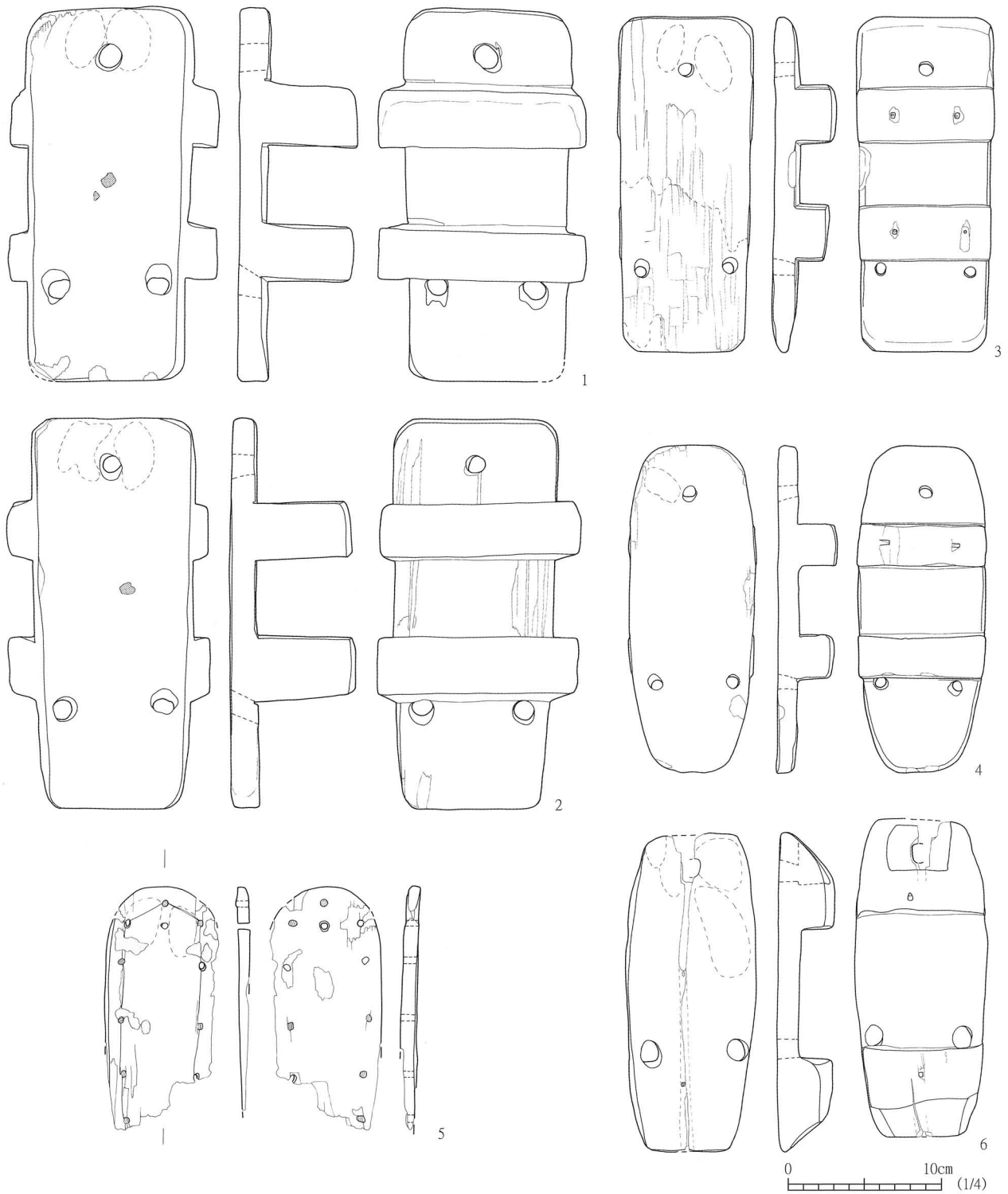
第39表　第23次調査出土木製品５観察表



第46図　第23次調査出土木製品６（S=1/4）

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　　量（mm）	備　　考	写真
1	2250	竹材	1	KS-746・埋土4	全長290　幅10　厚さ4	細い竹ヒゴ状　桶のタガを加工した可能性高い　竹のフシ両端にあり	313
2	2299	栓か	1	KS-746・埋土	全長55　最大幅46	多角形　面取り（7面）　栓の未製品か	304
3	2302	栓	1	KS-746・埋土	全長69　最大径27	面取りあり　紐掛け用の切り込みか	305
4	2304	栓	1	KS-746・埋土	全長63　最大径28	柿渋（茶色）塗り　表面の磨耗、剥落が著しい　上端面取り	306
5	2325	栓	1	KS-746・埋土	全長93　幅29　厚さ27	1箇所穴がある　上が斜めになっている	307
6	2311	栓	1	KS-746・埋土4	全長46　最大径40	柿渋（黒色）が帯状に分布（網点）	309
7	2315	栓	1	KS-746・埋土4	全長138　最大径21	酒樽用の栓か	308
8	2314	栓	1	KS-746・埋土4	全長75　最大径37		310
9	2228	クサビ	1	KS-746・埋土4	全長120　幅45　厚さ29	孔径5×6　側面中央に穴3つ（貫通穴2つ）	311
10	2259	不明	1	KS-746・埋土4	全長45　幅126　厚さ38	釘1つ　板目材	312
11	2229	雑具(道具の柄)	1	KS-746・埋土4	全長140　幅(30～)	道具の柄　茎の穴あり（表面黒い）　柄の端部に面取りあり	314
12	2184	道具の柄(竹製)	1	KS-746・埋土4	全長(165)　幅(39)	孔2つ　孔径17mm×19mm　竹製柄　孔あり　「×」印　指し込むため先端を先細く加工（節抜き）	315
13	2251	糸巻きか	1	KS-746・埋土	全長(186)　幅90　厚さ33	削り込みの加工痕多数あり　把手のついたもの　破片1つあり　コゲ痕あり　（網点）	317
14	1976	漆器（角材）	1	KS-746・埋土4	全長(185)　幅22　厚さ15	表面黒い　建具の部材か（障子、板戸など）　ほぞ穴　突起　切り込み	316

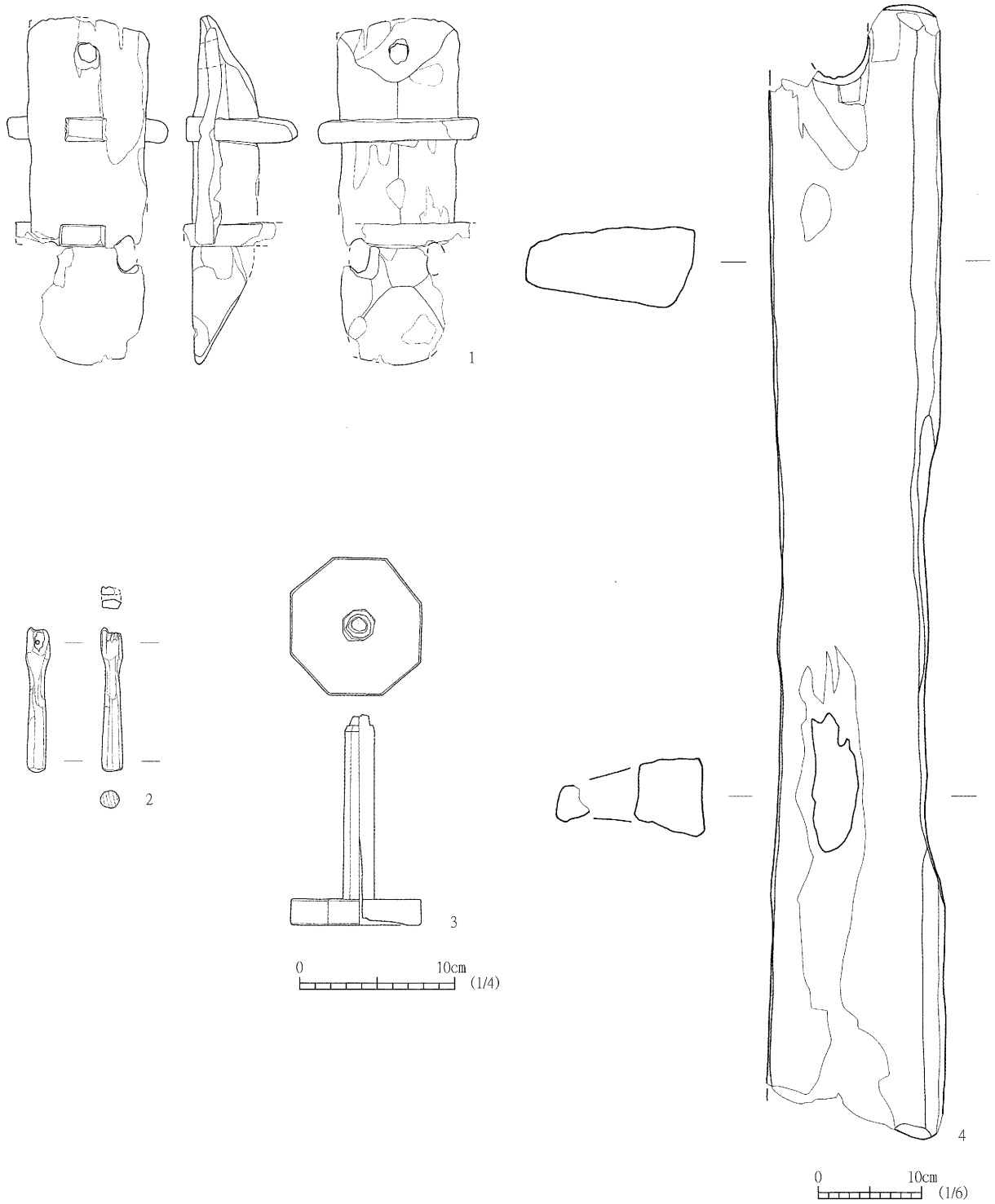
第40表　第23次調査出土木製品６観察表



第47図　第23次調査出土木製品７（S=1/4）

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	備　考	写真
1	2320	下駄	1	KS-746・南壁	全長259　幅104　厚さ20　高さ78	連歯下駄（高下駄）　歯の長さ（高さ）約60mm　台部板目取り　穴の壁面にコゲあり　コゲ焼印か（網点）　№2318下駄と組むのではないか　台形	320
2	2318	下駄	1	KS-746・埋土4	全長260　幅104　厚さ19　高さ82	歯の長さ（高さ）約65mm　連歯下駄（高下駄）　台部板目取り　後壷の壁面コゲている穴2つ　台形　焼印か（網点）	318
3	2178	下駄	1	KS-746・埋土4	全長223　幅88　厚さ13　高さ40	連歯下駄（角型）完形品　面取り加工した作りの丁寧な下駄　台部表面板目（柾目に近い）焼けた跡あり　芯なし　角部面取り　前歯、後歯とも2つずつ計4つ釘穴がある（すべりどめか）　穴の壁面にコゲ	320
4	2244	下駄	1	KS-746・埋土4	全長218　幅83　厚さ14　高さ39	連歯下駄（丸型）　楕円形完形品　台部板目　芯なし　前歯に2箇所釘穴あり	319
5	2169	草履	1	KS-746・埋土2	全長(162～)　幅(73～)　厚さ(10～)	歯のない履物　（柾目材）　木釘の穴11個、そのうち木釘残は9個　表面磨耗汚れていない　上面にわら状物質付着（トーン部分）	323
6	2324	下駄	1	KS-746・埋土4	全長212　幅86　厚さ14　高さ37	刳り下駄（丸型）　前歯、後歯ともに歯の表面に釘穴あり　芯持ち材　貫通する穴あり（木の芯の部分が抜けている）　釘穴（四角）　穴の壁面にコゲ	321

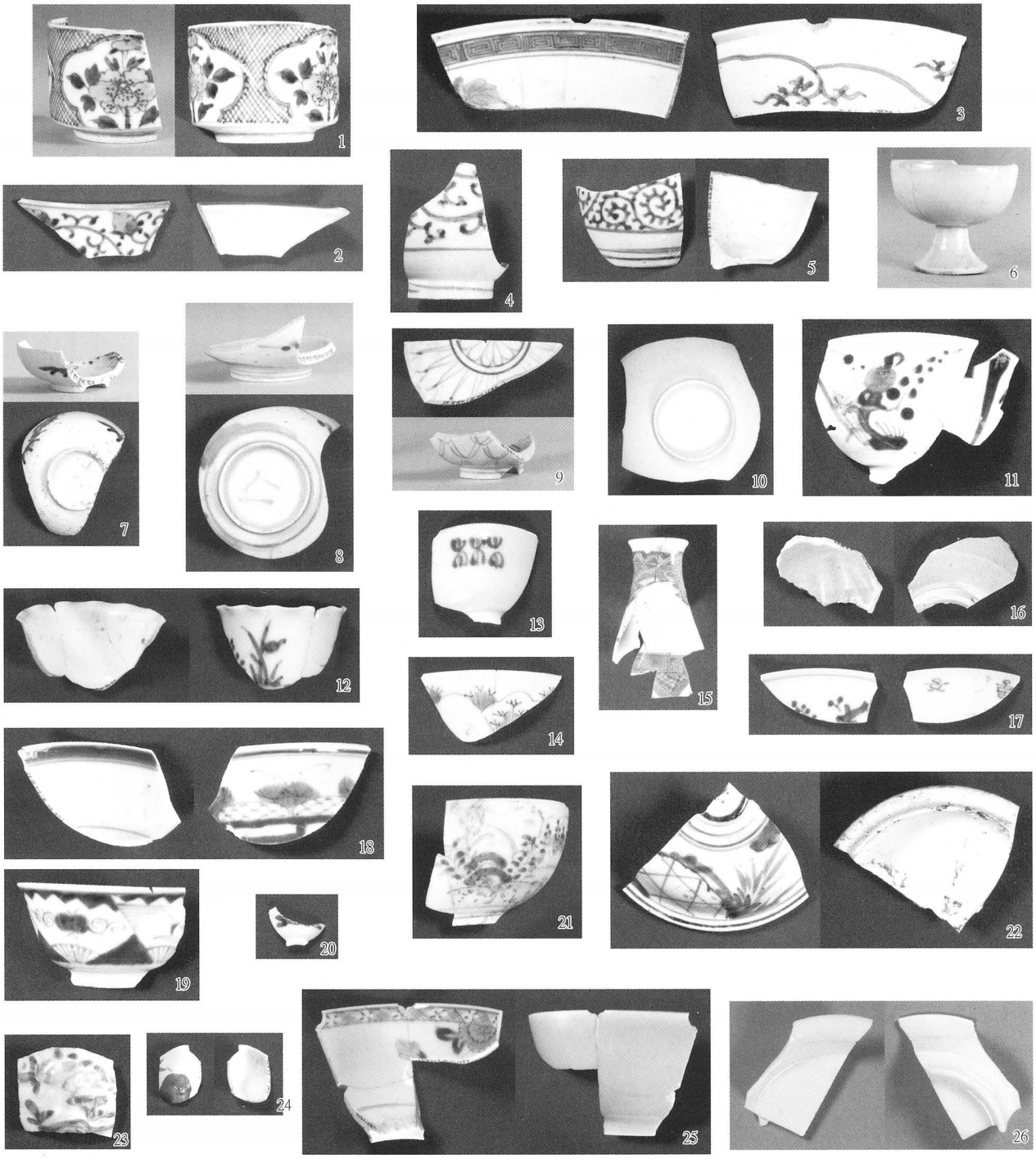
第41表　第23次調査出土木製品７観察表



第48図　第23次調査出土木製品８（１～３：S=1/4　４：S=1/6）

図	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	備　考	写真
1	2177	下駄	1	KS-747・埋土上	全長225　幅(79)　厚さ(43)　高さ(71)	差歯下駄（露卯下駄）　磨耗、欠損あり	324
2	1787	人形（手）	1	KS-746・埋土4	全長94　幅13　厚さ16	人形の腕　指の間などに黒色顔料残存　小指付近欠損　基部面取りあり（稜線不明瞭）物を握った状態　肘側径1～1.1cm	325
3	2240	支脚	1	KS-746・埋土4	全長137　支柱部120　土台高さ17　土台幅84	台部が八角形　茶色塗彩（柿渋か）　面取り　灯火具（燭台か）	326
4	2335	建築部材	1	KS-746・西壁	全長1105　幅173　厚さ78	井戸支柱材(割材使用)　断面を見ると割り材でありことがわかる(幅が一定していない)割り材を井戸枠の支柱として利用　表面は黒くあるいは焼いているのか　ほぞ穴1つ　すべて加工面	327

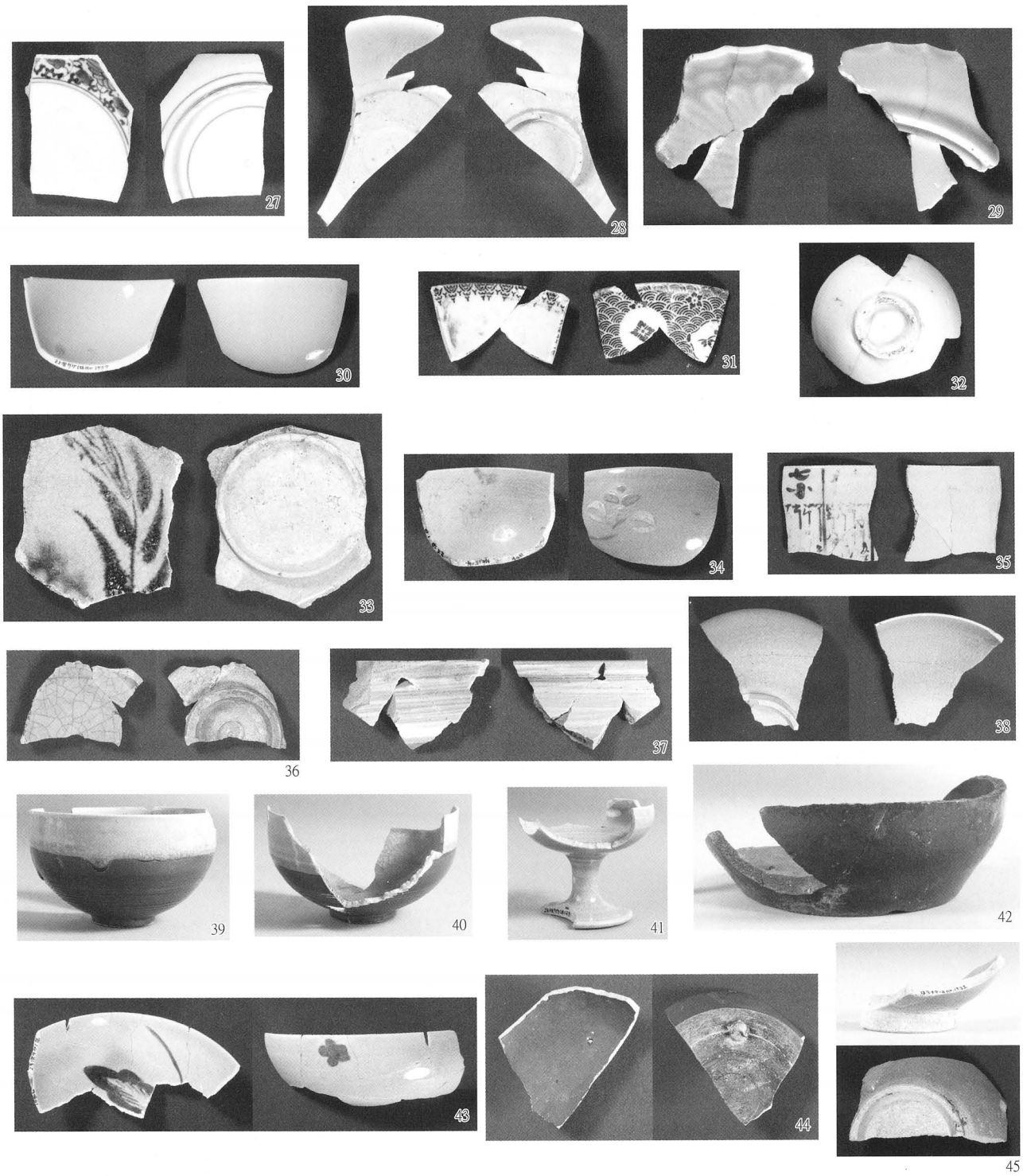
第42表　第23次調査出土木製品８観察表



写真図版11　第23次調査出土磁器１（S=1/3）

写真	遺物番号	区	遺構・層位	種　類	生産地	器　種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	文　様　等	備　　考
19	99	2	Ⅱ	染付	瀬戸美濃	端反碗	19ｃ前	－	－	－	(扇子文)	
20	1532	1	KS－746・埋土4	染付	肥前	紅猪口	18ｃ	－	－	－		
21	1081	1	KS－681・埋土	染付	肥前	碗	18ｃ	－	－	－	草花文	
22	224	1	Ⅱ	染付	肥前	蓋	18ｃか	－	－	－	草花文か	
23	1284	1	KS－746・埋土4	染付	肥前	徳利	17～18ｃ	－	－	－	型押しか	
24	1332	1	KS－746・埋土4		肥前	水滴か	17～18ｃ	－	－	－	色絵　赤	
25	1184	1	表採	青磁染付	肥前	碗	18ｃ後	－	－	－	草花文	
26	1388	3	Ⅰ	白磁	瀬戸美濃	端反皿	19ｃ中	－	－	－	型押し	

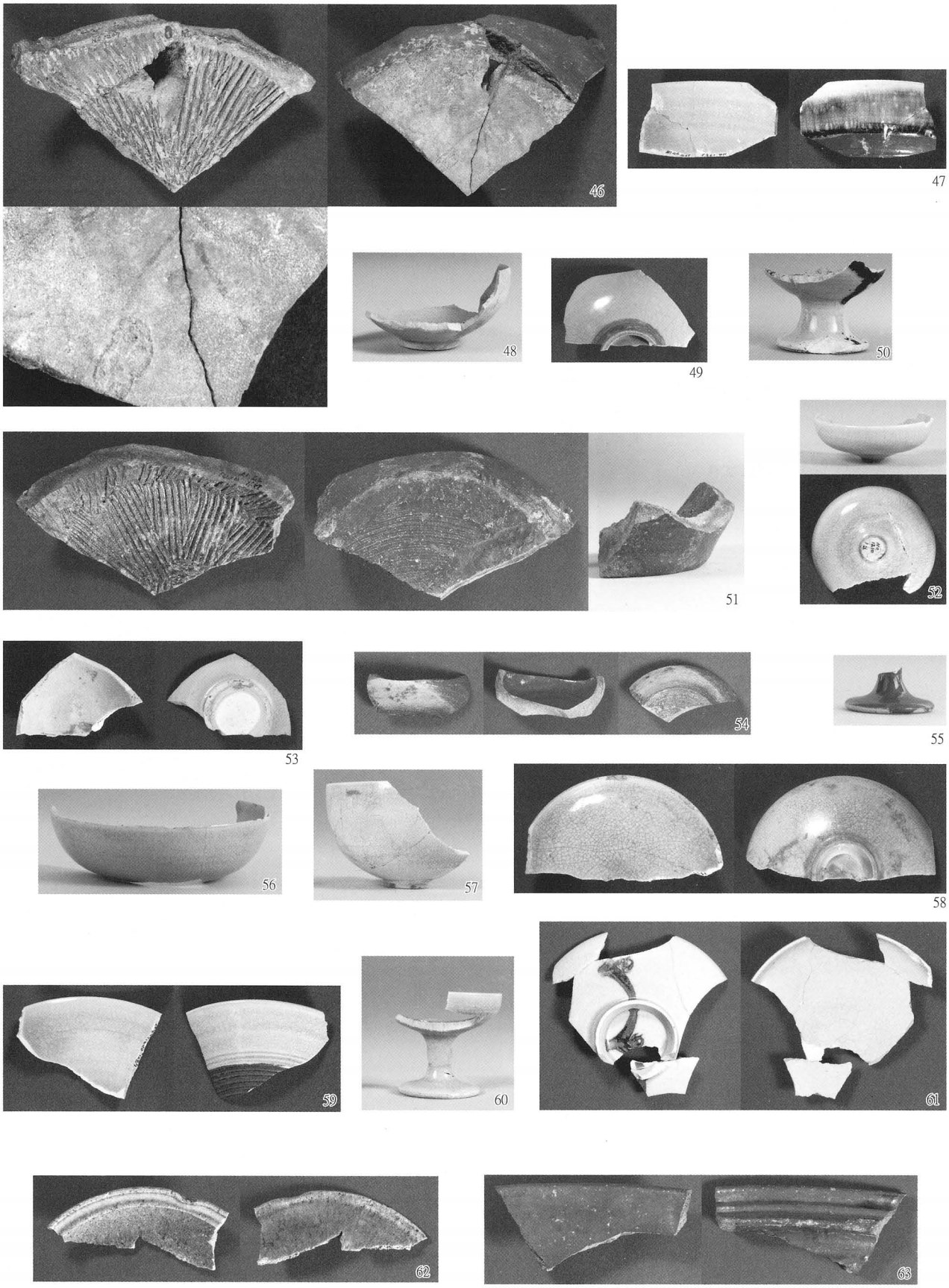
第43表　第23次調査出土磁器１観察表



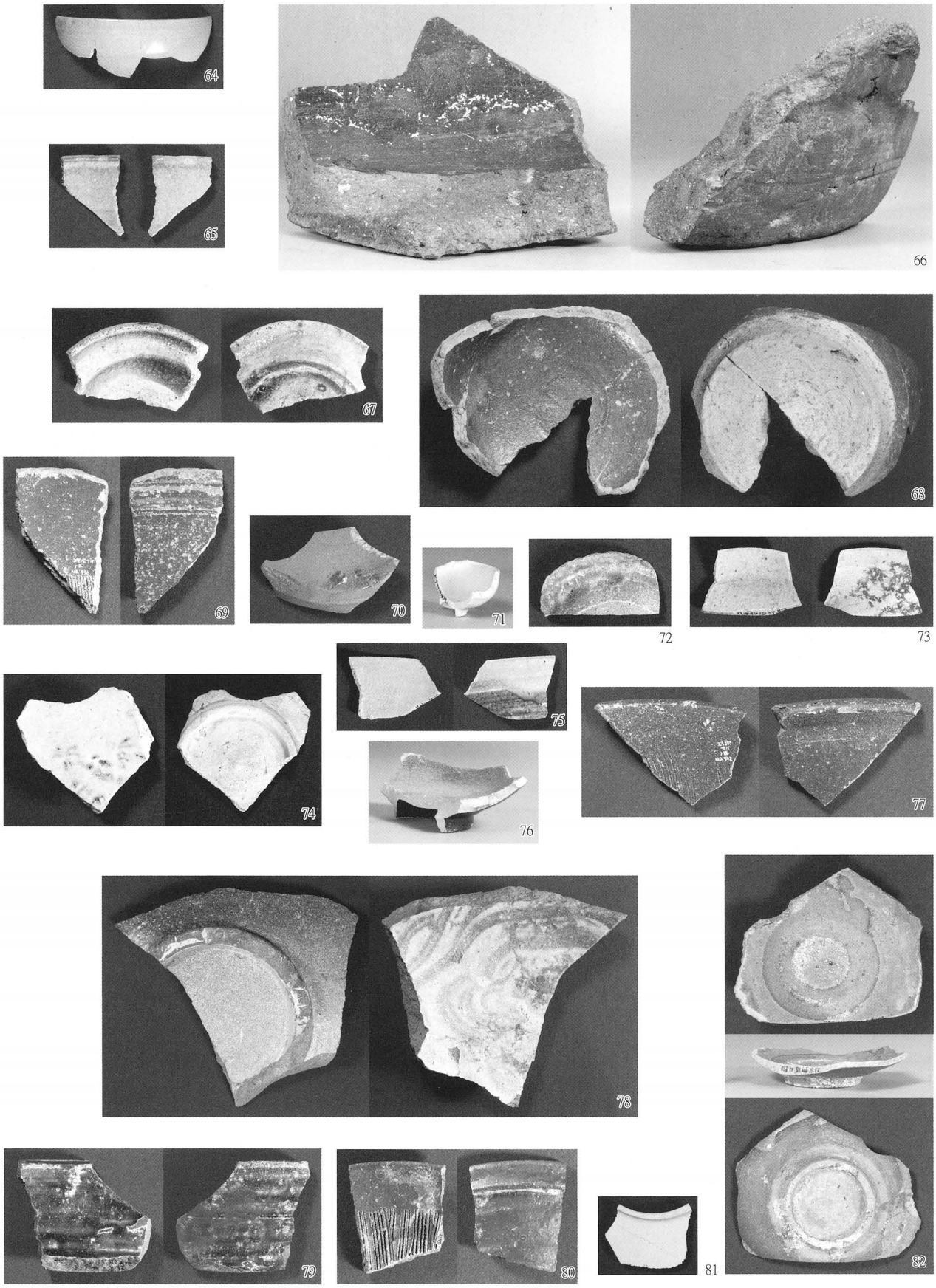
写真図版12　第23次調査出土磁器２・陶器１（S=1/3）

写真	遺物番号	区	遺構・層位	種　類	生産地	器　種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	文　様　等	備　　考
27	602	1	Ⅰ	染付	肥前	皿	18ｃ後	－	－	－	花唐草文　高台内目跡1ヶ	
28	537	1	Ⅲ上面	染付か	肥前	皿	17ｃ後か	－	－	－	見込蛇ノ目釉ハギ	
29	213	1	KS－681・埋土	青磁	肥前	輪花皿	17～18ｃ	－	－	－	花弁文か	
30	1757	1	KS－681・埋土	白磁	肥前	碗	18ｃか	－	－	－		
31	451	1	Ⅱ	染付	産地不明	碗	19ｃ後	－	－	－		
32	99	2	Ⅰ	白磁	肥前	小型碗	17ｃ後か	－	－	－	畳付に砂か	

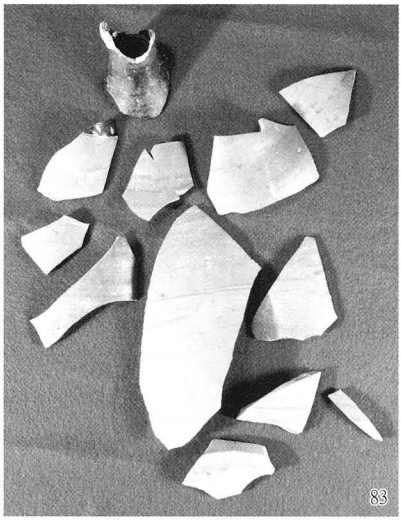
第44表　第23次調査出土磁器２観察表

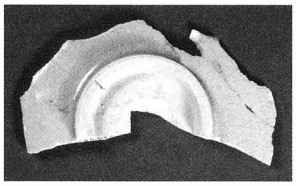


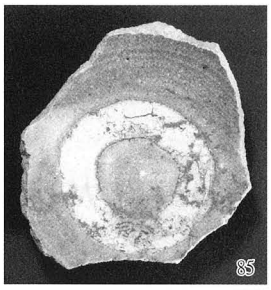
写真図版13　第23次調査出土陶器２（S=1/3）



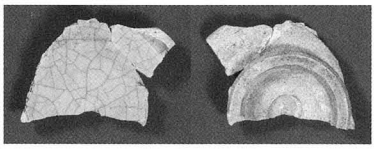
写真図版14　第23次調査出土陶器３（S=1/3）

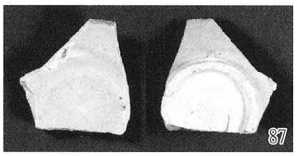


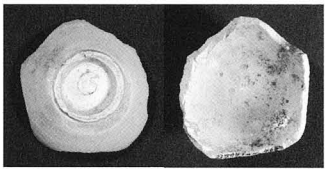

84

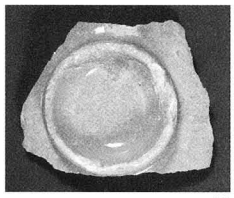


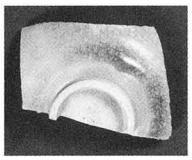
88

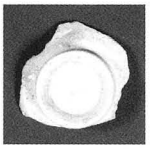

86

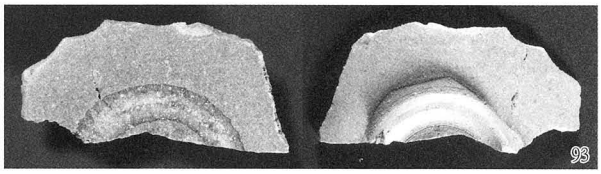


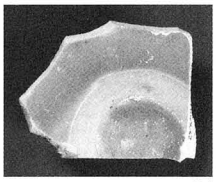

89

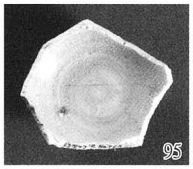

90


91


92



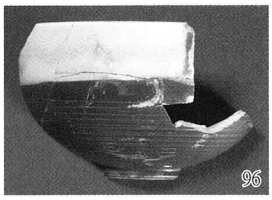

94

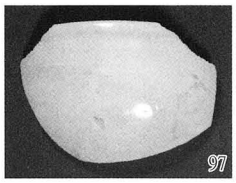


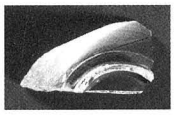
写真図版15　第23次調査出土陶器４（S=1/3）

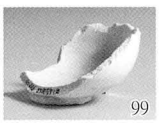
写真	遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器　種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	文　様　等	備　　考
83	1706・他	1	KS－746・埋土4	志戸呂	徳利	18c	－	－	－	鉄釉	写真70と同一か
84	336	2	Ⅰ	大堀相馬	皿	18c	－	－	－	灰釉	
85	221	1	Ⅱ	小野相馬	皿	18c	－	－	－	灰釉　見込蛇ノ目釉ハギ	
86	1405・他	1	KS－746・埋土4	京信楽か	碗	18c	－	－	－	灰釉筒形　内面と外面に施釉　高台内渦形沈線　白色粒子	
87	375	3	Ⅰ	大堀相馬	碗	18c	－	－	－	灰釉	
88	149	1	Ⅰ	備前	大甕	17c	－	－	－	内外塗土	
89	468	1	Ⅱ	大堀相馬	小坏	18c後	－	－	－	灰釉　高台内渦状沈線	
90	625	1	Ⅱ	肥前	碗	17c後	－	－	－	灰釉　畳付のみ露胎	
91	1456	1	KS－746・埋土4	大堀相馬	碗	18c	－	－	－	灰釉	
92	86	1	東壁壁切	瀬戸	小坏	18c	－	－	－	付高台	
93	454	1	Ⅱ	小野相馬	皿	18c	－	－	－	灰釉　見込蛇ノ目釉ハギ	
94	197	1	Ⅴ	肥前	皿	17c後	－	－	－	青緑釉　見込蛇ノ目釉ハギ	
95	923	1	Ⅳ上面	大堀相馬	小坏	18c後か				灰釉	

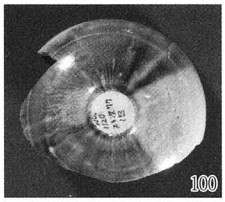
第45表　第23次調査出土陶器４観察表

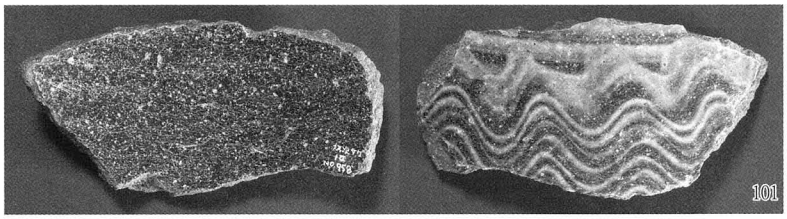


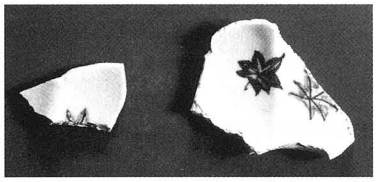


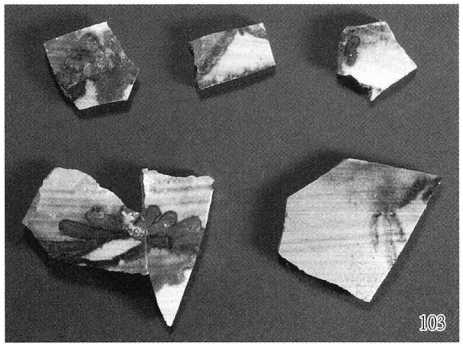


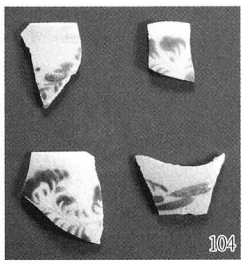


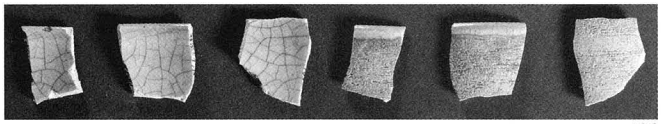


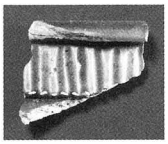








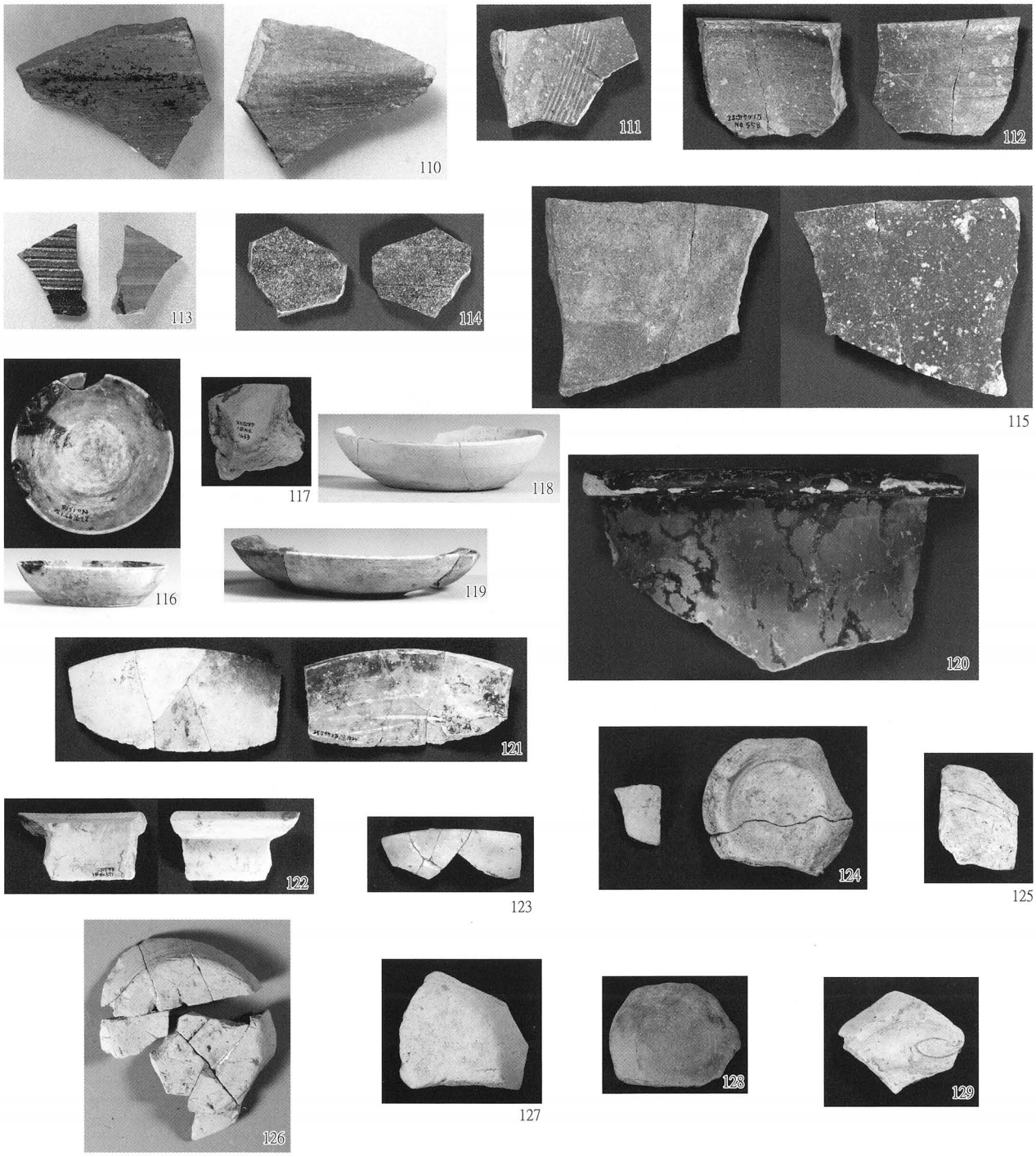




写真図版16　第23次調査出土陶器５（S=1/3）

写真	遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器　種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	文　様　等	備　　考
96	1428	1	KS－746・埋土4	大堀相馬	碗	18c	－	－	－	掛分　灰釉、鉄釉	
97	1125	1	KS－746・埋土	大堀相馬	碗	18c	－	－	－	灰釉	
98	268	1	Ⅱ	大堀相馬	碗	18c	－	－	－	掛分　灰釉、鉄釉（片身替り）	
99	626	1	Ⅰ	大堀相馬	小坏	18c半～	－	－	－	白濁釉	
100	1120	1	KS－746・埋土	大堀相馬	仏飯器	18c	－	－	－	灰釉飴釉流	
101	958	1	Ⅳ上面	産地不明	甕か	18c～	－	－	－	刷毛文　胎土黒褐色　砂を含む	
102	33・他	1	－	瀬戸美濃	輪花鉢	18cか	－	－	－	鉄絵紅葉文	2個体
103	1151・他	1	KS－746・埋土	唐津	壺	17c	－	－	－	二彩唐津　松文か	写真37と同一か
104	1127・他	1	KS－746・埋土4	京信楽	碗	18c	－	－	－	色絵草花文　緑・　青・　金	
105	1077	1	KS－681・埋土	美濃	大鉢	17c前	－	－	－	灰釉緑釉流　波状文	
106	1459・他	1	KS－746・埋土4	京信楽か	碗	18c	－	－	－	灰釉筒形　内面と外面に施釉　高台内渦形沈線　白色粒子	
107	928	1	Ⅳ上面	瀬戸美濃	瓶	19c初	－	－	－	緑釉掛け	
108	492	1	側溝	瀬戸	茶入	17cか	－	－	－	鉄釉	
109	645	1	撹乱	鳴海織部？	皿	17c前	－	－	－	鉄絵	

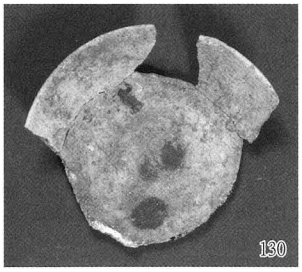
第46表　第23次調査出土陶器５観察表

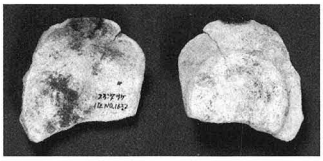


写真図版17　第23次調査出土陶器６（S=1/3）

写真	遺物番号	区	遺構・層位	生産地	器　種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	文　様　等	備　　考
110	646	1	撹乱	備前	大甕	17c前	－	－	－	内外塗土　薄手	
111	988	1	Ⅳ上面	丹波	擂鉢	17c	－	－	－	鉄化粧	
112	558	1	KS－682・埋土	産地不明	香炉か	17c	－	－	－	岸窯か	
113	570	1	KS－716・掘り方	備前	徳利	17c末～18c初	－	－	－	糸目　薄手　塗土	
114	1621	1	KS－746・埋土	中国？	壺か	17cか	－	－	－	褐釉　漆継ぎ	
115	871	1	Ⅲ	常滑？	壺	時期不明	－	－	－	中型か	

第47表　第23次調査出土陶器６観察表


130


131

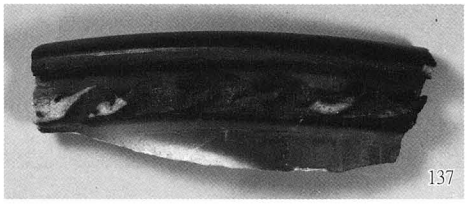
132

133

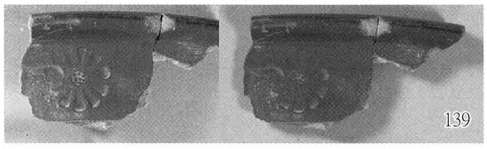
134

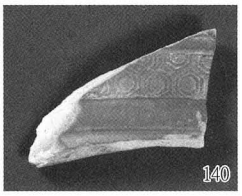
135

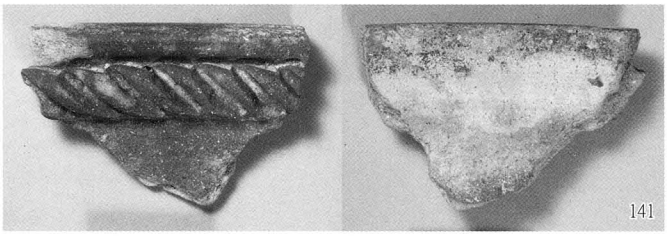
136

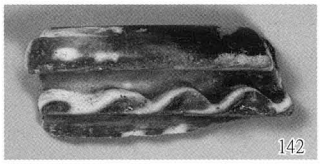

137

138


139


140


141


142

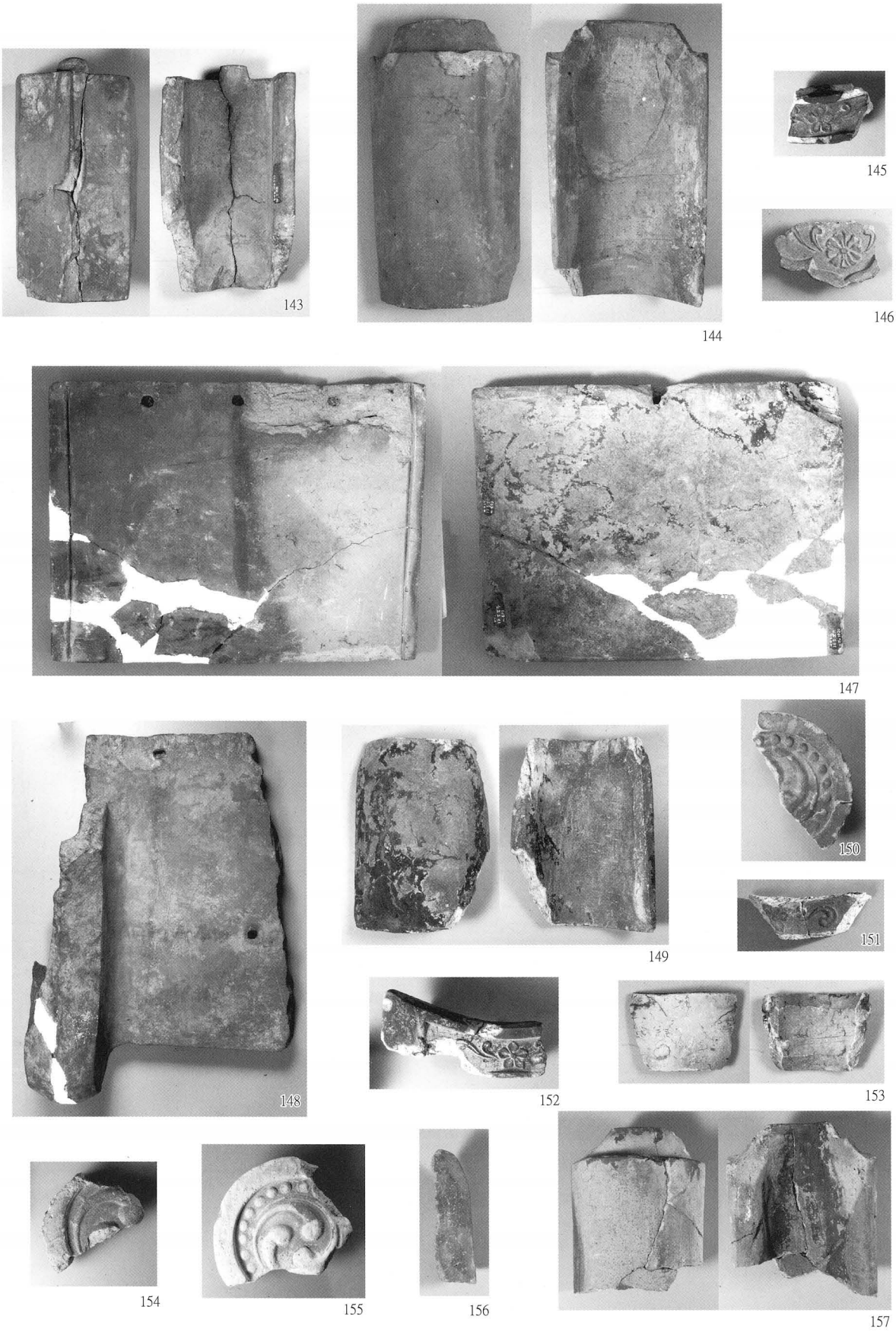
写真図版18　第23次調査出土土師質土器2・瓦質土器（S=13）

写真	遺物番号	種　別	器　種	区	遺構・層位	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	備　　考
130	1158	土師質土器	Ⅲ	1	KS－746・埋土4	－	－	－	内外褐灰色　回転糸切
131	1632	土師質土器	灯明皿（小型）	1	KS－746・埋土	－	－	－	油煙付着　回転糸切
132	1205	土師質土器	灯明皿（小型）	1	KS－746・埋土3	－	－	－	油煙付着　回転糸切
133	1094	土師質土器	灯明皿（小型）	1	KS－746・埋土2	－	－	－	№1604と接合　油煙付着　回転糸切
134	308	土師質土器	Ⅲ	1	Ⅲ上面	－	－	－	回転糸切
135	1694	土師質土器	灯明皿（小型）	1	KS－681・埋土	－	－	－	油煙付着　回転糸切　胎土黒色
136	1736	土師器	甕	1	撹乱	－	－	－	口縁部　平安時代（他に1点出土）

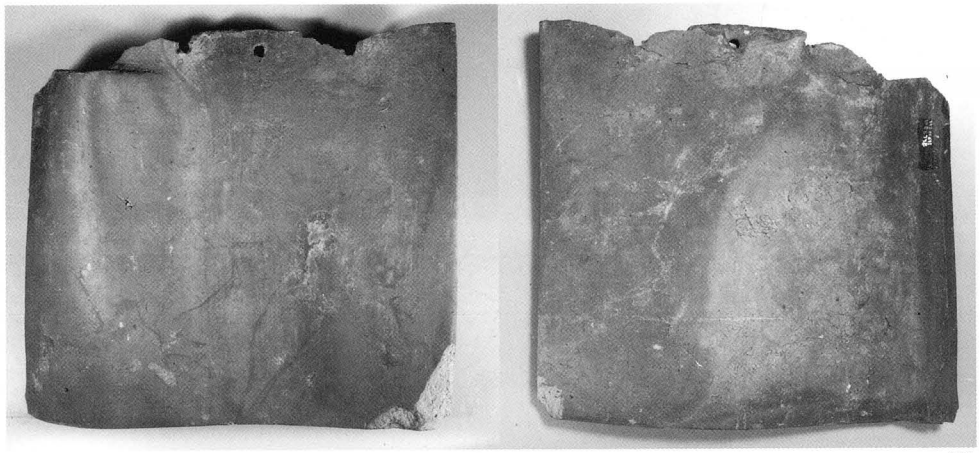
第48表　第23次調査出土土師質土器２観察表

写真	遺物番号	種　別	器　種	区	遺構・層位	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	備　　考
142	1272	瓦質土器	火鉢	1	KS－746・埋土4	－	－	－	口縁端部ミガキ

第49表　第23次調査出土瓦質土器観察表

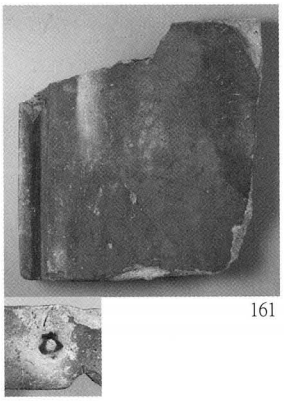


写真図版19　第23次調査出土瓦１（S=1/6）


158

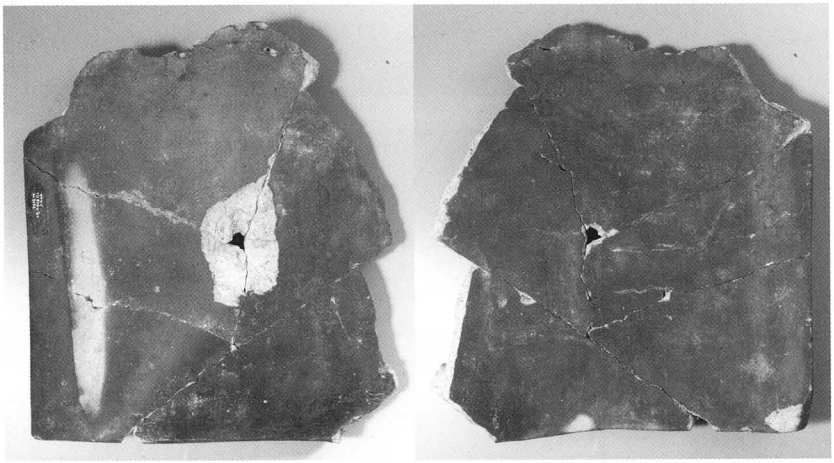
159

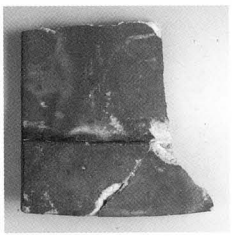
160


161

162

163

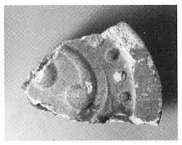

164


165

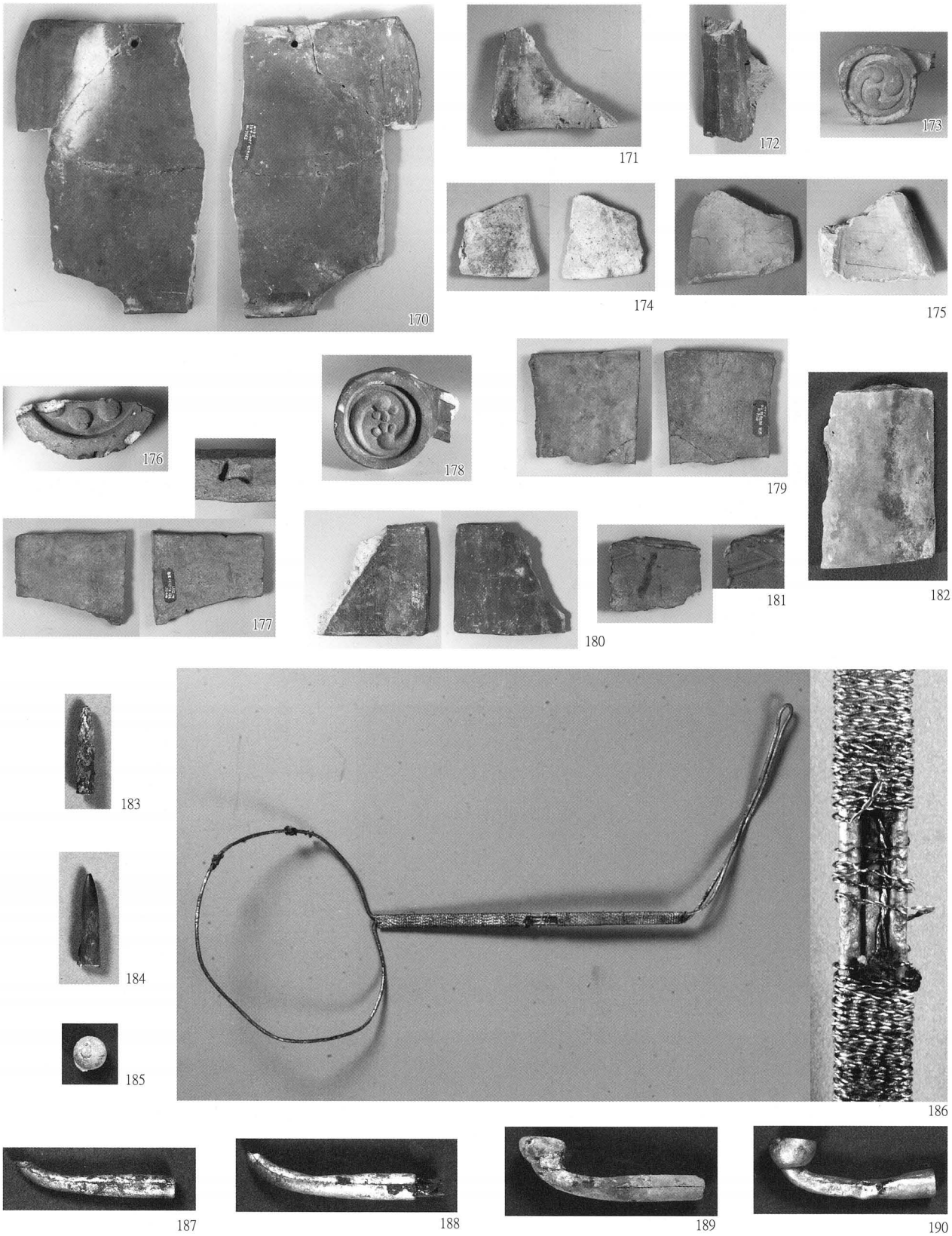
166

167

168


169

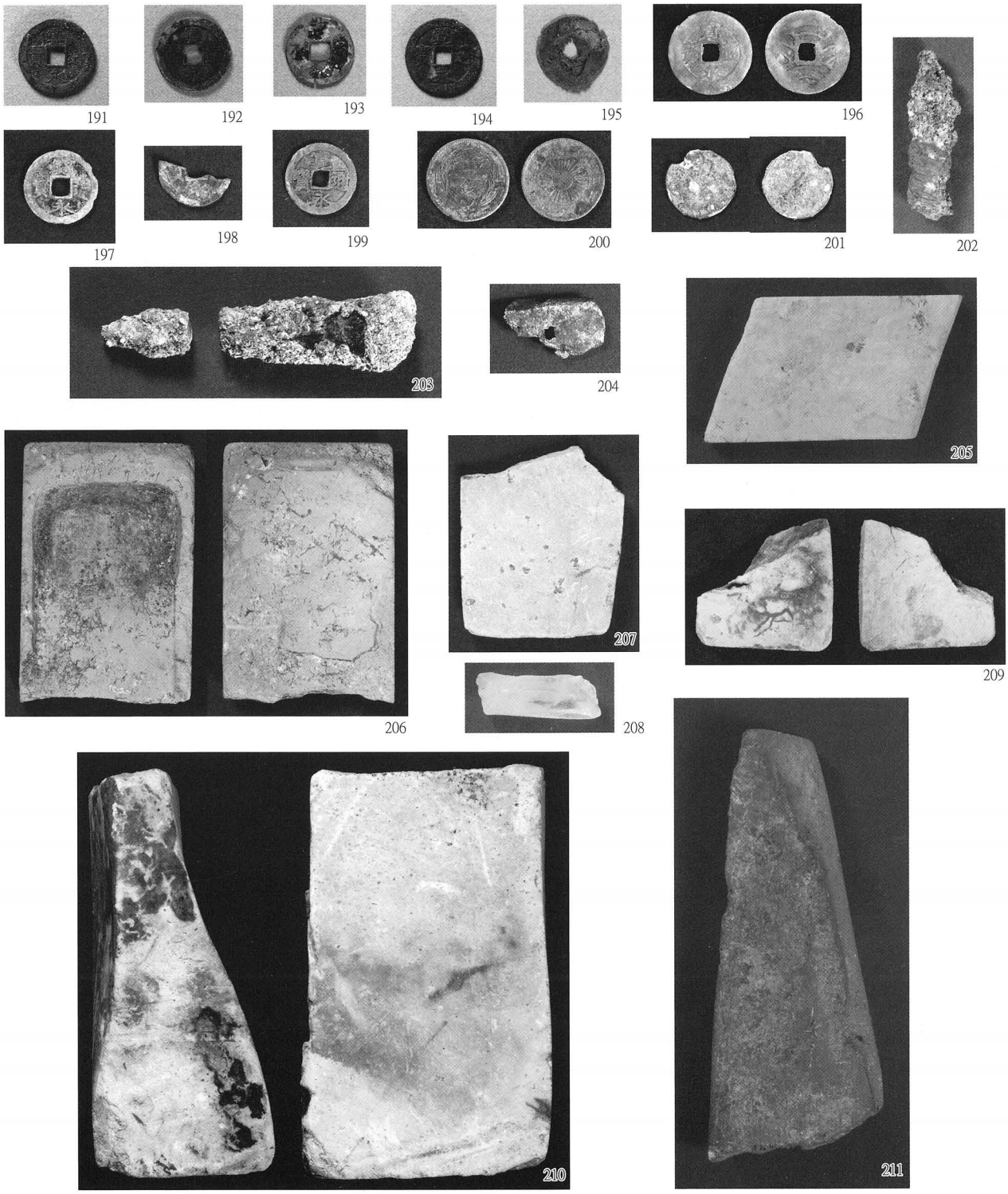
写真図版20　第23次調査出土瓦２（S=1/6）



写真図版21　第23次調査出土瓦３（S=1/6）・金属製品（1/2）

写真	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	文　様	計測値（mm）	重量(g)	備　　考
181	1807	平瓦	1	KS－681・埋土		－	－	レの線刻あり
182	2081	桟瓦か	1	KS－768・埋土		－	－	

第50表　第23次調査出土瓦３観察表



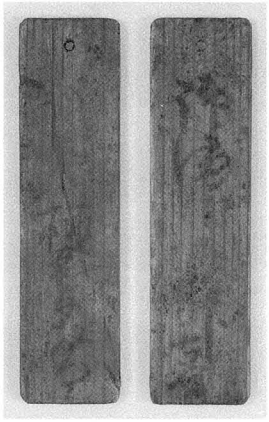
写真図版22　第23次調査金属製品２・石製品（S=1/2）

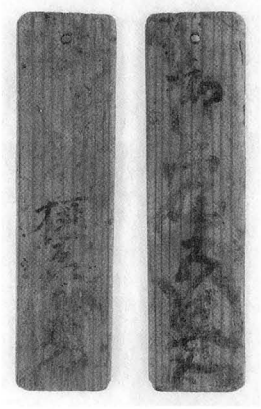
写真	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量(g)	備　考
201	421	古銭	1	Ⅱ下部		－	桐一銭青銅貨　大正～昭和
203	869	釘	1	Ⅲ	全長（90）	－	二つに分離
202	431	釘	3	KS－686・埋土	全長（50）	－	木質付着
204	1270	金具	1	KS－746・埋土4	全長（33）	－	釘穴あり　非常に薄い

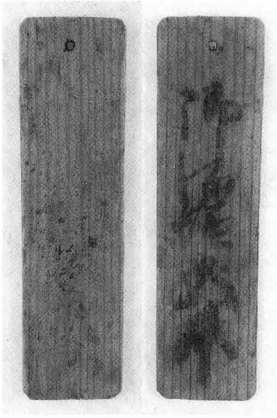
第51表　第23次調査出土金属製品２観察表

写真	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量(g)	備　考
208	1687	水晶	1	Ⅲ	－	－	他に破片2点出土

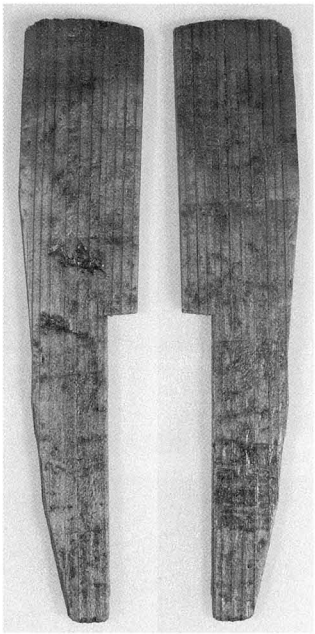
第52表　第23次調査出土石製品観察表


212

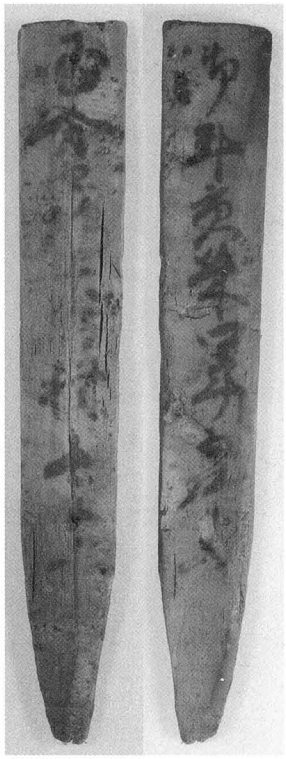

213

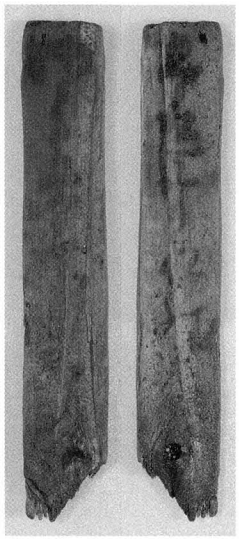

214

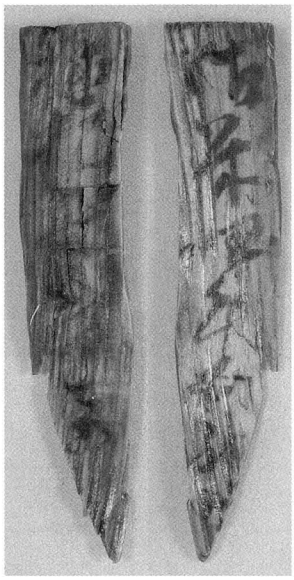
215


216

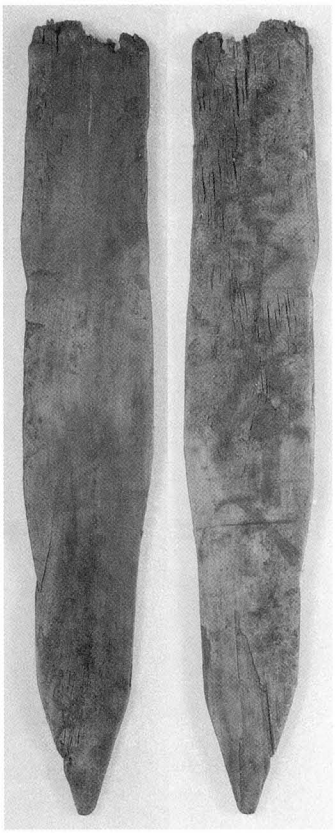
217


218

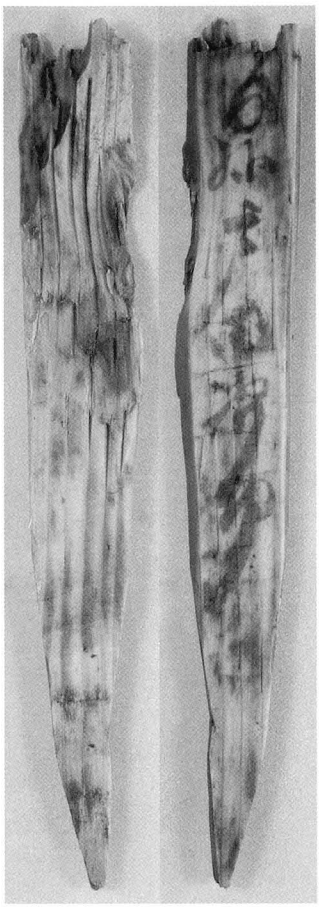

219


220

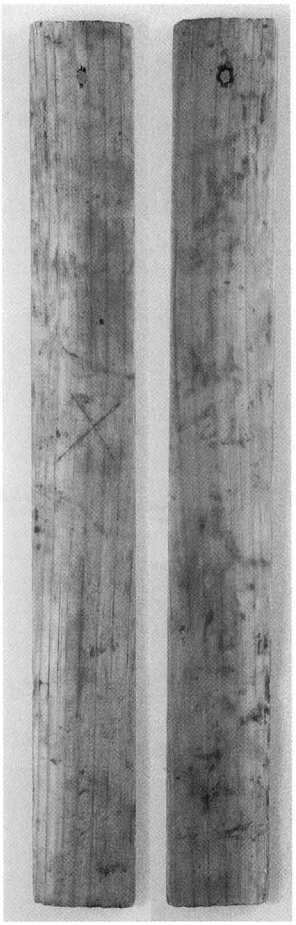
写真図版23　第23次調査出土木簡１（S=1/2）



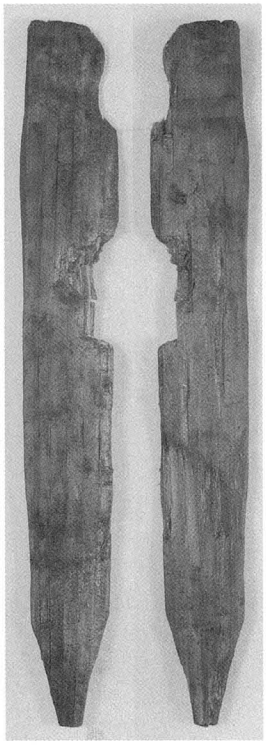
221



222

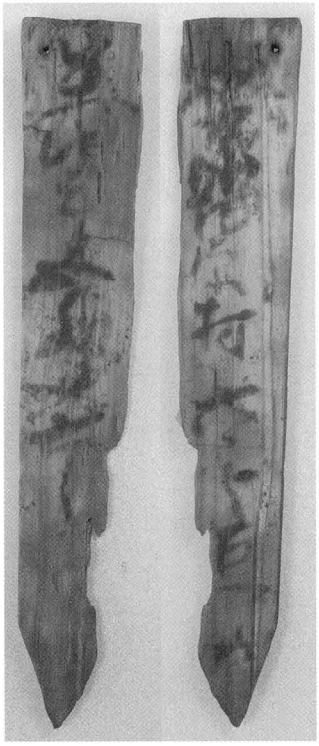


223



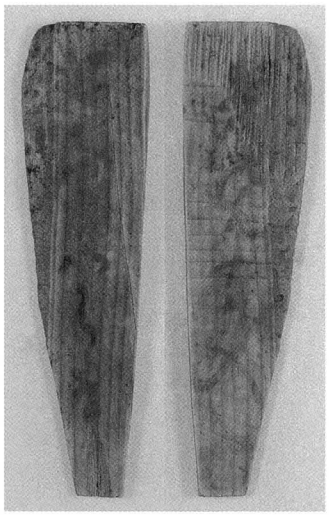
224

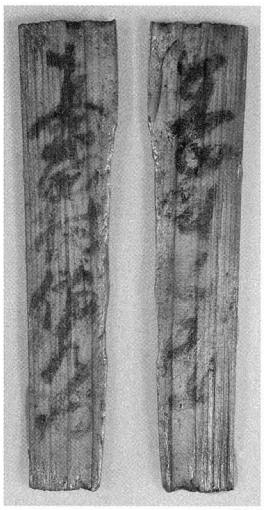
225

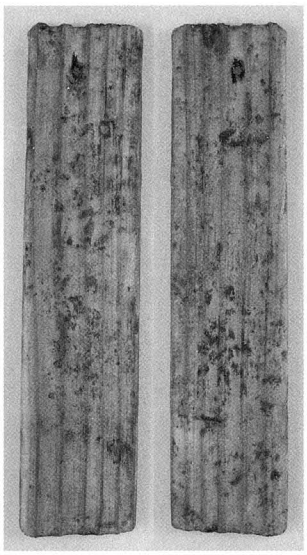


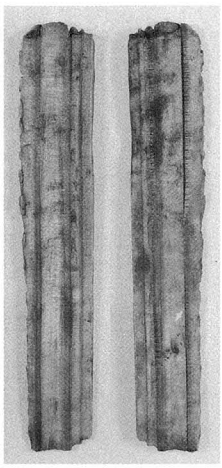
226

写真図版24　第23次調査出土木簡２（S=1/2）


227

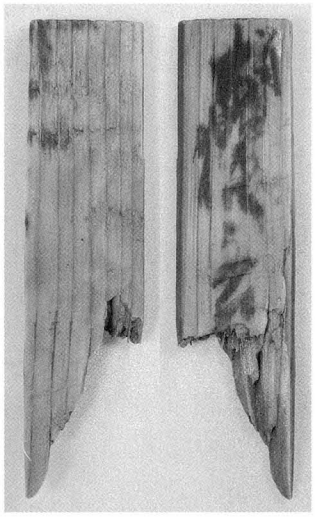

228

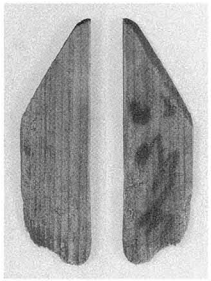

229

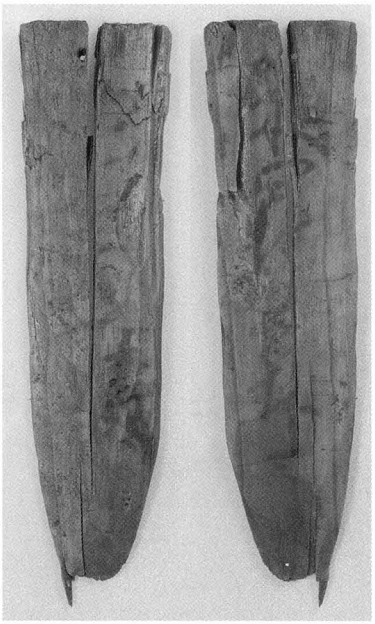

230

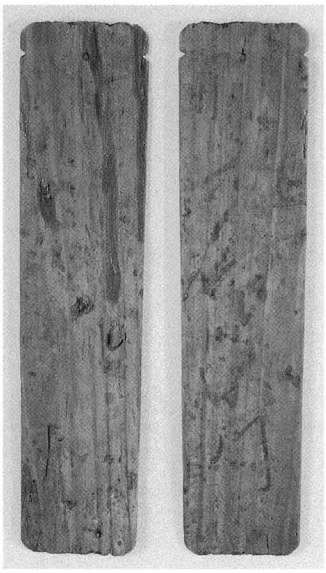
231

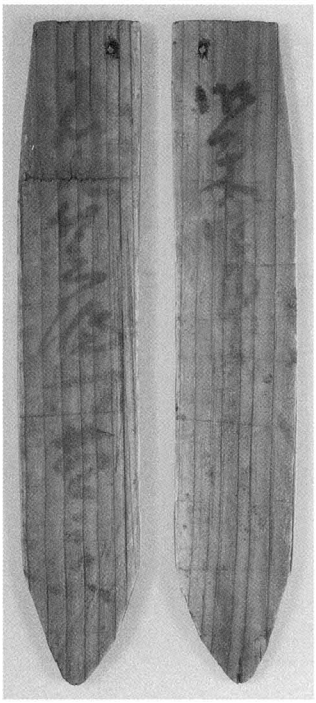
232


233


234


235


236


237

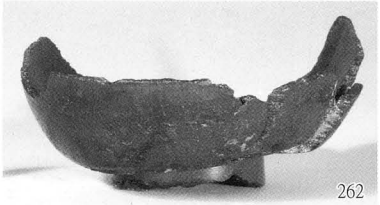
写真図版25　第23次調査出土木簡３（S=1/2）

写真図版26　第23次調査出土木製品１（S=1/3）

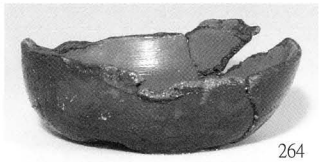
写真	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量(g)	備　考
257	1969	漆器　椀蓋	1	KS－746・埋土4	口径98　器高25　つまみ径50	－	内赤色漆外黒色漆　木瓜文様
259	1997	漆器　椀蓋	1	KS－746・埋土	口径(103)　器高(25)　つまみ径48	－	内赤色漆外黒色漆　欠損あり
260	1970	漆器　汁椀	1	KS－746・埋土4	口径(109)　器高(19)　底径(52)	－	内赤色漆外黒色漆　片喰文様
258	2350	漆器　盃か	1	KS－746・埋土	－	－	内外赤色漆　内面金彩文様（梅・松葉）

第53表　第23次調査出土木製品１観察表

261


262

263


264

265

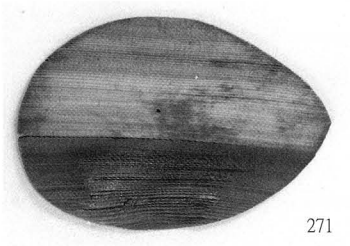
266

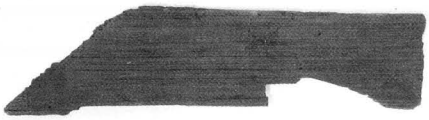
267

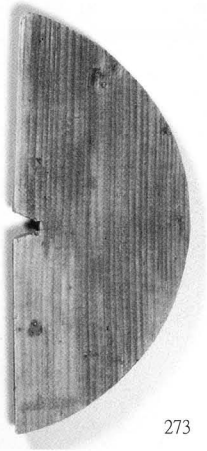
268

269

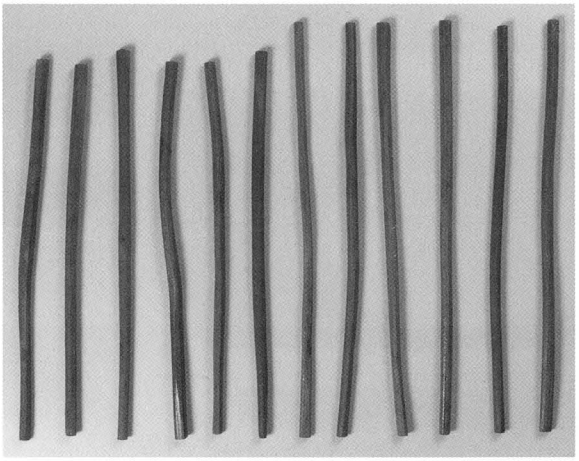
270


271


272


273

274


275

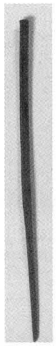
276

277

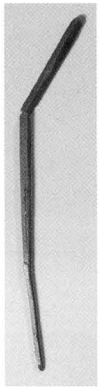
写真図版27　第23次調査出土木製品２（260～268：S=1/3　269～276：S=1/4）

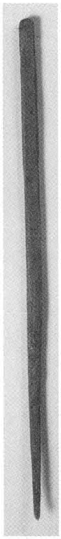
写真	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量(g)	備　考
261	1973	漆器　飯椀	1	KS－746・埋土4	口径（107）　器高（77）　底径（57）	－	内外赤色漆　腰部稜あり
262	1996	漆器　汁椀か	1	KS－746・埋土	口径（125）　器高（60）　底径65	－	内外赤色漆　腰折稜あり　大型　変形
263	2306	漆器　椀蓋	1	KS－746・埋土4	口径（116）　器高（35）　底径60	－	内外赤色漆　腰折椀用　稜あり
264	1995	漆器　汁椀	1	KS－746・埋土	口径（118）　器高（40）　底径（55）	－	内赤色漆外緑色漆　欠損あり
265	2305	漆器　飯椀	1	KS－746・埋土4	口径（117）　器高（73）　底径（57）	－	内外赤色漆
266	2347	漆器　飯椀	1	KS－746・埋土3	高台径（55）　器高（18）	－	高台部のみ　高台内角枠内に「万」字銘
267	2361	漆器　飯椀	1	KS－746・埋土4	高台径56　器高（12.5）	－	高台部のみ　高台内楕円枠に銘あり
268	1984	漆器　膳(側板か)	1	KS－746・埋土4	長240　幅45　厚さ15	－	3面茶色柿支部か　両端切り込み
269	1985	漆器　不明	1	KS－746・埋土4	長277　幅20　厚さ7	－	竹材に赤色・黒色漆を塗ったものか

第54表　第23次調査出土木製品２観察表

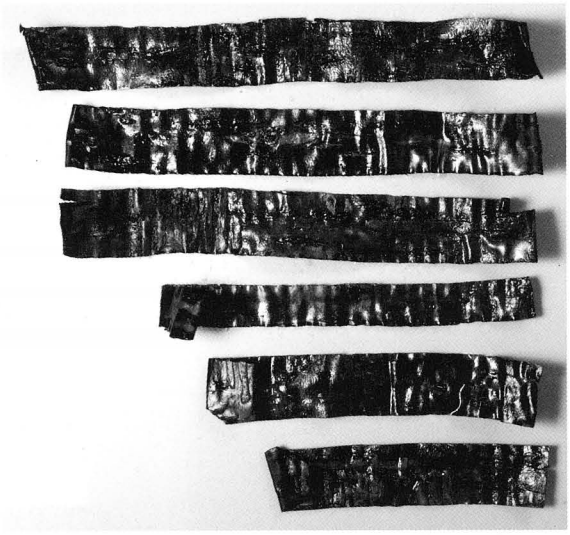

278

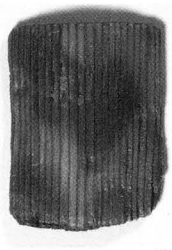
279

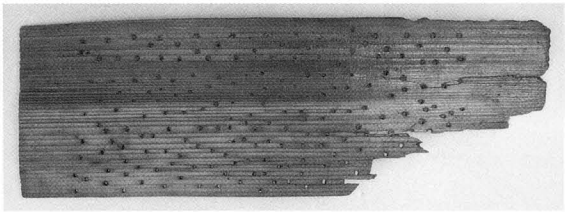
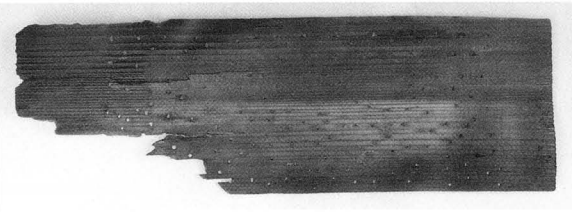

280

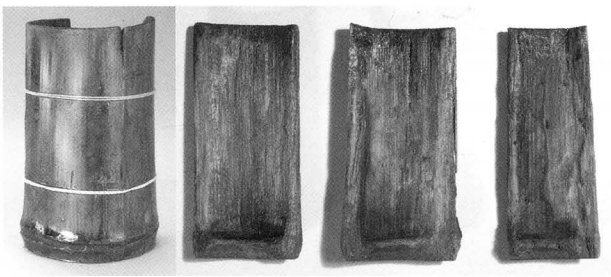

281

282

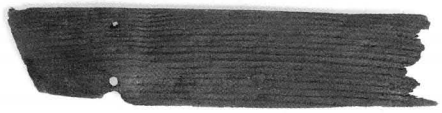

283


284

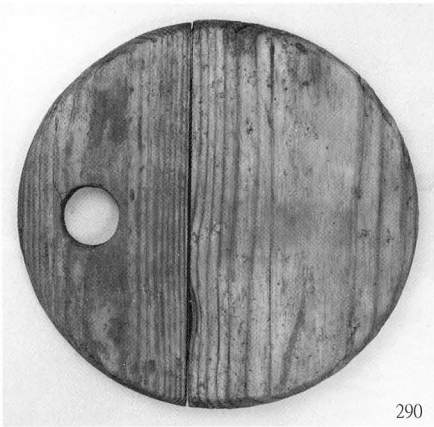


285


286

287

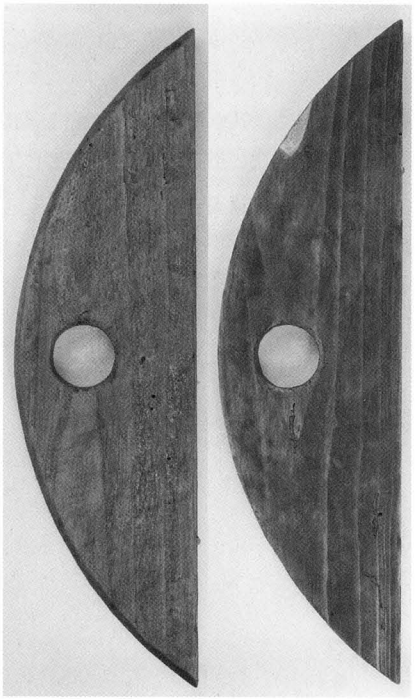

288

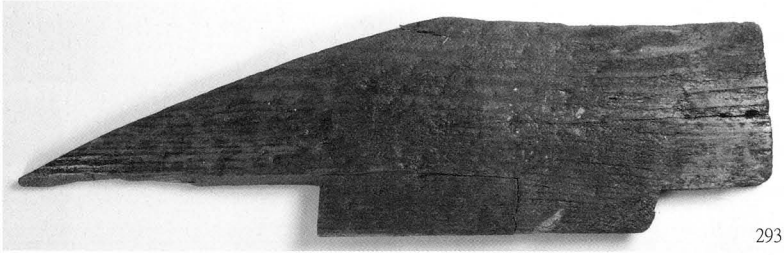
289

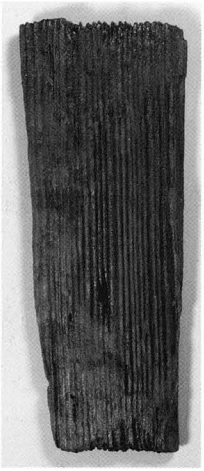

290

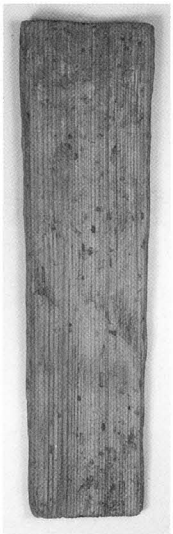
291

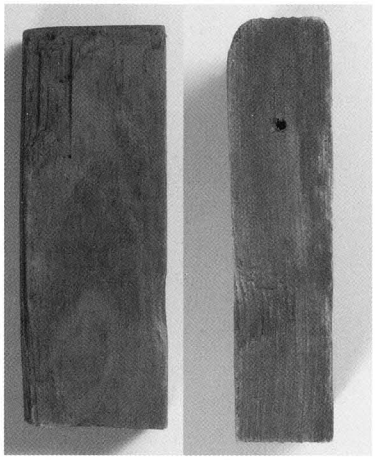
写真図版28　第23次調査出土木製品３（S=1/4）

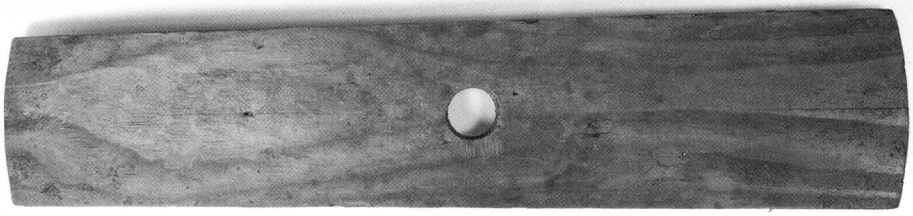

292

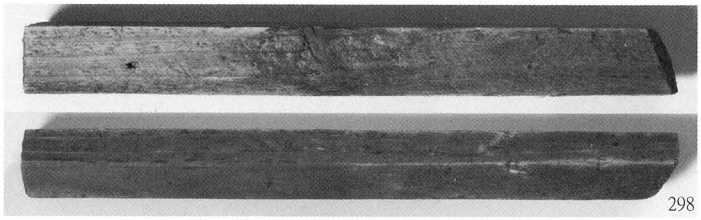

293

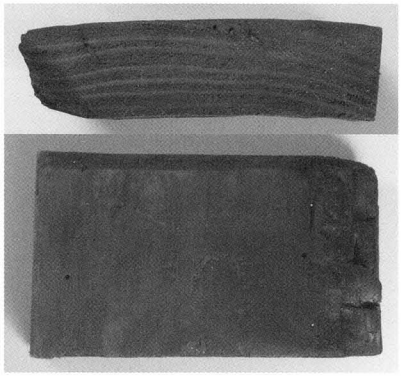

294

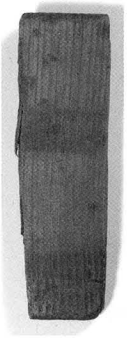

295

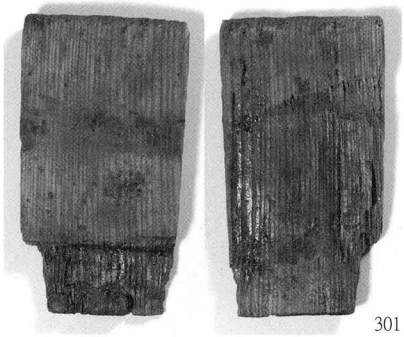

296

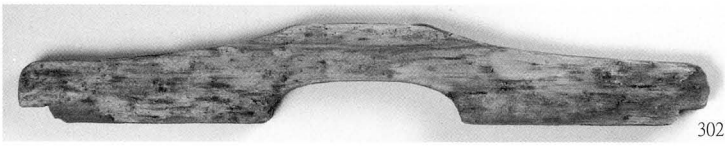

297


298


299

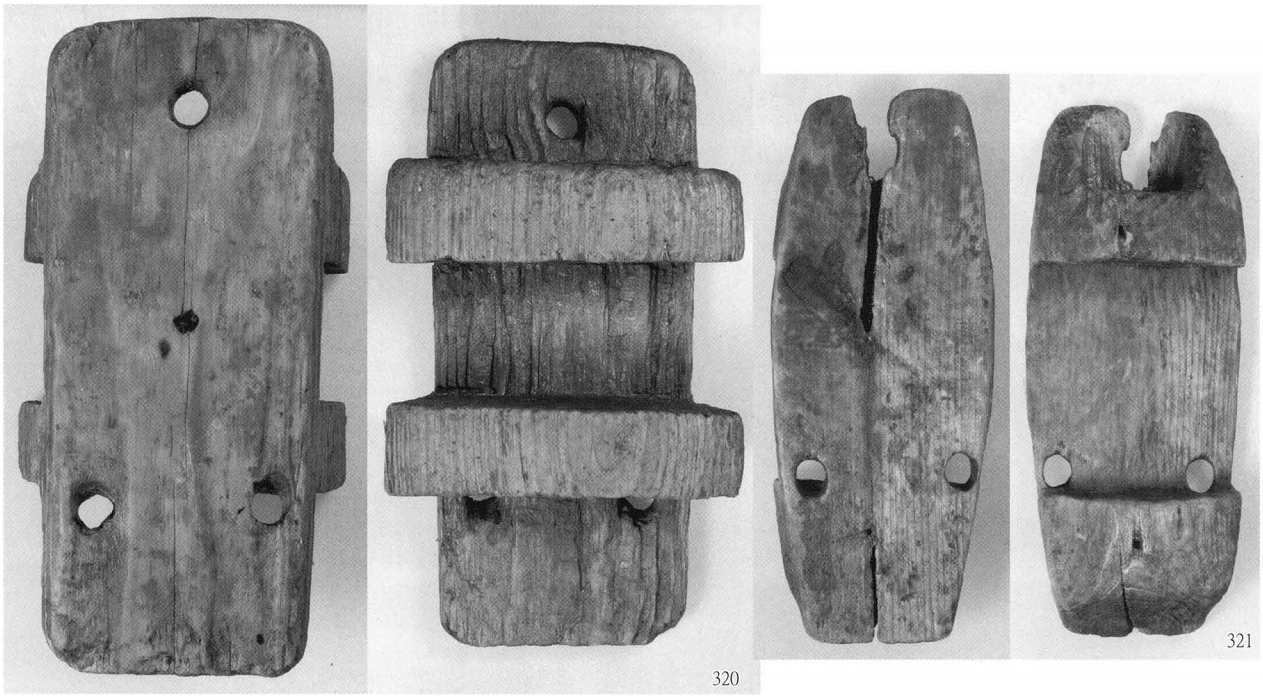

300

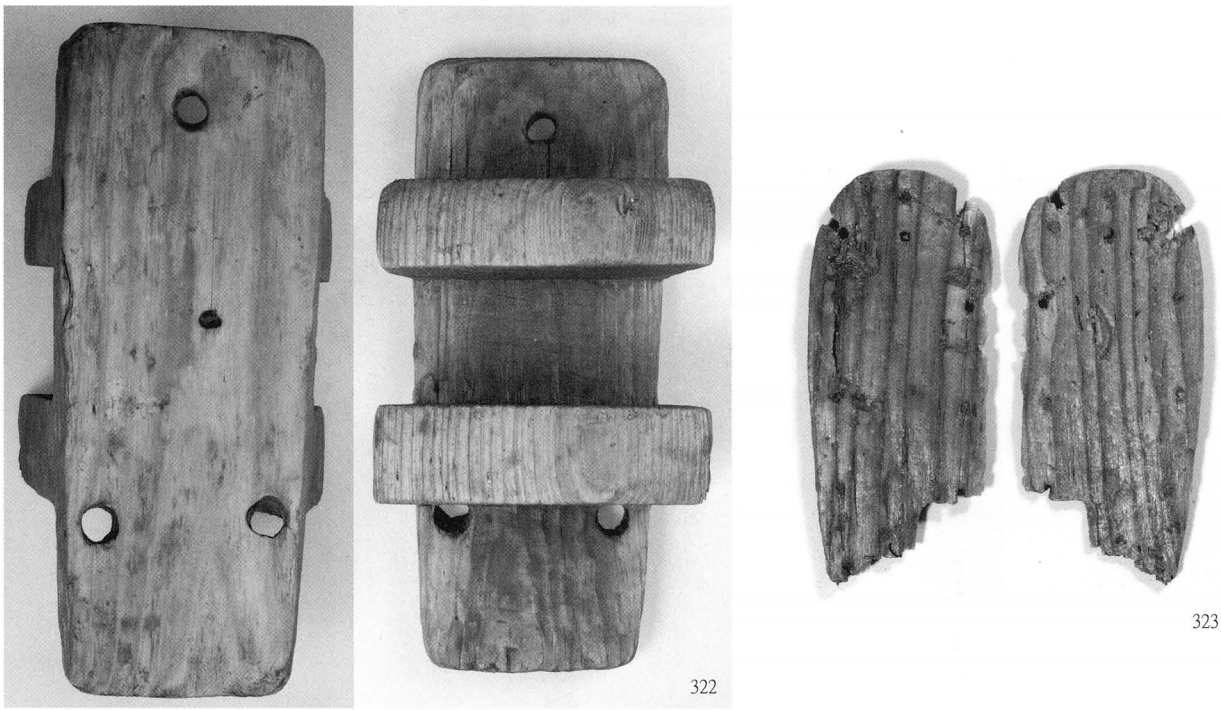

301


302

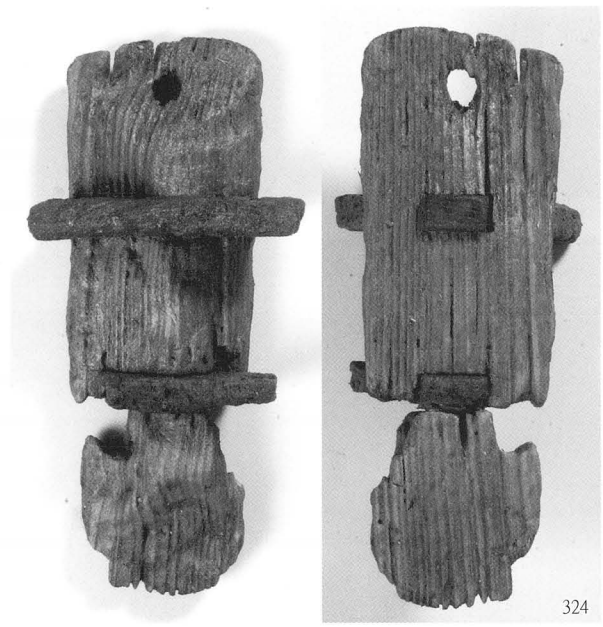
写真図版29　第23次調査出土木製品４（S=1/4）

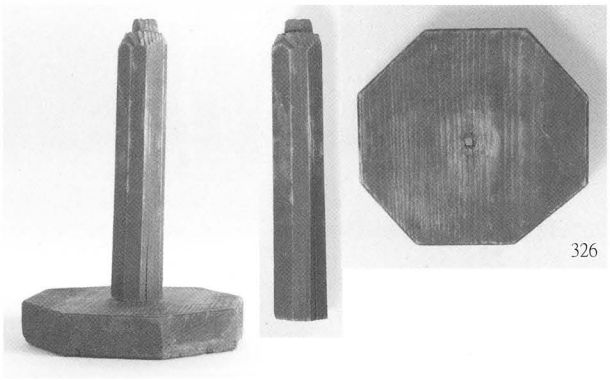
写真図版30　第23次調査出土木製品５（S=1/4　318・319：S=1/3）





写真図版31　第23次調査出土木製品６（S=1/3）



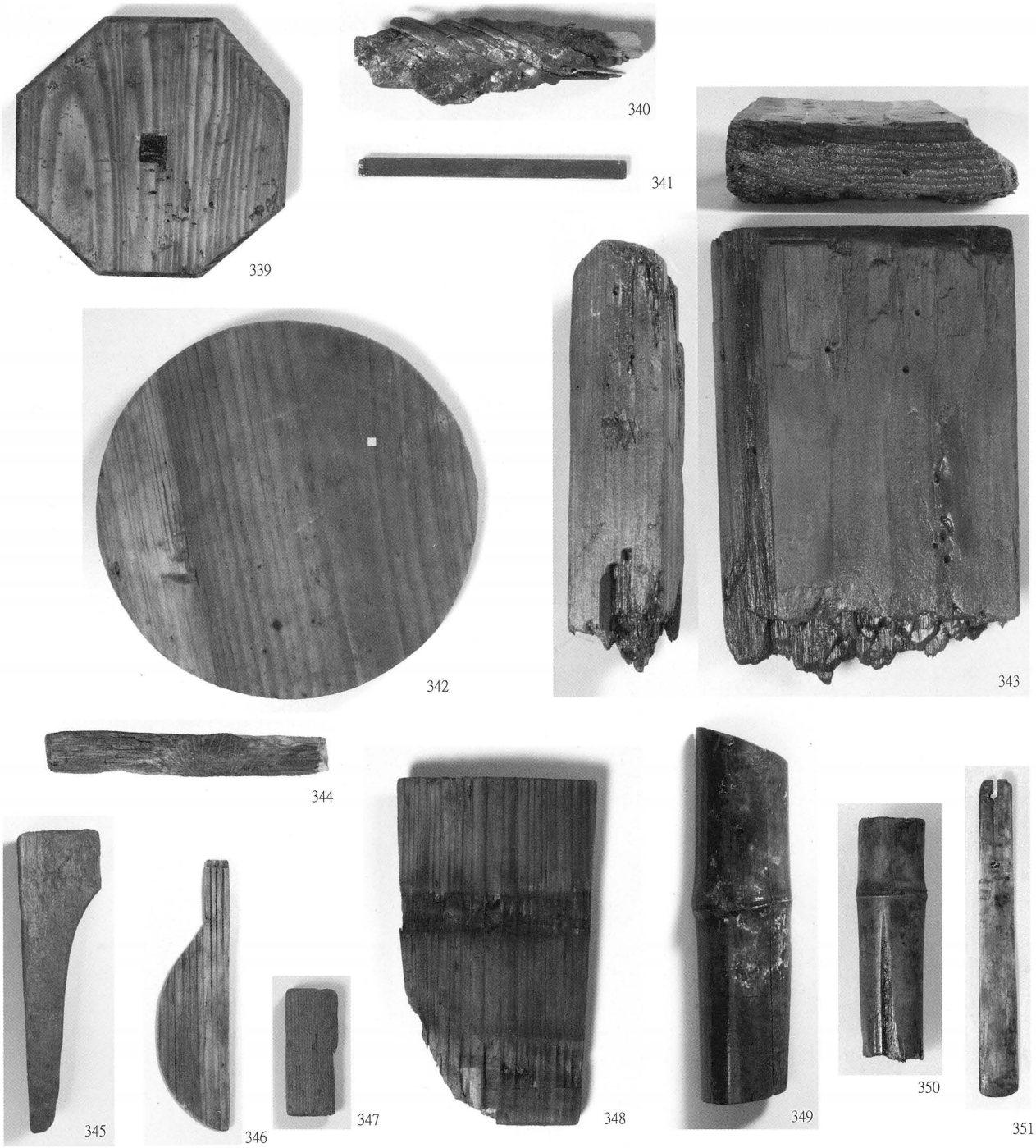


写真図版32　第23次調査出土木製品７（324・325：S=1/3　326：S=1/4　327：S=1/6）

写真図版33　第23次調査出土木製品８（S=1/4）

写真	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　　量（mm）	重量(g)	備　　考
328	2266	曲物　容器	1	KS－746・埋土	全長62　幅105　厚さ3.5	－	側板　綴じ目あり（桜皮か）
329	2263	桶・樽　側板	1	KS－746・埋土	全長410　幅95.5　厚さ32	－	板目材　切断あり　焼面あり
330	2268	不明	1	KS－746・埋土	径54　厚さ2.6～5.7	－	有孔円板　中央に穴1つ
331	2273	桶　側板か	1	KS－746・埋土4	全長90　幅60.1　厚さ13	－	桶　側板か　有孔突起　（刷毛か）
332	2269	道具　柄	1	KS－746・埋土	全長190　幅32　厚さ23	－	
333	2300	栓	1	KS－746・埋土	全長67　幅上35　幅下23	－	
334	2303	栓	1	KS－746・埋土	全長52　幅上28　幅下18	－	
338	2281	桶の側板か	1	KS－746・埋土4	全長505　幅25　厚さ13	－	板材　面取りなし
335	1968	板材	1	KS－746・埋土4	全長420　幅43　厚さ12	－	一面柿渋（茶色）塗り　釘穴2つ　調度品か
337	2277	柿材か	1	KS－746・埋土4	厚さ3	－	樹皮（杉か）48cm×10.5cm
336	2274	柿材か	1	KS－746・埋土4	全長460　幅55　厚さ4	－	樹皮（杉か）46cm×5.5cm

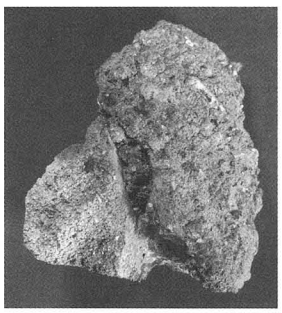
第55表　第23次調査出土木製品８観察表

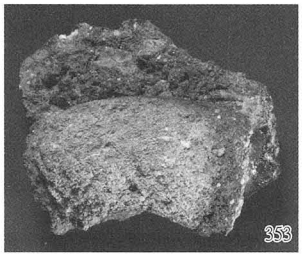


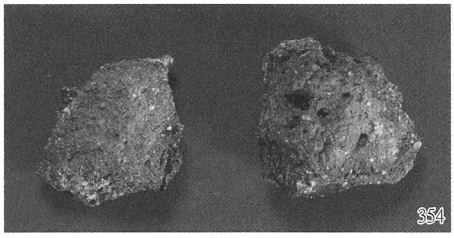
写真図版34　第23次調査出土木製品９（S=1/4）

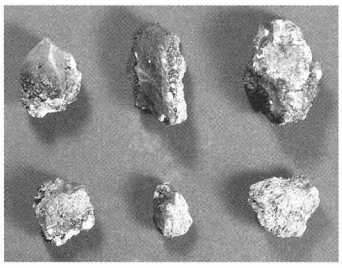
写真	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　　量（mm）	重量(g)	備　　考
339	1962	灯火具	1	KS－746・埋土4	全長123　厚さ35	－	燭台か　八角形　中央にほぞ穴
340	2343	カゴか	1	KS－746・埋土4	全長95　幅28　厚さ14	－	
341	2282	膳側板か	1	KS－746・埋土4	全長173　幅12　厚さ7	－	板材　柿渋塗り（茶色）か　約20cm
342	1961	桶か樽　底板	1	KS－746・埋土4	直径177　厚さ14	－	板目材
343	2598	大桶	1	KS－746・埋土4	全長（145）　幅96　厚さ30	－	側板（口縁部）　内側面取り　側面に木釘穴
344	2242	棒	1	KS－746・埋土4	全長(135)	－	棒状製品（割材　断面三角形）　表面沈線文様　折れている
345	2286	クサビ	1	KS－746・埋土4	全長188　幅40　厚さ52	－	釘穴2つ
346	2180	ヘラ状木製品	1	KS－746・埋土4	全長130　幅35　厚さ3		板材　約半分欠損か　木釘穴か
347	2583	雑具　柄	1	KS－746・埋土	全長80　幅39.5　厚さ14	－	
348	1998	桶　側板	1	KS－746・埋土4	全長160　幅92　厚さ17	－	タガ痕2条
349	2181	竹筒	1	KS－746・埋土4	全長243　幅76　厚さ6	－	節を抜いている　用途不明
350	2185	竹筒	1	KS－746・埋土	全長153　径40　厚さ5.4	－	節を抜いている　用途不明
351	2239	竹材	1	KS－746・埋土4	全長150　幅20　厚さ2.6	－	両端加工　釘穴2つ

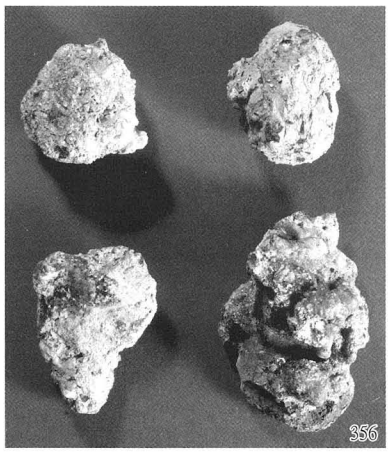
第56表　第23次調査出土木製品９観察表

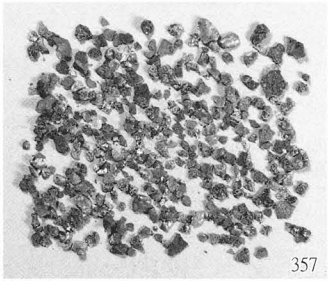

352

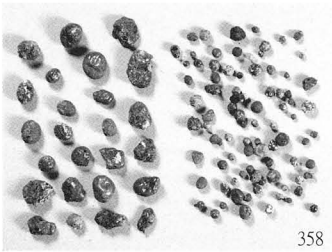

353


354

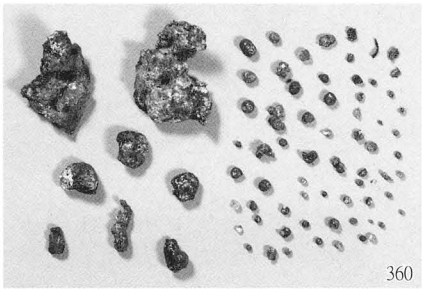

355

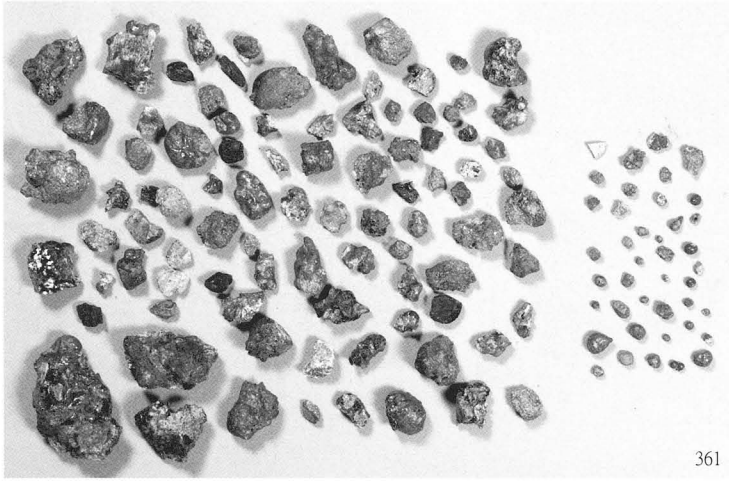

356

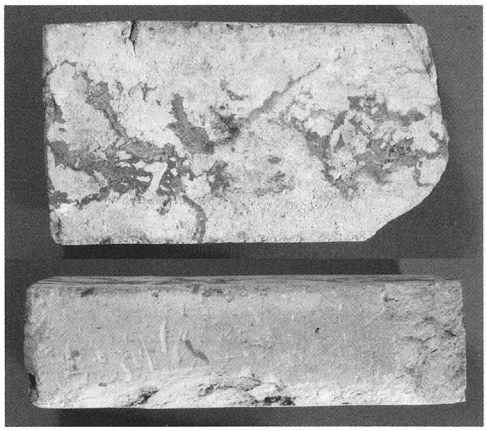

357


358

359


360

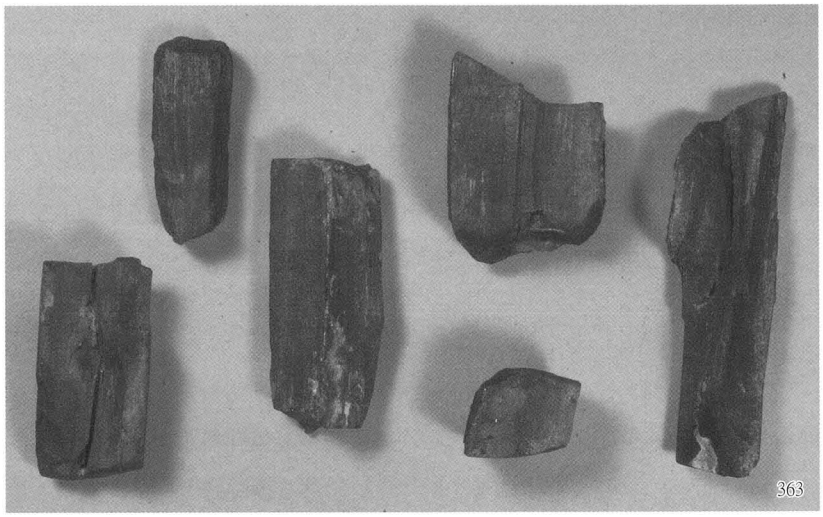

361

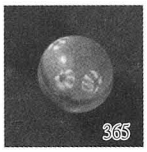

362

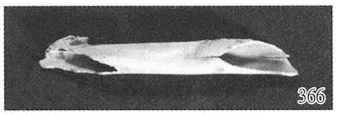
写真図版35　第23次調査出土鍛冶関係遺物（S=1/2）

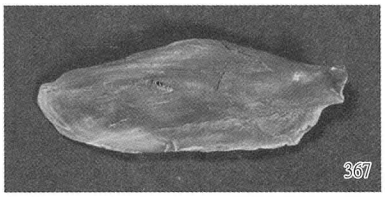
写真	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　量（mm）	重量(g)	備　考
352	347	羽口	1	KS－680・炭1	－	－	
353	1699	羽口	1	KS－680・炭2	厚さ（28）	－	
354	629	羽口	1	KS－680・炭1	－	－	羽口片2点
355	1700	鉱滓・羽口	1	KS－680・炭2	－	－	
356	1740	鉄滓	1	KS－680・土坑	－	－	4点
357	1746	鍛造剥片・粒状滓	1	KS－680・炭1	－	－	
358	1745	粒状滓	1	KS－680・炭1	－	－	
359	1748	粒状滓	1	KS－680・炭3	－	－	
360	1755	鉱滓・粒状滓	1	KS－680・1号炉	－	－	
361	1753	鉱滓・粒状滓	1	KS－680・炭2	－	－	

第57表　第23次調査出土鍛冶関係遺物観察表









写真図版36　第23次調査出土その他（S=1/2　365～367：S=1/1）

写真	遺物番号	種　類	区	遺構・層位	法　　量（mm）	重量(g)	備　　考
363	1201	木炭	1	KS－746・埋土4	－	－	燃料用か
364	2340	紐	1	KS－746・埋土4	－	－	
365	147	とんぼ玉	2	Ⅱ	－	－	花文　穴1個　かんざしか
366	1090	焼骨	1	KS－746・埋土4	直径約4mm	－	中空
367	1087	魚の骨か	1	KS－746・埋土4	－	－	
368	2597	植物遺体	1	KS－746・埋土4	－	－	クルミ・ウリ種子など34点
369	2342	植物遺体	1	KS－746・埋土4	－	－	トチノミ果皮など7点
370	2344	植物遺体	1	KS－746・埋土4	－	－	クルミなど5点

第58表　第23次調査出土その他観察表

5．絵図・文献の検討

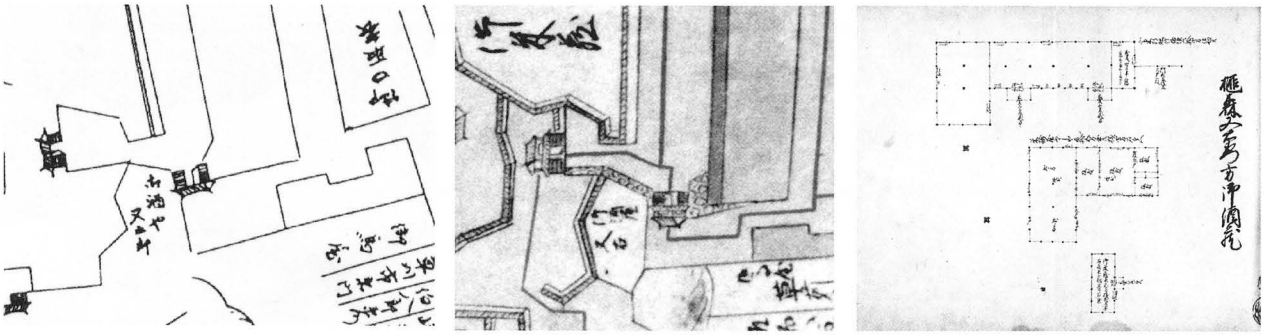
今回調査を行った造酒屋敷跡の位置や建物の配置等について時期的な変遷を明らかにするため、江戸時代の絵図の比較を行った。

造酒屋敷跡の位置は、樋森家が務めた御用酒屋（御酒屋）と記された絵図から巽門の西、清水門の南東に位置していたことが読み取れる。現在においてもその場所は、一部が近代以降の参道整備や公園整備等により改変されているが、平場が残存している。このことから、現在の巽門と清水門の間にある平場が造酒屋敷跡の一部であるといえる。

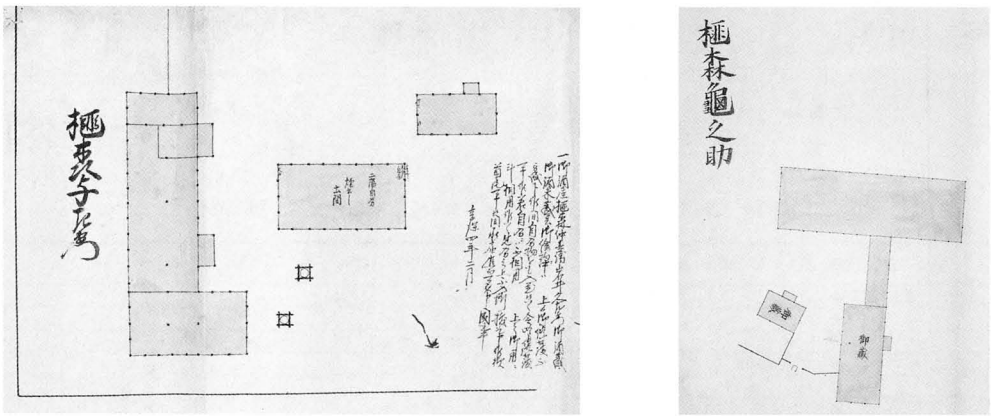
次に建物配置であるが、絵図における建物の配置には大きく３段階の変遷を確認することができた。以下、その概要について述べる。

Ⅰ段階　寛文～元禄年間（1661～1704）の『仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調』に描かれた段階である（第49図③）。この絵図が造酒屋敷（酒蔵）の建物配置を描いた現存する最古のものであり、これ以前についての建物配置等は知ることができない。方位は記されておらず、建物３棟と井戸２基が描かれている。上に大きく描かれている建物が主屋で、この建物の右側（東か）に屋敷の入口があると推測される。次のＬ字形の建物には「米擣屋ふかし屋」「煙出し」、下の建物には「御米蔵」と記されていることから、それぞれ作業場と米蔵であると推測される。また、絵図の右側に「樋森又右衛門方御酒蔵」と記されているが、文献から寛文～元禄年間に３代当主だった又右衛門を指すと考えられる。

Ⅱ段階　安永年間（1772～1781）の『御修覆帳』（以下、『御修覆帳・古』）に描かれた段階である（第49図④）。Ⅰ



①　②　③



④　⑤

①『仙台城下絵図』　御酒や又五郎　寛文８・９年（1668・69）　第二高等學校所蔵 模写図　昭和11年（1937）模写
②『仙台城下絵図』　御酒屋　又右　寛文９年（1669）　宮城県図書館蔵
③『仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調』　酒蔵　寛文～元禄年間（1661～1704）　宮城県図書館蔵
④『御修覆帳』　酒蔵　樋森与左衛門　安永年間（1772～1781）　東北大学大学院工学研究科蔵
⑤『御修覆帳』　酒蔵　樋森亀之助　文化・文政年間（1804～1830）　宮城県図書館蔵

第49図　絵図からみた造酒屋敷

の段階同様、方位は記されておらず、建物３棟と井戸２基が描かれている。ただし、作業場がＬ字形から長方形の二階建てになり、米蔵の入口が半間南にずれるなどの変化が読み取れる。また、井戸の位置もＩの段階より近接して描かれている。このことから建物の修復もしくは改築が行われていたことがわかる。なお、絵図には６代当主与左衛門の名前と享保４年（1719）２月付けの付記が記されている。これは享保４年に描かれたものが、のちに安永年間にまとめられた『御修覆帳・古』へ綴じ直されたと推察される。享保年間の当主が与左衛門であることは文献からも裏付けられる。

Ⅲ段階　文化・文政年間（1804～1830）の『御修覆帳』に描かれた段階である（第49図⑤）。これまでの絵図とは大きく異なり、大小２棟の建物が通路によって結ばれてＴ字形となり、１棟が離れて描かれている。屋敷入口も変化した。規模の小さな建物２棟には「御蔵」と記されている。これは屋敷地内で大規模な改築が行われたことが推察できる。絵図の左側に亀之助の名前が記されており、文献から文化年間に９代当主だった亀之助と一致する。なお、大正時代の文献（註１）に「仙台城内榧森御酒屋之図」が所収され、その図には建物が３棟以上描かれている。

今回の調査では、上記の変遷を考古学的に検証することが主要な目的の一つであった。今回の調査において、KS-746井戸跡から出土した６代当主「榧森与左衛門」銘の木簡から、Ⅱ段階の以降の屋敷にかかわる遺構と推察される。来年度以降も継続的な調査により全体像を解明していく必要がある。

文献の面からも造酒屋敷（酒蔵）の存在を検討するため、榧森家および造酒屋敷に関連する文献および記事を抜粋し、これをまとめる作業を行った。ここに掲載した第59･60表はその成果の一部である。記事の大半は榧森家に代々伝わった通称『榧森家文書』である。『榧森家文書』は榧森家の子孫が所蔵していた。大正から昭和にかけて、複数の文献（註２）に紹介されており、慶長13年（1608）に初代又右衛門（以下、又右衛門）が仙台に招かれ、御用酒屋に命じられてから、明治９年（1876）に酒造業を廃業するまでの記事を中心に掲載した（おもに『宮城県酒造史別篇』より引用）。また、又右衛門来仙以前の仙台での酒造に関する記事と榧森家同様、又右衛門の推薦により御用酒屋となった岩井家の記事についても掲載した。

仙台藩初代藩主で又右衛門を仙台に招いた伊達政宗から又右衛門に宛てた書状が７通確認されている。また、今回の調査で発見された木簡に名前が書かれている６代当主与左衛門が寛延元年（1748）に記したとされる「榧森与左衛門書上」では、又右衛門から自分までの歴代当主の功績を挙げている。与左衛門は享保17年（1732）11月から享保18年（1733）３月まで奈良に滞在して酒造法を習得しており、その後、次々と新しい御膳酒を藩主に献上している。８代当主市郎左衛門も奈良に赴き、酒造法を見聞する記録がみられる。このように歴代当主が奈良で当時最新の技術を習得し、その酒造法を学んだ領内の酒屋が相次いだとみられる。一方で又右衛門の頃に藩から支給されていた酒造道具や酒造用の品物、紙、麻、柿渋、作業に当たる人足などは元禄年間（1689～1703）頃から、支給が中止となり、人足の定数が減らされるようになる。さらに藩の財政難から屋敷等の修復も自費で賄わなければならなかった。やがて、市中（町）酒屋の台頭により、御用酒屋としての榧森家はやがて衰退していったと考えられる。明治時代になって仙台城が軍用地となり、12代当主孝蔵はこの地でなおも酒造りを続けるが、明治７年（1874）、大伯母やすに譲って隠居し、明治９年（1876）にやすが廃業することにより、仙台城内での酒造りは終焉を迎える。

今後も関連資料の収集を進め、造酒屋敷の調査を行う上での参考とし、併せて集成していく予定である。

註１　伊達邦宗　『伊達家史叢談 巻之五』 1921

註２　寺崎巻石　『藩祖以来仙臺物産誌』 1917

矢野顕蔵　『仙臺藩祖時代実業一斑』 1914

鈴木省三　『仙臺物産沿革』 1925

仙臺市史編纂委員会　『仙臺市史９　資料編２』 1953

元　号	西暦	月	事　　項	当　主	藩　主
慶長10	1605		大泉勘右衛門尉、仙台国分町にて酒造を始める。（大泉岳陽翁小伝）	―	政宗
慶長13	1608		榧森（旧姓雲野）又右衛門、柳生宗矩の紹介により伊達政宗に召抱えられ、城内詰御酒御用に仰せつかる。	又右衛門	
慶長年間	1596～1615		又右衛門の推薦により、岩井家が奈良より召され、御用酒屋として仙台元櫓丁で酒造を始める。（藩祖以来仙台物産誌）		
元和元	1615		又右衛門、政宗の命により、京都で『忍冬酒』の製造法を習得する。		
寛永18	1641		又右衛門、隠居願いを出すも慰留され、藩主より酒庵の号を許される。		忠宗
万治2	1659		又右衛門病死、又五郎が2代当主となる。	又五郎	綱宗
寛文2	1662		又五郎病死、又右衛門が3代当主となる。	又右衛門	綱村
天和3	1683	10	又右衛門、御膳酒の出来が良いため、藩主より時服を拝領する。		
貞享2	1685	11	又右衛門、御膳酒の出来が良いため、藩主より時服を拝領する。		
元禄2	1689	7	又右衛門、日光山普請に付き、酒造に係る費用の一部を返上する。 米搗方人足、米100石に付き238人を170人に、定付人足を3人を2人に減らされる。		
元禄7	1694		又右衛門病死、茂市郎が4代当主となる。	茂市郎	
元禄16	1703		茂市郎病死、又五郎が5代当主となる。	又五郎	吉村
宝永6	1709		城下御酒造御免石かやの森分450石、岩井分250石（渡部文書）		
正徳元	1711		又五郎病身につき隠居、与左衛門が6代当主となる。	与左衛門	
享保4	1719	2	藩が倹約中につき、酒蔵、米蔵等を自費にて修築する。（御修覆帳）		
享和16	1731	1	大雨により屋敷が損壊する。（獅山公治家記録）		
享保17	1732	6	南都（奈良）より榧森家の師匠舛屋六兵衛来仙。与左衛門、藩主の命により南都流酒造法の口伝を受ける。		
		11	与左衛門、南都寒造酒造法を見聞、習得するため南都に出発する。		
享保18	1733	3	与左衛門、南都酒造法を習得し帰仙、南都よりの諸白樽を藩主に献上する。		
享保20	1735	3	御膳酒『勝ノ井』を藩主に献上する。		
享保年間	1716～1735		定付人足は一切廃し、自費で人足を調達することになる。酒蔵・居宅・酒造道具、酒造に係る紙・麻・柿渋など一切も自費（自分入料）となる。		
元文3	1738	5	御膳酒南都流『玉ノ井』を藩主に献上する。		
		7	御膳酒南都流『秋ノ井』、『夏井』を献上する。		
		10	御膳酒『中汲増井』、『薄濁 永井』を献上する。		
		11	新御膳酒『壺ノ井』を献上する。		
元文4	1739	3	御膳酒南都流『安ノ井』、『竹本』を献上する。		
			与左衛門、出入司支配組抜に仰せ付かる。		
元文5	1740	12	南都流『みぞれ酒』を献上する。		
延享2	1745	11	与左衛門、長年に亘る勤続の功績により御足軽御小人組抜並に仰せ付かる。		宗村
延享3	1746	3	藩主、榧森家酒蔵を訪れる。		
寛延元	1748	8	藩主、『榧酒』を御酒屋榧森家・岩井家に求めるが無いために、榧森家で仕込み9月17日に献上する。		
			『榧森与左衛門書上』を記したとされる。（仙台市史）　※延享3年（1746）説あり		
寛延2	1749	7	与左衛門隠居、与助が7代当主となる。	与助	
寛延3	1750	11	名酒『いにん酒』、『紫蘇酒』を献上する。		
宝暦2	1752		与助死去、市郎左衛門が8代当主となる。	市郎左衛門	
宝暦4	1754		御膳酒『松ノ井』、『朝ノ井』、『梅ノ井』を献上する。『菊酒』を仕込む。		
宝暦8	1758		『椿井』、『亀ノ井』、同年7月に名酒『榧酒』を献上する。		重村
宝暦12	1762		『千代井』、『松ノ井』、『竹ノ井』を献上する。		
明和7	1770		藩主より『印籠酒』の製造を命じられる。		
安永4	1775		市郎左衛門、自費にて南都に赴き、酒造法について見聞する。		
天明3	1783		南都流諸白酒二品を献上し、藩主より晒布一疋を拝領する。		
寛政元	1789		市郎左衛門、酒蔵や酒造道具の修復・修繕費用の求めに対し、藩が20両のみしか給付しなかったことや自費による負担増などの窮状について願いを出す。		
享和2	1803		市郎左衛門死去、亀之助が9代当主となる。	亀之助	周宗
文化10	1813		亀之助死去、惣吉が10代当主となる。	惣吉	斉宗
文政13	1830	11	惣吉、勘定所あてに、引き続き市中払い出店2軒の無役御免を求める願いを出す。		斉邦
安政4	1857	11	南都、伊丹の酒造法を榧森家に入門した門弟に指導する。	不明	慶邦
年代不明			又右衛門が11代当主となる。	又右衛門	不明
年代不明			孝蔵が12代当主となる。	孝蔵	慶邦
明治4	1871		孝蔵、清酒75石の酒造願いを県庁に提出する。（宮城県酒造史）		
明治7	1874		孝蔵、酒造業を大伯母やすに譲り、隠居する。（藩祖以来仙台物産誌）	やす	
明治9	1876		やす、酒造業を廃業する。（藩祖以来仙台物産誌）		

第59表　榧森家関連年表

年	月日	文書名	宛先	差出人	造酒屋敷関係部分	所蔵者
慶長12年 または 慶長15年 (1607) (1610)	9.11	茂庭石見守綱元宛書状	茂庭綱元	伊達政宗	かの屋しきに此度のさけつくり、必々可指置候、手前之ざうさにてくらをもつくらせ、たうぐまてざうさを入、こしらへ候間	登米市歴史博物館 (亘理家文書)
元和2年 (1616)	1.1	諸白屋又五郎 榧森又右衛門宛 黒印状	榧森又右衛門 (初代)	伊達政宗	壱人分　一月ニ御しゅ壱斗五升つゝ御わたし候へく候けんわニねん　正月一日（黒印） 御つかひ九郎さへもん　又五郎殿参る	
元和2年 (1616)	10.14	諸白屋又五郎 榧森又右衛門宛 黒印状	榧森又右衛門 (初代)	伊達政宗	酒壱斗五升つゝ、毎月、宮内因幡所へ可相渡候、但、喝喰丸つかい用也、仍如件、 元和二年　十月十四日（黒印） もろはく屋又五郎	
元和5年 (1619)	3.9	諸白屋又五郎 榧森又右衛門宛 黒印状	榧森又右衛門 (初代)	伊達政宗	上之丸之御酒、壱月付は、壱斗五升つゝ御上候へく候、 元和五年　三月九日（黒印） 御使文右衛門　もろ白や又五郎殿	
元和9年 (1623)	3.7	諸白屋又五郎 榧森又右衛門宛 黒印状	榧森又右衛門 (初代)	伊達政宗	月なみのうけとり御しゅ 一みかわ様御やしきへ、一月ニ仁斗四升つゝ 一ゑちせん様御やしきへ、一月ニ仁斗五升つゝ、 一ゑもん様御やしきへ、一月ニ仁斗四升つゝ、 一御かつしき様御やしきへ、一月ニ仁斗四升つゝ、 このとをりあひわたし候へく候、 元和九年　三月七日（黒印） 又五郎	
寛永4年 (1627)	8.21	榧森又右衛門宛 黒印状	榧森又右衛門 (初代)	伊達政宗	おきんつほねへ亦々もろはく一日ニ壱斗五升つゝ相わたすへく候、たゝし、七月廿一日よりのつもりにわたすへき也、以上、 寛永四年　八月廿一日（黒印） かやのもり又ゑもん	
寛永4年 (1627)	12.15	榧森又右衛門宛 黒印状	榧森又右衛門 (初代)	伊達政宗	せんきく様へ月なみの御しゅ、一月に壱斗五升つゝ、むらかみ正すけへ相わたすへき也、以上、 寛永四年　極月十五日（黒印） かやのもり又ゑもん	
寛永10年 (1633)	6.16	榧森又右衛門宛 黒印状	榧森又右衛門 (初代)	伊達政宗	酒三升、治部大輔奥方へ毎月可遣候、但、柴田勝兵衛・佐瀬所左衛門ニ可相渡者也、仍如件、 寛永十年　六月十六日（黒印） 御酒屋　又右衛門	
寛文～ 元禄年間 (1661～ 1704)		仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調			一　御酒屋榧森又右衛門	宮城県図書館
享保16年 (1731)	2/3条	獅山公治家記録			去年二十九日ヨリ翌朔日子刻ニ至マテ大雨、榧森与左衛門・勘定所東方ノ塁崩ル	仙台市博物館
寛保元年 (1740)	1月	勤功書		千田理兵衛	御本丸下御酒屋方破損共ニ道□　□所々御繕共ニ拙者儀	仙台市博物館
寛延元年 (1748)		榧森與左衛門書上		榧森與左衛門		
寛延4年 (1751)	3.19	御城中御締等之部		千葉名太夫	一、(榧森与左衛門)同人居宅江　同壱人 右ハ榧森与左衛門居宅江相入申候、与左衛門家内共ニ居懸ニ御座候事	㈶斎藤報恩会
安永年間 (1772～ 1782)		御修覆帳			榧森与左衛門	東北大学大学院工学研究科
文化・ 文政年間 (1804～ 1830)		御修覆帳			十二　御酒屋榧森亀之助	宮城県図書館
文化～ 天保年間 (1800代 前半)		御給仕心得之事			御本丸并榧森上之雉子御鳥屋	㈶斎藤報恩会
安政2年～ (1855～)		初鏡心之手綱			一、御酒蔵壱軒　是ハ巽御門と申所ニ有之事、『川内ヱツニ有、此御門江続キニテ西也』巽ノ御門　追廻ヨリ御米蔵之方江入口也、附、右御江続き西之方ハ御酒屋榧森辰吉と云組抜居所也、	仙台市博物館

第60表　造酒屋敷関連資料一覧

6．まとめ

第23次調査では、以下①～⑦の成果が得られた。

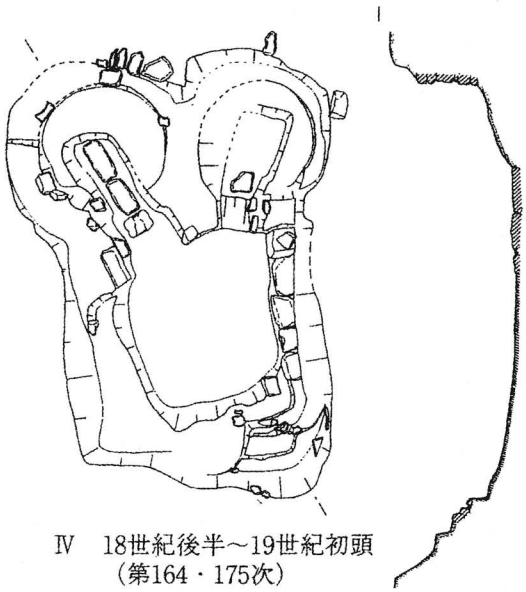
①　1区の中央部では、第2遺構面からKS-746井戸跡を検出した。井戸跡の埋土から18世紀代のものを中心とする陶磁器、土師質・瓦質土器、煙管、古銭、砥石などのほか、木簡をはじめ漆器椀、下駄、箸、樽や桶の部材、栓、井戸支柱材などの木製品が多数出土した。出土した木簡のうち、榧森家6代当主「榧森与左衛門」と記されたものが3点確認された。また、年貢米の荷札木簡が出土しており、この場所に酒造りで使われる大量の米が藩から支給されていたためであると考えられる。ほかに米俵や樽、桶の部材、栓など酒造りにかかわる可能性のある遺物も多数出土した。厚みのある大型の桶の部材は酒造りの仕込み貯蔵などに使われた大桶の可能性が考えられる。また、さまざまな形をした木製の栓も、ほかの遺跡に比べて数多くみつかり、多くの木製容器が使われていたことが推測される。陶器では、17世紀代の厚手の備前大甕の破片が16点出土した。貯蔵用のもので、酒などを入れていた可能性が考えられる。

これらの出土遺物から、調査地が「榧森家の造酒屋敷」の一角であることが裏付けられたと考えられる。

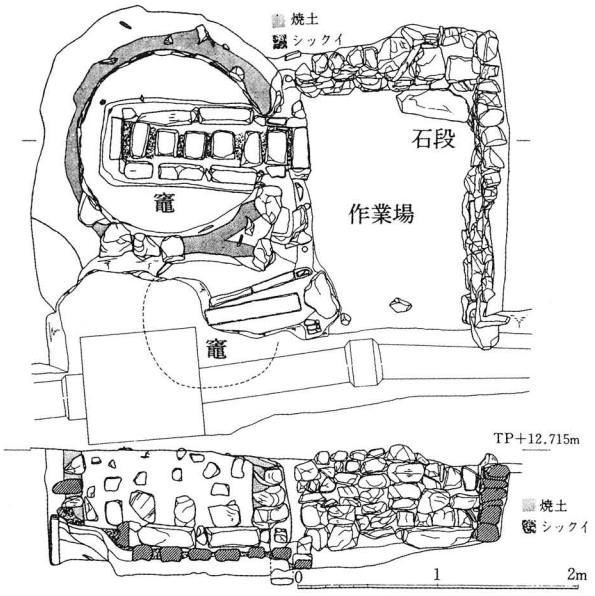
②　1区西部では、第2遺構面からKS-768カマド跡を検出した。平面形は横板で囲まれた部分が方形で、北側に加工された方形の石材の列が接続する形状の遺構である。検出当初は用途が不明で木製枡として扱ったが、その後、酒造にかかわる遺跡や遺構の検討を行い、酒造用と考えられるカマドとして報告されている伊丹郷町第164次・175次調査（兵庫県伊丹市）と玉造小学校内の調査（大阪府大阪市）で検出された遺構に類似していることがわかった。カマドの構造については松尾信裕氏の論文（註1）で、「大小二つの竈が並び、さらに焚き口の前に作業場がつくられた。（中略）竈の底には石で組んだ溝が作られ、灰や炭を掻き出す箇所と考えられる。作業場は1.1m×1.8m以上の長方形で、焚き口以外の壁は石垣が積まれていた。（中略）作業場の床には灰や炭が厚さ3cm程たまっており、竈の中から掻き出したものと考えられる。（一部要約）」と述べている。KS-768は上記の論文によると、北側の石列がカマドにあたり、横板に囲まれた部分が作業場にあたると推測される。

カマドは1つと考えられ、上部が削平されたためにカマド本体は失われ、底部の石組溝にあたる石のみを検出したことになる。なお、2連の可能性もあるため、遺構の精査を行ったが東側ではカマドの痕跡は確認されなかった。

作業場については石垣ではなく、横板で囲まれていたと考えられる。規模や形は、玉造小学校の調査で検出されたものが1.1m×1.8m以上の長方形であるのに対し、KS-768では1.15m×2.8mの長方形で類似しているといえる。



第50図　伊丹郷町第164・175次調査検出カマド遺構平面図



第51図　玉造小学校内調査かまど遺構平面図（1/50）

なお、作業場と考えられる箇所の上面に３～４cmの炭の堆積がみられることから、カマドから掻き出した炭と考えられる。ここからは桟瓦や瀬戸美濃染付端反碗が出土した。

構築時期については伊丹郷町のカマドが18世紀後半から19世紀初頭、玉造小学校のかまどが18世紀中ごろと考えられている。KS-768は検出面が第2遺構面とする近世の遺構面であり、遺構の南側にみられる段差より一段低い位置で検出されていることから19世紀代の遺構の可能性が考えられ、２つの遺構と構築年代が近い。

類似する遺構は近畿地方の事例であるが、造酒屋敷で酒造りを行った初代榧森又右衛門は大和国（現在の奈良県）出身であり、江戸時代初頭に「南都諸白」として酒造りが盛んであった南都（奈良）流の酒造法を用いていた。文献によると、その後も歴代当主が最新の技術を習得するために奈良へ赴いていることから、上方（おもに大阪・京都とその周辺地域）の酒造技術を取り入れていたと考えられる。カマドの構造が類似する点もこのような背景にあると推察される。

以上の点からKS-768はカマド跡と考えられる。造酒屋敷内での酒造にかかわる遺構が検出されたことからも、この地で酒造りが行われていたことが明らかになった。

また、仙台藩が江戸時代の初めから、当時の先進地である上方の酒造技術を東北地方に導入した点は評価される。

③　１区の第２遺構面からは、造酒屋敷の建物に伴うと考えられる礎石跡や集石、石列、柱穴などを検出した。それぞれ位置関係などを検討したが、明瞭に建物配置と考えられる遺構間の組み合わせがみられず、今後の更なる検討が必要とされる。また、屋敷内の排水施設と考えられる石組溝、溝跡、木樋なども検出した。遺構の切り合いもみられ、作り替えによるものと考えられる。KS-695･696･722･751･759溝跡は上端幅や方向、溝内に砂が堆積している検出状況から、KS-705木樋が作られる以前の木樋の可能性が考えられる。KS-799井戸跡はKS-681池状遺構西壁下部で検出されており、第２遺構面より古い遺構面が存在すると考えられる。

④　１区南東部では、第１遺構面からKS-680鍛冶工房跡を検出した。平面形は台形を呈し、規模は東西４m以上、南北４mである。南半部で炉跡２基を検出した。炉跡の周辺を中心に床面上には炭層が分布している。炭層はサンプルを採取して水洗作業を行い、炭の中から鍛造剥片、鉄滓、鉱滓、粒状滓などを検出した。また、羽口も出土しており、これらの遺物などからこの場所で鍛冶作業が行われた工房があったと推測される。工房に伴うと考えられる掘立柱建物跡も検出した。鍛冶工房の存続時期は榧森家が城内から市内に移住した明治10年（1877）頃、下限は招魂社（現宮城県護国神社）の参道整備が行われた明治30年代後半頃と考えられる。

⑤　２区の調査では、KS-687石組溝を検出した。清水門に近い位置で検出していることから、造酒屋敷北側の屋敷境となる石組溝である可能性が考えられる。

⑥　３区の調査では、KS-800石組溝、KS-801暗渠状遺構を検出した。ともに造酒屋敷に伴う排水施設と考えられる。

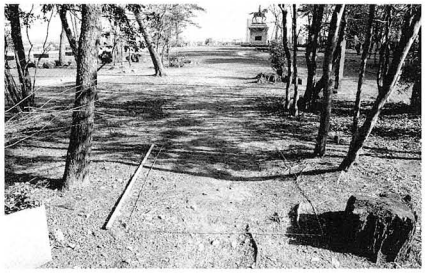
⑦　遺物としては、近世の遺構面である第２遺構面から陶磁器、土師質･瓦質土器、瓦、煙管、古銭、砥石、木簡、漆器椀、下駄、箸、樽や桶の部材、栓、井戸支柱材などが出土した。近代の遺構面である第1遺構面からは陶磁器、羽口、瓦、レンガ、ガラス瓶、金属製品、鍛造剥片、鉄滓、鉱滓、粒状滓などが出土した。

註１　松尾信裕　「玉造小学校内で発見された酒造遺構」　大阪市文化財協会編『葦火』９号　1987

Ⅴ．第24次調査

１．調査目的及び調査経過

第24次調査は、大広間跡虎の間西側、広縁部中央の礎石跡を調査指導委員会の指導により、遺構確認を目的として平成21年（2009）12月14日から12月15日まで実施した。調査面積は、青葉山公園として管理されている仙台市有地内の2.25㎡である。



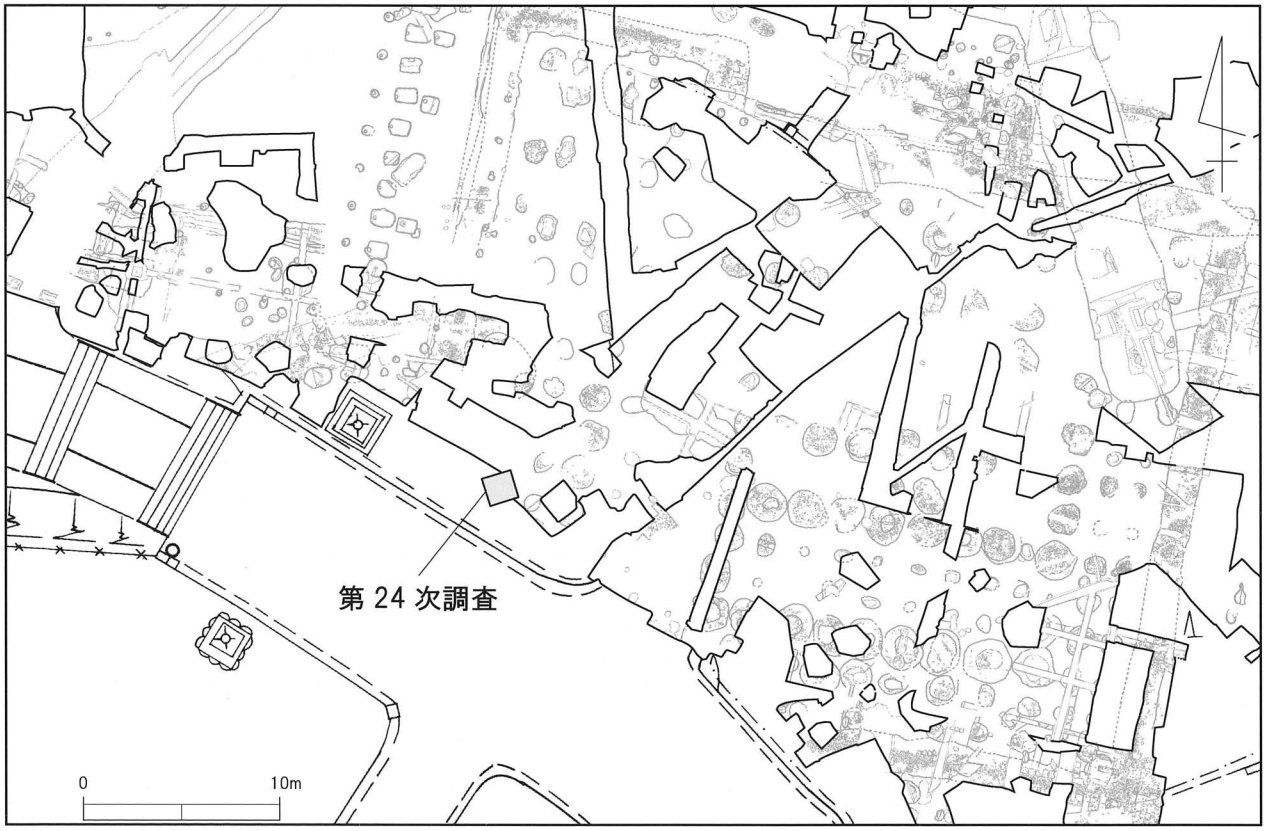
第52図　調査前状況（西から）

調査区の設定や調査前の現況写真撮影の後、12月14日から人力による遺構面の検出作業を開始した。掘削は表土Ⅰ層を除去後、明治以降のブロック土Ⅱa層を除去した。掘削の過程では第20次調査区とともに、第１次調査区の埋め戻し土を確認した。灰色の硬くしまったⅡb層を確認後に除去し、調査区中央に不整形で横長の遺構を検出した。その周囲には大広間建築前に敷いた整地土Ⅲ層が一面にみられたことから、この遺構が第20次調査で一部のみ検出したKS-531礎石跡であることを確認した。調査では、KS-531礎石跡の遺構全体を検出した。遺物は、磁器、瓦が出土した。その後、調査区の埋め戻し等の作業を終え、12月15日に調査箇所を原状に復した。

平成22年３月12日に第24回仙台城跡調査指導委員会を開催し、調査成果の最終的な確認を行った上で、本報告書を刊行するに至った。

２．基本層序

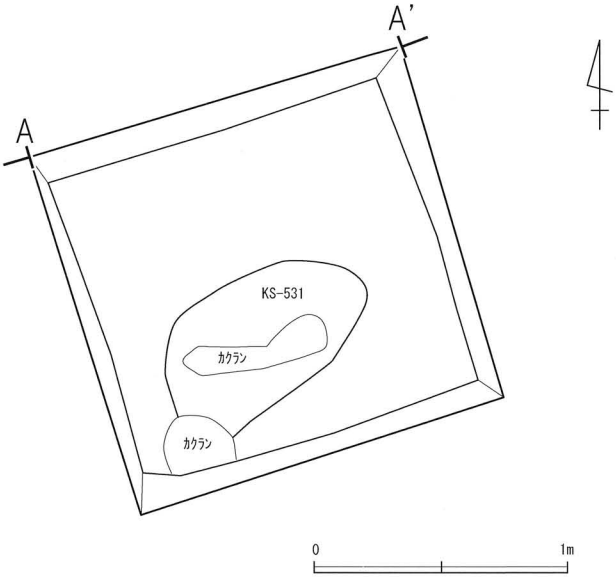
基本層は、Ⅰ層（現表土）、Ⅱ層（近代以降の整地層）、Ⅲ層（近世の整地層）に大別される。Ⅱ層は２層に細分した。Ⅱa層はにぶい黄褐色粘質土、Ⅱb層はにぶい黄褐色砂質シルト主体である。Ⅲ層は黄褐色粘土質シルト主体で、礎石跡の検出面である。



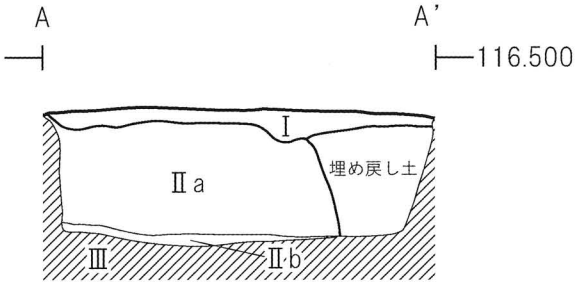
第53図　第24次調査区位置図（1/400）

3．検出遺構と出土遺物

・KS-531礎石跡　今回の調査で確認した礎石跡はKS-531の１基で礎石が無く、礎石抜取り穴のみを検出した。抜取り穴の検出面はⅢ層上面である。平面形は不整円形で一部木の根により切られている。規模は東西85cm、南北50cmである。根固め石と掘り方は確認されなかった。出土遺物は近現代の磁器２点、平瓦14点、丸瓦３点、鳥伏間（巴文）１点で、いずれもⅡ層および撹乱から出土した。



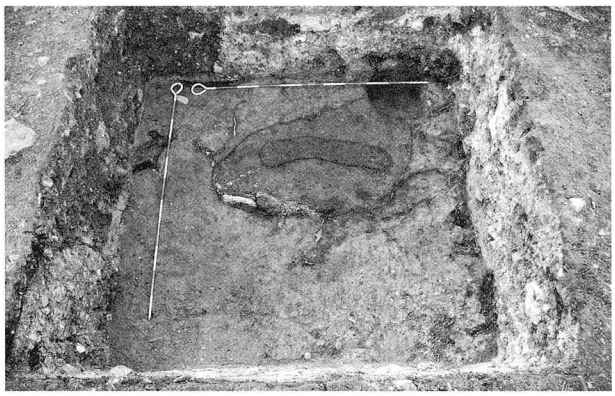
第54図　第24次調査遺構平面図（1/30）



第55図　第24次調査北壁断面図（1/30）

遺構番号	遺構・層位	土色		土質	備考
		土色No.	土色		
基本層	Ⅰ	10YR4/4	褐色	砂質シルト	細かな木根を多く含む
	Ⅱa	10YR7/2	にぶい黄褐色	粘質土	径8cm内のブロックとなり、径5cm内の円礫を少量含む　10YR3/3暗褐色粘質土ブロックを少量含む
	Ⅱb	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色シルトを粒状に僅かに含む
	Ⅲ	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	10YR6/8明黄褐色粘土質シルトを全体に密に含む　径5cm内の円礫をまばらに含む
KS-531	埋土1	10YR4/6	褐色	シルト	微細な黄褐色粘土質シルトブロックを全体に含む　一部に径5cm内の明黄褐色粘土質シルトブロックを含む

第61表　第24次調査土層注記表



第56図　調査区全景（北から）

第57図　KS-531礎石跡検出状況（北から）

4．まとめ

今回の調査では、第20次調査で一部しか検出されなかったKS-531礎石跡の遺構全体を確認することができた。また、これまで大広間跡の調査で検討材料としてきた『御本丸大広間地絵図』（斎藤報恩会蔵）に描かれている広縁部西辺の柱位置に礎石があったことが検証された。

Ⅵ. 第25次調査

1．調査の経緯

第25次調査として広瀬川護岸石垣（大橋南側）の石垣測量を実施した。これまで広瀬川護岸石垣の調査は平成15年度の第９次調査、平成16年度の第11次調査、平成17年度の第14次調査と３年次にわたって測量を実施している。今回の調査範囲は現存する護岸石垣で最も南側に位置する面である。

第58図　広瀬川護岸石垣(大橋南側)全景(南東から)

平成21年12月16日から12月17日にかけて石垣の除草作業を行った。測量はレーザーを用い、平成22年１月７日に基準点設置、測量とオルソ画像用の写真撮影を実施した。レーザーは、地上からのみ照射した。なお、第14次調査で実施した広瀬川護岸石垣（大橋北側・南側）、中門北側石垣の測量図についても、本報告書にて掲載した。

2．測量結果の概要

広瀬川護岸石垣（大橋南側）

今回の測量は第14次調査で測量した範囲の南側64m分を測量した。

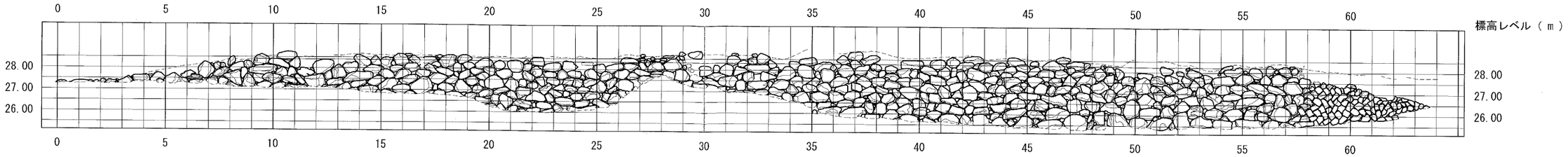
・天端の長さ：約47m、下端の長さ：約64m、石垣の高さ（天端残存部）：約1.5～３m

・石垣南端部から北側に約10m付近までは石垣の天端部分が失われており、南端部では下端に１石ずつしか残存していない。江戸時代の絵図によると広瀬川の河道は現在よりも西側にあり、護岸石垣も河道に沿う形で青葉山山麓まで描かれている。絵図によって表現等の違いがみられるが、石垣はやがて河道の変化に伴い、山麓側の石垣が取り外され、現在のような形になったのは明治以降と考えられる。

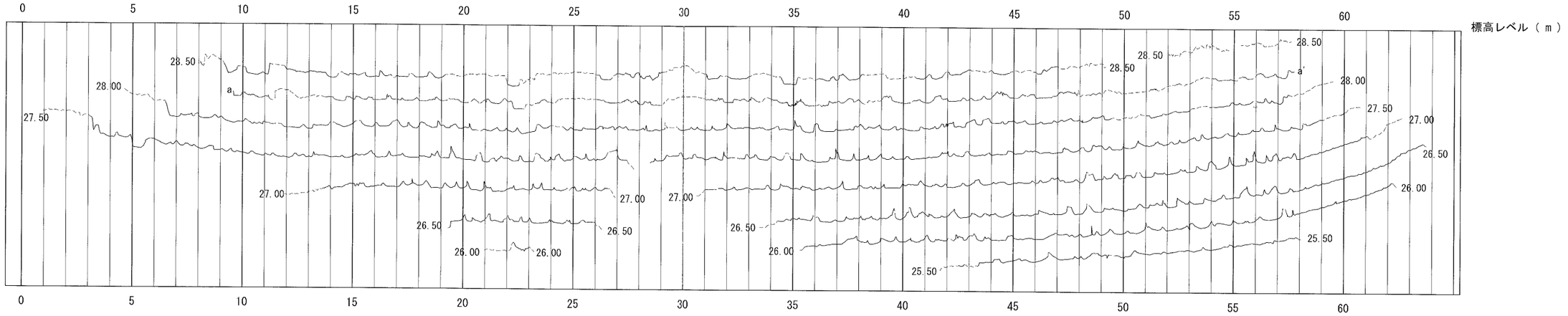
・測量地点の石垣は自然石を使った野面積みで、勾配は82～85度である。比較的大型の石材を横置きに積んでいる。石垣の間には詰石がみられるが、石垣前面にある石は近年になって詰められたものと考えられる。58m付近から北端部までの約６m分は切石を使った落とし積みによる積み直しを行った箇所である。石垣の北側に「仙台電気工業株式会社」が大正８年(1919)から大正10年（1921）の間に建設したと推定される発電用水路の取水口が設けられている。護岸石垣が施設建設のため、約30mにわたって石垣が取り外されたと考えられる。

・横断図をみると、20～40m付近が直線的であり、石垣が少しずつ角度を変え、弧を描く積み方から石垣の構築時期が江戸時代前期に遡る可能性が考えられる。

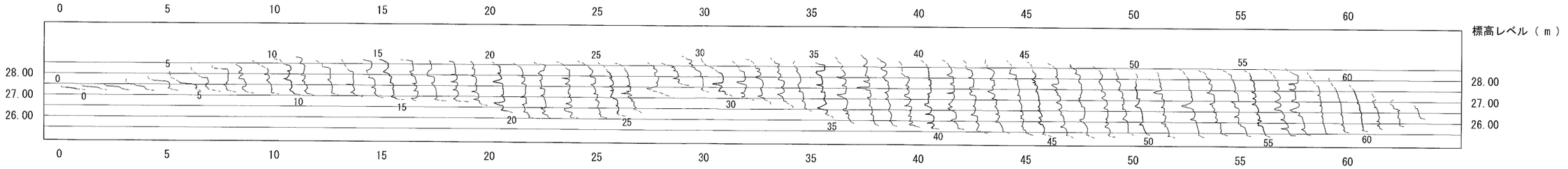
第59図　第25次調査位置図（1/5000）



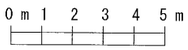
立　面　図



横　断　図



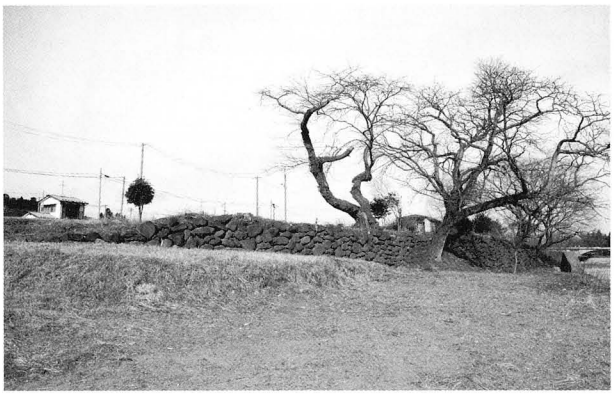
縦　断　図



第60図　第25次調査　広瀬川護岸石垣立面図・横縦断図　S＝1/200

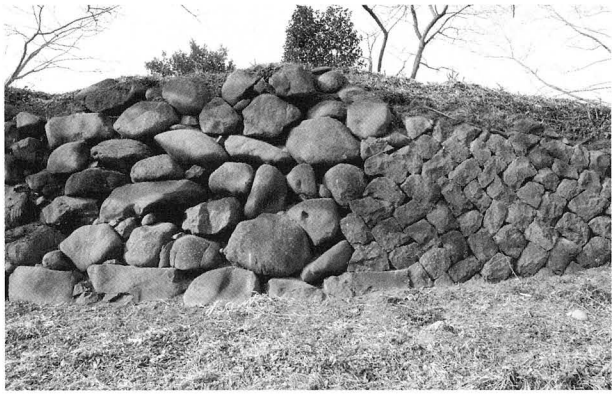
測量地点全景（東から）

測量地点全景（北東から）



測量地点全景（南東から）

測量地点北端部（東から）



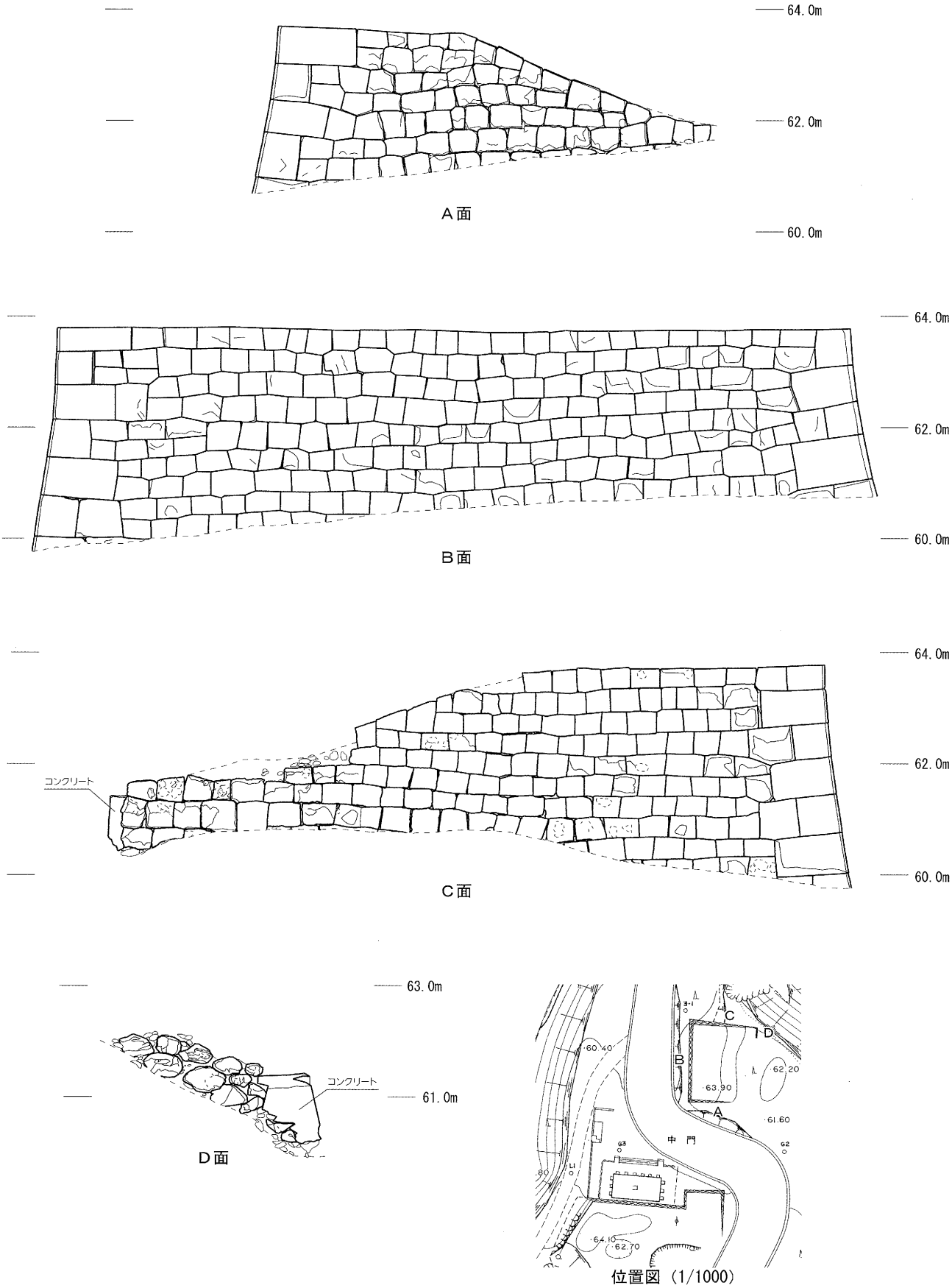
野面積み・落とし積み（東から）

野面積み（東から）

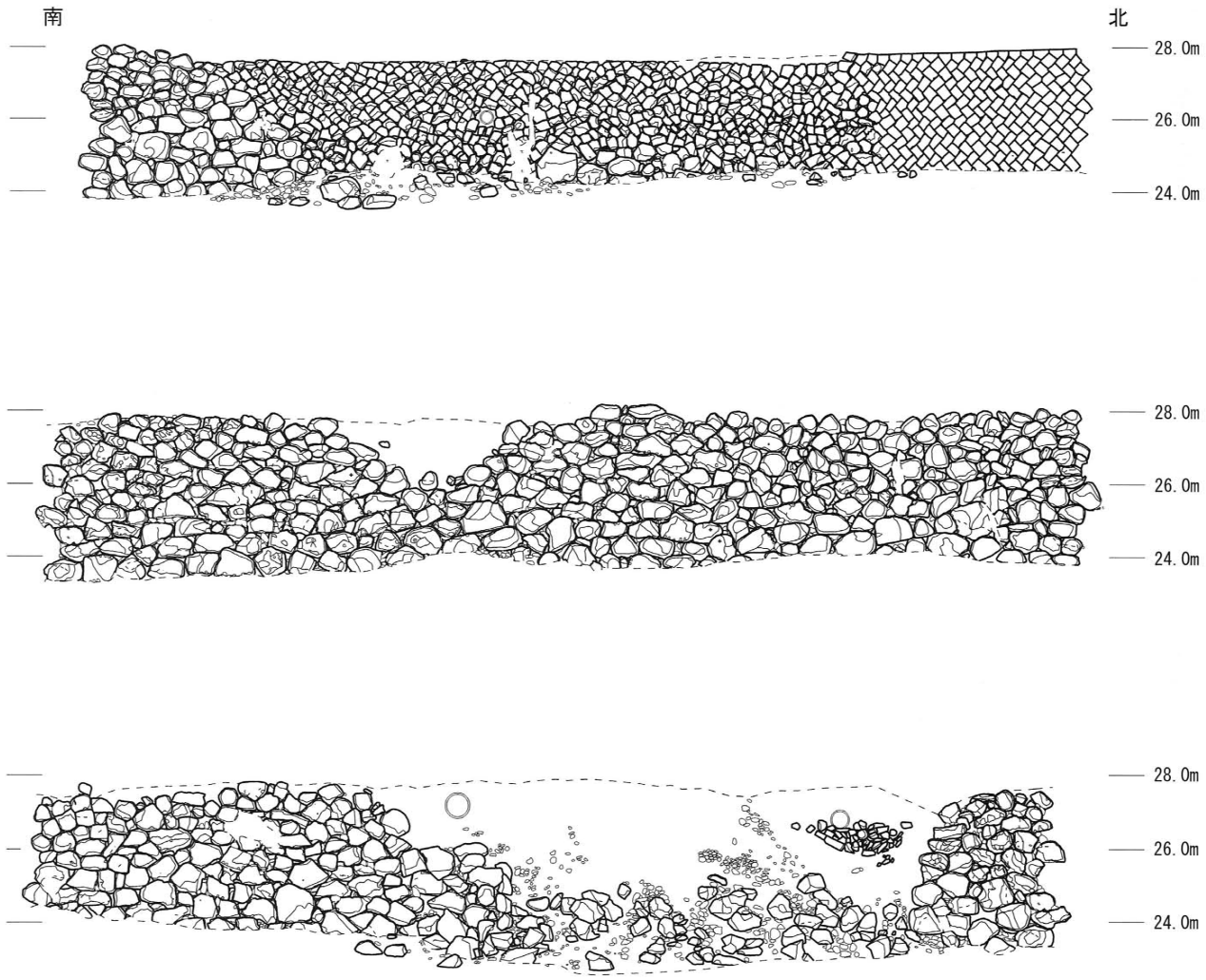
広瀬川護岸石垣南端部（南東から）

レーザー測量風景（南東から）

写真図版36　第25次調査

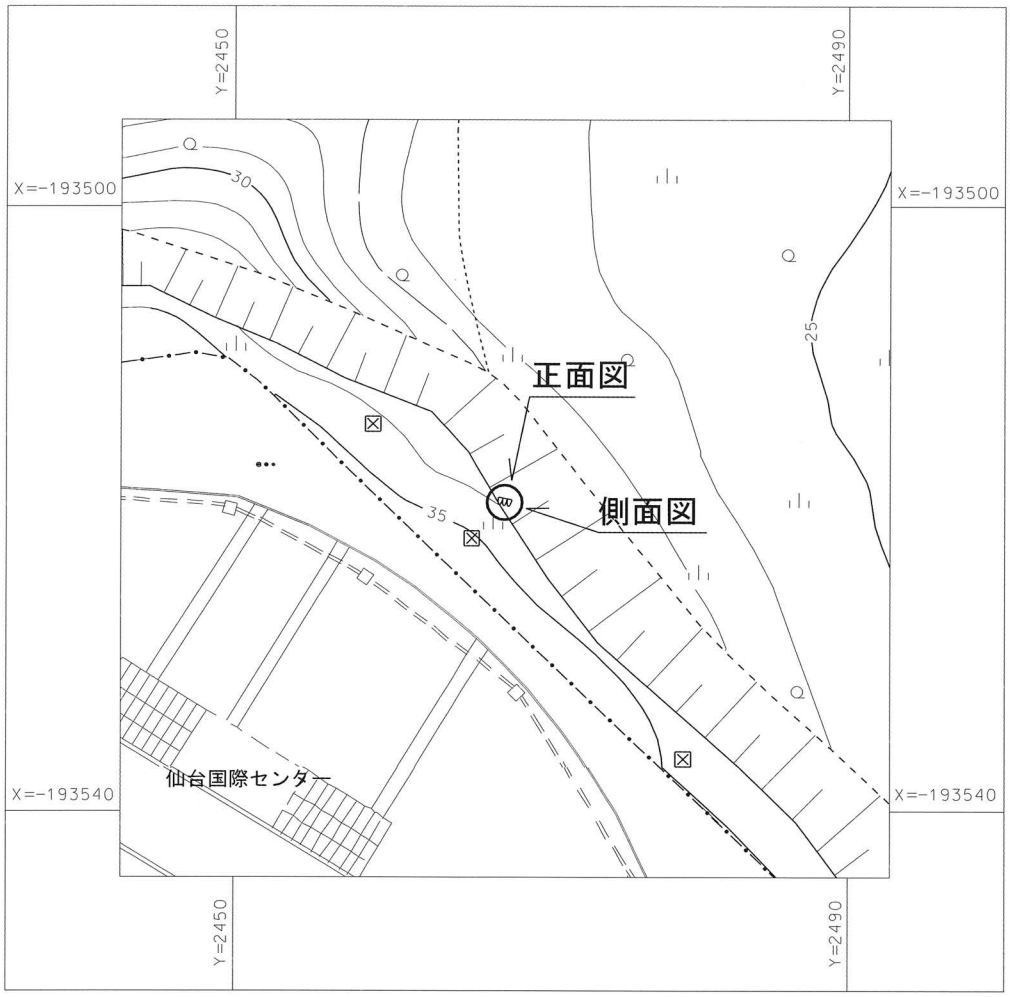


第61図　第14次調査　中門跡北側石垣立面図（1/100）

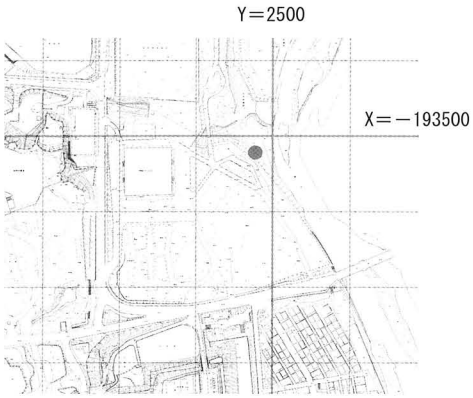


位置図（1/5,000）

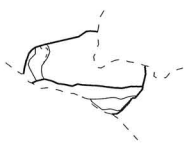
第62図　第14次調査　広瀬川護岸石垣（大橋南側）立面図（1/100）



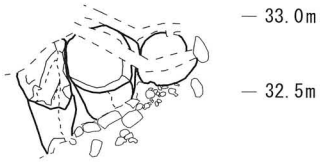
位置図（1/500）



位置図（1/1,000）



側面図（1/50）



正面図（1/50）

現況写真（2005年撮影）

第63図　第14次調査　広瀬川護岸石垣（大橋北側）

Ⅶ. 総括

本年度は仙台城跡遺構確認調査の第２期５ヵ年計画の４年目であり、造酒屋敷跡の遺構確認調査（第23次）、本丸大広間跡西部の遺構確認調査（第24次）、広瀬川護岸石壁の石垣測量調査（第25次）を行った。

第23次調査は、造酒屋敷跡（１～４区）に関連する遺構の確認を目的として実施した。今回の調査区は屋敷の主屋部分にあたる場所である。１区中央部では、第２遺構面からKS-746井戸跡を検出した。井戸跡の埋土から18世紀代のものを中心とする陶磁器などのほか、木簡をはじめとする木製品が多数出土した。出土した木簡のうち、榧森家６代当主「榧森与左衛門」と記されたものが３点確認された。そのほかに酒造りにかかわると考えられる樽や桶の部材、栓なども出土した。これらの出土遺物から、調査地が「榧森家の造酒屋敷」の一角であることが裏付けられたと考えられる。

１区西部では、第２遺構面からKS-768カマド跡を検出した。カマドは１つと考えられ、上部が削平されたためにカマド本体は失われ、底部の石組溝にあたる石と作業場にあたる横板に囲まれた部分を検出した。造酒屋敷内での酒造にかかわる遺構が検出されたことからも、この地で酒造りが行われていたことが明らかになった。

１区南東部では、第１遺構面から２基の炉跡を伴うKS-680鍛冶工房跡を検出した。炉跡の周辺を中心に床面上には炭層が分布し、炭の中から鍛造剥片、鉄滓、鉱滓、粒状滓などを採取した。また、羽口も出土しており、これらの遺物などから造酒屋敷廃絶後にこの地で鍛冶作業が行われた工房があったと推測される。

造酒屋敷の建物に伴うと考えられる礎石跡や集石、石列、柱穴などを検出した。それぞれ位置関係などを検討したが、明瞭に建物配置と考えられる遺構間の組み合わせがみられず、主屋をはじめとする建物の規模や配置については今後の検討課題である。

第24次調査は、大広間跡虎の間西側、広縁部中央の遺構の確認を目的として実施した。KS-531礎石跡の遺構全体を確認することができた。大広間跡の調査は昨年度の第20次調査で一応の終了となったが、今後も必要に応じて補足調査等を行っていく予定である。

第25次調査は、広瀬川護岸石垣で石垣測量調査を実施した。大橋の南側から追廻にかけて石垣が残されており、その観察によって広瀬川護岸における石積み技法の変遷を解明し得ると考えられる。今後も、石垣の現状の記録化を進めていくことが必要である。

引用・参考文献

江戸遺跡研究会編　『図説江戸考古学研究事典』　2001

大阪市文化財協会　『大坂城跡Ⅵ』　2002

小長谷正治　「伊丹の酒蔵を掘る－伊丹の酒造り発展史－」　伊丹市立博物館秋季企画展関連講座　2009

児玉幸多　『くずし字解読事典』　1970

佐野美術館　『みしま　～三島暦から三島茶碗へ～』　図録　2001

鈴木省三　『仙臺物産沿革』　1925

仙台市教育委員会　『仙台城』　1967

仙台市教育委員会　『仙台城三ノ丸跡』　仙台市文化財調査報告書第76集　1985

仙台市教育委員会　『仙台城跡１』　仙台市文化財調査報告書第259集　2002

仙台市教育委員会　『仙台城跡２』　仙台市文化財調査報告書第264集　2003

仙台市教育委員会　『仙台城跡３』　仙台市文化財調査報告書第270集　2004

仙台市教育委員会　『仙台城跡４』　仙台市文化財調査報告書第271集　2004

仙台市教育委員会　『仙台城跡５』　仙台市文化財調査報告書第285集　2005

仙台市教育委員会　『仙台城跡６』　仙台市文化財調査報告書第297集　2006

仙台市教育委員会　『仙台城跡７』　仙台市文化財調査報告書第309集　2007

仙台市教育委員会　『仙台城跡８』　仙台市文化財調査報告書第330集　2008

仙台市教育委員会　『仙台城跡９』　仙台市文化財調査報告書第348集　2009

仙台市教育委員会　『天賞酒造に係る文化財調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第304集　2006

仙臺市史編纂委員会　『仙臺市史９　資料編２』　1953

仙台市史編さん委員会　『仙台市史　特別編７　城館』　2006

仙台市史編さん委員会　『仙台市史　通史編３　近世１』　2001

仙台市史編さん委員会　『仙台市史　通史編５　近世３』　2004

仙台市史編さん委員会　『仙台市史　資料編11　伊達政宗文書２』　2003

仙台市史編さん委員会　『仙台市史　資料編13　伊達政宗文書４』　2007

高倉淳　ほか　『絵図・地図で見る仙台　第一輯』　1994

伊達邦宗　『伊達家史叢談 巻之五』　1921　復刻版『伊達家史叢談』　2001

寺崎巻石　『藩祖以来仙臺物産誌』　1917

東北大学埋蔵文化財調査研究室　『東北大学埋蔵文化財調査年報19　第２分冊』　2009

東北大学埋蔵文化財調査研究室　『東北大学埋蔵文化財調査年報19　第３分冊』　2007

東北大学埋蔵文化財調査研究室　『東北大学埋蔵文化財調査年報19　第４分冊』　2007

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　『東北大学埋蔵文化財調査年報19　第１分冊』　2006

『南部杜氏』編纂委員会編　『南部杜氏』　岩手県石鳥谷町　1983

早坂芳雄　『宮城県酒造史　別篇』　宮城県酒造組合　1962

松尾信裕　「玉造小学校内で発見された酒造遺構」　大阪市文化財協会編『葦火』９号　1987

松尾信裕　「上方の酒造り」　平成20年度平野区画整理記念会館住民大学講座資料　2009

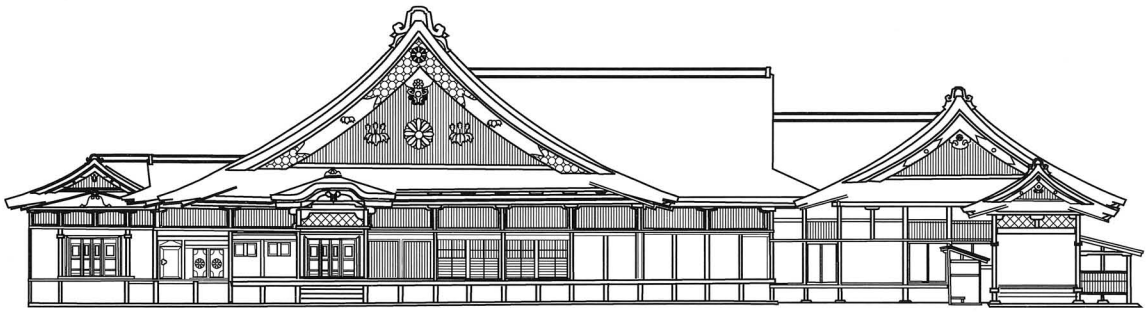
木簡学会　『木簡研究』　第29号　2007

矢野顕蔵　『仙臺藩祖時代実業一斑』　1914

吉岡一男　ほか　『絵図・地図で見る仙台　第二輯』　2005

吉田　元　『江戸の酒　その技術・経済・文化』　朝日選書　1997

仙台城本丸大広間跡調査成果の総括



仙台城本丸大広間跡調査成果の総括　目次

Ⅰ．これまでの調査成果 ……118

Ⅱ．大広間建物跡の特徴 ……119

⑴上屋の特徴 ……120

1)　建築様式 ……120

2)　方位、面積 ……120

3)　規模 ……120

4)　柱間寸法 ……120

5)　座敷各部屋の規模・特徴 ……120

6)　縁側の特徴 ……124

7)　屋根（瓦）……124

8)　飾り金具類（銅釘）……125

⑵基礎の特徴 ……127

1)　床下　①整地層の特徴 ……127

②砂礫層 ……127

③座敷・縁側の勾配（傾斜）……128

④軒下　犬走りの叩き（硬化層）……129

2)　礎石　①残存礎石の特徴 ……129

②礎石レベルの比較 ……130

③座敷部礎石掘り方・抜取り穴 ……130

④縁側部礎石掘り方・抜取り穴 ……131

Ⅲ．付属施設 ……131

⑴雨落ち溝跡の特徴 ……131

1)　規模・形状 ……131

2)　構造 ……132

3)　その他の特徴 ……132

Ⅳ．その他の遺構 ……132

⑴石敷き遺構 ……132

⑵区画施設　塀跡 ……133

⑶暗渠状遺構 ……135

⑷KS－８４溝跡 ……135

⑸柱筋にのらない礎石跡及び掘り方 ……135

⑹下層遺構 ……137

Ⅴ．出土遺物 ……139

⑴陶磁器　⑵土師質土器　⑶金属製品　⑷瓦

Ⅵ．科学的分析 ……140

Ⅶ．絵図の検討 ……141

引用・参考文献

写真図版

仙台城本丸大広間跡調査成果の総括

Ⅰ．これまでの調査成果

仙台城本丸大広間跡の調査は、平成９年度より始められた青葉山公園整備事業の一環として行われた石垣修復に伴う調査の後、平成13年度からの国庫補助事業による仙台城跡の遺構確認調査として始められた。平成15年度には、国の史跡指定を受け、城跡の保存管理及び整備を目的とした調査に切り替わった。以来、大広間跡の調査は、小規模なものを含めて９年次にわたり実施された。以下は、大広間跡調査成果の概要である。なお、文中の部屋名称は『御本丸大広間地絵図』（㈶斎藤報恩会蔵、以下『地絵図』と略する）に描かれたものを使う。

第１次調査（平成13年度）

初めて、大広間建物跡東辺ライン、礎石跡（13基）確認。くらすみの間から裏上段の間、檜の間から紅葉の間の一部調査。

第５次調査（平成14年度）

建物跡西辺、北辺ライン、礎石跡31基検出（首実検の間と建物北東角部）。

第７次調査（平成15年度）

西辺部より御成門跡付近、南東部（裏上段の間・鶴の間の一部）の調査。建物跡を検討し、柱間寸法が６尺５寸であることが明らかとなる。また、御成門跡の位置や車寄せに至る石敷き遺構の検出。

第10次調査（平成16年度）

引き続き、西辺部より御成門跡付近と石敷き遺構の調査。大広間跡西側の塀跡（区画施設）の調査。

第12次調査（平成17年度）

大広間跡北辺部の調査。雨落ち溝跡に改修を確認。大広間跡の北側で、より古い礎石立建物跡を検出。これまでの調査の層位を検討整理し、５時期の変遷が明らかになる。

Ⅰ期：基盤層（Ⅴ層）上に形成された遺構の時期

Ⅱ期：Ⅲｆ層上の遺構を想定した時期（礫の集中や瓦が出土、遺構未確認）

Ⅲ期：古い雨落ち溝跡が形成された時期

Ⅳ期：Ⅲａ層（12次調査）上面に遺構が形成された時期（改修後の雨落ち溝跡等）

Ⅴ期：大広間廃絶以降の時期

第15次調査（平成18年度）

大広間跡北東角部及び南東角部の調査。これにより、建物跡角の礎石跡と雨落ち溝跡の角をそれぞれ確認できた。第12次調査例に類似する大広間に先行する礎石を検出。また、大広間跡の内外より近世以前の溝跡や焼土遺構などの遺構群を発見。

第17次調査（平成19年度）

大広間跡北半部の調査。これにより、上段の間から孔雀の間、そして、檜の間の一部を検出。

第20次調査（平成20年度）

大広間跡南半部の調査。これにより、奥向きの裏上段の間から鶴の間・鷹の間、そして、虎の間を検出した。調査のできない鹿の間を除き、ほぼ全容を調査した。今回、床束や縁束の礎石跡を多数検出でき、また、大広間に先行する下層の建物跡の礎石1基を確認。

第24次調査（平成21年度）

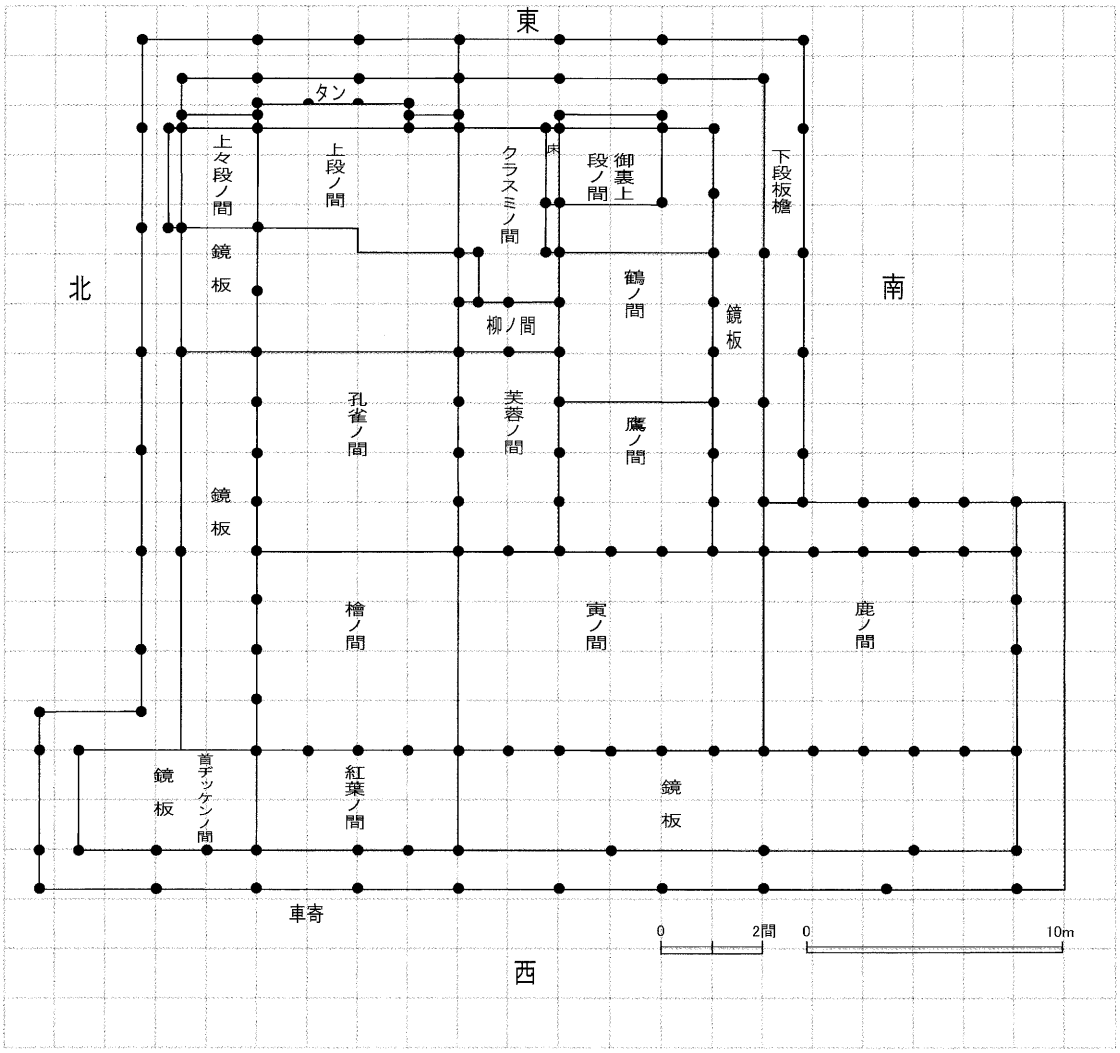
大広間跡虎の間の西側広縁中央の礎石跡の調査。調査指導委員会の指導により追加調査を実施。

大広間建物は、『地絵図』で名前の付いた部屋を14部屋知られているが、このうち13部屋についての調査ができた。南西部に位置する鹿の間付近が市有地外にあり、未調査となっている。なお、本丸大広間跡をはじめ、史跡仙台城跡では、保存を前提とする調査であることから遺構の掘り込みは必要最小限度に留め、保存・整備の措置として、調査後は砂を入れて埋め戻しを行っている。

Ⅱ．大広間建物跡の特徴

仙台城本丸大広間は明治初年に取り壊され、その際礎石の多くも抜き取られ兵舎建設などに転用されといわれている。さらに昭忠碑や招魂社の建立、宮城県護国神社建設、青葉山公園造成、各種埋設管やケーブルの設置などの影響を受けている。そのため、礎石が失われさらに礎石跡も残らないなど、残存状況の悪い箇所が少なくなかった。このため間仕切りを示した絵図の必要性が強く感じられていたので、『地絵図』は調査の際に有効な資料であった。

本丸大広間建物は、長方形の母屋に曲屋を付属させたもので、北側には中門廊に相当する「首実検ノ間」、南側に色代に相当する「鹿ノ間」がある。西の妻側に車寄せを備え、北側が表となる典型的な江戸初期の御殿建築である。大広間を描いた『地絵図』をみると、表側に「上々段ノ間」・「上段ノ間」・「孔雀ノ間」・「檜ノ間」を配し、さらにＬ字に曲がって「虎ノ間」・「鹿ノ間」へと続く。南の奥向きには、「御裏上段ノ間」・「鶴ノ間」・「鷹ノ間」を配し、両者の中間に小規模な「クラスミノ間」・「柳ノ間」・「芙蓉ノ間」を介在させている。この部屋割りの特徴は、調査成果から得られた礎石跡の配置と良く一致している。大広間建物の建築学的な研究については、小倉強氏、佐藤巧



第１図　大広間部屋割り図　「御本丸大広間地絵図」の寸法による（1/300）

氏らの論考があるが(註1)、詳細な寸法と建具の記入などがあり、誤記が一部にあるものの正確性の高い資料として『地絵図』を評価されており、対照資料として扱われている。ここでも、有効とされるこの『地絵図』を参考に、調査成果で得られた具体的な特徴について述べていくことにしたい。

註１　小倉強：『仙台城の建築』(1930)
　　佐藤巧：『近世武士住宅』(1979)『仙台城の建築と姿絵図』(1981)

⑴上屋の特徴

1)建築様式　　板葺入母屋造礎石建建物（桃山様式の御殿建築）

2)方　　位　　約N－79°－W（大広間建物の主軸方向）

3)規　　模　　東西33.5m、南北26.3m（第7次調査データより）　面積　約1034㎡（推定）
　　＜記録＞　縦（南北）十七間半、横（東西）十三間半
　　（『伊達家治家記録』慶長15年（1610）の条）

4)柱間寸法　　６尺５寸（約197cm）
　　７次調査で礎石跡を検討し、調査指導委員の西和夫氏により６尺５寸のメッシュ透過シートを用い、遺構平面図と合わせることで柱間寸法を検証した。メッシュの交点と礎石跡が多くの部分で一致しており、６尺５寸が大広間の柱間寸法の基準となっていることが確認された。その後の調査でも矛盾はなく当てはまる。

5)座敷各部屋の規模・特徴

＜上段の間＞

主室となる上段の間は建物北東部に位置し、規模は東西４間半（北辺は２間半２つ割　第３図①）と２間、南辺は２間２つ割と２間半通し〔第３図②〕、南北４間（床の間のある東辺では３間２つ割〔第３図③〕と１間である。この部屋は上段・下段に二分され、上段は格式の高い折れ上段であることが知られている。調査でも部屋中央部で柱筋が約半間ずれる箇所があり、それに対応する礎石跡が１基検出された。東辺の床の間（絵図には「タン」と表記）中央では、束柱の可能性のある礎石跡に接して礎石１石が連結するように検出されている。類例には、丹波篠山城跡の大書院跡床の間中央床下にも、礎石跡の可能性のある穴がみられる。後述する裏上段の間の床の間中央床下では、束柱とみられる礎石跡が認められる。西辺や中央床部の礎石跡は、近代以降の公園整備等で削平をうけているためか、検出できなかった。東側の違棚に対応する位置でも礎石跡は検出されていない。

＜上々段の間＞

上々段の間は上段の間の北側に位置している。規模は、礎石跡が西辺２基のみの検出にとどまったことからはっきりしないが、『地絵図』では東西２間、南北１間半の規模である。北側に付書院、東側に違棚が設けられているが、これらに対応する礎石跡は検出されていない。

＜孔雀の間＞

孔雀の間は上段の間の西側に、芙蓉の間の北側に位置している。礎石跡は、後世の公園整備等で削平をうけ、非常に残りが悪い。南辺では東西４間分検出できたが、南辺・北辺では両端角の礎石跡を検出するに留まった。しかし、両端の礎石跡位置から南北４間であることが推定できる。部屋中央部では、束柱にあたる礎石跡は検出できなかったが、西辺では根固め石のない束石の可能性のある礎石が１石検出された。ただし、報告書（第17次調査）では、石の上面が傾き、原位置を保っていないと指摘されている。

＜檜の間＞

檜の間は、孔雀の間の西側、寅の間の北側に位置している。四辺とも揃った形で礎石跡を検出できず、各辺とも３基ずつの礎石跡の検出に留まった。しかし、検出できた四隅の礎石跡等と『地絵図』から、規模は東西４間、南

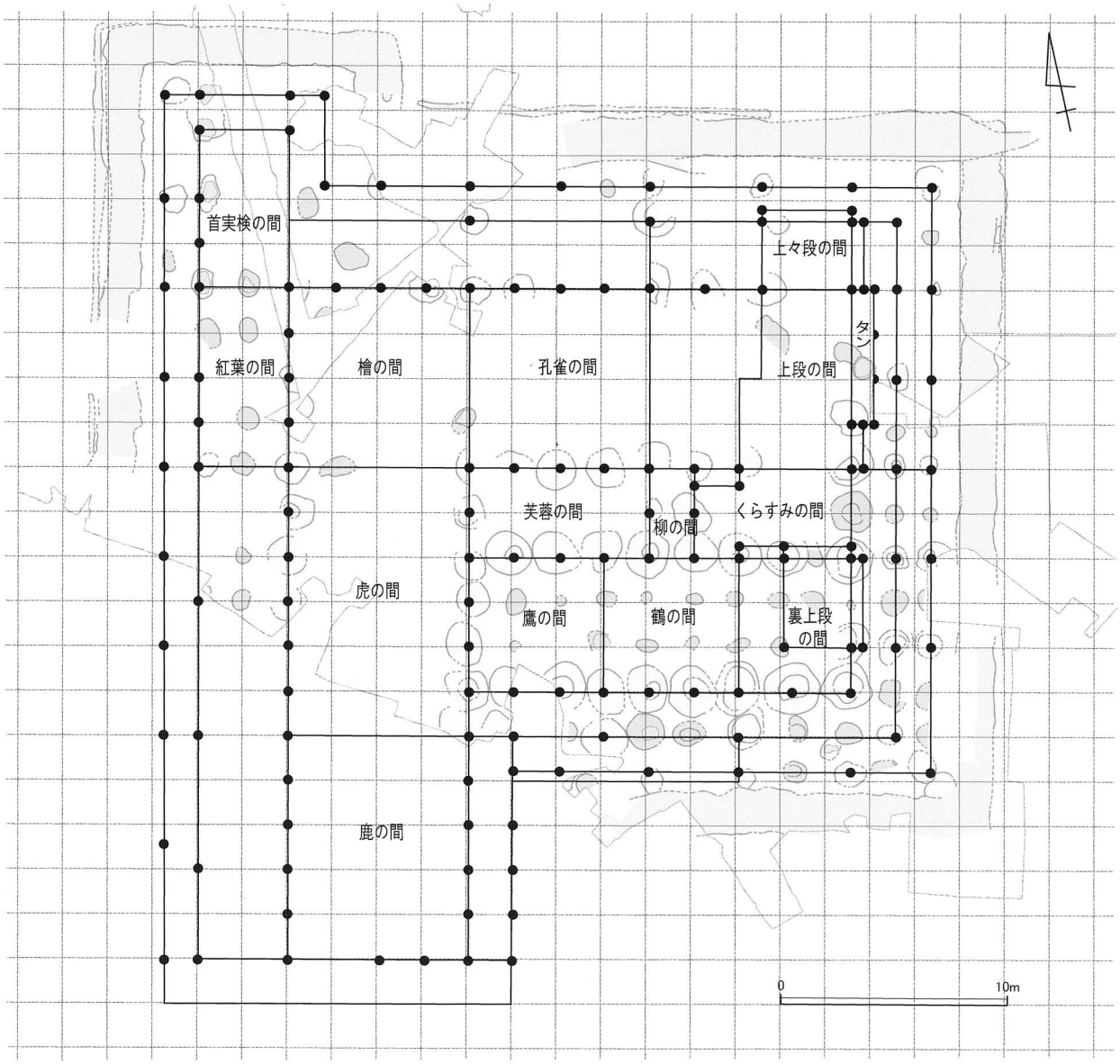
北４間と推定できる。この部屋も中央部では、削平を受けて、束柱の礎石跡は検出できなかった。なお、前述したように孔雀の間との境（東辺）の柱筋で、礎石が１石検出されている。

＜紅葉の間＞

紅葉の間は大広間西側で檜の間の西に位置し、玄関（車寄せ）から入る最初の部屋である。規模は、東西２間、南北４間である。北辺の首実検の間の境で礎石が２石検出されている。また、束柱にあたる礎石跡も、中央の１基が不明だが、４基検出されている。東辺・西辺では未調査部があり、それぞれ２基分の特徴がつかめない。この部屋から首実検の間にかけてが、尾根筋に近く標高の高い、比較的遺構面の残りが良い箇所であった。

＜首実検の間＞

紅葉の間の北側に位置し、中門廊に相当する曲屋となる部屋である。規模は、東西２間、南北３間半である。西辺は、３間半を２つ割（第３図⑥）にしている。残存状況の良い西辺と紅葉の間との境である南辺で、礎石が計４石検出された。北辺・東辺では、撹乱溝や未調査部分があり、特徴をつかめなかった。なお、東辺側で南東角の礎石跡が検出されたほか、柱筋にのらない礎石跡が１基検出されている。逆に、中央部の束柱に相当する礎石跡は、未調査部に位置し検出されていない。この部屋は『地絵図』に「鏡板」と表記され、板の間であったことが分かる。



第２図　大広間跡遺構平面図と『御本丸大広間地絵図』の合成図（1/300）

＜虎の間＞

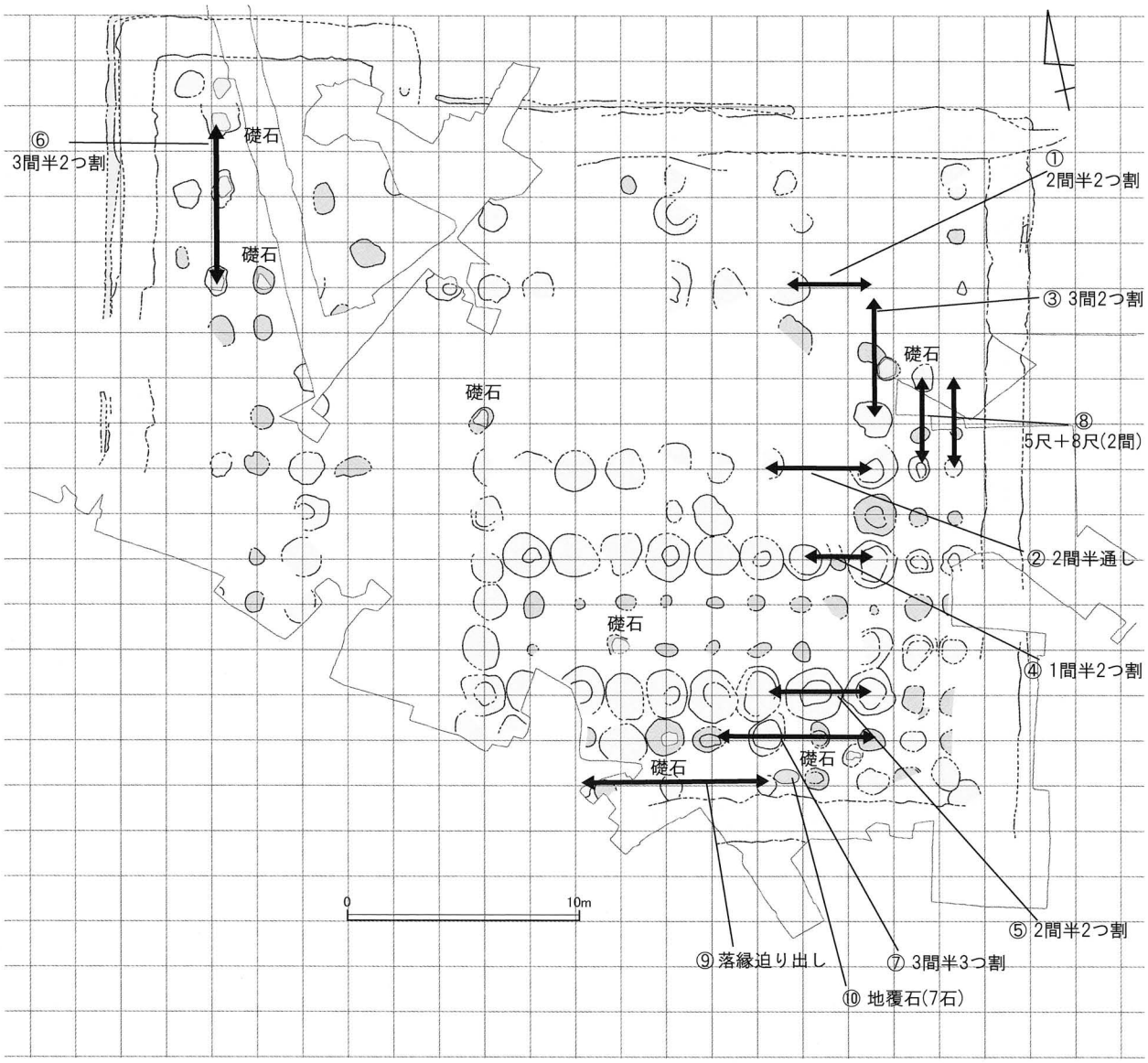
虎の間は前述した檜の間の南側に位置し、大広間建物内で最も広い部屋である。第20次調査で東辺側の礎石跡（７基６間分）がすべて確認できたことから、東西４間、南北６間の規模になることが明らかとなった。さらに、礎石跡は西辺で４基（３間分）、北辺３基確認できた。部屋内部は上部が削平や撹乱を受け、束柱の礎石跡を検出することができなかった。なお、部屋の南西部は市有地外であることから調査が行えず、南辺部を確認することができなかった。

＜鹿の間＞

鹿の間は虎の間の南側に位置し、色代部に相当する曲屋となる部屋であり、南側に続く建物の出入り口の機能も兼ねている。この部屋は全体が市有地外にあり、調査を行うことができなかった。『地絵図』よると、東西４間、南北５間の規模である。今後、機会があれば調査が必要である。

＜くらすみの間＞

くらすみの間（「御帳台」ともいわれる）は、上段の間の南側、裏上段の間の北側に位置している。ちょうど、東西方向の母屋中央部に３部屋（他は柳・芙蓉の各部屋）が東西に連なるが、その東端の部屋である。規模は、東西３間半、南北２間である。東西の柱列は、北辺側では２間半の通し部分があるが、そこには束柱礎石跡は検出できなかった。南辺側（裏上段の床の間あり）では１間半の２つ割の箇所が認められる。部屋中央では、上部を削平さ



第３図　大広間跡遺構平面図（1/300）

れたためか束柱に相当する礎石跡は検出されなかった。

＜柳の間＞

柳の間は、くらすみの間の西側、上段の間と鶴の間の中間に位置している。規模は東西１間、南北２間で、それぞれ東西辺が各２基、南北辺が各３基あり、すべての礎石跡が検出できた。

＜芙蓉の間＞

芙蓉の間は、柳の間の西側、孔雀の間と鷹の間の中間に位置している。規模は、東西４間、南北２間で、四辺すべての礎石跡を検出することができた。内訳は、東辺・西辺各５基（４間分）、南辺・北辺各３基（２間分）である。しかし、ここでも部屋中央で束柱にあたるような礎石跡（３基分）は削平されており、検出できなかった。

＜裏上段の間＞

大広間南半部は奥向きとして扱われ、東西に連なる裏上段の間・鶴の間・鷹の間の３部屋で構成される。このうち、裏上段の間は建物南東角にあり、くらすみの間の南側、鶴の間の東側に位置している。規模は、東西２間半、南北３間である。東西の柱列は、北辺に礎石跡４基、南辺に３基であるが、北辺側が１間半を２つ割（第３図④）、南辺側は２間半２つ割（第３図⑤）にしている箇所が認められる。北辺には床の間を、東辺には附書院をそれぞれ設けている。北辺床の間中央床下に束柱とみられる礎石跡がある。束柱にあたる礎石跡（抜取り穴）は、柱間が６尺５寸等間隔に検出されたが、床の一段高くなる東側上段部では東西が約５尺間隔となっている。なお、樹木がある未調査部分に１基礎石跡が予想される。

部屋名	東西		南北		備考
	調査	地絵図	調査	地絵図	
上段の間	３間？（28.5尺）	４間半	３間（26尺）	４間	北辺２間2つ割（第3図①）
上段の間					東辺３間2つ割（第3図③）
孔雀の間	４間（26尺）	４間	４間（26尺）	４間	
檜の間	４間（26尺）	４間	４間（26尺）	４間	
虎（寅）の間	４間（26尺）	４間	６間（39尺）	６間	
鹿の間	未調査				（４×５間）
クラスミの間	３間？（22尺）	３間半	２間（13尺）	２間	北辺２間半通し（第3図②）
柳の間	１間（6.5尺）	１間	２間（13尺）	２間	
芙蓉の間	４間（26尺）	４間	２間（13尺）	２間	
裏上段の間	２間？（16尺）	２間半	３間（19.5尺）	３間	北辺１間半2つ割（第3図④）
裏上段の間					南辺２間半2つ割（第3図⑤）
鶴の間	３間（19.5尺）	３間	３間（19.5尺）	３間	
鷹の間	３間（19.5尺）	３間	３間（19.5尺）	３間	
紅葉の間	２間（13尺）	２間	４間（26尺）	４間	
首実検の間	２間（13尺）	２間	３間（22.5尺）	３間半	３間半2つ割（第3図⑥）
上々段の間	１間？（11尺）	２間	１間（9.75尺か）	１間半	東西２間半通し 南北１間半通しか

・柱間寸法は、６尺５寸（約197cm）を基準にしている。

・掘り方や抜取り穴のプラン内で、切のよい数値を採用し柱間寸法とした。

・上段ノ間、裏上段ノ間、首実験ノ間は、柱間が等間隔にならない。

・間数は長さではなく、柱間の数を示す。（　）内は尺寸で記述。

・裏上段ノ間南側の広縁部にも３間三つ割りがあるとした各部屋の長さ。（第３図⑦）

第１表　大広間座敷部各部屋規模一覧（発掘調査成果による）

この部屋から鶴の間にかけてが、撹乱坑はあるが削平の影響の少ない、大広間跡では残存状況の最も良い箇所と言える。

＜鶴の間＞

鶴の間は、裏上段の間の西側、柳の間・芙蓉の間の南側に位置している。規模は、東西３間（礎石跡４基）、南北３間（礎石跡４基）である。礎石跡は、四辺及び部屋中央の束柱にあたる礎石跡（抜取り穴）も、６尺５寸等間隔ですべて検出することができた。また、鷹の間との境である西辺側中央で、束柱の礎石が１石検出された。

＜鷹の間＞

鷹の間は、鶴の間の西側、芙蓉の間の南側に位置している。規模は、鶴の間同様東西３間、南北３間で、四辺の礎石跡各４基ずつをすべて検出することができた。また、前述したように鶴の間の境で、礎石１石が検出されている。部屋中央では、束柱にあたる礎石跡（抜取り穴）が３基検出することができたが、南東側の１基分は検出することができなかった。

6)縁側の特徴

縁側は、広縁と落縁とから構成されている。

＜広縁＞

広縁は建物東辺と南辺が座敷より６尺５寸の幅で廻るが、表向きとなる北辺や玄関側となる西辺は、より幅の広い広縁となっている。北辺側の広縁幅の柱間距離は、上々段の間や孔雀の間で約2.9mあり、1間半の寸法を示している。これは『地絵図』の９尺７寸５分の記述と合っている。また、東西も10間半で、同図と合っている。西辺側は紅葉の間南辺で幅が約3.9mあり、こちらも『地絵図』の２間（13尺）の記述と合う。なお、未調査である鹿の間東側の広縁は、『地絵図』には１間幅で「鏡板」との表記がないことから、板の間ではない可能性もある。また、鹿の間から虎の間の西側部分は、北側３間分は調査を行うことができたが、南側8間分については市有地外で道路下になることから、調査を行っていない。

＜落縁＞

落縁は、座敷と広縁を合わせた平面形と相似形で、柱は広縁から５尺離れて外側を廻っている。未調査の鹿の間東側では、『地絵図』に落縁は描かれていない。広縁と落縁の礎石間の幅は５尺であり、落縁の外周の礎石間では６尺５寸の柱間を基準としている。ただし、この基準に合わない箇所が２ヵ所ある。一つは、上段の間の東側にあり、柱２間分が６尺５寸等間隔にならず、５尺＋８尺で13尺（２間）となっている所である（第３図⑧）。この地点には、例えば乗降階段のような何らかの施設があったのではないか。もう一つは鶴の間の南側に面する地点である。ここでは、広縁と落縁間の柱間寸法が６尺５寸を示し、掘り方プランが雨落溝跡と接している（第３図⑨）。鶴の間から鷹の間にかけて、他よりも１尺５寸ほど落縁が南に迫り出して広かった可能性も考えられる。しかし、雨落ち溝跡には変化が無く直線的に伸びており、屋根には変化が無かったものと考えられる。

裏上段の間南側の落縁部で、地覆石と考えられる石材が7石検出され（第３図⑩）、このうち５石が円礫であった。石の大きさは、幅18～29㎝、奥行き13～40㎝、厚さ5～12㎝である。この地覆石は部分的に施工されたのか、全周するのかは判断できない。北辺部では、首実検の間の北側で落縁の礎石が1石検出された。

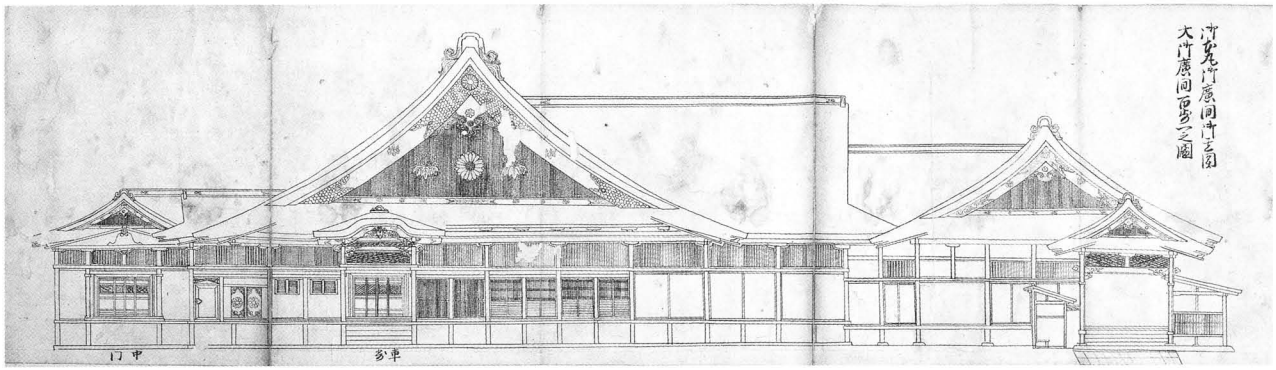
7)屋　根(瓦)

考古学的に屋根と関わりのある遺物には瓦があるが、これまでの調査で直接大広間跡に関わる遺構からの出土は少ない。大広間跡関連の瓦については第２表のようになる。比較的多く出土した雨落ち溝跡からの瓦でも、建物規模を考えたとき、出土量は極めて少ない。したがって、考古学的には瓦葺建物とは言えず、建築学の指摘どおり板葺（柿葺など）とみてよいであろう。ただ、出土した瓦には鬼瓦や菊丸瓦があり、これらは屋根の棟に使用される。

このことから、大広間跡でも棟等の屋根の一部に瓦が葺かれていた可能性がある。それを裏付けるように、仙台藩大工棟梁の千田家に伝わる『仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図』（第4図　仙台市博物館蔵）には、大広間建物屋根の棟に鬼瓦等が描かれている。なお、金箔瓦など特別な瓦は、これまで出土していない。

遺　構　名		種類・点数	調査次数
礎石跡	KS－132	丸瓦１　平瓦１	15次（抜取り時か）
	KS－166	平瓦２	15次（抜取り時か）
雨落ち溝跡	KS－53	軒丸瓦１	1次
〃	KS－53	菊丸瓦１	5次
〃	KS－53	丸瓦３　平瓦７　塀瓦１　鬼瓦？１	12次
〃	KS－53	丸瓦１　平瓦２　軒平瓦２	15次
石敷通路	KS－178	平瓦１	10次
小型溝	KS－84	平瓦１	12次

第２表　大広間跡関連出土瓦（各次報告書より）



第４図　『仙台城及び江戸上屋敷主要建物姿絵図』（大広間部分）　仙台市博物館蔵

8)飾り金具類・銅釘

＜飾り金具＞

桃山建築の飾り金具は、それ以前に比べ躍動感にあふれる造形・意匠を見せるという。これまで、脇役だった金具自体が、自己主張を始めたといわれる。政宗も、京都の錺師を仙台に招聘し、こうした時代の特徴ある金具を採用させ、大崎八幡宮社殿や松島瑞巌寺本堂の建築に当たらせた。大崎八幡宮の擬宝珠には「慶長十四年」「山城国上京一条之住　津田次兵衛」の銘が残されている。ほぼ、時を同じくして、大広間建物を飾る金具類にも蹴彫や魚々子打ち等の技法を駆使して、時代に合った造形・意匠の金具で飾らせたものと考えられる。

飾り金具はこれまで、合わせて132点（第20次調査まで）の出土が確認されている。銅を地金に鍍金した金銅金具は63点あり、多くは軒廻りの垂木材用と考えられている。そのうち主なものとして、第1次調査では１点は垂木先の八双金具、もう１点は隅木先金具の可能性があるものが出土している。第５次調査では釘隠し片、また、第７次調査では、鋳造の可能性のある菱形座金具（吊金具）が１点出土している。一方、第10次調査では鍍金が確認できず、銅金具としたものも68点出土している。

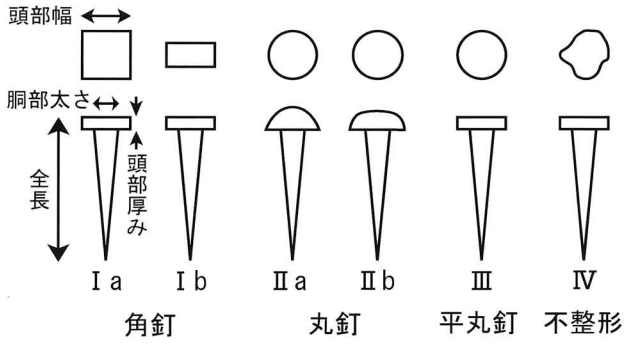
これまでの調査では妻飾は確認できず、建具用のものが含まれているのかどうかなど、種類や使用（取り付け）部位の特定は難しい。さらに、これらの金具はすべて建築当初からのものなのか、修理時などに取替えや追加されていないのかなど判断が付きにくい。なかには、文様をもつものがあり、蹴彫り・魚々子打ちの技法が観察された金具については、江戸時代初期の建築当初から取り付けられていた可能性が高い。今後も機会あるごとに、個々に検討が必要である。

＜銅釘＞

銅釘は、上記のような金銅金具・銅金具を建築部材などに留めるのに使用された。銅釘の種類は第10次調査時に

検討され、頭部の形状から角形・平形・平丸形・不整形の４種類に分類された（第５図）。第20次調査までに957本が出土している。内訳は第３表のとおりであるが、ここには御成門跡に関連するものも含まれている。また、銅釘の中には、頭部に鍍金の認められるものもあり、金銅金具との関係を指摘できる。

出土傾向は、大広間跡西辺部の紅葉の間付近より御成門跡にかけて（第７次・第10次調査）と東辺部の上段の間からくらすみの間付近（第１次調査）に多い傾向が指摘できる。この東西に分かれる傾向は、建物の東西両妻に対応している。妻側に、金具が多く取り付けられていた結果を反映したものと考えられる。



第５図　銅釘類型模式図・計測部位

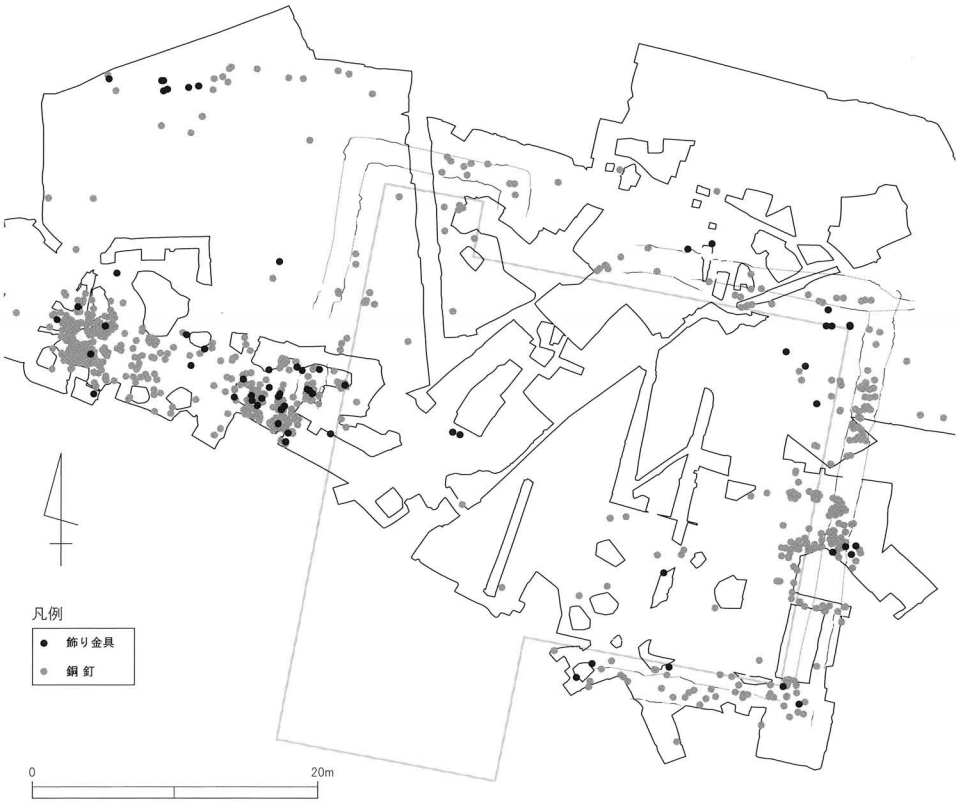
＜飾り金具＞

飾り金具	１次	５次	７次	10次	12次	15次	17次	20次	計
金銅金具	9	9	30	7	4	3	0	1	63
金銅座金具か			1						1
銅金具				67				1	68
計	9	9	31	74	4	3	0	2	132

＜銅釘＞

類　　型	１次	５次	７次	10次	12次	15次	17次	20次	計
Ⅰ類（角）	9	8	42	16	3	10	4	1	93
Ⅱ類（丸）	4	8	43	10	5	0	3	2	75
Ⅲ類（平丸）	134	21	113	53	9	14	32	15	391
Ⅳ類（不整形）	44	55	206	22	2	20	10	7	366
Ⅴ類（形状不明）	0	2	12	7	0	9	1	1	32
計	191	94	416	108	19	53	50	26	957

第３表　飾り金具・銅釘集計表



第６図　大広間跡・御成門跡　飾り金具・銅釘出土地点図（1/400）　※第17次調査分を除く

⑵基礎の特徴

1)床　下

①整地層の特徴

まず、前提となる基本層は以下のようになる。

Ⅰ層　現表土

Ⅱ層　大広間建物解体後の堆積土（近代以降の公園整備などによる）

Ⅲ層　大広間建築時の整地層など

Ⅳ層　築城以前の表土層（中世以前、大広間跡では建築時に削平されたためか、確認できず）

Ⅴ層　基盤層（黄褐色粘土層・浅黄色風化礫層）

大広間跡の整地層は基本層のⅢ層としている。Ⅲ層整地層を大別すると、イ：最上層の礎石抜取り時まで存続したにぶい黄褐色土層（第20次調査で確認し、礎石抜取り時までの表土相当）、ロ：礎石掘り方を被覆する明褐色土層、ハ：虎の間付近より西側に分布する黄褐色粘土層（Ⅴ層起源とみられる整地層面）が見られる。ニ：さらに下層には、西側で砂礫層が、ホ：東側では風化礫等の混入物の多い褐色土（多数、細分が可能）等に分層される。なお、整地層の下層には、基盤層（Ⅴ層）となる黄褐色粘土層が比較的厚く堆積している。

＜その他の特徴＞

Ⅲ層整地層は、現地表面から基盤層までが浅い尾根筋に近い大広間北西角部付近では、ほとんど見られない。整地層は、微地形に沿って東側に傾斜しており、東に行くにしたがい厚く盛られている。

大広間跡北西部の整地層（第20次調査西部付近）は、その中位の黄褐色粘土層（Ⅴ層起源）では撹拌されたようなブロック状を呈している。建物跡南西部から北東部にかけて、砂礫層が帯状に分布している。この層の東辺部では漸移的に礫の量が減り、砂も灰色粘土に変化している（第７図参照）。

大広間跡のプラン内の整地層上部では、広範に褐色粘質土層が認められ、礎石の掘り方は、この層の上面で検出される。礎石掘り方底面はⅤ層（黄褐色粘土層）中に達するものが多い。一方、Ⅴ層面で掘り込みが確認された礎石（KS－581）が1基確認され、古い建物跡の存在が予想される（第20次調査）。

第７次調査や第20次調査（裏上段の間付近）では、整地層自体の残りが良く、座敷部から雨落ち溝跡に向かう傾斜（勾配）が確認できた（別項参照）。

大広間跡下層の整地層中には、前述した建物礎石（KS－581）の他、土坑跡（KS－586）等と推定される遺構群が介在しており、すべての整地地業が一気に行われたとはいえない。

大広間跡内部では、厚く整地層が行われているが、雨落ち溝跡の外側では整地層はほとんど見られない。

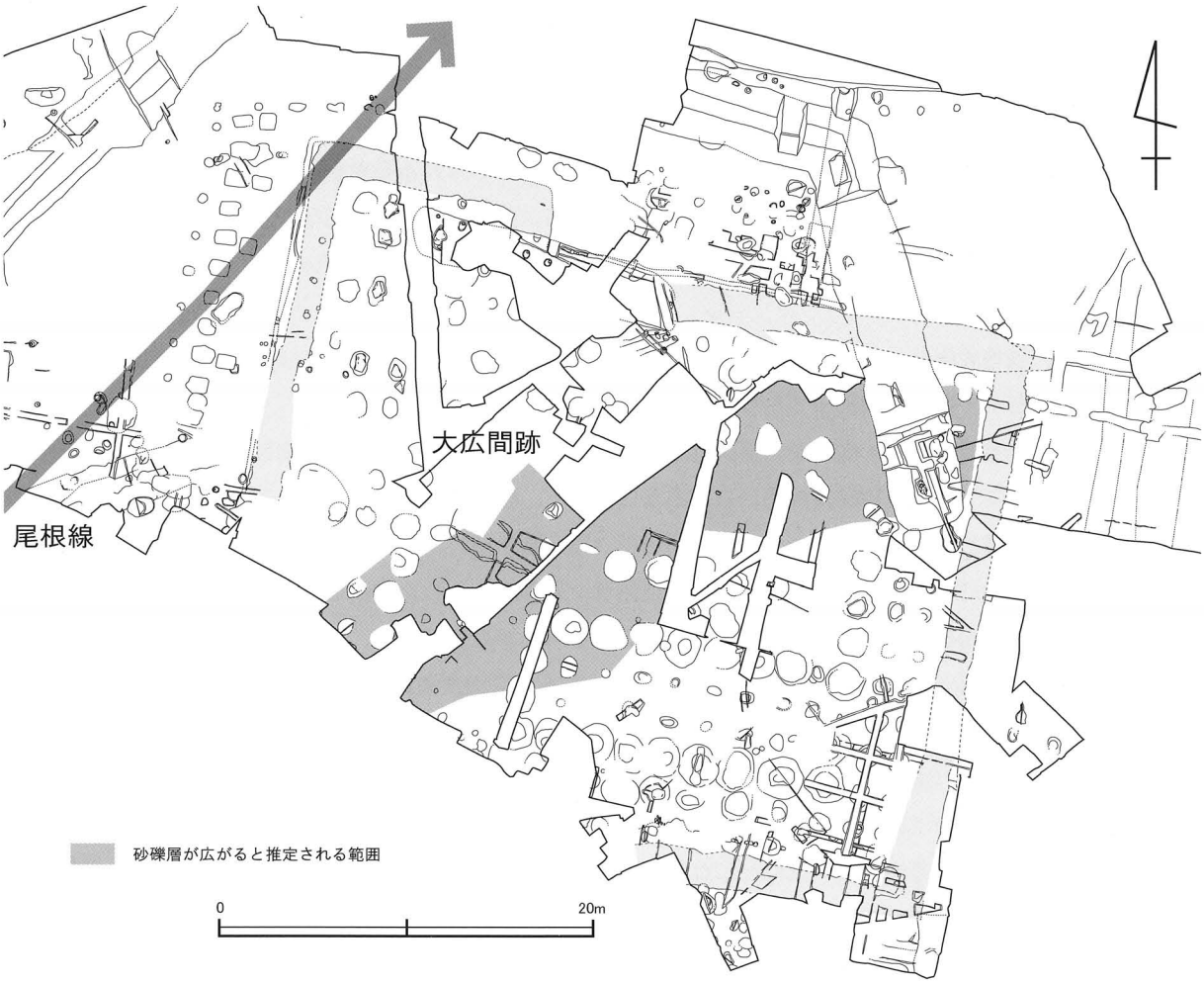
②砂礫層

大広間跡下層の整地層中には、床下全面ではないが、砂礫層が認められる。その分布範囲は、大広間跡南西部（虎の間付近）から北東部（上段の間付近）へ幅約10mで帯状に伸びる。北東部では、雨落ち溝跡の内側で途切れている（第17次・第20次調査）。

砂礫層は、２～５cm程の礫と粗砂から成るが、砂が主体で礫は少ない。第20次調査で１×0.3m、厚さ約２cmの範囲で、この層のサンプルを採取した。その結果、総重量14.8kgあり、そのうち礫は5.7kgで38.5％を占める程度であった。砂が主体の整地層であることが分かる。礫の大きさも長軸が５cm未満のものが多かった。したがって、後述するような「石敷き」という表現がよいのかどうか、検討の余地がある。砂礫層東辺部では、礫がほとんどなく、砂は細砂が堆積していた。第20次調査では、サンプル採取地点の砂礫層直下に、極めて薄い厚さ約５cmの茶褐色有機土層が検出された。

砂礫層は、Ⅲ層の下層に建物の存在を想定し、これと関連する石敷き遺構ではないかとの見方があったが、この

点は、面的な調査ができない現状では結論が出せない。また、尾根筋ラインに平行しているという特徴も認められるので、地下水処理や地盤沈下防止など他の用途・機能も考慮する必要が考えられる。大広間跡北東部外側の砂礫層との関連は、前述したように雨落ち溝跡内で途切れており、層を連続的に追いかけることができないが、一連のものである可能性は低い。この外側の砂礫層（KS－178石敷き等）は、形状が角礫のものを含み、瓦片がみられるなど、砂を主体に円礫を含む本砂礫層とは特徴に違いがある。

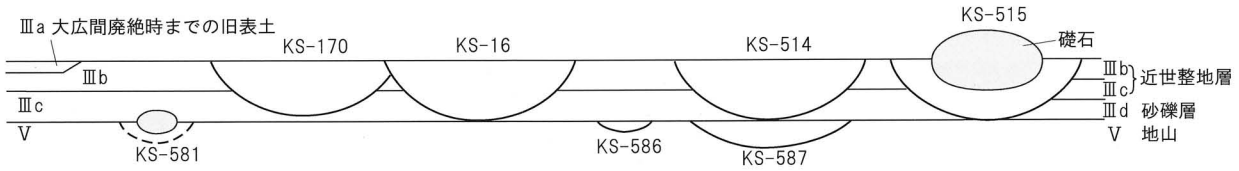


第7図　砂礫層分布図（1/400）

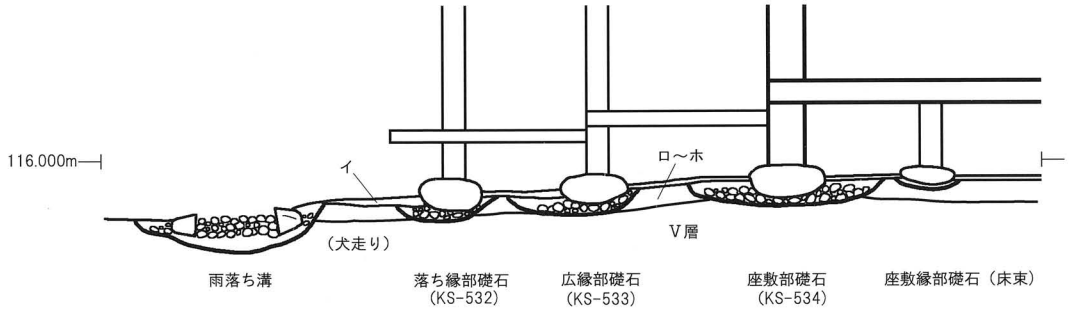
③座敷・縁側の勾配

座敷部床下から雨落ち溝跡までの状態については、比較的残存状態のよい第20次調査で観察することができた。この部分では、座敷部礎石掘り方№31から広縁の礎石№32、落縁の礎石№33を経て雨落ち溝跡に至る（この間の距離は約３ｍ）整地層上面の傾斜は、約３°の勾配（法面）が確認できた。東部の法面部では、広縁礎石抜取り穴が整地層最上層（にぶい黄褐色土）より掘り込まれているのが観察され、この層の表面は硬く締まっており、Ⅱ層がきれいに剥がれる現象がみられた。落縁礎石と雨落ち溝跡間はやや傾斜が緩くなり、この間の土層は上下に分層でき、上層が法面と同じにぶい黄褐色土（Ⅲa層）、下層（Ⅲb－1層）が硬化層となっていた（軒下の項で後述）。

なお、勾配の先の座敷部では、漆喰を塗るような亀腹状の隆起は認められなかった。



第8図　第20次調査　大広間南東周辺基本層序模式図



第9図　裏上段の間東側断面模式図

④軒下　　犬走りの叩き（硬化層の形成）

第20次調査の東側拡張部（裏上段の間東側）、落縁礎石抜取り穴（№33）と東側の雨落ち溝跡の間（犬走り部分）で、硬化層が検出された。軒下の犬走り部分が幅約90cmにわたり、Ⅲb－1層とした褐色シルト層（層厚最大６cm）が非常に硬化していた。特に、上面は硬く締まっている。層中に、漆喰や小石が混ぜられたような形跡は認められなかった。このような硬化層は、他の部分では確認されていないが、本来は建物の軒下を全周していたと考えられ、大広間の軒下では、建築当初犬走りにおいて叩き仕上げ作業が行われていたと推定される。

なお、上層のⅢa層は硬化が認められなかったが、この層の上面から礎石抜取り穴が掘り込まれているので、この層の形成は、下層（Ⅲb－1層）の叩き仕上げ後、落縁礎石（KS－532）の抜取り時までに形成された層であることが判明した。また、Ⅲa層は、拡張部では雨落ち溝跡の内部にも入り込んでいることや、上面あるいは上部で釘類が出土することも確認されている。

2)礎石

①残存礎石の特徴

これまでの大広間跡の調査において、その建物跡範囲内で検出された礎石は９石ある。このうち、１石は柱筋に載らない石で、上段の間の床の間中央床下に位置している（第７次調査　KS－130）。第17次調査の報告では、この礎石は掘り方が確認できず動いていると指摘したが、前述したように、篠山城跡大書院跡に類例があり、注意する必要がある。孔雀の間と檜の間の境に位置するKS－472礎石についても、石の上端が傾いていることから動いていると指摘されている。

大広間跡の柱筋にのる礎石は７石あり、いずれも扁平な自然石を使用している。北西部、首実検の間に位置する４石（首実検の間西辺３石とその北側１石）のうち２石は動いていると報告したが（第５次調査）、柱筋にのってお

り礎石の標高にも問題ないので、ほぼ原位置を保っているものとしてここで扱うことにした。これらの礎石には、加工痕や、番付などの書き込みも確認できない。大きさには差異があり、長軸60～95cm、短軸38～68cmのものがある。詳しく見ると、礎石は使用する場所によって、大きさの異なる扁平な自然石を選択している。屋根を支える柱には、長軸80～95cm、短軸55～65cmの礎石が認められる。束柱用には、やや小型の長軸60～80cm、短軸60cm～75cmの礎石が使われている。落縁には、長軸69～89cm、短軸50～75cmの礎石が使われている。

首実検の間北端の礎石（KS－97）は、落縁礎石としては他の石に比較して大きいようである。大広間跡の主要な各部屋の本柱に当る部分の礎石は残存していないが、縁の部分や束柱の礎石跡に比べて掘り方のサイズが大きいことは後述のとおりである。掘り方のサイズと礎石のサイズがどのような相関関係にあるのか、検討を要する課題である。

大広間跡の北に１石、転石となっている礎石（長軸120cm・短軸80cm・厚さ20cm）があり、これには柱を据える位置と考えられる部分に柱を受ける円形の加工痕が認められる（第12次調査で確認）。ただ、大広間に使用されていた礎石か明らかでない。

②礎石レベルの比較

礎石上端レベルは第４表に見られるように、首実検の間など座敷部の礎石では、115.80m台から115.90m台のものが見られ、最大約15cmの差が認められる。この差は、柱の長さを調整することによって解消したのであろう。平均礎石上端レベルは、標高約115.91mである。確認できるものは、すべて標高116.00mを下回る。不陸や沈下があったかどうか判断できないが、№9(KS－551）の広縁礎石のレベルは他より低い特徴をもつ。

番号	礎石名	位置（部屋名）	法量（cm）	標高（m）	加工	備考
1	KS－97	首実検の間	約89×75	115.987	無	落縁
2	KS－98	〃	約80×65	115.965	無	広縁、やや動く
3	KS－99	〃	約90×65	115.839	無	広縁、やや動く
4	KS－100	首実検の間・紅葉の間	約95×55	115.948	無	広縁
5	KS－101	首実検の間・紅葉の間	約70×50	115.911	無	束柱
6	KS－130	上段の間（床ノ間下）	約80×75	115.779(※)	無	束柱、動く
7	KS－472	孔雀の間・檜の間	約60×38	115.875	無	束柱
8	KS－538	鶴の間・鷹の間	約72×(65)	115.93	無	束柱
9	KS－551	鶴の間（広縁部）	約69×58	115.792	無	広縁

※17次調査データ使用

第４表　残存礎石一覧

③座敷部礎石掘り方・抜取り穴

礎石の掘り方や抜取り穴については、全容の分かるものは多くない。公園整備による園路工事や各種の埋設管掘削工事などで削平されたものも多く、北半部では礎石の掘り方が確認できない所もある。

＜掘り方・抜取り穴の特徴＞

座敷部の礎石掘り方は、円形や楕円形の形状が多いが、不整形のものもある。直径は約1.7～2.4mが確認できるが、特に、上部の削平を免れた大広間跡南東部では、その多くが直径２m前後である。深さは、0.2～0.4mである。内部には主に褐色土と円礫を充填している。抜取り穴は、最大1.5×1.0mのものがあるが、0.7×1.0m程の略円形のものが多い。深さは確認できたもので、最深0.45mである（裏上段の間KS－17）。抜取り穴の内部は、暗褐色系の土で

埋められ、根固め石が起源とみられる円礫が入っているものが多い。

＜礎石設置＞

座敷部の礎石設置は鷹の間・虎の間付近の観察では、掘り方内の観察から直径２m前後、深さ0.2～0.4mの穴を穿ち、基盤層の黄褐色粘土層中で底になるようにし、根固め石を入れて安定化を図り、礎石を設置したものと考えられる。礎石設置後は、根固め石が隠れるように褐色土やにぶい黄褐色土で被覆している。このうちにぶい黄褐色土は、座敷床下部ではあまり認めらないが、裏上段の間の東、縁側部法面で良好に残存していた。この層は、前述した第20次調査東側拡張部のⅢa層と一連の層である。座敷部床下では、この層が乾燥風塵化し、雨落ち溝上や犬走り付近に再び堆積したのではないかと推定される。

＜抜取り穴と抜取り時期＞

裏上段の間北辺に位置するKS－６礎石抜取り穴では、第1次調査の際に根固め石とともにレンガ片が出土している。これは、礎石抜取りの時期を考えるうえで、一つの視点を与えてくれる。一般に、大広間礎石の抜取りは、明治初年の建物解体と同時期（明治４年～８年頃）と考えられている。しかし、レンガは建物などに一定期間使用されてから廃棄され、礎石抜取り穴を埋める土に混入した可能性が高い。仙台市内で、最初にレンガが使用されたのは、明治15年の仙台警察署の建物で、レンガは片平丁にあった宮城県監獄署で製造されたという（『仙台市史通史編６近代１』）。また、本丸跡地に明治35年竣工した昭忠碑は、その建設にあたりレンガを多量に使用したといわれ、これと関連する可能性もある。したがって、礎石抜取りは建物解体時だけでなく、その後も行われていた可能性が高いと考えられる。

＜束柱の礎石掘り方・抜取り穴の特徴＞

束柱の礎石抜取り穴は、第20次調査で多く検出されている。平面形は一定していないが、長軸0.4～0.9mで、円形より楕円形を呈するものが多い。深さは、0.1～0.27mを測る。礎石は、素掘りのもの（KS－20）、穴を掘り内側に粘性土を入れた（貼った）もの（KS－523）、僅かだが根固め石を入れたもの（KS－527）が見られた。礎石設置後は、その脇まで被覆する整地がなされたと考えられる。上記のように、束柱と考えられる礎石の設置に際しては、形状や構造に統一性があまり見られない。

④縁側部礎石掘り方・抜取り穴

縁側部の礎石の掘り方は、落縁・広縁とも直径１m前後のものが多い。深さは、第20次調査で確認した例では、0.14～0.26mを測る。なお、広縁では間仕切りライン上で屋根を支える柱の礎石掘り方に、座敷部の礎石掘り方同様、直径1.7～2.0mを測るものがあり、鶴の間の南側KS－170・552、上段の間KS－124が該当する。座敷部では、掘り方直径が約２m前後のものが一般的である。

礎石抜取り穴の大きさは、掘り方よりやや小さいがほとんど差がない。深さは、多くが0.1～0.25mであるが、削平を免れ整地層の残りのよい第20次調査３区裏上段の間付近では、0.3～0.45mを測る。裏上段の間から鶴の間にかけての広縁では、柱間間隔が３間半の３つ割となっている特徴的な箇所がある（第３図⑦）。

Ⅲ．付属施設

⑴雨落ち溝跡の特徴（KS－53）

雨落ち溝跡は大広間建物跡の外側を廻り、溝跡中央部（芯々）は、屋根の軒先ラインと一致することが判明している。なお、南西部の鹿の間付近の雨落ち溝跡については、敷地外に位置することから調査を行えず、特徴をつかむことができなった。

1)規模・形状

溝跡の芯々間を図上で計測すると、東西37.68m（北半部）、南北29.79m（東辺部）を測る。形状は大広間建物跡

と相似形を成す。溝跡は、切石を縁石とする石組溝で、溝幅（縁石間）は50～56cm（大広間北西部に当たる第５次調査では最大で90cm を測る）、深さは確認面からで一定しないが、溝底面まで20～50cm を測る。

雨落ち溝跡西辺部では、溝跡の輪郭が西側に張り出し、突出部を形成している。調査では厚さ約１ｍを測り、西側へ突出する部分は内側で50cm、外側で30cm 程張り出している。この突出部は玄関（紅葉の間）に対応した何らかの施設を反映したものと考えられる。

2)構造

1.7～2.0mの掘り方を建物と相似形に掘り、内部に一部加工した割石による石組溝を作り、さらに溝内に川原石や割石を充填している。裏込め部分にも小礫や割石が含まれている。縁石の大きさは、およそ20～40cm(最大49cm) で、小口を広くとり、控えの短い切石を使用している。縁石は解体時などに抜き取られたようである。残存部でも一段分しか確認できない。二段の石組みの可能性も考えられたが、明らかではない。溝内の川原石は、検討の結果、下部の石は粒径・重量が揃い規格性が認められるが、上部の石は一定ではないことが確認されている（第12次調査）。

3)その他の特徴

大広間建物跡北辺部の雨落ち溝跡は、第12次調査時に同じ位置で上下の重複が確認された。詳細な時期は不明だが、藩政期に雨落ち溝北辺部は改修されていたことが分かる。

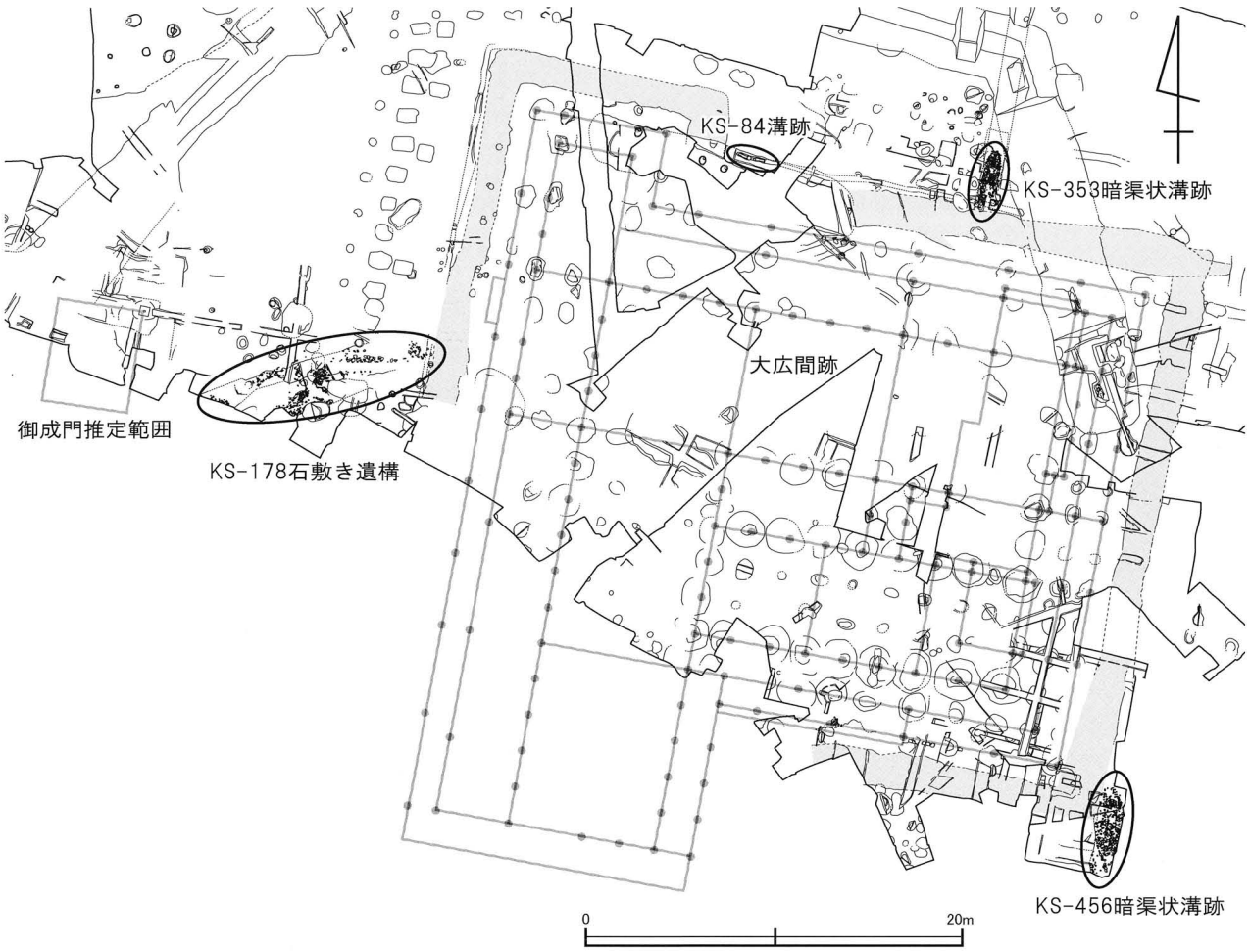
また、溝跡内の流水方向を明らかにするため、川原石面の標高を比較した結果、建物跡の北西側が高く南東側が低いことが確認された。特に、車寄せ付近が最も高く（115.694m)、北西角部（115.622m）がこれに次いでいる。逆に、最も低い箇所は南東角部で、標高115.451mを測る。北東角部もこれとほとんど差がない（115.455m)。

鹿の間付近の雨落ち溝跡は明らかではないが、雨水などの排水処理は溝の底面レベルの低い東側で行われた可能性が考えられる。しかし、これまでの調査では、KS－456暗渠状遺構（第15次調査）が排水施設の可能性を残すが、大広間の雨落ち溝に続く開口する排水処理施設は明らかなっていない。

Ⅳ．その他の遺構

⑴石敷き遺構（KS－178)

第７次調査時に、大広間建物跡と御成門跡の間に両者を繋ぐように石敷き遺構が検出された。幅約1.7m、長さ7.4mに亘り検出され、下部に深さ30～40cmの溝状遺構を伴っていることが明らかになった。溝状遺構の内部下層では、多量の円礫が出土した。この遺構は当初、暗渠の可能性が考えられた。上面の石敷き遺構は、溝部の埋土１層上面に10cm未満の大きさの揃った円礫を敷き詰めたものである。方向はＮ－約72°－Ｅを測り、大広間建物跡の東西軸方向に比べ、北に約30°傾いていた。また、石敷き部の石レベルは大広間跡に向かって下がり、約20cmの比高差があり、大広間建物跡とは紅葉の間で接するようである。引き続き、翌年の10次調査で、この遺構の追加調査と検討を行った。その結果、通路跡で全長約12.5mとなり、石敷きの幅は最大約2.5m、下部の溝状遺構は上幅0.9～1.2m、深さ20～40cmを測る。石敷き部の礫は、採取し検討した結果真円に近いものを多く選択し、使用されていることが明らかとなった。溝内部の礫は、選択性はあまり看取されなかった。ところで、この遺構の延長線が、御成門跡に繋がらず予想外に南側にずれることも判明した。御成門跡の規模の検討からも、やはりずれることが明らかとなり、御成門跡とこの遺構との連続性は低いと判断された。ただ、御成門跡の礎石掘り方内から瓦が出土していることから、この門跡は築城当初からのものではなく建て替えられている可能性も考えられ、なお検討の余地を残している。また、下部の溝状遺構の珪藻分析では、珪藻がほとんど検出されず、一時的でも乾燥した環境だった可能性がある。したがって、暗渠ではなく通路下の地業遺構とも考えられる。こうした状況から結論を出せないが、通路跡とみてよいものの、この遺構と接続すると予想される古い御成門跡が別地点に存在した可能性を考えなければならない。



第10図　大広間跡関連遺構位置図（1/400）

⑵区画施設

①１号塀跡（南北柱列）

大広間建物跡西側に位置し、大型の掘り方をもつ柱列で柱穴13基（KS－67～76、233、246、296～298、12間分）が検出され、全長20.8mを測る。柱間間隔は1.55～1.6mである。さらに、南側調査区外に伸びていくと予想される。方向はN－約10°－Eを示し、大広間建物跡の西辺南北ラインに約7.4m離れ平行している。柱穴は略長方形を呈し、長軸が0.8～1.5m、短軸が0.7～0.95mで、その多くで柱痕跡が検出できた。塀跡には、柱列の東側に１間おきに控え柱とみられる柱穴（KS－51・78・79・80）が取り付いている。また、塀跡を構成する柱穴のうち、KS－233とKS－296は柱間間隔が他と異なり約４mと広く、深さも他より深い。底面まで確認できたKS－233柱穴では、底面から扁平で大きな根石が出土した。こうした特徴から、２基の柱穴は門柱の柱穴と考えられる。KS－296柱穴跡には、柱の抜き取り穴（KS－246）が認められた。遺物はKS－51柱穴から、丸瓦・熨斗瓦が1点ずつ出土した。塀跡は、本丸入り口より直接部屋や廊下が見えないように、区画・遮蔽を目的に設置されたものと考えられる。なお、前述した石敷き遺構は、KS－233・296の門柱間の下を通り、大広間の雨落ち溝跡に達するものと推定される。

②２号塀跡（南北柱列）

大広間建物跡・１号塀跡の西側にこれと並行して位置する。小型円形の掘り方をもつ柱列で柱穴８基（KS－58～65、７間分）が検出され、全長約13.7mを測る。柱間間隔は1.9～2.0mで、約1.96mを測る箇所が複数あり、６尺５寸を基準としていたと考えられる。方向はN－10.5°－Eの南北方向を示し、大広間建物跡とは約8.5m、1号塀跡とは約

1.2m離れ、ほぼ平行している。柱穴は直径0.4～0.5mの略円形を呈し、その多くで柱痕跡が検出できた。遺物は出土していない。この塀跡北端柱穴（KS－58）より約１m北に、後述する3号塀跡の西端柱穴（KS－254）が位置しており、両者は関連するあるいは一連のものと考えられる。１号塀跡との新旧関係は不明である。

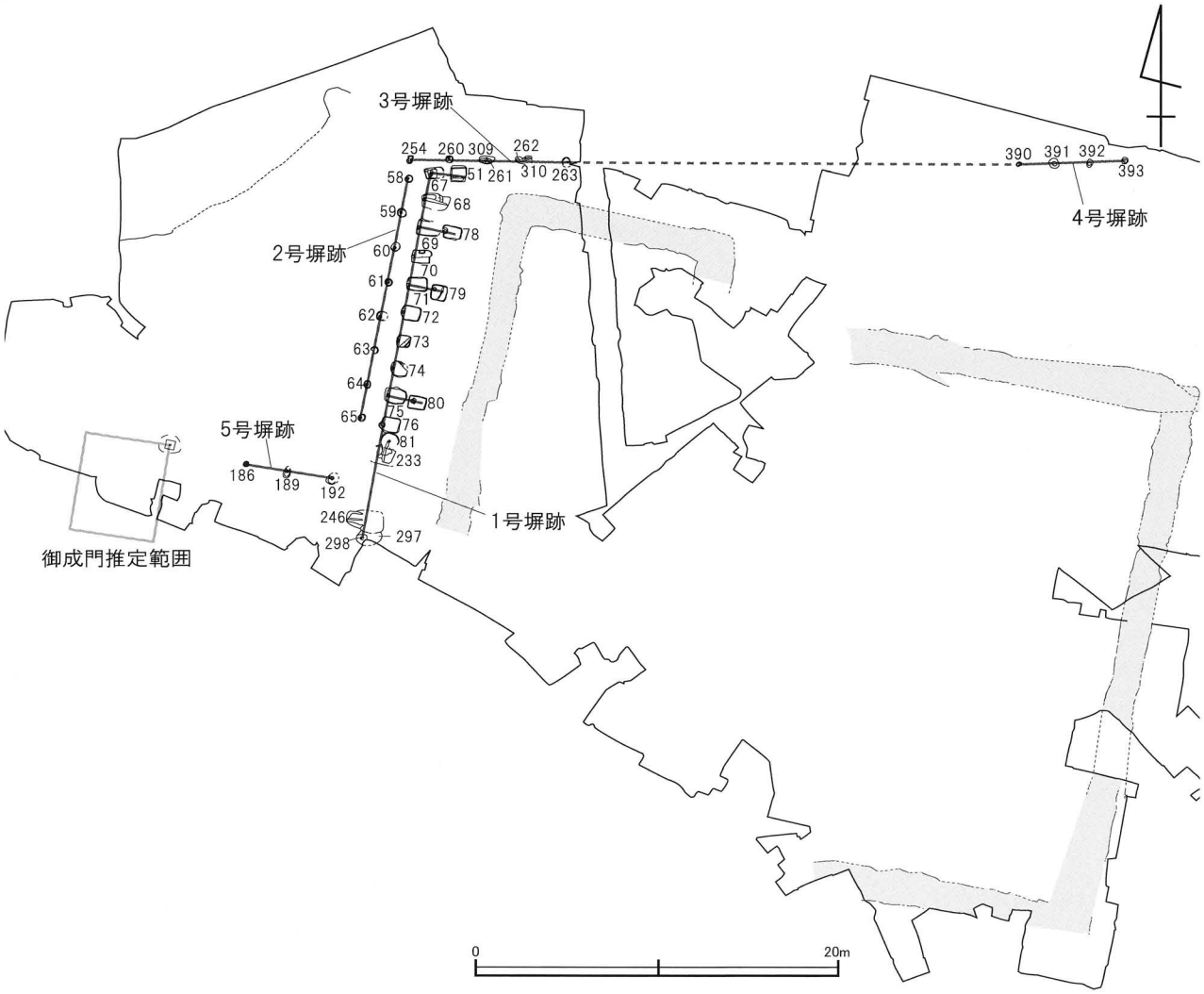
③３号塀跡（東西柱列）

大広間建物跡の北側に位置し、２号塀跡と類似した小型円形の掘り方をもつ柱列で、西端の柱穴は２号塀跡北端の柱穴に合っている。柱穴は５基（KS－254、260～263、306、309、310、4間分）検出され、全長約8.6mを測る。一部で柱穴どうしが重複しており、建替え等が行われたものと判断される。柱間間隔は1.9～2.1mとばらつきがあるが、６尺５寸を基準にしていた可能性がある。方向はN－90°－Eで真東西方向を示し、大広間建物跡北辺ラインとは平行しない。柱穴は直径0.3～0.4mで、重複している穴は0.4×0.9mを測る。遺物は出土していない。

④4号塀跡（東西柱穴列）

３号塀跡の東約25mの地点で、方向が一致する柱列が検出され（第12次調査）、柱穴4基（KS－390～393）で３間分になり、全長5.8mを測る。柱穴は直径0.3～0.5m、柱間間隔は1.8～1.9mを測る。遺物は出土していない。

３・４号塀跡は東西に離れて検出されたが、一連の遺構と推定している。東側は大広間の範囲を超えて伸びていると推定され、大広間北辺と同一方向ではなく、Ⅲ期石垣のラインと平行している。Ⅲ期石垣の盛土層より新しいことが確認されている。これらの塀跡は大広間の付属施設とみるより、大広間建物と石垣を遮蔽する施設であった可能性が考えられる。



第11図　大広間跡関連施設（塀跡）位置図（1/400）

⑤５号塀跡（東西柱列）

この遺構は第7次調査の際、「KS－186・189・192柱穴」として報告したものである。今回、この遺構を５号塀跡として扱うことにした。この塀跡は、御成門跡と大広間建物跡の間に位置し、３個の柱穴で構成される。柱痕跡が確認でき、一列に並ぶ。柱穴３個（２間分）で約4.8mを測る。KS－186は直径約0.32mで円形を呈し、直径約10cmの柱痕跡がある。KS－189は直径60cm以上で楕円形を呈し、直径約15cmの柱痕跡がある。KS－192は直径60cm以上で円形を呈し、直径約18cmの柱痕跡がある。方位は約N－82°－Wで、大広間建物跡東西軸にほぼ平行し、２号塀跡とはほぼ直交し、形状の異なる1号塀跡とは方向が僅かにずれている。遺物は出土していない。

⑶暗渠状遺構

＜KS－353暗渠状遺構＞

この遺構は大広間建物跡北辺の雨落ち溝跡の東部に直交し、さらに北方に延びる。方位は約N－10°－Eで、長さ約3.7mを測る。北端部は撹乱溝や近代大溝に切られ、どのように展開するのか明らかではない。検出面はⅢａ層（第12次）で、雨落ち溝跡の新段階と同じ面である。遺構掘り方は幅約90cm、深さ30cmで内部は石列を2列配し、その間の一段低い部位に小形礫を充填している。遺物は鉄釘・古銭等が出土している。この遺構の埋土を珪藻分析した結果、珪藻密度が低く、乾燥した環境だったこと可能性もある。したがって、深さが30cmと浅い特徴もあり、調査時には暗渠の可能性を考えて報告したが、開口した石組溝跡であった可能性も残り、なお、検討の余地を残している。

＜KS－456暗渠状遺構＞

大広間雨落ち溝跡南東角に位置し、南あるいは東へ延びると予想される遺構である。撹乱が著しく、形状・規模は不明だが、東西1.5m、南北3.2mの範囲に密度の高い礫の集中が検出された。大広間跡の雨落ち溝で一番低い部分にあたることから、雨落ち溝跡から続く排水施設であった可能性もある。

⑷KS－84溝跡

この溝跡は素掘りで、大広間跡の外周を巡る雨落ち溝跡と相似形を成す（第9図）。西辺部では約１～２m外側に平行している。全長18.8m程が検出できた。方向はN－11°－Eである。北辺部でも断片的に検出され、雨落ち溝跡に切られている。大広間跡北部で検出された礎石建物跡に伴う石敷きより新しいことが確認されている（第12次調査）。規模は検出面で幅25～32cm、深さ約30cmである。埋土は均質で、人為的に埋められた可能性が高い。遺物は、埋土中から瓦片が出土している。溝跡の性格としては、大広間建設にかかわる何らかの遺構と考えられる。

⑸柱筋にのらない礎石跡及び掘り方

柱筋にのらない礎石は、近代以降何らかの理由で動かされてしまったものを除き、礎石に限らずその掘り方も柱筋にのらないものとして扱っている。

この条件に合う礎石あるいは掘り方は、合計11基ある。礎石（掘り方）が、何故ずれているかは不明である。現代の撹乱等と異なり、当初から、あるいはその後も含めて、柱筋からずれた位置に穴を掘り礎石を据えたのであるから、そこには何らかの意図あるいは目的があったものと考えられるが、その理由は明らかでない。ただ、上段の間「タン」の下に位置するKS－130のように、新寛永通宝が出土したことにより、江戸時代のある時期に新たに追加設置された可能性を示すものもある。

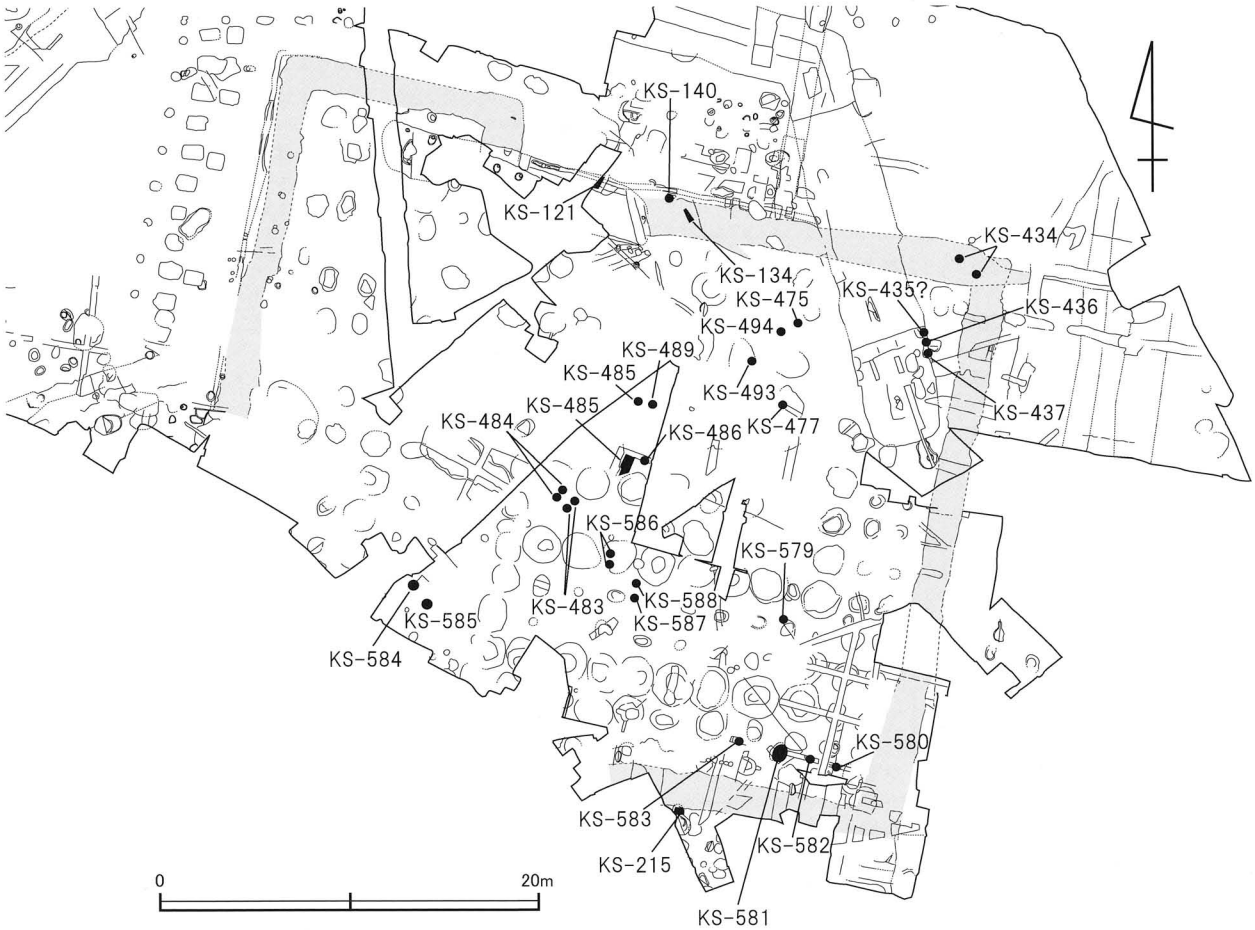
第12図　柱筋にのらない礎石位置図（1/400）

礎石・掘り方	位　　置	東西筋	南北筋	備　　考
KS－13	紅葉の間	×	×	
KS－54	西辺部落縁	×	○	
KS－115	欅の間	×	×	KS－54と東西筋合う
KS－116	同上	×	×	
KS－117	同上	×	×	
KS－125	北辺部広縁	○	×	
KS－130	上段の間	×	×	「タン」の床下礎石　新寛永通宝出土
KS－133	建物北東角	×	○	第5次調査ではKS－124
KS－137	首実検の間	○	×	
KS－232	鷹の間落縁	○	×	
KS－242	建物南東角	×	×	KS－166の外側　建物南東角対角線上
KS－472	孔雀ノ間、檜ノ間境	○	×	礎石掘り方もずれている

第５表　柱筋にのらない礎石跡及び掘り方一覧　※柱筋にのるものは「○」、のらないものは「×」

⑹下層遺構

大広間建物跡は調査の結果、盛土整地層上に建造されていることが判明したが、この整地層中あるいはその下層（基盤層上）で検出できた遺構を、下層遺構と呼んでいる。下層遺構の多くは、平面的な観察や精査できたものは極めて少ない。大部分は撹乱溝等の壁面で確認できたものばかりで、特徴や時期が明らかなものはない。第６表は、下層遺構を一覧表にしたものである。Ⅲ層中及びⅤ層上に遺構が検出されているが、いずれも、規模や形状等が異なり一連の遺構とは考えにくい。検出できた下層遺構は個別のものが多いと判断されるが、第20次調査のKS－581礎石は１基だけだが、大広間建物に先行する建物跡の一部になる可能性があり、注目される。大広間建物跡に比べ、礎石やその掘り方は小さく、標高も低い。ただし、１基だけなので、その規模や特徴は明らかではない。遺構からの遺物の出土も殆どなく、時期・年代を決めがたい。



第13図　大広間下層遺構位置図（1/400）

次数	遺構名	調査区	層位・他	規模（確認長）	備　考
1次					該当なし
5次	KS－121 ?	2B区	KS－84の下	約1m、深さ0.9m	土坑状
5次	KS－134 ?	2B区	雨落ち溝下	約1.7m、深さ0.12m	皿状
5次	KS－140 ?	2B区	〃	約0.36m、深さ約0.3m	ピットか
7次	KS－215	2区	雨落ち溝下	約0.3×0.29m	雨落ちに切られる
12次					該当なし
15次	KS－434	1区	〃	約1.5m、深さ0.14m	皿状
15次	KS－435	1区	KS－410の下	約0.2m、深さ0.14m	
15次	KS－436	1区	KS－410・435の下	約0.46m、深さ0.18m	底、平坦
15次	KS－437	1区	Ⅴ層上面	約0.8m、深さ0.21m	ゆるいU字状
17次	砂礫層	2～4区			基礎の特徴項参照
17次	KS－485	2区	Ⅲd層上面	幅1.48m、深さ0.36m	皿状
17次	KS－486	2区	Ⅲb2層下	幅0.34m、深さ0.1m以上	ピットか
17次	KS－489	2区	Ⅲc層・Ⅲd層	幅0.84m以上、深さ0.16m	皿状、KS－485に切られる
17次	KS－493	3区	Ⅲd層	幅0.28m、深さ0.12m	ピット状、KS－469礎石下
17次	KS－473	4区	Ⅴ層上面	幅0.55m、深さ0.25m	
17次	KS－474	4区	Ⅴ層上面	幅0.7m、深さ0.25m	KS－473より古い
17次	KS－475	4区	Ⅴ層上面	幅0.12m、深さ0.16m	礫多量
17次	KS－476	4区	Ⅴ層上面	幅0.12m、深さ0.24m	ピットか
17次	KS－477	4区	Ⅴ層上面	幅0.12m、深さ0.16m	礫多量
17次	KS－483	2区	Ⅴ層上面	幅1.68m、深さ0.16m	
17次	KS－484	2区	Ⅴ層上面	幅0.48m、深さ0.18m	KS－483より古い
17次	KS－494	4区	Ⅴ層上面	幅0.4m、深さ0.12m	
20次	KS－580	3区	Ⅴ層上面	0.7m×0.15m以上	平面、楕円形か
20次	KS－581	3区	Ⅴ層上面	礎石0.62×0.38m 掘り方0.75×0.6m	根固め石なし 標高115.572m
20次	KS－582	3区	Ⅲc5層	0.53×0.21m以上	平面、円形か
20次	KS－583	3区	Ⅴ層上面	0.65×0.3m以上	平面、円形か
20次	KS－584	1区	Ⅴd層上面	幅1.32m、深さ0.14m	上部開くU字形
20次	KS－585	1区	Ⅲd層上面	幅0.94m、深さ0.28m	撹乱溝両壁確認
20次	KS－586	2区	Ⅲc8層上・Ⅴc層上面	幅1.13m、深さ0.44m	瓦片出土、KS－514礎石下
20次	KS－587	2区	Ⅴc層上面	幅1.02m、深さ0.18m	皿状
20次	KS－588	2区	Ⅲc19層下	幅0.43m、深さ0.14m	浅いV字状

第6表　下層遺構一覧

V．出土遺物

大広間建物跡として扱う遺物は、雨落ち溝跡（KS－53）の内側を対象とし、Ⅲ層上面や礎石掘り方や礎石抜き取り穴、さらに、付属施設である雨落ち溝跡や塀跡出土のものを扱う（詳細は各次報告書参照）。大広間跡にかかわる遺物は、雨落ち溝跡（KS－53）及び建物の床下に当たる整地層最上層のⅢ層（Ⅲａ層）から、多くの遺物が出土している。遺物の種別としては、金具・釘が目立ち、陶磁器・土器類は予想外に少ない。帰属が明らかでないので対象から今回外したが、雨落ち溝跡の外側や基本層Ⅱ層の出土遺物にも、本来、大広間建物跡に帰属すると推定される遺物（金銅金具等）がある。

(1)陶磁器

次数	調査区	遺構名・層位	産地・種類	時　期	備　考
5次		KS－53	肥前染付碗	18世紀	くらわんか手
7次	2区	Ⅲ層	常滑甕	中世	

第7表　大広間跡関連出土陶磁器

(2)土器類

次数	調査区	遺構名・層位	産地・種類	時　期	備　考
7次	2区	Ⅲ層	土師質土器皿	江戸	灯明皿　スス付着
7次	2区	Ⅲ層	瓦質土器鉢	江戸	
7次	2区	Ⅲ層	瓦質土器火鉢	江戸	

第8表　大広間跡関連出土土器類

(3)金属類（金具・銅釘を除く）

次数	調査区	遺構名・層位	産地・種類	時　期	備　考
5次	2Ａ区	KS－53　1層	煙管	雁首部分	付け肩
10次	2区	KS－269　1層	鉄釘	頭部角	先端欠損
15次	2区	Ⅲａ層	煙管	延べ煙管	火皿欠損
17次	4区	KS－130　1層	古銭	寛永通宝	新寛永

第9表　大広間跡関連出土金属類（金具・銅釘を除く）

(4)瓦

次数	調査区	遺構名・層位	産地・種類	時　期	備　考
1次	1Ａ区	KS－1（53）	軒丸瓦	連珠巴文	瓦頭1/6程残
5次	1区	KS－51	丸瓦		一部欠損　塀跡
5次	2Ｂ区	KS－121　4層	軒丸瓦	連珠巴文	瓦頭約1/2残
5次	2Ａ区	KS－53　1層	菊丸瓦	菊文	一部残存
5次	1区	KS－51	熨斗瓦	凹面櫛目あり	約1/2残　塀跡
7次	2区	Ⅲ層	軒平瓦	三引飛雲文	瓦頭一部残
12次		KS－53　4層	鬼瓦？		接合面の突起
15次	2区	KS－53　1層	軒平瓦	桔梗文	瓦頭約1/3残
20次	3区	礎石抜き取り穴	軒平瓦	桔梗文	瓦当約1/2残
20次	3区	Ⅲａ層	角桟瓦		約1/4残

第10表　大広間跡関連出土瓦

Ⅵ. 科学的分析

８年間の大広間建物跡の調査において行なわれた科学的分析をまとめると、以下のとおりである。なお、まとめは、直接大広間建物跡とその付属施設の遺構等に関係する分析に限ることにした。

第１次調査（平成13年度）

・地下レーダー探査　　調査前に行う。礎石や溝跡に有効。礎石掘り方跡の把握には不充分。

・土壌分析

雨落ち溝跡東側（外側）で検出された白色土が、漆喰かどうか分析。蛍光Ｘ線分析でカルシウムが主成分の土（石灰）と判明。

・プラント・オパール定量分析

植物珪酸体が検出。スサ入りの可能性が高いことが判明。この分析の結果、白色土は漆喰土である可能性が大である。

・金属分析　　飾り金具と銅釘について非破壊による成分分析を依頼。

第５次調査（平成14年度）

・地下レーダー探査　　調査前に行い、礎石・近代の溝状遺構・金属の埋設管等を把握。

・土壌分析　　雨落ち溝跡とKS－84溝跡について花粉分析を行う。両遺構の花粉組成の差は認められなかった。

・金属分析　　金銅金具について成分分析を依頼。

第７次調査（平成15年度）

・金属分析

成分分析の結果、金銅金具は、銅の含有量90％以上。一部で砒素検出。金部分は、金以外に水銀を検出し、鍍金であることが確認された。

・土壌分析

KS－163雨落ち溝跡・KS－222土坑・Ⅲａ層について、花粉分析を行う。分析の結果は良好なデータは得られなかった。

第10次調査（平成16年度）

・土壌分析

KS－178石敷き通路跡の機能解明のため、珪藻分析を行う。分析結果は、珪藻が少なく、乾燥した堆積環境だったことが判明。

第12次調査（平成17年度）

・土壌分析

KS－84素掘り溝跡の珪藻分析を行う。分析結果は、珪藻が少なく、乾燥した環境か、堆積速度が速かったことが判明。

・年代測定

大広間建物に先行する北側の礎石建物跡の構築に伴う整地層（Ⅲｇ層）出土の炭化物3点の測定を行う。分析結果は、14Ｃ年代Ｃ1:330±40yrＢＰ、Ｃ2:330±40yrＢＰ、Ｃ3:300±40yrＢＰの値がえられた。

第20次調査（平成20年度）

・年代測定

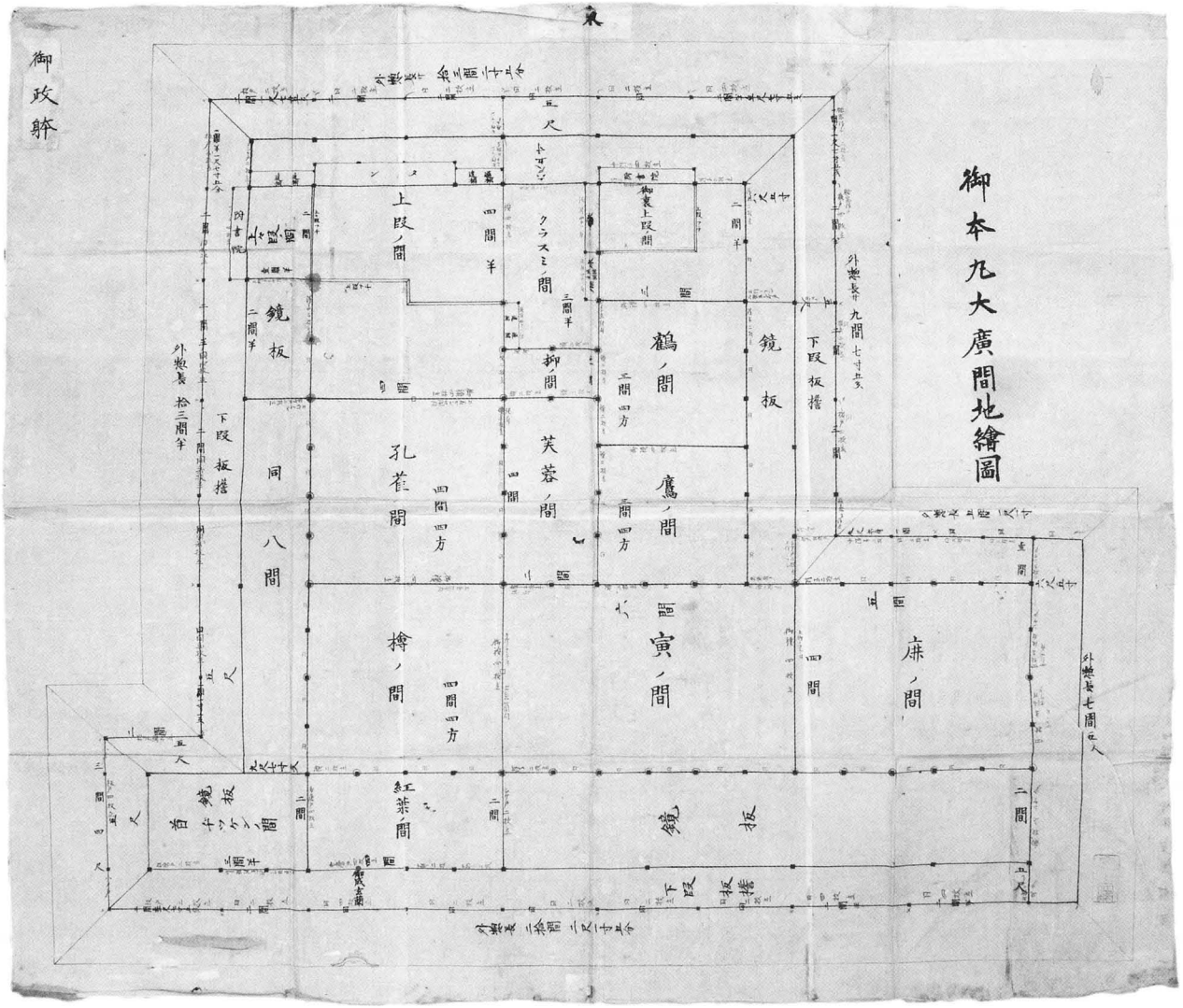
KS－586（土坑？）内の木片について、放射性炭素年代測定を行う。なお、この遺構は、大広間整地層下の基盤層上で検出。また、報告書では、２区Ⅲ層扱いになっているが、ここに訂正する。測定結果は、木片の14Ｃ年代は、2300±30ｙｒＢＰである。予想とは異なり、より古い年代のものであった。

Ⅶ. 絵図の検討

第１次調査以来、絵図に関する調査・検討を野外調査と合わせて行ってきた。特に、大広間建物跡に関しては、第５次・第７次・第10次・第15次・第17次の調査にあわせ検討してきた。その詳細は各次報告書のとおりである。大広間を描いた絵図資料は現在のところ８点確認されており、そのうち「御本丸大広間地絵図」、「青葉城御本丸之図」、「御本丸千畳敷之図」、「旧本丸御屋形図」の４点について比較・検討し、その結果を整理した。

１．御本丸大広間地絵図

大広間建物を描いた絵図はいくつか残っているが、御本丸大広間地絵図（以下、「地絵図」と略する）部屋割りや規模等の建築学的な特徴を最も良く示している。製作年不詳で、約１/60の縮尺で描かれている。地絵図は発掘成果と比較すると、他の絵図より柱の位置や柱間寸法、部屋の規模が正確に描かれている。部位名称では他の絵図と異なり、上段の間の東辺の床は「タン」、裏上段の北辺は「床」とし区別している。紅葉の間西側の玄関部には、「御成玄関」と記載し、唐破風の屋根を描いている。この絵図には、法量の実長記載に誤りがみられる。西辺の総長「二拾間二尺一寸五分」は誤りで、各部屋の合計では20間１尺１寸５分となる。同様に南辺東半部も合計の長さは「九間七寸五分」ではなく、９間１尺７寸５分となる。この点に気づかれた佐藤巧氏は、『仙台城』(1967年)で首実検の間を例に修正案を示されている。地絵図では、西辺の総長、南辺東側の総長に、記載の誤りがみられるが、絵図の資料的価値を下げるものではないであろう。また、屋根軒先ラインや戸板、板敷等の表記がみられるが、他の絵図と異なり、障壁画等の内部装飾や仕様の表記はみられない。絵図作成に際し、他の絵図とは視点が異なっている。



第14図　『御本丸大広間地絵図』（斎藤報恩会蔵）

２．御本丸千畳敷図

この絵図は、江戸末期の仙台藩家臣茂木新九郎が模写したものと言われているが、原本が何かは不明である。部屋割りは他の絵図と同じであるが、部屋の名称、規模に違いが認められる。広縁（この絵図では「拭縁」）は地絵図が２間・１間半・１間の別があるのに対し、概ね２間として描かれている。また、虎の間の南北柱間は地絵図が６間に対し、５間と記載されている。広縁や落縁の柱の表示は、省略されている。柱の配置や寸法等には、あまり注意が払われていない。しかし、地絵図に比べ、各部屋のしつらい（装飾）は天井を含めて記載し、障壁画や板戸絵等の内容が具体的に分かり、これに力点が置かれている。地絵図との主な違いを以下に列記した。

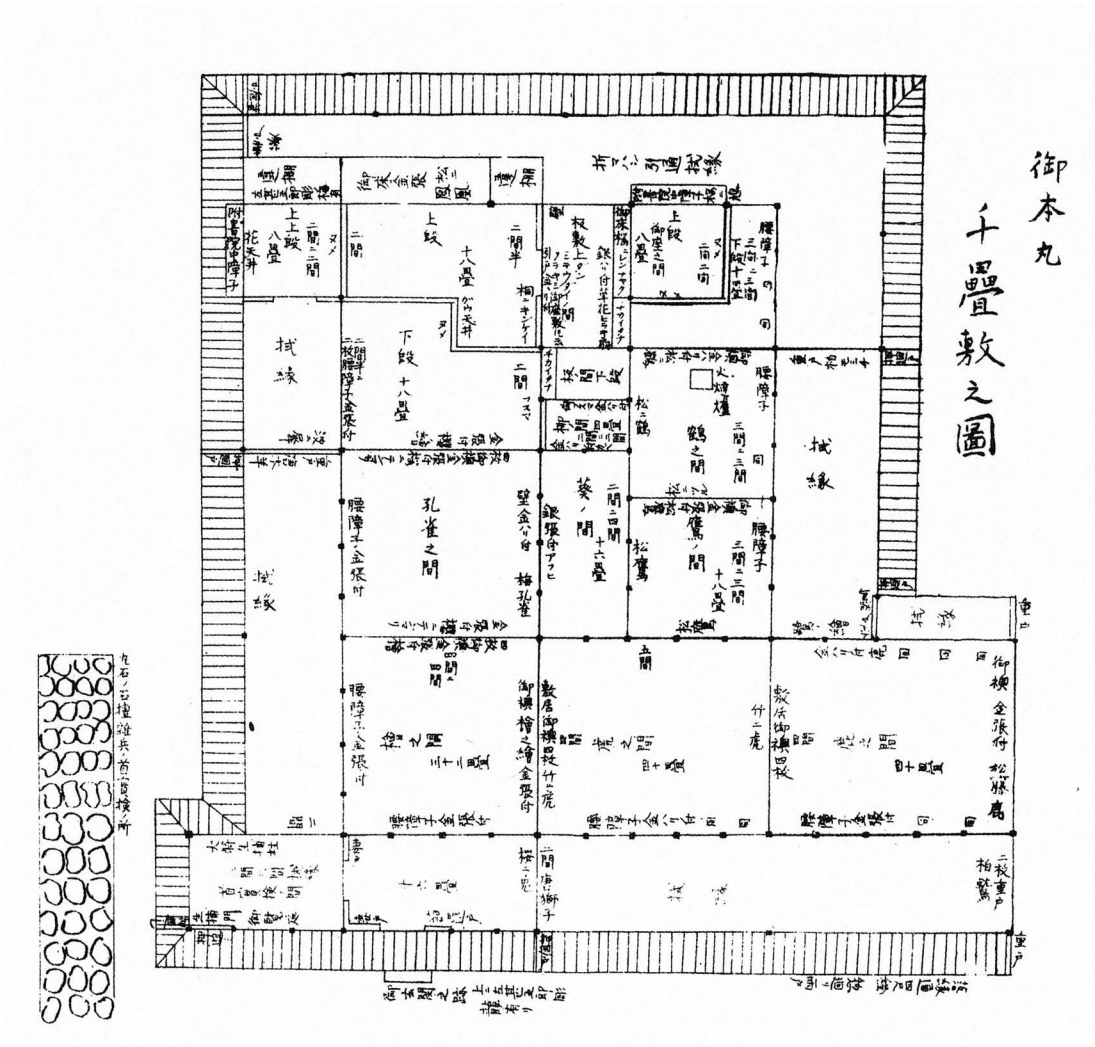
1)「壁」、「火燵炬」（鶴之間）、「大将生捕柱」（首実検ノ間の北東角の太い柱）の記載あり。

2)西側の玄関は、「御玄関之跡」としている。

3)大広間北西部首実検ノ間の北側に接するように、「丸石ノ石壇雑兵ノ首実検ノ所」として３段～４段の石壇または石敷きの壇が描かれている。

4)落縁幅が４尺で、西側ではその外側に雨戸が付くとの記載あり。

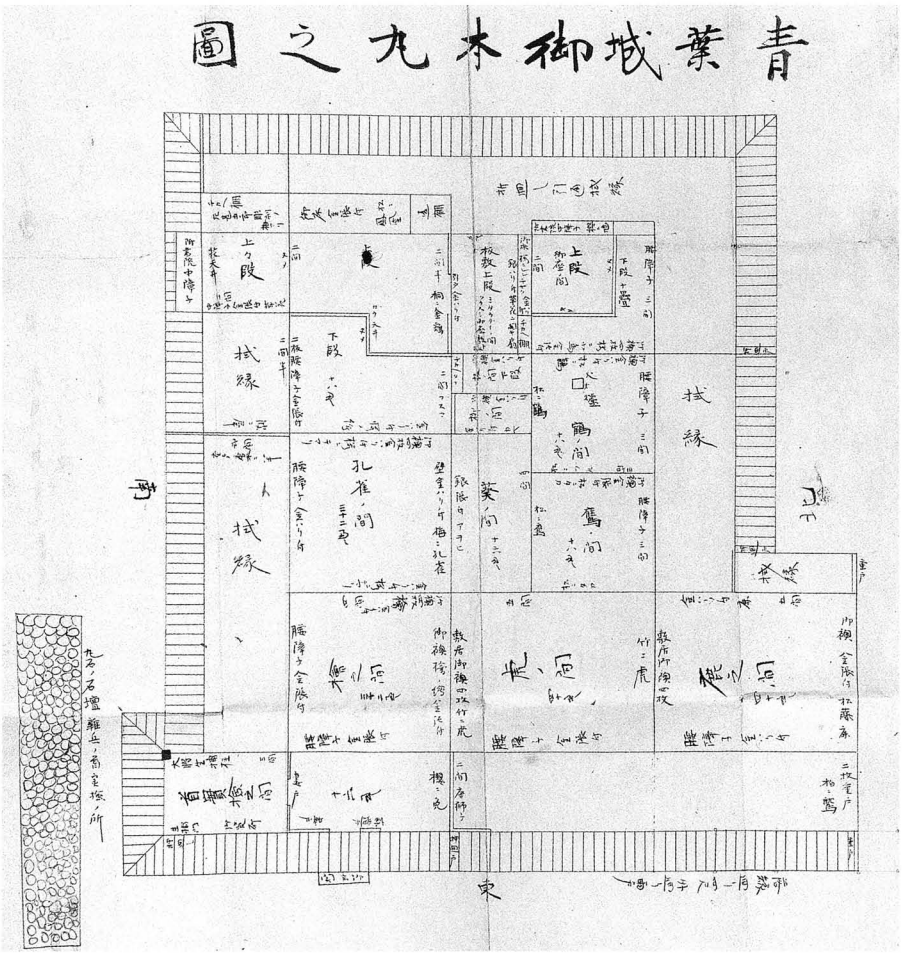
これらの特徴は地絵図になく、調査でも確認できなかった。特に、北側に描かれた石壇は、付属施設として扱った３号塀跡の位置と重複する可能性が高いのだが、検出できなかった。落縁幅４尺と表現されているが、地絵図に示されたとおり調査成果から基本的に５尺としてよい。



第15図　『御本丸千畳敷之図』（『仙台郷土研究』第十二巻第十一号所収）

3．青葉城御本丸之図

この絵図は、前述の「御本丸千畳敷図」と同一の原本からの写本と推定されている。内容は「千畳敷図」とほぼ同じ記載だが、柱の表現がない点が大きく異なっている。ただ、「千畳敷図」に表現された「首実検之間」にある「大将生捕柱」だけが、大きく強調されて描かれている。方位の記載があるが、東西南北を取り違え、まったく逆になっている。この絵図にも北側に石壇が描かれている。

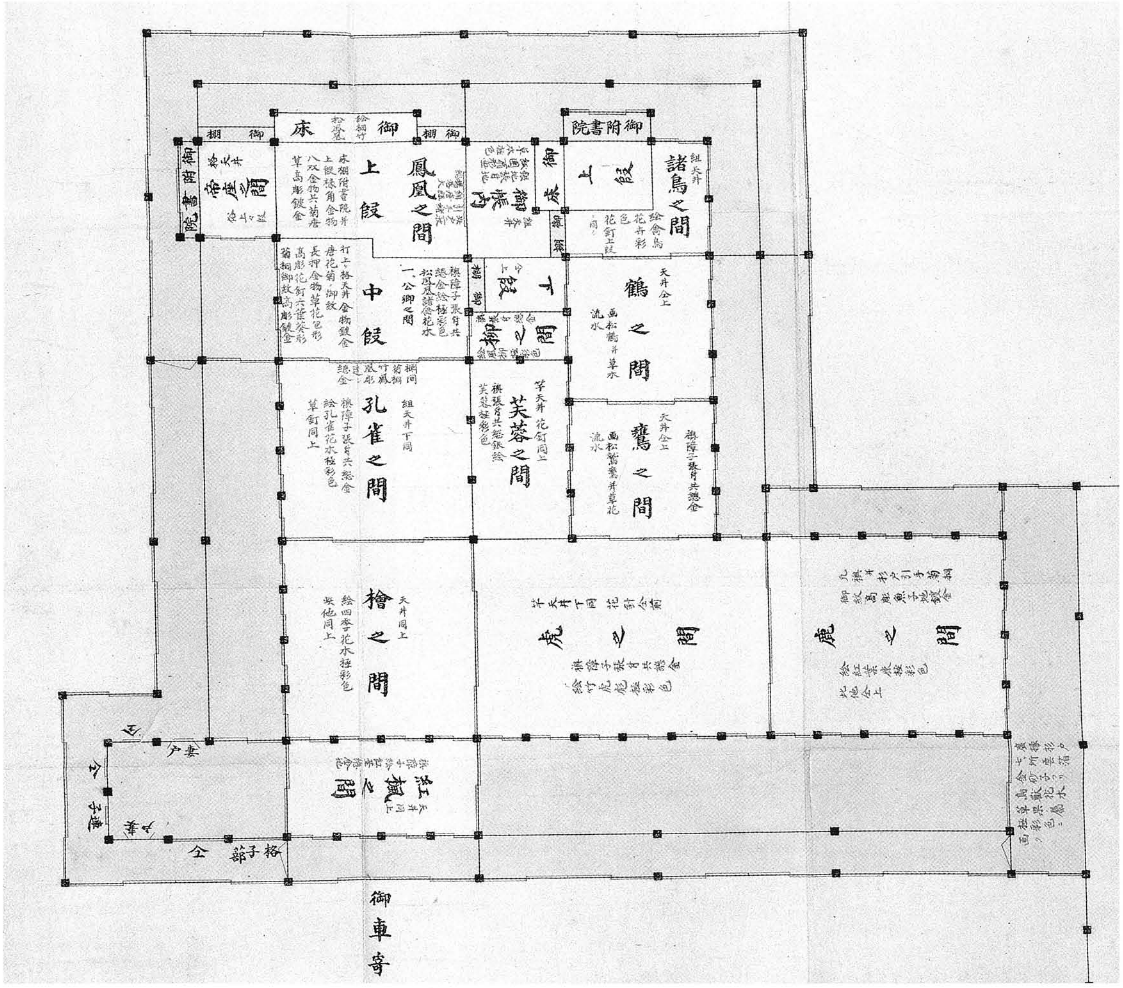


第16図　『青葉城御本丸之図』（仙台市博物館蔵）

4．旧本丸御屋形図

この絵図は、明和４(1767) 年の原本を明治26(1893) 年に写したもので、その際加筆（朱書き）されている。部屋割り、部屋名称、柱の位置が記載され、さらに、部屋内部の装飾の特徴も具体的に記載されている。この図は彩色され、座敷部と縁側部は色分けされている。地絵図とは部屋の名称に違いが認められる。釘の飾り金具、障壁画の金銀の使い分け等詳細な特徴の記載がある。地絵図との大きな相違点は、柱の位置、数が大きく異なっている点である。したがって、調査成果とも異なることになる。ただし、虎の間と鹿の間は規模が異なり、柱間は地絵図と一致している。

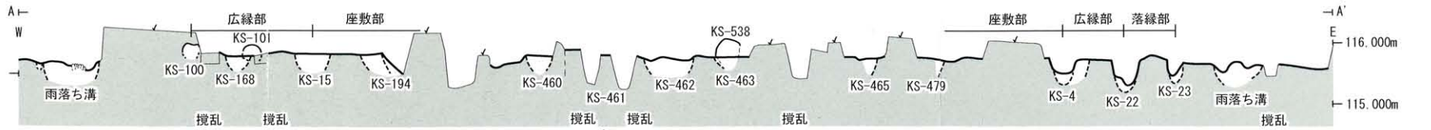
以上、大広間に関する各絵図を検討してきたが、地絵図は建物規模、部屋割り、柱位置等建物そのものの特徴に力点を置いて描かれている。これに対して、他の3種類の絵図は各部屋内部のしつらい、細部の特徴、絵画等に力点が置かれた描き方になっている。



第17図 『旧本丸御屋形図』(仙台市博物館蔵)

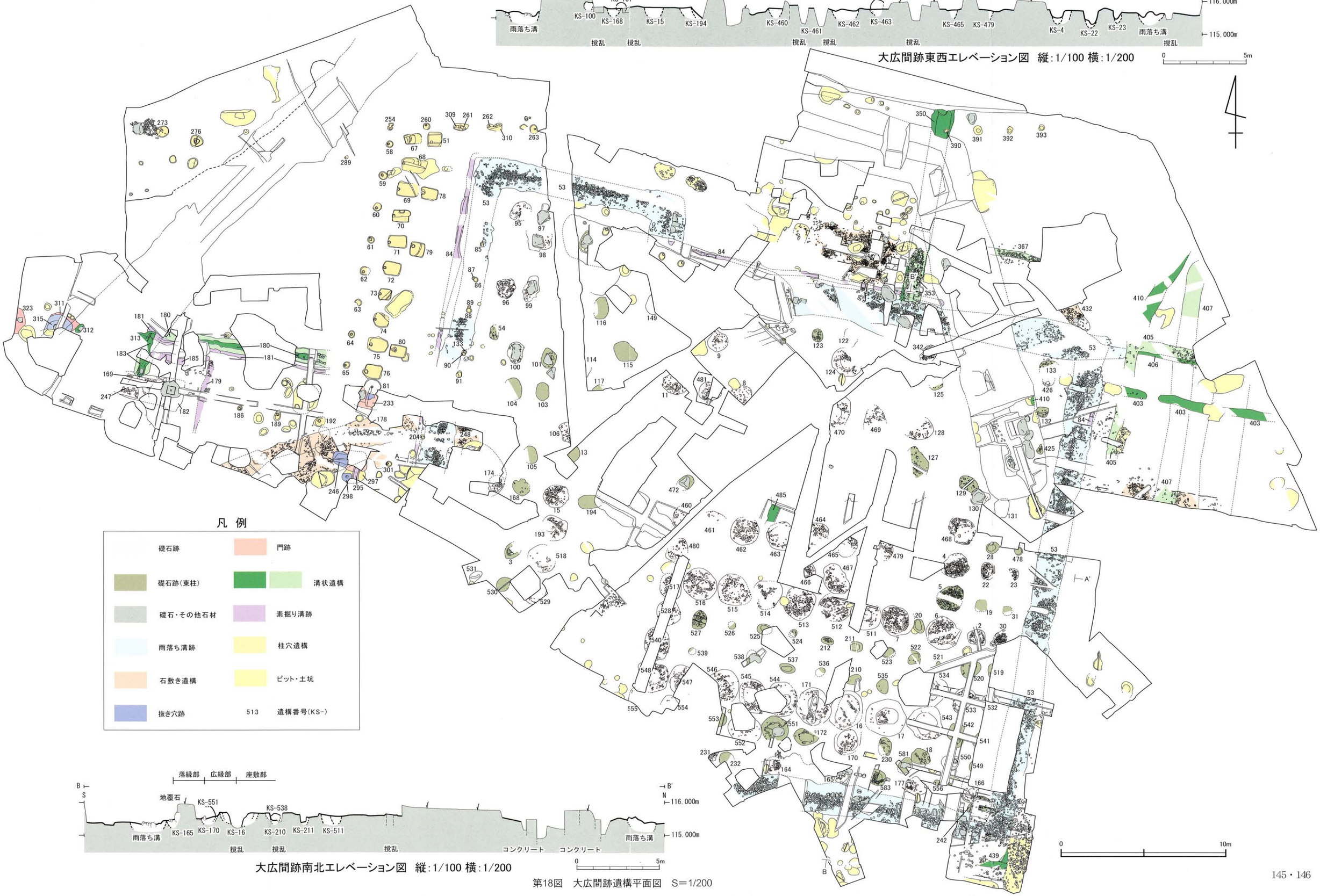
番号	御本丸大広間地絵図	御本丸千畳敷図	青葉城御本丸之図	旧本丸御屋形図
1	上々段の間	上々段の間	上々段	帝座の間・俗上々段
2	上段の間	上段	上段	上段・鳳凰の間
3	〃 (下段部)	上段	下段	中段・公卿の間
4	孔雀の間	孔雀の間	孔雀の間	孔雀の間
5	檜の間	桧の間	檜の間	檜の間
6	虎の間	虎の間	虎の間	虎の間
7	鹿の間	鹿の間	鹿の間	鹿の間
8	くらすみの間	板敷上段、他	板敷上段	御帳内
9	〃 (下段部)	下段	板の間下段	下段
10	柳の間	柳の間	柳の間	柳の間
11	芙蓉の間	葵の間	葵の間	芙蓉の間
12	裏上段の間	上段・御座の間	上段・御座の間	上段
13	〃 (下段部)	下段	下段	諸鳥の間
14	鶴の間	鶴の間	鶴の間	鶴の間
15	鷹の間	鷹の間	鷹の間	鷹の間
16	紅葉の間	なし	なし	紅楓の間
17	首実検の間	首実検の間	首実検の間	なし

第11表 大広間座敷・部屋名対照表



大広間跡東西エレベーション図　縦:1/100 横:1/200

0　5m



大広間跡南北エレベーション図　縦:1/100 横:1/200

第18図　大広間跡遺構平面図　S=1/200

第19図　大広間跡遺構平面合成写真（1/200）

引用・参考文献

小倉　強　『仙臺城の建築』　仙臺高等工業学校　1930

久保智康　『日本の美　№437　飾金具』　至文堂　2002

京都国立博物館　『特別展覧会　黄金のかざり　－金属工芸にみる日本美－』　図録　2003

㈶文化財建造物保存技術協会　『国宝　大崎八幡宮本殿・石の間・拝殿保存修理工事報告書』　2004

篠山市　『国指定史跡篠山城跡大書院復元工事竣工記念誌　20世紀から21世紀へのおくりもの』　2000

篠山町教育委員会　『史跡篠山城跡　－二の丸跡発掘調査報告書－』（篠山町文化財資料第28集）　1995

佐藤　理　『昭和・平成の大修復全記録　桂離宮の建築』　木耳社　1999

佐藤　巧　『近世武士住宅』　叢文社　1979

佐藤　巧　「仙台城の建築」『仙台城』　仙台市教育委員会　1967

佐藤　巧　「仙台城の建築と姿絵図」『東北大学建築学報　第21号』　1981

佐藤巧・小林清治他　『歴史群像　名城シリーズ13　仙台城』　学習研究社　1996

仙台市教育委員会　『仙台城跡１』　仙台市文化財調査報告書第259集　2001

仙台市教育委員会　『仙台城跡２』　仙台市文化財調査報告書第264集　2003

仙台市教育委員会　『仙台城跡３』　仙台市文化財調査報告書第270集　2004

仙台市教育委員会　『仙台城跡５』　仙台市文化財調査報告書第285集　2005

仙台市教育委員会　『仙台城跡６』　仙台市文化財調査報告書第297集　2006

仙台市教育委員会　『仙台城跡７』　仙台市文化財調査報告書第309集　2007

仙台市教育委員会　『仙台城跡８』　仙台市文化財調査報告書第330集　2008

仙台市教育委員会　『仙台城跡９』　仙台市文化財調査報告書第348集　2009

仙台市史編さん委員会　『仙台市史特別編７　城館』　2006

仙台市史編さん委員会　『仙台市史通史編６　近代Ⅰ』　2008

仙台市博物館　『仙台開府四百年記念特別展」　仙台城　－しろ・まち・ひと－』　2001

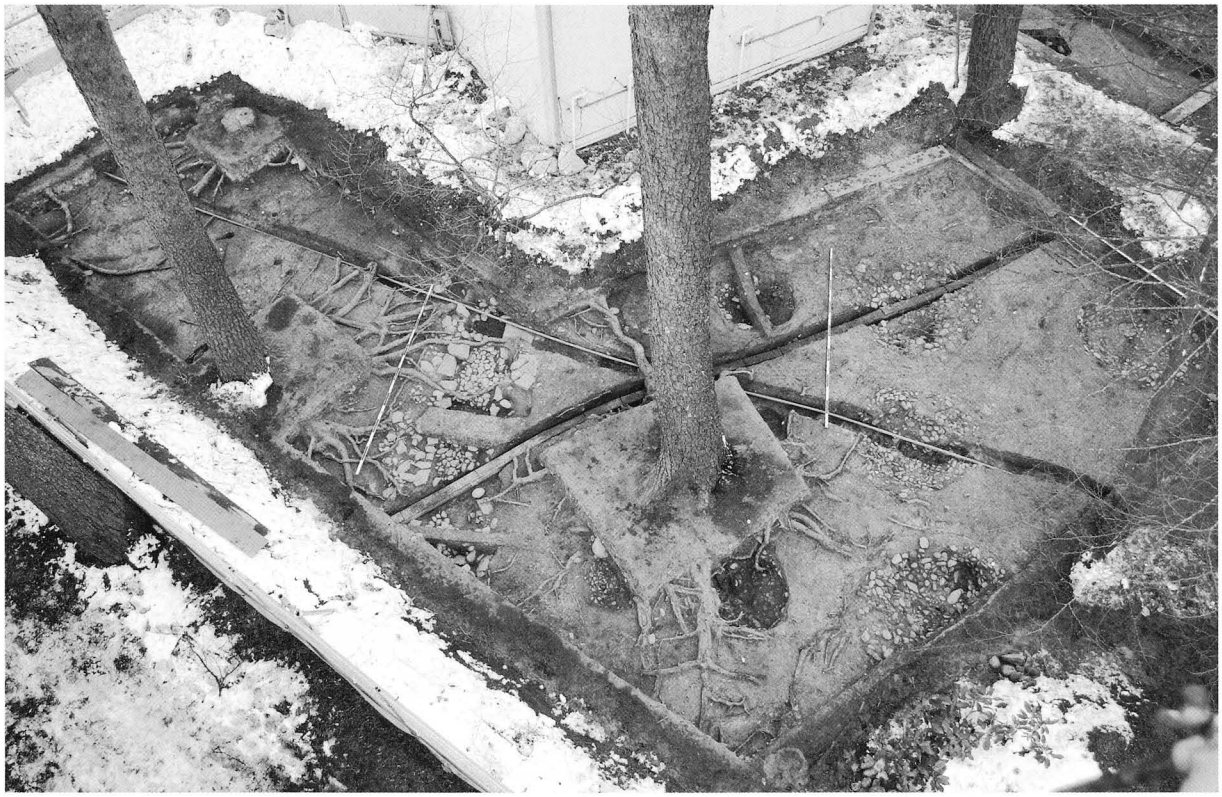
第二師団司令部　『仙台城沿革（第５版）』　1937

西　和夫　『図解　古建築入門　日本建築はどう造られているか』　彰国社　1990

平井聖・鈴木解雄　『日本建築の鑑賞基礎知識　－書院造から現代住宅まで－』　至文堂　1997

矢野顕蔵　『仙臺藩祖尊皇事蹟』　1899

大和　智　『日本の美術　№405　城と御殿』　至文堂　2000



調査区全景（1Ａ区・北から）

1Ａ区礎石跡（南から）

雨落ち溝跡（西から）

鍍金飾り金具・銅釘検出状況（雨落ち溝東側・南から）

2Ｂ区中央部遺構検出状況（東から）

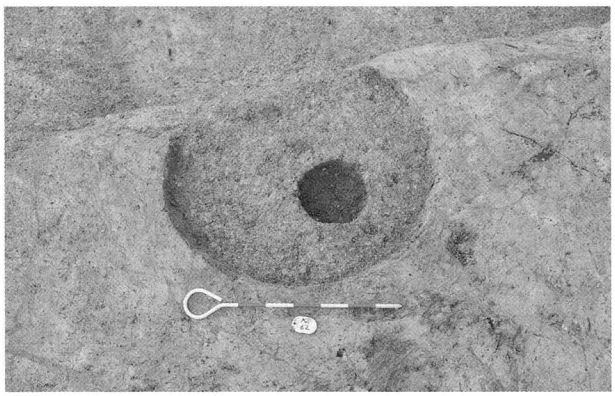
写真図版１　第１次調査（平成13年）

1区全景（北西から）

1区雨落ち溝跡（北西から）

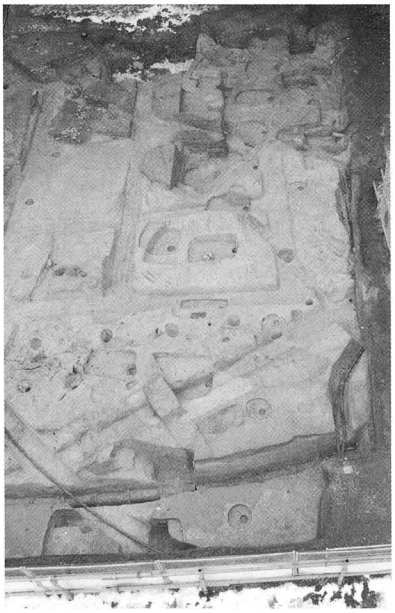
2Ａ区雨落ち溝跡・縁石・KS－84溝跡断面（北西から）

1区1号塀跡KS－51方形柱穴断面（南西から）



1区2号塀跡KS－62円形柱穴（西から）

1区2号塀跡KS－63円形柱穴断面（西から）



1区1号塀跡・2号塀跡（北から）

1区1号塀跡KS－75・80方形柱穴（西から）

写真図版2　第5次調査（平成14年）

2区全景　遺構検出状況（北東から）

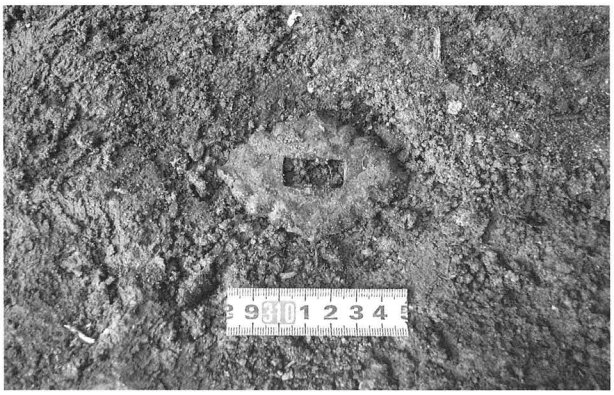
2区雨落ち溝跡検出状況（北東から）

2区雨落ち溝跡断面（東から）

2区落縁部地覆石検出状況（東から）

2区KS－230礎石跡検出状況（南西から）

1A区KS－233掘立柱穴（東から）



2区金銅金具（No.531）出土状況

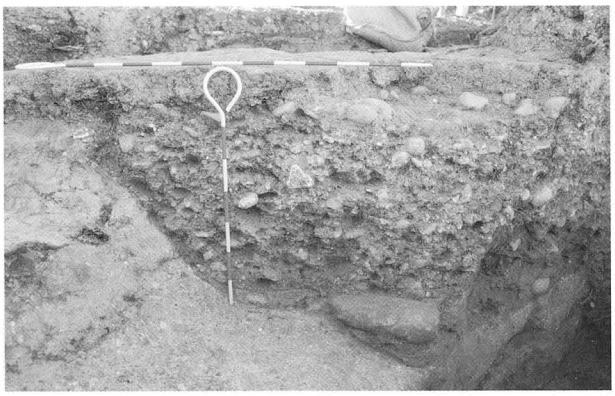
1A区銅釘（No.142・143・144）出土状況

写真図版3　第7次調査（平成15年）

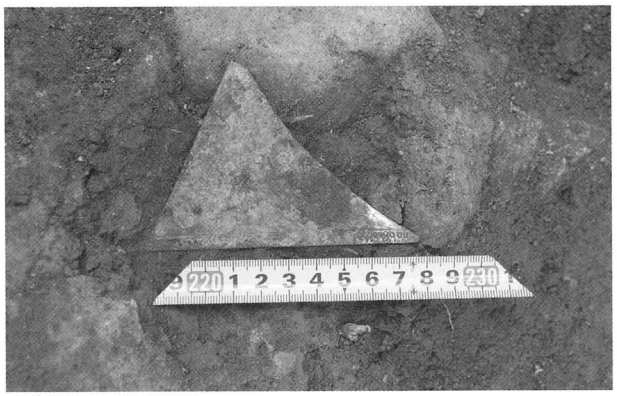
1区全景（東から）

2区中央部KS－178石敷き溝状遺構全景（北から）

2区東部張出部・KS－296断面（西から）



2区中央部KS－178断面（南西から）



No.390金銅金具出土（西から）

写真図版4　第10次調査（平成16年）

調査区全景（北から）

KS－53雨落ち溝跡・353他検出状況（東から）

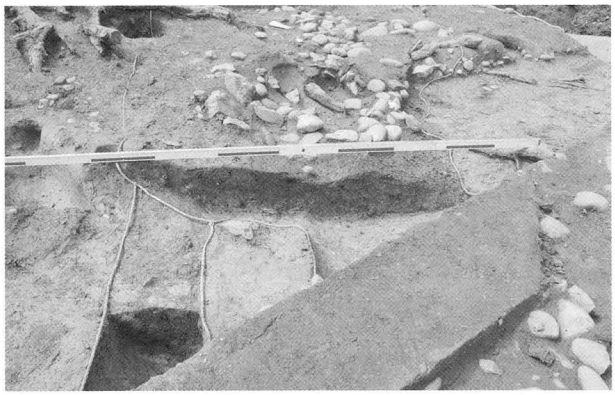
KS－53雨落ち溝跡断面（東から）

KS－84溝跡完掘状況（上が東）

KS－350・353・359断面（北から）

写真図版５　第12次調査（平成17年）

1区全景（西から）



1区KS－53雨落ち溝跡・84溝跡断面状況（北から）

2区遺構検出状況（北西から）

2区西壁全景（東から）

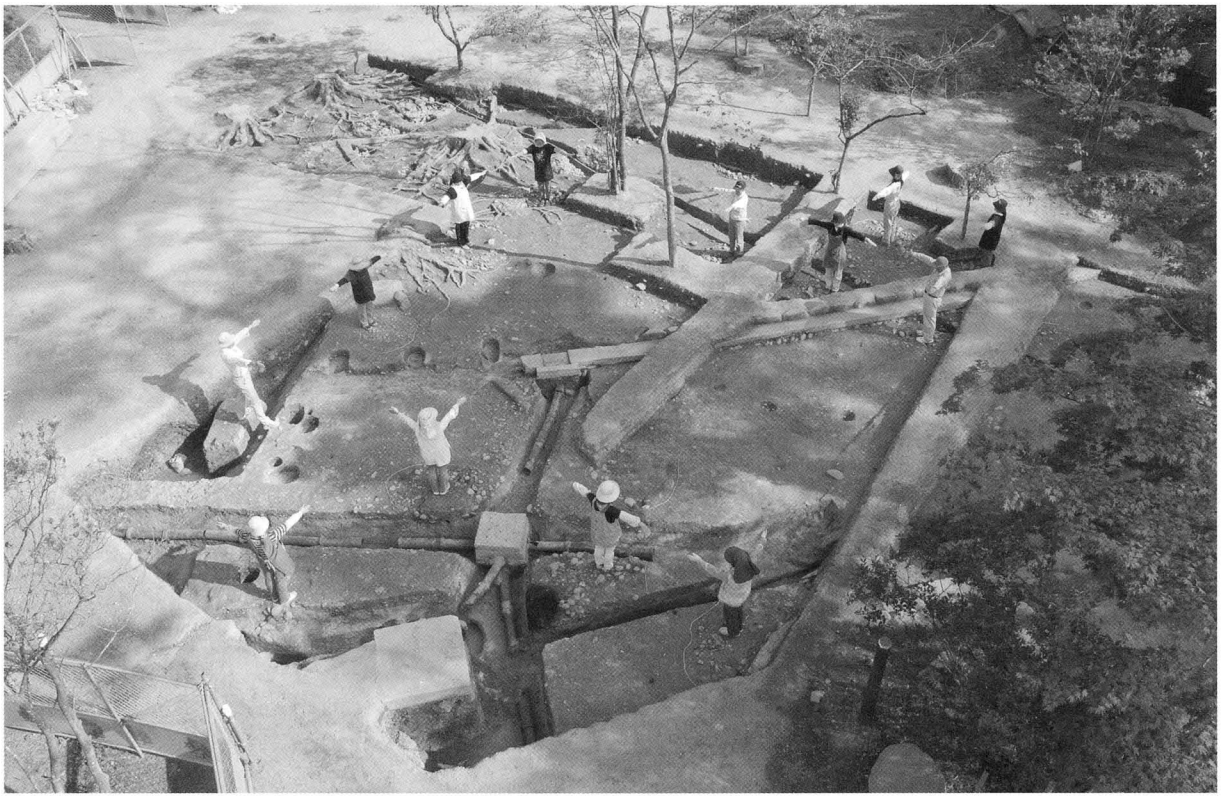
2区全景（南から）

2区KS－166・242礎石跡検出状況（北から）

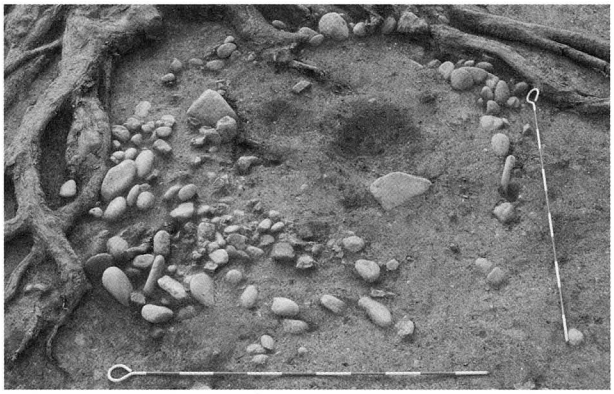
2区作業風景（南東から）

現地説明会風景（北西から）

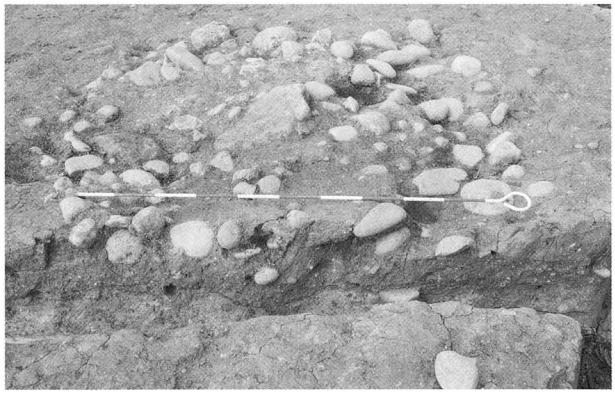
写真図版6　第15次調査（平成18年）



大広間北半部遺構検出状況（北西から）
上々段の間から上段の間、くらすみの間方向を望む

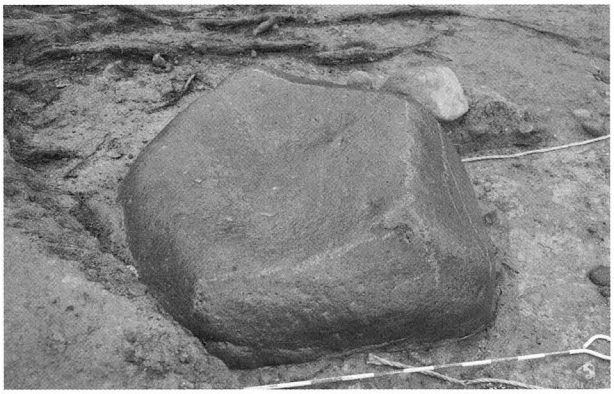


4区KS－486検出状況（北から）
上段の間東辺の礎石



2区KS－462検出状況（北西から）
孔雀の間と芙蓉の間の境の礎石

4区KS－473・474断面（北東から）

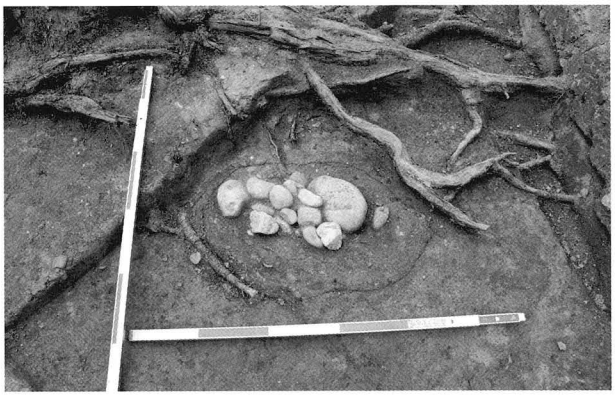


4区KS－130検出状況（東から）
上段の間床の間下の礎石

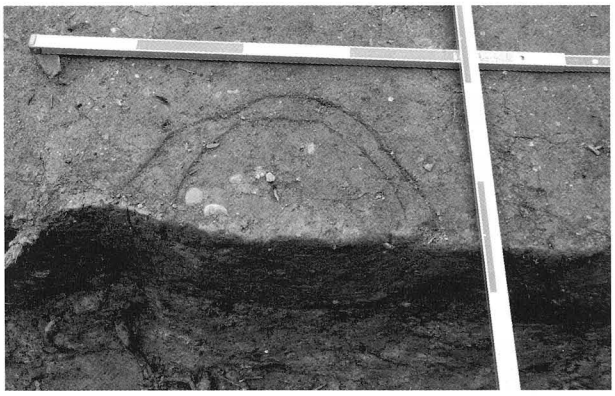
写真図版７　第17次調査（平成19年）

調査区全景（東から）
裏上段の間から鶴の間、鷹の間方向を臨む

2区KS－513検出状況（北から）
柳の間と鶴の間の境の礎石



2区KS－212検出状況（南から）
鶴の間の東柱の礎石

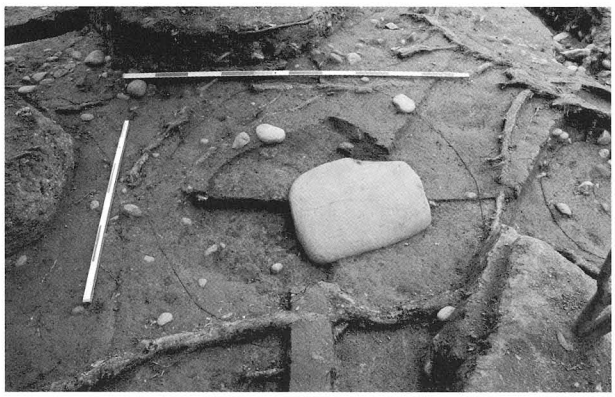


2区KS－524検出状況（南西から）
鶴の間の東柱の礎石

2区KS－538検出状況（北西から）
鶴の間と鷹の間の境の礎石

写真図版8　第20次調査（平成20年）

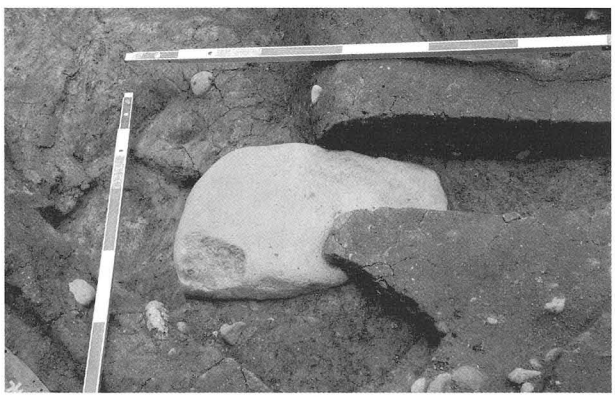
2区全景（北から）
鶴の間、鷹の間方向を望む



2区KS－551検出状況（南から）
広縁部南辺の礎石

3区広縁部勾配状況（北東から）

1区砂礫層検出状況（南東から）



3区KS－581検出状況（南から）

写真図版9　第20次調査（平成20年）

報告書抄録

ふりがな	せんだいじょうあと
書名	仙台城跡10
副書名	－平成21年度　調査報告書　仙台城本丸大広間跡調査成果の総括－
巻次	10
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第374集
編著者名	佐藤　洋・在川宏志
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　仙台市青葉区国分町3丁目7-1　TEL022-214-8544
発行年月日	2010年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
仙台城跡（せんだいじょうあと） 造酒屋敷跡（ぞうしゅやしきあと） ［第23次調査］	宮城県仙台市（みやぎけんせんだいし） 青葉区川内地内（あおばくかわうちちない）	04100	01033	38°15'06"	140°51'38"	2009. 7. 1 ～ 2009.11.12	369㎡	重要遺跡の遺構確認調査
仙台城跡（せんだいじょうあと） 大広間跡（おおひろまあと） ［第24次調査］		04100	01033	38°15'02"	140°51'33"	2009.12.14 ～ 2009.12.15	2.25㎡	
仙台城跡（せんだいじょうあと） 広瀬川護岸石垣（ひろせがわごがんいしがき） ［第25次調査］	宮城県仙台市（みやぎけんせんだいし） 青葉区川内追廻（あおばくかわうちおいまわし） 地内（ちない）	04100	01033	38°15'06"	140°51'51"	2009.12.16 ～ 2010. 1. 7	250㎡ （立面）	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城跡	城館跡	江戸時代 明治時代	礎石跡・石列・井戸跡・カマド跡・石組溝 鍛冶工房跡・炉跡・掘立柱建物跡	陶磁器・土師質土器・瓦質土器・瓦・石製品・金属製品・木製品	第23次調査では、造酒屋敷に伴うと考えられる礎石跡や石列、井戸跡、カマド跡、石組溝などを検出した。また、近代以降の鍛冶工房に伴うと考えられる炉跡、掘立柱建物跡などを検出した。 第24次調査では大広間にかかわる礎石跡を検出した。

要約

仙台城は、初代仙台藩主伊達政宗によって造営された城である。慶長5年（1600）に城の縄張りが開始され、翌年から普請に着手、工事は慶長7年（1602）に一応の完成をみたとされている。築城当初は「山城」である本丸を中心とする城郭であったが、政宗の死後、二代藩主忠宗が山麓部に二の丸の造営を開始する。寛永年間以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸・勘定所・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。

造酒屋敷は清水門の南側に位置し、伊達政宗が親しい徳川家重臣柳生宗矩の紹介で、慶長13(1608)年に大和国から優れた南都流の酒造技術を導入するため、又右衛門という技術者を招き、仙台城内の一角に屋敷地を与えた場所にあたる。また、出身地にちなんだ「榧森」の苗字を名乗ることを許し、榧森家は「御酒屋」として藩内で消費する酒を造った。第23次調査では屋敷に伴うと考えられる礎石跡や井戸跡、酒の醸造にかかわると考えられるカマド跡を検出した。酒造にかかわる遺構が検出されたことからも、この地で酒造りが行われていたことが明らかになった。井戸跡から榧森家当主の名前のを記した木簡をはじめ、年貢米の荷札木簡や米俵、樽、桶の部材、木製の栓など酒造りにかかわる可能性のある遺物も多数出土した。これらの出土遺物から、調査地が「榧森家の造酒屋敷」の一角であることが裏付けられたと考えられる。

仙台市文化財調査報告書第374集
仙　台　城　跡　10
— 平成21年度　調査報告書 —
仙台城本丸大広間跡調査成果の総括
2010年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目７－１
文化財課　TEL 022（214）8544

印刷　株式会社　建設プレス
仙台市青葉区折立二丁目2－10
TEL 022（302）0177